

この素晴らしいキリア  
スに祝福を！完結

アーク1

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

不慮の事故に見回れたキリトは、見知らぬ場所にいた。

そこで、天使を名乗る女性に選択を迫られる。

天国へ行くか、来世へ行くか… それとも異世界へ転生するか…

その世界の魔王を倒せば、どんな願いも叶えてくれると言う。

キリトは、異世界への転生を希望した。

そこで待つているものとは…

# 目

# 次

カズマ一行、キリアスに遭遇する（後編）

69

アスナ、異世界にて初クエストに挑む！

76

カズマ一行、キリアスに会いに行く。

7

プロローグ1

1

プロローグ2

16

プロローグ3

21

プロローグ4

28

プロローグ5

35

プロローグ6

43

この素晴らしいキリアスに祝福を！

カズマ一行、キリアスの戦闘を見学する。

85

ゆんゆん、生まれて初めて、仲間と打ち上げパーティーをする。

91

異変の前触れ

99

廃城の奥で待つもの…

106

アクセルの宿屋にて…

112

冒険者ギルドへ行こう！

120

カズマ一行、キリアスに遭遇する（前編）

62

立ち上がり、ゆんゆん！		133	126
アクセル防衛戦1	迫る危機！	149	
アクセル防衛戦2	冒険者たちの戦い！		133
アクセル防衛戦3	キリアス戦場へ！	139	
アクセル防衛戦4	黒の剣士と閃光再び		193
決着…そして…		185	176
この素晴らしいキリアスに祝福を！		167	158
章前までのあらすじ		257	
キリトの願い、アスナの望み			272
アクアの提案			265
集合！ キリアスのもとに集う仲間たち	対決！ 黒の剣士ＶＳ黒の絶剣士！	246	237
集合！ 前編	再会の兄妹	226	218
！ 中編	初心者指導	210	201
集合！ キリアスのもとに集う仲間たち	私の王子様		ああ、愛しのマイホーム
	再び妖精の世界へ		リンクスタート！

！ 後編

英雄対決！キリトVSカズマ

邂逅

母と娘と…

家族

プロポーズ

桐ヶ谷家の人々

結婚式の準備をしよう！

続 結婚式の準備をしよう！

続 結婚式の準備をしよう！

キリアスの結婚式 このすば編

キリアスの結婚式 S A O 編

帰郷

明日へ

この素晴らしい世界の伝説

こんにちは赤ちゃん

396 387 378 370 360 352 342 334 322 312 302 291 280

426 413 404



# プロローグ1

「桐ヶ谷和人さん、貴方は死にましたー

ここは、どこだ？俺はどうしたんだ？

混乱していた俺は、今日の出来事を思い出してみた。・

「ごめんね。キリト君。今日のデートなんだけど、ユウキがどうしても私とALOでスリーピングナイトの皆と遊びたいって言うから、又、今度にしても良いかな？」

そうだ、今日は学校が終わつたら明日奈とデートをするはずだつた。

でも、ユウキに強引に誘われた明日奈は断りきれずの、今日のデートは中止になつた。

俺は、笑つて許したけど、やっぱり寂しい気持ちはあつた。

明日奈も、そうだつたろう。だからこそ、明日奈の方からデートに誘つてきたんだと思ふ。

「今日は、俺を優先してほしい」

きっと明日奈は、俺がそう言えばユウキの誘いを断つただろう。

ユウキに時間がないのは理解してるし、俺自身、ユウキを気に入ってるけど、寂しいものは寂しい。

はつきり言えれば楽なんだけどなあ。

俺は、何度目かのため息をついた。

「元気を出してください。パパ。きっとママもパパと一緒にいたいハズです。」

携帯端末から、そう励ましてくれてるのはユイ。そう、ユイ。俺の娘だ。

元々メンタルヘルスカウンセリングプログラムとして作られたユイは、人の感情の変化に敏感だ。

俺が落ち込んでいるのを感じて、慰めてくれているのだろう。我が娘ながら、すばらしいと思う。

「そうだよな。ユイだつて、プローブを使うのをユウキに譲つて、我慢してるんだもんな。」

そもそも、あのプローブはユイの為に作った物だ。それを、ユウキ…というかアナの為にユウキが使うのを許してくれたのは、ユイなのだ。

俺は、それからユイととりとめのない話しをしながら、下校した。

川越まで戻り、家路をゆっくりと歩いていると、目の前の道路をボールを追いかけて、女の子が飛び出してきた。

そこに、トラックが猛スピードで走つてきている。

「危ない。」

俺は、女の子を助けるために走つた。

女の子を抱き寄せるが、回避する暇は無さそうだ。

俺は、自分の体を盾にするしかないと、女の子を庇う。

衝撃が、体を襲つた。浮遊感があり、その後さらに衝撃。撥ね飛ばされてどこかにぶつかつたんだろう。

何故か、冷静にそんな事を考えながら、俺の意識は暗転した。・・・

・

・

・

私の名前はユイ。パパである桐ヶ谷和人とママである結城明日奈の娘。  
その日は、パパと話しをしながら家へと帰つていた。  
パパは、ママといられないことに落ち込んでいる様だったから、私がパパと会話することで、気分転換になればと思ったのだ。

その考えは上手くいっていたと思う。

川越に着く頃にはパパは、笑顔を見せるようになつていた。

そこから家に向かう途中、パパが切迫した声で叫んだと思うと、私の視界はぐるぐると回つた。

恐らくは、パパが携帯端末を放つたのだと思うが、携帯端末のカメラからの視覚情報では、何があつたのかまでは把握できなかつた。

その後、すぐに大型のクルマのブレーキ音とドンッという大きな音…  
パパ？パパ？ 何かあつたんですか？  
いくら話しかけても返事がない。

私は、嫌な予感がした。でも、まずは情報を把握しなければ。  
確か、ここ近くに監視用の防犯カメラがあつたハズ。

私は、ネットワークから防犯カメラの視覚と同調させて、現場を見る事にした。  
少し時間がかかつたが、何とか成功した。

そこには… 血溜まりの中に倒れるパパの姿が映し出されていた。  
そんな… ウソ…

私は、携帯端末に戻ると急いで救急車を要請した。

救急隊が到着した。私を見て驚いた様だが、今はパパの搬送が優先。

私は、パパと救急車に乗りそのまま病院に搬送された。

しばらくすると、パパの妹の直葉さんと、母親の翠さんが駆けつけてきた。パパの携帯電話の電話帳から、家族に連絡が行つたのだろう。

私は、現在の情報を二人に伝えた。

すでに治療が終わつている事。危険な状態であること。

そうこうしていると、パパの手術を担当した医師が改めて説明にやつて來た。「はつきり申し上げて、今彼が生きているのは奇跡に近い。彼の精神力だけで死に抗つていると言つて良い状態です。」

「ご家族の皆さん、彼に励ましの言葉のをかけてあげてください。きっと今は、彼の大切な人の声が、一番の薬になるハズです。」

それを、聞いた直葉さんはパパの仲間に電話をした。

パパの情況と、パパに、声をかけてもらう為に。

ママ以外は、すぐに駆けつけてくれた。

ママには、連絡が付かなかつたらしい。

きっと、まだALOにいるのだろう。

私は、ALOに行つて直接ママに伝えようと思つた。でも、それはできなかつた。

この端末から、出られない。恐らく、放られた時にネットワーク接続の部品に障害が

出たんだ。

防犯カメラに視覚を同調させる時も、予定より時間がかかった。それが、時間が経つてか、完全に故障してしまったのだろう。

そんな… これではあのときと同じではないか。

アインクラッドで、自身の存在意義を果たす事ができず、ただ見ている事しかできなかつたあの時…

今自分の存在理由は、パパとママの役に立つ事。

それが、パパが大変な時にただ眺めている事しか出来ない。

私は、必死にパパを応援した。非科学的だとはわかっているけれど、今は、それしか出来ることがなかつた。

でも、私達の願いも虚しく、パパの心電図モニターは… ゼロを示した…  
パパは…

桐ヶ谷和人は… 死んだ…

嫌、嫌、いやあああああ。

瞬間、大きな黒い波が、わたしの意識を飲み込んだ…

私は、その波から抜け出そうと何かを掴んだ気がした…

そこで、私の意識は完全に途絶えた…

# プロローグ2

そうか…俺は…俺は死んだのか。

俺は、道路に飛び出してきた女の子を庇つて、そのままトラックに轢かれて…  
「その通りですよ。桐ヶ谷和人さん。貴方は死んだのです。」

目の前の女性は、そういった。

「それと、貴方が庇つた子は無事ですよ？大変、勇気ある行動でした。」

「そうか、あの子は無事か。良かつた…。」

そう言えば、ここはどこなんだ？そして、この人は誰だ？

そんな疑問を抱いていると、

「ここは…と言ふか私の説明は後でしますが、先に貴方についているイレギュラーを  
解決してしまいましょう。」

そう言うと、女性は俺の額に手を触れる。すると、俺の体が光った。眩しさで目を開けていられない。

光が收まり目を開けると、そこにユイが立っていた。

「え？あれ？ここは？」

ユイは、混乱していた。どうやら、イレギュラーというのはユイの事だつたらしい。

「パパ。良かつた。生きてたんですね。」

俺に気付いたユイはそう言つて俺に抱きついてきた。  
どういつたものか：自分が死んだのは理解出来るが、それをこの娘に説明するのは  
憚れる。

すると、女性がその言葉を否定した。

「いえ、桐ヶ谷和人さんは亡くなりましたよ？」

正直、空気を読んで欲しかった。

「どういう事ですか？」

ユイが、女性に気付いて説明を求める。

女性は、ニコリと笑うと説明を始めた。

「ここは、天界。神々の世界。あなた方にとつては、死後の世界にあたります。

まずは、はじめまして。桐ヶ谷和人さん、M C H P 試作1号 ユイさん。」

「私は、日本において若くして亡くなつた方を導く女神アクリア様に仕える天使です。」

そう言つて、背中の翼を広げた。

「そんな、天使なんて非科学的です。」  
「流石に、ユイは信じないよな。何せ、もどが科学の結晶みたいなものだし。」

「私達からすると、あなたの方が信じ難い存在なのですよ？ユイさん。」

天使は言った。

「先程も申し上げましたが、ここは死後の世界。つまり生ある存在が、その生涯を終えた時に訪れる場所です。ですがユイさん。貴方は人が作り出した人工知能。生ある存在では無かつたはず。それなのに、ここにいる……と言うことは、貴方は生きていた。そういう言う事になります。」

「我々としても、人工知能がここを訪れるというのは始めての出来事なのですよ。」

その言葉は、ユイが真に生きていた事の証明。

ユイも嬉しそうだ。でも、それはつまり、ここにいると言うことはユイも死んだということになる。

一体どうして？

「ユイさんが、亡くなつた理由は私どもにはわかりかねますが、貴方の心臓が止まつた瞬間に、ユイさんは亡くなりました。そして、貴方の魂が天界に送られる時に、ユイさんの魂がしがみついていた為に、同時にこちらへ来たのでしよう。」

「さて、現状の、説明はこれで終わりです。次は、これからのことについて説明します。」  
 「では、桐ヶ谷和人さん、ユイさん。あなた方にはこれから選択肢を与えます。その選択肢は三つ。」

「一つは、人間として生まれ変わり、新たな人生を歩むこと。もう一つは、このまま天国へ行くこと。」

「そして、最後の一つはある異世界への転生です。そこは、魔王によつて危機に瀕しているのです。その世界で死んだ方は、生まれ変わる事を拒否する方が多く、このままでは世界その物が滅亡してしまいます。そこで、こちらから希望者には、今の記憶を引き継いで向こうに転生させる事が神々の取り決めで決まりました。」

「本来であれば、これで説明を終えて、選択をしていただくのですが……桐ヶ谷和人さん。出来れば、貴方には異世界へ行つてもらいたいと私どもは考えています。」  
天使は言い辛そうに話し始める。

「実は、貴方の事はあのS A O 事件を解決した英雄として、アクア様は注目なさつていました。もしこちらに来る事があれば、是非とも異世界に行つて頂きたいと。」

「もちろん、だからと言つて運命を操作して若くして亡くなつてもらつた訳では無いですよ？あくまでも、注目していただけです。」

「ですが、こうして今、貴方はここにいる。だから、どうか異世界に転生して下さいませんか？戦いの無い現代の日本において、6000人もの人々を救つた貴方なら魔王を倒す事が出来る可能性が高いと私どもは考えています。」

「俺は、悩んだ……それは明日奈の事だ。もし、異世界に行つたらどうなる？生まれ変

わって来世で明日奈と出会う事も、出来なくなる。それは、俺にとつてとても辛い事だ。  
例え死んだとしても、来世でまた一緒になる。いつだつたか、そう約束したんだ。  
一キリト君が、帰つてこなかつたら、私自殺するよ。もう、生きてる意味無いし、た  
だ待つてた自分が許せないものー

唐突に、アスナの言葉を思い出した。

冷や汗が止まらなかつた……これは……マズイ。

近い内に、明日奈はここに来る。俺はそう確信した。

普通なら自意識過剰だと思う。

いや……俺だつて昔の俺なら鼻で笑つていただろう。

でも俺は知つている……愛する人が死んでしまつた時の喪失感を。

俺と明日奈の関係は、共依存に限りなく近い。

そしてアスナの方は、俺以上に依存度が高い。

俺のバイタル情報を見て、安心する……等と言うのはその最たるものだろう。

それが異常だと、理解しながら俺自身も嬉しいと感じていた。

二人が一緒に入るなら、それでも構わなかつた……

でも、こうして俺は、明日奈を一人残して死んでしまつた……

明日奈は、きっと追いかけてくるだろう……

そう思つた。

「あの、天使様。幾つか質問をしたいんですけど。良いでしょか？」

「この質問によつては、異世界行きに条件を付ける。

「ここへは、若くして死んだ日本人は皆来るんですか？」

「いえ、全員ではありません。ここへ来るのはアクア様が注目していた者か、もしくは幸運により選ばれた者だけです。 それでも無ければ、こんなに呑気に話しての余裕はありませんよ？」

それはそだう。1日にどれだけの人が亡くなつてゐるか… それを考えればこうして話している間にも次の死者の魂がここに來ても可笑しくない。

「では、死因はどうでしょ。自殺でも、関係なく来られるのですか？」

「いえ、自殺の場合は別です。自殺とは、我々が最も厭うものです。その場合、選択肢も与えず問答無用で来世に転生させます。」

やはり、そうか。

「天使様、もし条件を飲んで頂けるなら、異世界に行くことを了承します。」

「それは？」

「近い内に、結城明日奈という女の子が自殺する可能性があります。もし、そうなつた時に彼女にも、選択肢を与えて欲しい。それが、条件です。」

そうならなければ、その方が良いのかも知れない。

それでも、もし追いかけてきて… 来世へ転生したとしても、そこに俺はいない… 取り越し苦労なら、それで良いが最悪は想定しておく方が良い。

「結城明日奈さんとは、貴方の恋人で S A O 事件解決の立役者の一人と認識していますが、間違いないですか？」

俺は、黙つて頷いた。

天使は、しばらく悩んでいた様だが、

「わかりました。結城明日奈さんも、アクア様が注目していた人の一人です。本来は許されない事ですが、彼女の功績に免じ選択肢を与える事とします。」

良かつた。もし、自殺してここへ来るなら、多分アスナは、俺を追つて異世界に来るだろう。

「それでは、天使様。俺は、異世界行きを選びます。」

「パパが行くなら、私も行きます。」

ユイが同行を宣言した。

「では、桐ヶ谷和人さん。ユイさん。異世界に一つだけ持つて行けるものを選んでもらえますか？ 才能でも、強力な武器でも一つだけ持つて行くことを許可します。」

「天使様。これから行く世界の事をもう少し教えてもらいたいのですが。」

情報は大事だ。それを聞いてから選んだって良いだろう。

俺は、それから異世界の平均的な人の強さや、モンスターの強さ、武器の能力や魔法について簡単に教えてもらつた。

俺は悩んだ。ここにある武器やスキルは破格のものだろう。  
でも… 俺はある考えがあつた…

「天使様… 異世界に持つていけるのは、ここにあるものしか、選択はできませんか？」  
俺の質問に、

「それは、物によります。その人の選択を上が受理すれば可能ですね。貴方の前にも、提示された物以外を選択した方がいらつしやいましたし…」

天使は、ちょっと笑いそうになりながら答えた。  
何がそんなに可笑しかつたのかはわからないが…  
そして、決めた。

「では、天使様。俺が持つているのは、俺のSAOとALOの最終的なアバターデータを持つて行くことにします。」

ユイは、

「私は、ALOでの私の能力、世界への情報検索とピクシーに変身する能力を持っていきます。」

俺たちが宣言すると、間もなくして、

「あなたの方の選択は受理されました。」

天使が、そう言うと俺たちの足元に、青い魔方陣が現れた。

「桐ヶ谷和人さん、ユイさん。あなた方をこれから、異世界へと送ります。魔王討伐の勇者候補として。もし、魔王を倒した暁には、神々から贈り物を授けましょう」

「そう、世界を救つた偉業に見合つた贈り物。どんな願いでも、たつた一つだけ叶えて差し上げましょう。」

「さあ、勇者よ。願わくば、数多の勇者候補の中から、貴方達が魔王を打ち倒す事を願つています。さあ、旅立ちなさい。」

そして、俺たちは、明るい光に包まれた。：

# プロローグ3

気が付くと、そこは石造りの街並みだった。

本当に異世界に来たんだな。VRではなくて。

少しの間、周りをぼーっと見渡していた俺は、ユイがない事に気が付いた。

ユイも一緒に来ているはず。

「ユイ、どこだ？」

俺は、慌ててユイを探した。

「私は、ここです。」

頭の上から、声が聞こえた。

どうやら、ピクシーの姿で頭の上に乗つていた様だ。

俺は、安堵の溜め息を付くと、今後の方針を決める為に、ユイと相談する事にした。

「ユイ、これからどうするかを決める為にも、まずは情報収集をしなきやな。ユイは、天使に情報検索能力をもらつてたよな？色々と聞きたいんだが、大丈夫か？」

「ちよつと、待つてください。」

そう言つてユイは、自身の両耳に手をかざして目を閉じた。

「問題無く、使えるようです。やり方もA L Oの時と同じで良いようです。」

「まず、この街についてですが、ここは、駆け出し冒険者の街『アクセル』と言いうようです。」

俺は、少し考え込むと、口を開いた。

「駆け出し冒険者の街か。ここに転移してきたって事は、まずは冒険者になれって事なんだろうな。」

「恐らく、その通りだと思われます。現在、魔王軍の侵攻を食い止めているのは国家に属する軍ですが、国家に属さない冒険者には、魔王軍の幹部やモンスターに賞金を懸ける事で討伐を促しているようです。パパの最終目標は魔王の討伐になりますから、国と繋がりのないパパは、冒険者になるのがセオリーになるでしょう。」

「冒険者になるのに、条件はあるのか？」

「基本的には、冒険者ギルドに行つて、登録料を払えば誰でもなれるようですね。例外として、前科のある犯罪者は厳しい審査が入るようですね。」

「登録料？でも俺は、お金なんて持つてないぞ？」

「パパ、SAOの要領でメニュー画面を開いてみてください。」

俺は、言われた通り右手を上げて、降り下ろしてみる。すると、慣れ親しんだメニュー画面が出た。

ステータスは、記憶にある数値よりかなり低い。レベルが1だからか？  
でも、スキルはかなりあるな。

二刀流のようなエクストラスキルからバトルヒーリングのようなパッシブスキル。  
スキルについては、記憶通り……か高い熟練度のものもあつた。恐らくS A OかA L  
Oで同じフォーマットの物はどちらか高い方のものになつてているようだ。  
ソードスキルは使えるだろうか……これは後で実験が必要だな。  
アイテムは……

武器にエリュシデータとエクスキヤリバー？

S A Oで持つっていた最強武器とA L Oの最強武器……二刀流の為にこれも用意して  
くれたのか……

でも、今の筋力じゃこれを使うのは無理だな。要求S T Rにまるで足りない。  
後は、S A Oで装備していた防具のコートオブミッドナイトか。

他のアイテムは……無いな。

ん？金が1000コル入つてるな。これは？

その時メールが来た。

『桐ヶ谷和人さん。転生おめでとうございます。まずは、冒険者になつてください。そ  
の街にある冒険者ギルドで登録することで冒険者になれますよ。登録料を贈つておく

ので使つてください。ちなみにその世界の通貨はエリスです。それでは、頑張つて下さい。天使より。』

至れり尽くせりだな・：？』

「なあ、ユイ。金は入つていたんだが、どうやつて使うんだ？自動で引き落とされるのか？」

「いえ、パパが使つているメニュー画面のようなシステムはこの世界には存在しません。ですから、お金も物質化されたものでやり取りします。パパ：アイテムをオブジェクト化する要領で、お金を出してみて下さい。」

言われた通りにすると、金貨が二枚、俺の手に握られていた。

これが、ここでの金か。二枚つて事は、一枚で500エリスになるのか？

「パパ、一度オブジェクト化したものは二度とアイテムストレージに入れる事は出来ません。メニュー画面やアイテムストレージのようなものは本来、こちらの世界には存在しないものなので。」

オブジェクト化した時点で、この世界の物質になるからつてことか？

それなら、武器のオブジェクト化はまだしない方が良いな。今のステータスじや装備出来ないし、邪魔になるだけだ。

「今の、俺のステータスはこの世界ではどの位の強さになるんだ？」

「えーと、そうですね。レベル1としては破格のステータスだと思われます。ほぼ全において、平均を大きく超えてますね。特に、筋力と敏捷が高いようです。逆に魔力は平均より少し低めです。恐らく、SAOとALOのステータスの内、高い方を参照して、それをレベル1のステータスにフォーマットしたものと推測されます。」

「それから、冒険者に登録すると、職業を選ぶ事になります。パパのステータスなら、魔法職や回復職以外なら、最初から上級職も選べますよ?」

⋮ これは、もうビーティーと言うよりチータードナ⋮ つて初めてALOをやった時にも言つたつけ⋮

まあ、今さら悩んでいても仕方ないか。  
なるようになるさ。

「ユイ、冒険者ギルドまで案内頼めるか?」

「はい、任せてください。」

俺は、この世界での第一歩を踏み出した。

# プロローグ4

ユイの案内で、迷うことなく冒険者ギルドまで着いた。

うーん。大きい建物だ。

さてと… 入るか…

中に入ると、

「あ、いらっしゃいませー。お仕事案内なら奥のカウンターへ、お食事なら空いてる席へどうぞー。」

ウェイトレスの女性が愛想良く迎えてきた。

ふーん、ここは酒場も併設されているんだな。

カウンターへって言つてたつけ。

カウンターを見ると受付は4人いるようだ。

たまたまなのか、どこも空いているな。

俺が受付を見回していると、その中の女性と目があつた。

手招きをされたので、その人の所へ向かつた。

「今日は、どうされましたか？」

受付嬢が訪ねてきた。

「えっと、冒険者になりたいんですが……ここで登録出来ると聞いて訪ねてきました。」「もちろん、出来ますよ。ただ、登録手数料が掛かりますが、大丈夫ですか？」

俺は、頷くと天使様から送られた1000エリスを受付嬢に渡した。

「確かに、お預かりしました。私は、冒険者ギルドの受付を行つているルナと言います。それでは、冒険者について、簡単に説明させて頂きます。……まず、冒険者とは街の外に生息するモンスター……。人に害を与えるモノの討伐を請け負う人の事です。とはいっても、基本は何でも屋みたいなものですかね。……冒険者とは、それらの仕事を生業としている人達の総称。そして、冒険者には各職業と言うものがあります。」

その辺は、既にユイから情報を仕入れている。

SAOやALOと違つてジョブシステムがあるのだと。

説明は続く。受付嬢のルナさんは免許証程度の多きさのカードを差し出してきた。  
「こちらに、レベルと言う項目がありますね？ご存知の通り、この世のあらゆるモノは、魂を体の内に秘めています。どのような存在も、生き物を食べたり、もしくは殺したり。他の何かの生命活動に止めを指すことで、その存在の魂の記憶の一部を吸収できます。通称、『経験値』と呼ばれるのですね。それらは普通目で見ることは出来ません。」

「ですが、このカードを持つていると、冒険者が吸収した経験値が表示されます。それに

応じてレベルと言うものも同じく表示されます。これが、冒險者の強さの目安であり、どれだけ討伐を行つたかもここに記録されます。経験値を貯めていくと、あらゆる生物はある日突然、急激に成長します。俗にいうレベルアップですね。レベルが上がるとスキルを覚える為に必要なポイントなど、様々な特典が与えられるので、是非頑張つてレベルを上げてくださいね。以上になりますが、なにか質問はありますか？」

この世界は、まんまゲームだな。ホントに…

必要は無い旨を伝えると、ようやく手続きに移つた。

「まずは、こちらの書類に、身長、体重、年齢  
、身体的特徴等の記入をお願いします。」

言われた通り記入していく。

「結構です。それでは、このカードに触れてください。それで貴方のステータスがわかりますので、その数値に応じてなりたい職業を選んでください。経験を積むことで、選んだ職業によつて様々な専用スキルを習得出来るようになりますので、その辺も踏まえて、職業を選んでください。」

さて、ステータスはメニュー画面で見てるからなあ。ユイに言わせると、かなり高い

らしいからなあ。出来ればあまり注目を集めたく無いんだけど……無理だろうな。

そう思いながらカードに触れた。

「こ、これは。凄い数値ですよ。魔力こそ平均的ですが、他は全てにおいて、平均を超えています。特に筋力、敏捷性は平均を大きく超えていますよ。」

「ああ、やつぱり……予想通りのリアクション……」

ギルド内も、ざわついている……

「以前、この街で登録したアーフプリーストの女性には、やや見劣りする所がありますが、いくつかの上級職も選べる数値です。」

俺は、周りの視線を無視……しようと努力しながら職業について考えていた……

ユイのお薦めは、ソードマスターだったな。

確かに、今までSAOにしろALOにしろ俺のアバターはダメージディーラーであり、騎士系のようなタンクは向いていない。

「ソードマスターでお願いします。」

かと言つて魔力は高くないから、魔法職や回復職みたいな上級職は選べない。

「ソードマスターですね。あらゆる剣系のスキルに加えて、攻撃力に大きなボーナスが付く前衛職でも攻撃に特化した強力な上級職ですよ。」

「それでは、ソードマスター……と。冒険者ギルドへようこそ、キリト様。スタッフ一

同、今後の活躍に期待しています。」

プレッシャーを受けながらその場を退散した俺は、クエスト掲示板の前にいる。

うーん… 討伐系クエストと…

雑用関係はある程度能力が無いと無理だな。

ちなみに、定番の採取系クエストは無いらしい。

この近辺のモンスターは狩り尽くされていて、一般の人も、気軽に外に出れる為に、冒険者に依頼するようなものでは無いのだそうだ。

「ユイ。この中で今の俺でも出来そうなクエストはあるか？」

結局、ユイに相談する事にした。

「パパのステータスなら、討伐系でもそれなりにやれるモノはありますよ。」

「私のお薦めは、ジャイアントトードの討伐ですね。中級程度のモンスターですし、打撃系の攻撃は効きにくいですが、パパのソードスキルなら簡単に… そう言えばパパ、武器はどうするんですか？ アイテムストレージにある武器は使えないんですね。」

俺は、その言葉に今さらながらに使える武器を持つていらない事に思い至った。

普通、ゲームなら最初から最低限の武器を持つているものだが、今の俺が持つてているのは最低限所か伝説級のものだ。ただ、装備できなければ無いのと変わらない…

ここに来る途中、体術スキルを試してみて、問題無くエンブレイザ―が発動したこと

から、ソードスキルが使える事はわかっている。

だが、肝心の剣を持つていらない。

どうしよう…

… 結局、ルナさんに相談する事にした。

「あの… 相談があるんですが…」

「どうしました？ キリト様。」

「様はいりません。」

「では、キリトさん。どうされました？」

… 言い出し辛い…

「ええっと… 実は、討伐クエストを受けたいんですけど… 武器を持つていなくして… ギルドで貸し出しとかしてませんか？」

俺が聞くと、ルナさんは困った顔をして、ギルドでは行つていないと教えられた… 参つた…

俺が悩んでいると…

「そうですね… 先程話したアーヴィングリストと、そのお連れ様は、しばらく土木作業で お金を貯めて、武器を購入してから、討伐クエストを行つていましたよ？」

そう、教えてもらつた。しかし、出来れば早めにレベルを上げておきたい。なるべく

早く討伐クエストに行きたい俺としては、悩む選択肢だつた。

「後は、パーティーを募集してはどうでしよう。キリトさんなら、高い敏捷性を活かして魔法職の人人が魔法を撃つまでの回にもなるでしようから、パーティーを組みたいと言つ方もいるかも知れませんよ?」

うーん、パーティーか…

「そんなに、都合良く来てくれますかね。」

俺が、素直な感想をいようと、ルナさんは小声で、

「実は、お薦めの方がいるんです。」

そう言つて、ある人物を紹介された。

ちようど良く、その人物は、施設内で一人で食事をしていたので、訪ねてみる事にした。

「ちよつと良いかな…」

「は、はい。わ、私に何か様ですか?」

そう言つて、その人物は慌てながら聞いてきた。

# プロローグ5

「ちよつと良いかな…」

「は、はい。わ、私に何か様ですか？」

俺が声をかけるとその人物は、あからさまに狼狽えながら返事をした。  
なんだろう？なにか声の掛け方が不味かつたか？

俺は、そう思いながらもそのまま話を続けた。

「俺は、キリト。さつき冒険者に登録したばかりの駆け出し冒険者なんだけど…。君  
は、ゆんゆんで間違い無いかな？」

俺の問いに「はい。」と返事をするゆんゆん。

そう。俺は、このゆんゆんと言う人をルナさんから紹介された。

・ · ·

「実は、お薦めの方がいるんです。」

そう言つて、ルナさんはゆんゆんがどんな人物か教えてくれた。

まず、紅魔族であること。紅魔族は、魔力の高いものばかりで、里の大人は皆、アークウェイザードとなるらしい。

その高い能力から、魔王も一目置く一族なのだが、独特のセンスを持つていて、名前や名乗りに前口上をするなど、一族総出で所謂、チューニビヨーを患っているらしい。ルナさんによると、ゆんゆん自身は紅魔族の中でも、かなり常識人なのだそうだ。正義感も強く、優しくて良い娘だと言っていた。

そんな娘が、なぜパーティを組まずにソロで活動しているかと言えば‥

本人が恥ずかしがり屋で、引っ込み思案なせいで、パーティを組んでほしいと自ら言えないのだと言う。

それでも、周りから誘われそうなものだが、これは、この街で冒険者をやつてている、もう一人の紅魔族の悪評が問題らしい。

通称『頭のおかしい爆裂娘』ことめぐみんは、一日一爆裂などと宣つて、街の近くの広野に爆裂魔法を撃つては騒音被害を出しているらしい。

また、このめぐみんという娘は、爆裂魔法しか習得していないようで、爆裂魔法の消費魔力のせいで一日に一度‥しかもほとんどの敵にはオーバーキルな爆裂魔法を擊つと、その日は使い物にならないらしい。

それは。魔法使いとしてどうなのだろう‥と思うが、とにかく同じ紅魔族と言うこ

とで、ゆんゆんも敬遠されているらしい。

不憫な…

決して、昔の自分を思い出している訳ではないぞ？  
とにかく、ゆんゆんには問題が無い所か、むしろ優秀な冒険者なのだそうで、ルナさん  
に薦められた訳だ。

さて、どうやつて切りだそうか… もともとコミュニケーション能力はかなり低いと  
自負する自分が、年下の女の子をパーテイーに誘う… いや入れてもらうと言う方が正  
しいか…なんて出来るか？

シリカの時は、人助けってことで俺の方に余裕があつたけど、今回は逆だしなあ…  
… 正直に言うしかないか。

俺は意を決して口を開く。

「実は、パーテイーを組んでくれる人を探していてね。ルナさんから君を紹介されたんだよ。」

「わ、私とパーテイーを組んでくれるんですか？よろしくお願ひします。」

「こちらが言い終わる前に被された…」

「あ、ああ…その通りなんだけど…まずは、こちらの話を聞いてもらえるかな…  
とりあえず、こちらの事情も説明しないと…」

「実は、冒険者になつたは良いんだけど、武器を持つていらないんだ。ソードマスターになれたから、ステータスは高いんだけど、それでも剣を持ってないから、討伐に不安があるてね。それでも、敏捷性が高いから魔法職の詠唱中の回にはなれると思うんだけど、どうかな？」

「あ、そんなに高いものでなければ、私がプレゼントしますよ？」

… おかしいな。初対面の人に武器をプレゼントするつて、この世界では普通なのか？

「ええつと、それは流石に君に頼りすぎだと思うんだ… それなら、代金を立て替えるかもしれないかな？ クエストの報酬から君に返すと言うことで。」

「いえ、構いませんよ？ 友達に奢るのは慣れてますから…」

「いやいやいや、友達どころかまだ俺と君は初対面だよ。うん、必ず返すつてことでよろしく頼む。」

俺は、この娘の闇を見た気がした。

「とりあえず、じゃあ、パーティを組んでくれるつてことで、改めて… 俺はキリト。職業はソードマスターだ。よろしくなゆんゆん。」

俺が自己紹介をすると、ゆんゆんが涙目になつた。しばらく悩んでいるようだが、意を決したようで、

「わ、我が名はゆんゆん。アークウイザードにして上級魔法を操る者。いずれは紅魔族の長となるもの」

香ばしいポーズでそう名乗ったゆんゆん。

…これがルナさんの言っていたヤツか…

その後、ゆんゆんは、蚊の鳴くような声で、よろしくお願ひします…と言った。  
恥ずかしいならやらなきや良いのに…とも思つたが、きつと一族の擬か何かなのだろうと、自分を納得させた。

「よろしくな、ゆんゆん。」

俺が、普通にスルーしたリアクションをしたのが以外だつたのか、ゆんゆんは、目を丸くした後、笑顔で返事をして握手を交わした。

「パパ、浮気はダメですよ?」

その時、俺のコートに隠れていたユイが飛び出して、俺を嗜めた。

「いや、浮気つて… ただパーティーを組んで、握手を交わしただけだぞ?」

「ママが、パパは一級フラグ建築士だから、女性と親しくなりそなら氣を付けるように言つていました。」

アスナ：君は一体、ユイに何を吹き込んでいるんだ…

俺たちが、そんな会話をしていると、ゆんゆんが、ユイに興味を持ったようで尋ねて

きた。

「これって、もしかしてピクシーですか？ピクシーはあまり人前に姿を現さないんです  
が…：私も始めて見ました。」

俺は、咄嗟に故郷で困っていたところを助けたら懐かれた…と説明した。  
ゆんゆんは、特に疑問には思わなかつたようで、そうなんですか…と納得していた  
ようだ。

その後、今後の方針について話し合い、まずは武器屋に行こうと言うことになつた。  
駆け出し冒険者の街とすることで、お世辞にも品揃えは良くなかつたが、片手剣を一  
本購入し、軽く素振りしてみる。  
ちょっと軽すぎるけど、無いよりはずっと良いだろう。

なぜなら…：

俺は慣れ親しんだモーションを起こす。

すると、剣が光に包まれ下位ソードスキル『スラント』が発動した。  
そう。ソードスキルは剣が無ければ発動できないのだから…：

その動きを見た店主とゆんゆんが驚き目を見開いていた。

「キリトさん。今の動きなんですか？剣が光つてましたし、何かのスキルですか？」  
…：上手い言い訳考えて無かつた…：

結局、自分がいた今は亡き遠い故郷… アインクラッドの人間だけが使えるスキルだと説明した。

嘘は言つてないしな…

武器を手に入れた俺は、改めて冒険者ギルドに戻り、ゆんゆんと相談してジャイアントトードを5体討伐すると言うクエストを請け負った。

いよいよ、始めてクエストだ。

俺のこの世界での、はじめての冒険が始まろうとしていた。

# プロローグ6

俺の前には、身の丈を大きく超える巨大な力エルがいた。

今回のクエスト目的のジャイアントトードの討伐だ。

予想より遙かにデカイ……が、その分、動きは鈍重そうだ。

俺が様子を窺っていると、ジャイアントトードは、その巨大な口を開けた……と同時に口から何かが高速で向かつてくる。

とつさに左に回避し、改めて見てみると、それはジャイアントトードの舌だった。

なるほど、これで獲物を捕らえて補食するわけだ……

さて、どうするか…… ゆんゆんに近づかせないのが、まず第一だけど……

思案していると、後ろから

## 『ボトムレススワンプ』

どうやら、ゆんゆんが魔法を唱えたようだ。

すると、力エルの足元が泥沼になり力エルの体の4分の一ほどが埋まつた。

なるほど、動きを止めた訳だ。よし、なら攻撃は俺が……と思いつ力エルに向かつて動

こうとする……

『ライトオブセイバー』

またも、ゆんゆんの魔法が炸裂し、カエルは討伐された。

「やりましたね。キリトさん。」

笑顔で駆け寄つてくるゆんゆん。

俺は思わず苦笑いを浮かべた。

確かに、討伐はしたんだけど……これではダメだ。

これでは、ゆんゆんが一人で倒したのとなんら変わらない。

パーテイーの戦いが出来ていない。今後のことを考えれば、今のうちに矯正しておいた方が良いだろう。

正直、俺が言うのもどうかとは思うが……

「ゆんゆん。君はパーテイー戦は始めてかい？」

「は、はい……そうです。私、何か失敗しちゃいましたか？」

不安そうに尋ねるゆんゆん。

「モンスター討伐つて意味では大成功だよ。ただ……今の戦闘……ゆんゆんは一人で戦つていたよな。モンスターの足止めも、モンスターへの攻撃も。」

俺は、ゆんゆんにパーテイー戦の基本を教えた。

ゆんゆんは、正に青天の霹靂と言つた表情で聞いていた。

「つまり、パーティーを組む最大の利点は、パーティー一人一人に役割を持たせることで、負担の軽減と戦闘の効率化が図れるんだよ。」

最後にそう締めくくり、先の戦闘の問題を指摘。ゆんゆんは、泣きそうな顔で謝つてきた。

「初のパーティー戦で緊張してたのもあるんだろう。次に気を付けたら良いさ。」

そう慰めると、

「はい、頑張ります。でも、キリトさん凄いですね。登録したばかりの冒険者なのに？まるで歴戦の勇士みたいな説明でしたよ？」

うつ!?: そうだつた。今の俺は、駆け出し冒険者。

「こ、故郷でそう言つた学校があつて勉強したんだよ。」

慌ててそんな言い訳をした。

「さて、後四体。今日中に終わらせたいな。さつきのカエルの動きを見る限り、俺も余裕がありそだし、連携の訓練にしよう。」

あと、ソードスキルの実験も。：

心中でそう呟きながら、俺は今日の方針をゆんゆんに、伝えた。

2体目、ゆんゆんに指示を出して泥沼魔法で足止めしてもらい、ソードスキルを試し

てみた。スラントで一撃見舞つたが、まだ倒しきれていなかつた。続け様にバーチカル・アークを放つと、今度こそジャイアントトードは絶命したようだ。

下位ソードスキルで倒せるなら、舌攻撃にだけ気を付ければ、然程驚異では無いだろう。

そう判断した俺は、3体目、4体目と連携の練習に宛てることにした。

最初と違い、上手く連携をとつて戦うやり方に、ゆんゆんは楽しそうにしていた。

五体目も、難なく倒した俺たちは、アクセルの街に戻つた。

カエルは一匹5000エリスで売れた上、クエスト報酬も合わせると、一人6万ちょつと。一日の稼ぎとしては、充分過ぎるだろう。

まあ、ゆんゆん一人でも、簡単にクリア出来たんだろうから、ゆんゆんの稼ぎを半分奪つているようなものだが……

とりあえず、半分は、剣の代金としてゆんゆんに渡し、ゆんゆんが定宿している宿に泊まつた。

もちろん、部屋は別々だぞ？

部屋に着くと、ユイと今日の出来事を話し合つた。

異世界への転生、ゲームのような異世界。ギルドに登録、モンスターの討伐……

「こうして、ユイと二人でいると、アスナを助けるためにALOにログインしたときを

思い出すな。」

ふと、そんな話題になつた。

あの時は、アスナを助けると言う目的があつた。  
でも、この世界にアスナはいない……

その事実が、どうしようもなく俺の心に寂しさを与えていた。

二日目は、ゆんゆんと討伐クエストを二つ程こなして終わつた。  
剣の代金も支払い終わり、これで気兼ねなくゆんゆんとパーティーを組めるだろう。

### 三日目：

ゆんゆんは、ライバル？に勝負を持ちかけるとのことで、今日はクエストには出れないとの事だつた。

一人で、クエストに挑むのはユイに止められていたため、街を散策することにした。  
こうして目的も無く、街を散策していると、やはりアスナの事を考えてしまう。  
アスナに会いたい。

でも、それは願つてはいけない事だ。

それは、アスナの向こうの世界での死を願うのと同義だからだ。理屈では解つている  
が、それでもアスナに会いたいと言う思いは止められない。

もしかしたら、俺を追いかけて自殺するかもしれない。そう思つて、転生に条件を付けた。

だが、もしかしたら新しい目標を見つけて幸せになつてゐるかもしれない。  
そう思う自分もいる。

それに…もし、俺を追いかけてここに来たら、俺はどんな風に接したら良いだろう。  
自殺したことを怒るべきか、あるいは悲しむべきか、それとも来てくれた事を喜ぶべきなのだろうか…

アスナ…君に会いたい…

「パパ、元気を出して下さい。元気の無いパパを見たら、ママは悲しみますよ。」

俺の表情から心境を察したのか、ユイが声をかけて慰めてくれる。

「そうだよな。ごめんな、ユイ。お前だつてママに会いたいだろうに…俺がくよくよ  
してたらダメだよな。」

そんな風に、ユイに話していると、広場の木の辺り…俺たちが始めてこの異世界に  
来た場所が光り輝きだした。

その光は、少しずつ收まり、中に人影が見える。

あれは…!!!

俺は、急いで人影に向かつた。

その人物は、少しの間呆然としていた。俺は、万感の思いでその人物の名を呼んだ。

「アスナ…」

「キリト君。会いたかったよ、キリト君。うあああああああ！」

アスナは、直ぐに振り向き、泣きながら俺に抱きついてきた。

「俺も会いたかった、アスナ。」

俺も泣いていたと思う。泣きながらアスナを抱き締めた。

結局、こうしてアスナを前にして思つたのは喜びだけだった。

悩む必要なんて無かつたんだな…

それから、少しの間俺たちは動かなかつた。

そして、アスナが落ち着いたころ、ユイに気づいたようで、ユイが声をかけた。

「ママ、会いたかったです。とつても」

「ユイちゃん、私もだよ。会いたかった。」

そう言つて、小さな妖精にアスナは頬を寄せた。

ここで、あまり長居すると人が集まつてくる。今はここを離れて改めて、アスナとゆつくり話したい。

そう思つた俺は、再会の喜びに感動しているだろうアスナに声をかけた。

「アスナ。これからのこともあるし、とりえず俺が泊まつてある宿へ行こう。」

アスナは、直ぐに了承してくれて、俺たちは手を繋ぎ、宿へ向かう。  
これからも、俺の隣にはアスナがいてくれる。

それが、嬉しい。

もう、俺はアスナということに遠慮なんてしない。アスナといふ時間の大切にする。  
俺たちの時間だつて、限りなくあるわけじやない。そう知つたから。俺は、  
俺は、これから的事に希望を感じ、宿へ向かつた。

# この素晴らしいクリアスに祝福を！

アスナと合流することが出来た俺は、まずは、落ち着いて話をするために宿に向かつた。

宿の扉を開くと、ゆんゆんがロビーで落ち込んでいた…  
「どうしたんだ？ ゆんゆん。」

俺が、尋ねるとゆんゆんが泣きながら抱きついてきた…  
ゆんゆんの突然の行動に、パニックになる俺…  
と、同時に俺の背後から、とてつもない殺気を感じる…  
うん、アスナだよね。

これ。正直、振り返りたくない…

まずは、ゆんゆんを落ち着かせて、離れない…  
「お、落ち着いて。ゆんゆん。何かあつたのか？」

すると、ゆんゆんは。

「めぐみんが、私を無視するんです！」  
と、泣きながら答えた。

とりあえず、離れてもらつて事情を聞くと、友達の家を訪ねたが、いくら声をかけても誰も出てこなかつた。

「と言うことらしい。用事つてそれか。

「なあ、ゆんゆん。もしかして留守だつたんじやないか？そもそも、今日その…めぐみんつて子と会う約束してたのか？」

このゆんゆんは、俺以上のコミュ障だからなあ。  
待ち合わせの約束なんてしないで、相手がくるまでひたすら待ち続けてたりしそうなんだよなあ。

この三日間の付き合いで、俺は、ゆんゆんの性格をなんとなく把握していた。  
すると、ゆんゆんは、

「あっ…」

と、ようやくその事に思い至つた様子。

そして、笑いながらごまかそうとした。

やはり、約束してなかつたんだな…

まあ、とりあえず、こつちは解決だな…

後は…後ろに控えるラスボスをどうにかしないと…

「えーと、アスナさん。まずは、話を聞いて貰えますでしようか…」

そう、言いながらアスナの方を振り向くと…

鬼がいました…

ええ、もうヒースクリフなんてこの視線だけで殺せるんじやね？って言う程の絶対零度の視線を放つアスナ…

アスナの顔がなまじ整っているだけに、静かに怒った表情は、相手に恐怖を与える…なんとか、勇気を振り絞り口を開く。

「アスナ。何に怒ってるのかは理解できるけど、誤解なんだ。彼女は、俺の恩人で今のがパーティーメンバーだけど、決してそんな関係じやないから…」

俺は、ゆんゆんとの出逢いとこれまでの経緯について、説明する。

「ふーん。私が、キリト君のことで、哀しみに暮れている時に、キリト君はこんな可愛い子と一緒に楽しくしてたんだねー。」

全然納得してくれなかつた…

「いや、本当に彼女とはなんでもないんだ。」

「うるさい。この一級フラグ建築士。なんで、キリト君は、私のそばを離れる度に、女の子を連れてくるの。」

「いや、本当に勘弁してください。」

折角、アスナとまた会えたのにこんなことで口論したくなんて無いんだ。

俺が、誠心誠意謝ると…

アスナが笑いだした。

「あはは。ゴメンね、キリト君。本当は、キリト君が彼女を宥めてる間に、ユイちゃんから絆縛は聞いてたの。関係も含めてね。」

つまり、俺はからかわれたのか…

「人が悪いぞ。アスナ。」

俺が抗議を挙げると…

「これ位、良いでしょ？私が悲しんでる時に、女の子と一緒にいたのは事実なんだから…」

全く、その通り…

「ご免なさい」

俺は、土下座を敢行した。

事態が落ち着いたので、俺たちは改めてお互に自己紹介することにした。

宿に来るまでに、口裏を合わせるために、今までの、俺が捏造した設定はアスナに伝えてある。

「始めてまして。ゆんゆんさん。私は、アスナ。キリト君と同じ所から来た、キリト君の… 恋人です。よろしく。」

「敬語は、良いですよ。私の方が年下みたいですし……わ、私も、自己紹介させてもらいます。」

「我が名は、ゆんゆん。アーヴィングードにして、上級魔法操る者。いづれは紅魔族の長となる者！」

「うん。俺が以前驚かなかつたからかな。

ゆんゆんは、恥ずかしがらずに名乗り口上を述べた。

アスナは、多少引いていたが、堪えたようだ。

「よく、引かなかつたな。アスナ。」

「うん。これもユイちゃんから聞いてたから……」

家の娘は、本当に良くできた娘です。

「キリトさんとは、三日前からパーティーを組んでいます。」

「そう、ゆんゆんが切り出した。

「ああ、ゆんゆん。それなんだけど、アスナも、冒險者ギルドに登録させて、パーティーを組もうと思うんだ。」

俺がそう話すと、ゆんゆんが泣きそうな顔になつた……

これは、アレだな。解散すると勘違いされてるな。きっと。

「それで、 ゆんゆんにも出来れば正式にパーティーに入つて欲しいんだけど、ダメかな？」

ゆんゆんは、 一も二もなく頷いた。

ゆんゆんは、 優秀な魔法使いだ。

それに、 アスナは俺と同じ特典を持つてきたようだし、 登録すれば上級職も選べるだろう。

死と隣り合わせの冒険者家業だが、 この二人と一緒になら安定して戦えるだろう。

前衛の俺、 前衛後衛どちらも出来て、 尚且つヒーラーのアスナ。 後衛で火力の高いゆんゆん。 かなりバランスの良いパーティになりそうだ。

まずは、 レベルを上げないとな……

俺は、 これから日々に思いを馳せ、 顔を綻ばせた。

## アクセルの宿屋にて・・

さて、めでたくパーティーを結成した俺たちだが、何故かリーダーを俺がすることになつた。

リーダーシップと言う点では、アスナの方が遙かに向いていると主張したのだが、ゆんゆんは人見知りでアスナとは初対面。

アスナはアスナで、俺がやるべきだと主張し、ユイも賛成してしまつた為、俺の意見は敢えなく却下となつた。

まあ、パーティーに関してはやつていく内に問題点も出てくるだろう。  
打ち合わせで時間が随分と経つた。

もう、外は夜だ。俺たちは、そのまま宿の食堂で軽食を取り、休むことにした。  
そこで、問題が発生した。

「そう言えば、アスナさんは今日はどこに泊まるんですか？」  
ゆんゆんのその一言が、発端だつた。

「ああ、二人部屋を取つたから、今日はゆんゆんと二人で泊まつて貰うつもりだ。金は俺が払うから。」

「え!? 私はキリト君と同じ部屋がいいんだけど?」

アスナから、直ぐに反対意見が出る。

「そ、そうですよ。アスナさんは、キリトさんを追いかけてここまで来たんですよ? 一緒にいてあげる方が良いと思います。」

ゆんゆんもアスナを支持する。

でもなあ、ここには他の冒険者も泊まっている。

ただでさえ、ここ二日のハイペースなクエスト攻略で目立ち始めてるのに、アスナのようなハイスペックな女の子と一緒に泊まる…なんて事になつたら、どんなやつかみを受ける事か…

俺が悩んでいると、

「パパ、私も今日はパパとママと一緒に寝たいです。」

ユイのお願いが炸裂する。

ハア…まあ、良いか。どうせ、明日から同じパーティーを組んでれば嫌でも噂になるだろうし、先に噂が立てばアスナへのちょつかいも減るだろう。

それに…俺だつて本当はアスナと一緒にいたいんだ…

「わかつた。じゃあ、俺とアスナが相部屋で。ゆんゆんは一人部屋を使つてくれ。」「やつた。」

「それでお願いします。（初対面の人と二人きりなんて、なにを話したら良いかわからな  
いし怖いもん）」

素直に喜ぶアスナと本音が少し漏れてるゆんゆん。

「じゃあ。明日は8時にロビーに集合。明日は冒険者ギルドにアスナの冒険者登録と、  
俺たちのパーティー登録をしに行こう。」

そういって俺たちは、それぞれの部屋に向かつた。

「ゴメンね、キリト君。ワガママ言つて。」

部屋に着いた俺たち。

一段落すると、アスナがそう話してきた。

「それは構わないさ。俺だつてアスナと一緒にいたかつたしな。まあ、多分明日には、他  
の冒険者に冷やかされそうだが……でも、珍しいな。アスナが周りに人がいるのにあ  
んなに積極的になるなんて。」

そう、俺はそれが不思議だった。

再会した直後は、感極まつていたから仕方ないだろうけど、冷静になつた今、普段の  
アスナなら周りの目を気にしてゆんゆんと相部屋を選びそうなものなんだが…  
「うん、あのね。キリト君、私… キリト君と離れたくない…。もう二度と… もし、キ  
リト君が私の知らないところで、また死んじやつたら… そう思うと怖くて… 本当に

怖くて…」

アスナが不安そうな顔で答えた。

俺は、その言葉を聞いて心底後悔した。

そうだ…。俺は向こうの世界で、アスナを残して死んだんだ。

それこそ、別の世界に転生なんて言う漫画のような事が起らなければ、アスナを一人にしてしまうところだつた。

あのとき、ヒースクリフから俺を庇つてアスナが消滅した時に感じた空虚。

それをアスナが味わっていた時に、アスナに会えない寂しさはもちろんあつた。でも、俺は… この世界を楽しんでいた…

「ごめん。」

俺は、いてもたつても要られず、アスナを抱きしめた。

「良いんだよ。こうしてキリト君に会えたんだもん。私は、それだけで幸せ。だから…もう、私を残して死なないでね。私を、ずっと離さないで。私も、ずっとキリト君から離れないから。」

俺たちは見つめ合つて、言葉の代わりに、誓いのキスを交わした。

「私も、一緒ですよ？パパ、ママ。」

あ、ユイを忘れてた…

いつの間にか、妖精から人間形態になつたユイがそばに立つていた。

俺たちは、弾けるように離れ…： たりはせず、ユイを交えて抱き合つた。  
ああ、これから三人ずつと一緒だ。

それから、どれくらいそうしていただろう。

名残惜しいが、明日もやることは多い。そろそろ寝ないとな。

ベットは2つある。

「ユイ。今日はアスナと寝るか？」

俺が聞くと、

「パパ、今日はパパとママと三人で寝たいです。」

「私もそうしたい。」

「一人に、そう言われた。

「つて言つてもな、流石に三人で寝るほど大きいベッドじゃないぞ？ 二人でもギリギリ  
だし。」

俺が現実的な意見を言う。

「じゃあ、私がピクシーに戻ります。それで、二人の間で寝たいです。」  
「うん。二人分なら身を寄せ合えば、なんとか寝れるよ。」

「結局、二人に押しきられた。  
「わかった。じゃあ、寝るぞ。」

俺たちは、ひとつベッドに入つた。

「おやすみ、キリト君。大好きだよ。」

「ああ。俺もだよ。アスナ。愛してる。」

俺たちは、抱き合つて眠りに着いた。

こうして、君と触れ合える。

今日、この日に感謝を。

# 冒険者ギルドへ行こう！

翌朝目が覚めると、目の前にアスナがいた……

そう言えば、昨日は同じベッドで寝たんだつけ。

こうして、目の前にアスナがいるのを実感すると、これから、三人で過ごす未来に自然と顔が綻ぶ。

ふいに、アスナが目を開けた。どうやら起こしてしまったようだ。

「おはよう。キリト君。」

そう言つて、俺に抱きついてくるアスナ。

「おはよう。アスナ。」

その行動に、俺も、キスでアスナへ返した。

「良かつた。キリト君がいて。もし、昨日の事が全部夢だつたらどうしようつて思つちやつた。」

「俺は、もうどこにも行かないよ。昨日、約束……いや……誓つただろ？」

「うん。そうだね。ありがとう。キリト君。」

俺たちは、そのままお互いの温もりを確かめ合つた。

それから、しばらくして、

「パパ、ママ、おはようございます。もうすぐ、ゆんゆんさんとの待ち合わせの時間ですよ。」

ユイが話しかけてきて、慌てて身体を離し、支度をし始める。

この世界は、SAOと違つてちゃんと着替えをしなければならない。

ゲームのような世界ではあるが、そこは現実的だ。

どうせなら、コマンドひとつでできた方が楽なんだが…

アスナは、昨日来たばかりで、買い物をする時間もなかつたから胸当て等の防具を外していただけなので、直ぐに支度も終わるだろう…と思つていた時期がありました。

それから、悠に三十分…時間はまだ多少あるが、やはり女の子の支度は時間が掛かるものらしい。

SAOで一緒に住んでいたときは、コマンドで簡単に支度を終えられた為、こんなに時間が掛かるとは思つていなかつた…

なんとか待ち合わせの時間に間に合い、俺たちはロビーへ向かつた。

「あ、おはようございます。皆さん。」

「「おはよう（ございます）。ゆんゆん（さん）（ちゃん）。」」

ゆんゆんは、既に待ち合わせ場所に着いていた。

互いに挨拶を交わし、席に着く。

「よし。皆揃つたな。それじゃあ、今日の予定を伝えるぞ？今日は、アスナの冒険者登録をして、職業を選んで貰う。それが終わつたら、パーティの申請を出して、クエストを請け負う。それからアスナの武器を購入して、クエストでチームプレーの練習を行うつもりだ。アスナを交えてのチームプレーは初めてになるからな。特に、ゆんゆんはまだチームプレーが上手くないから、難易度は高く無いものを選ぶ予定だ。何か、質問は？」

一応、リーダーになつてしまつたので俺から、今日の予定について説明をした。

「キリト君。私は、何の職業を選んだら良いかな？」

アスナからの質問である。そう言えば、その辺話し合つて無かつた…  
ALOでのアスナの役割をそのまま当て嵌めていたけど、考えてみたら、アスナはまだ職業を決めていない。

「ううん、俺たちのパーティはアタッカーバカリでバランスが悪いからな。回復職かタンク…あるいは盗賊系が良いと思うんだが…どうだ？ユイ。」

「ママのステータスは、敏捷優先ですから盗賊系が良さそうですが、パーティの安全…とすると回復職が優先するべきだと思います。ママはALOでもヒーラーは慣れています…。それに、おそらくママのステータスなら、アーフプリーストを選択

出来ると思われます。アークプリーストなら、前衛もこなせます。パパやママの最大の特長であるソードスキルを使う機会もあるでしょう。」

ユイの説明を聞いたアスナは、少し考えたあと、

「うーん……わかった。じゃあ、回復職にするね。アークプリーストになれるかは、行つてみないとわからないけど、どっちにしても回復役は重要だものね。」

回復役を請け負うことになったようだ。

バーサーカヒーラーの復活も近いか…

「キリト君。今、何か思わなかつた？」

「いえ、何も思つていません…」

なんでわかつたんだ…

「と、とにかくギルドへ向かおうか。」

俺たちは、宿を後にしてギルドへ向かつた。

「へえ、ここが冒険者ギルドか。大きいね。」

「ここは、酒場も兼ねてるからな、それなりの大きさがいるんだろう。」

冒険者ギルドの前でそんなやり取りをしていると、ふいに、声を掛けられた。

「よう、キリト。なんだ、今日はゆんゆんだけじやないのか。」

ニヤニヤして近づいてきた金髪の男。冒険者仲間のダストだ。

冒險者活動初日。クエストをあつさりと終えた俺たちに難癖をつけようと来たことは、あつさり返り討ちにしてやると、やたらフレンドリーに接してくるようになった。どことなく、雰囲気がクラインに似ているせいか、直ぐに打ち解けた。

「聞いたぞ？ ゆんゆんとパーティーを組んでいる癖に、他の娘と一緒に部屋に泊まつたんだって？」

「はじめまして。キリト君の恋人のアスナと言います。私もこれから、冒險者を始めますのでよろしくお願ひします。」

アスナが先制攻撃を仕掛けた。

ダストは放心していた。アスナの姿に見惚れていたんだろう。

「はじめまして、ダストです。困ったことがあれば、俺が助けてますよ？ なんなら、俺のパーティーに入つて頂いても…」

こういう所がクラインに似てるんだよなあ…

「いえ、私はキリト君のパーティーに入りますので、お断りします。」

笑顔で、最後まで言わせずに断るアスナ。

慣れてるんだろうな。

「さて、じゃあ中に入るぞ？」

振られて落ち込むダストを他所に、冒險者ギルドに入る俺たち。

冒険者登録は、滯りなく進んだ。

やはり、アスナのステータスにルナさんが驚き、俺の時と同じようなやり取りがあつたが。

ちなみに、アスナは俺と違つて、魔力も高めだつた。  
「これなら、いくつか上級職も選べますよ？筋力が少し足りないので、前衛の上級職は選べませんが……」

「アーフプリーストでお願いします。」

予定通り、アスナはアーフプリーストを選択した。

その後、俺たちはパーテイー結成の申請を行つた。

「パーテイーの三人が三人とも上級職なんて凄いですね。こんなパーテイーは、他に……一組しかこの街にはいませんよ。」

へえ、他にも駆け出し冒険者の街に上級職で固めたパーテイーがいるんだな。でもルナさんは、なんで言い淀んだんだ？

疑問に思いながら、ジャイアントトード10匹討伐のクエストを選び、外に出た。

外に出ると、ゆんゆんが見知らぬ女の子に詰め寄られた。

「ど、ど、ど、どうしたんですか……ゆんゆん。正気ですか？騙されてるんじゃないですか？ゆんゆんが一人じゃないなんて、明日は爆裂魔法が降つてくるんじゃないです

か？」

だいぶ酷いことを言われている気がする。

俺たちが、そのやり取りに呆気に取られないと、

「貴方は、もしかして『桐ヶ谷和人』さんではありませんか？」

青く長い髪をした、綺麗な女の子が声を掛けてきた。

# カズマ一行、キリアスに遭遇する（前編）

俺の名前は佐藤カズマ…

女神アクアに見出され、異世界へと転生した、この物語の主人公だ…

そして、今俺は… 驚愕の表情を浮かべている事だろう…

こいつは、誰だ…

今、俺が思っている事だ。

いや… 今、目の前にいる初対面の二人の事じやないぞ？

俺のパーティの一人であり、この世界を最初から共に過ごした、通称『駄女神』…  
別名『ポンコツ女神』のアクアの事だ。

・ ・ ・

そう、俺たちは、湯治の為にアルカンレティアに旅行へ行つた。

旅先で、大騒動に巻き込まれつつも、なんとか一段落し、先程アクセルの街に戻つて

きた。

街の入り口で親切な馬車のおっちゃんと別れ、冒険者ギルドへ帰ってきた報告をするために向かっていた。

「ハア…全つ然…骨休めにならなかつたなあ…それと言うのも…アクア!!お前の所のアクシズ教徒のせいだぞ。もうちよつとあいつらを自重させろよな。」「はあ?うちの子達は悪くないわよ。魔王の幹部が問題を起こしてたんじやない。むしろ、幹部を倒して、私たちのパーティの箔が上がつたでしょ?」

「俺は、その戦闘で『また』死んだけどな。これで何度目だ?なんんで、骨休めに行つた先で、また死んでるの?なんなの、これ?」

そう、俺たちは、湯治の為に訪れた先で、またもや魔王の幹部に遭遇。魔王はアクシズ教徒の無駄に高い信仰心と、ちよつとアレな考えに驚異を感じていたようで、その資金源の一つであるアルカンレティアの温泉に細工(温泉に毒を混入)をして、資金源を断とうと考えたようだ。

アクシズ教徒に遭遇した人間なら、その気持ちはとてつもなくよくわかる…

とにかく、企みを阻止に成功…したまでは良かつたんだが、うちの駄女神の気に充てられて、街の温泉が全てただの水になると言う、ある意味、魔王の幹部の目的が達せられてしまつたのだ。

俺たちは、街の人たちに感謝されるどころか石を投げられながら、帰路についた。・まあ、あのおかしなアクシズ教徒達に感謝されたいとは思わないが・

そんなわけで、俺はいつもの様にアクアと口論しながら、ギルドの前まで来た。すると、めぐみんが、ふいに立ち止まり驚愕の表情を浮かべていた。その視線の先には、三人組のパーティー。

一人は、確かめぐみんの自称ライバルのゆんゆん。

後二人は・見たことないな。

一人は、全身黒ずくめの男。顔は・整っている方だな。

あのイケメン勇者（笑）ミツルギキヨウヤほどじやないが・

もう一人は・・・・・可愛い・

見てくれ「だけ」なら文句の無い、うちのパーティーで綺麗な娘には見慣れてる俺がそう思うのだ。

日本で出会っていたなら一目惚れしていたかもしない。

残念な事に、うちのパーティーの面子を見ていると、見てくれだけで惚れる事は、もう出来そうにないが・

一人は、女神として見た目は非の打ち所が無いのに、口を開けばろくな事を言わない上に、他人の足を引っ張る事を生き甲斐にしているかのように問題を起こしてくれる、

駄女神。

「人は、爆裂狂で爆裂魔法以外覚えようとしないせいで一日一発しか魔法を撃てない、なんちやつて魔法使い。」

「人は、ドMの上、攻撃の当たらない変態クルセイダー……」

アレ……なんか……自分の現状を思い返していたら、勝手に涙が……まあ、それは置いておこう。悲しい現実しかないし……

とにかく、見知らぬ二人と一緒にいるゆんゆんに、めぐみんが絡んでいる状況だ。

会話から察するに、万年ぼつちのゆんゆんが、他の……それも見知らぬ人間と一緒にいることに動搖しているのだろう。

かなり、失礼なことを口走っている……

まあ、ゆんゆんが心配なんだろう。

めぐみんは、ああ見えて仲間思いだからな。

……ツンデレだけど。

そんなことを考えていると、アクアが黒ずくめの男に気づいたのか、声を掛けた。

「少し、よろしいですか？」

「貴方は、もしかして『桐ヶ谷和人』さんじやないではありますか？」

……こいつは、誰だ……（冒頭に戻る）

おかしい……俺の知ってる駄女神は、こんなに神々しい雰囲気を出したりしない……  
そもそも、口調も変だ。

いや、最初に会った時、少しの間はこんなだつたような……  
でも、直ぐに人の死因を笑うのはろくでも無かつたな……  
やつぱり駄女神だつたな。うん。

そう結論付けるが、目の前の会話は続いている。

「確かに俺は桐ヶ谷和人だ。ここでは『キリト』と名乗っているが……あなたは誰だ?  
何故俺の名前を知つている?」

どうやら、男の方はアクアを知らないらしい。

名前を知つているアクアを警戒しているようだ……  
つて、桐ヶ谷和人つて言つたか?まるつきり日本人じやねえか。  
アクアの変貌ぶりに、驚いてスルーしてたぜ。  
つてことは、こいつも転生者?

でも、それならなんでアクアを知らないんだ?

：ああ、アクアがこつちに来てから転生してきたんだな。あの天使さんが業務は引  
き継ぐつて言つてたし。

それにしては、なんでアクアはこいつを知つてるんだ?

自分で送り出したミツルギキヨウヤは覚えて無かつたクセに……

「私は、アクア。この名前に聞き覚えはありませんか？」

キリトは、最初その名前に聞き覚えが無い様に燐しがつていたが……

「もしかして……女神アクア……様ですか？」

向こうも、すぐにアクアの正体を察したらしい。

アクアは、ニッコリと笑い

「はい。はじめまして、桐ヶ谷和人さん。そちらは結城明日奈さんですね？私は女神アクア。本来は、日本に於いて若くして亡くなつた方を導く役目を負つていました。」

「事情があつて（俺が異世界に持つていく『モノ』として指定したんだがな。アレは痛恨の失敗だつた）、今はこの世界に受肉しているため、部下が仕事を代行しています。こう言う言い方は、お二人に失礼かも知れませんが、あなた方の転生を歓迎します。」

二人は、アクアに跪き、

「ありがとうございます。貴女のおかげで、こうしてアスナと一緒に過ごす事が出来ます。」

「私も、アクア様に感謝しています。私がキリト君といられるのは、アクア様のおかげです。」

そして、キリトの頭の上にいた小さな妖精も、

「ありがとうございます。アクア様。」

「あら？ 貴方は知らないわね？ 貴方も転生した人かしら？」

アクアは、この妖精は知らないらしい。

「私は、ユイと言います。はじめまして、アクア様。私は、本来生き物ではありません。人が作ったプログラムが自我を持った存在です。天使様も驚いておられました。有史以来、初めての事だと。」

「それが本当なら、確かに驚くべき事ですね。まあ、良いわ。はじめまして、ユイさん。

貴方も歓迎します。」

本当に、アクアはどうしてしまつたんだろう？

これでは、まるで本物の女神のようではないか。

俺は、落ち着かない気持ちを抱えながら、その会話を聞いていた。：

# カズマ一行、キリアスに遭遇する（後編）

「お、おい、カズマ。アクアがおかしいぞ。お前が何かしたんじやないのか？」  
さつきまで、俺と同じ様にアクアの変貌ぶりに呆然としていたダクネスが、そんな事を言つてきた。

「おい、なんでそうなる。なんでもかんでも俺のせいにするなよ？俺がいつ、アクアに何したってんだ？」

「カズマは、いつもアクアを口悪く罵つていたではないか。やれ使えない穀潰しだの、やれ借金女神だの。きっと、ストレスで…おかしくなつてしまつたんだろう…」  
そう言う事は、私にこそ言つて欲しいのに。そんなことを言われ続けたら…私は…んつ」

…こいつは平常運転だな。放つておこう…

それにもしても、本当にアクアのやつはどうしたんだ？

あんな女神ぜんとした姿を見ると、普段の駄女神つぶりを知つてる俺たちは落ち着かなくなる。

後でどんでもないことをやらかしそうで…

何しろ、こいつは一つ役に立つたと思うと二つ、三つも何かやらかして足を引っ張る

からな…

そんな俺の考えをよそに四人は会話を続いている。

「三人とも、これからどうするつもりですか？私たちは、強制はしません。あなた方が転生したことで、既に私たちの目的は達成しておりますから。」

「…俺たちは、魔王の討伐を最終的な目標にしています。確かに、強制はされていませんが、貴方には大きな恩があります。こうして俺とアスナとユイで過ごす日々をもう一度送れる…それだけで、俺たちは幸せです。」

「アクア様は、本当はこの世界の魔王を討伐して欲しいんですね？なんでも願いを叶えるなんて、報奨を用意する位ですから。」

「そうですね。この世界に住む人々は、今、まさに苦しめられています。それこそ死んだ人々が生まれ変わるのを拒否するほどに…勿論、魔王が討伐されるなら、私たちにとって、大変に喜ばしい事です。」

「貴方たちには、期待しています。ですが…無理はなされないように。この世界は、確かにゲームのようではありますが、貴方達がかの城で経験したものと同じ…死ねば本当に亡くなります。ですから、慎重に行動してください。」

「気を付けます。それでは、俺たちはこれから武器屋に寄つてからクエストに向かいますのでこれで。」

「ゆんゆん、そろそろ行くぞ？」

「あ、待つて下さい。それじゃ、呼ばれてるからこれで。めぐみん。勝負はまた今度するわよ。」

慌ててゆんゆんが二人の方に駆け寄り、俺たちの前から去つていった。：

アレ……おかしい……ナニコレ……おかしい……

何のオチもなく、会話が終了してしまった。

アクアは、三人と一匹？の姿が見えなくなるまで微笑みながら手を振つていた。神々しい気配を漂わせながら……

「おい、アクア。お前一体どうしたんだ？悪いものでも食べたんじゃないのか？」

あいつらが見えなくなるのを見計らつた俺は、アクアに声を掛けた。：

「ハア？何よ突然失礼ね。私はヒキニートのカズマじやないんだから、そんな事する訳無いじやない。」

そこには、先程の女神アクア様はいなかつた。

いるのは、俺が知つてる残念女神アクアだ。

「いや、お前、さつきの様子はなんだよ。見ろよ。さつきのアクアを見てダクネスが怖がつてるじゃないか。」

「わ、私は別に怖がつてなどいない。ただ、さつきのアクアは……その……本当に女神様

のようで、驚いていただけだ。」

「そうだぞ？ アレじやあ、まるで普通に女神様じやないか。」

「二人とも失礼ねえ！ まるでも何も、私は、正真正銘、今も昔も女神様なんですけど…」

「お前、普段のへっぽこっぷりを見て、周りが信じてくれると思うなよ？」

「うわあくん！ カズマが言つちやいけない事言つたあ！」

俺の一言に泣き出すアクラ。

ダクネスが宥めて落ち着いた頃に、

「で、結局あの態度はなんだつたんだ？」

俺が、改めて問いただすと、

「私は、彼らを導く女神として彼らに接していただけじやない。」

そんな答えが帰ってきた。

「ちょっと待て。お前、俺が日本で死んだとき、人の死因を笑うわ、俺には期待していないとか横になりながら、あろうことかお菓子食いながら、おざなりに対応してただろ？ 女神として接してなんていなかつたじやないか。それに、自分で送り出したミツルギつてやつの事は覚えてすらいなかつたクセに、なんであいつらのことは知つてるんだよ。」

俺が、早口で捲し立てると、

「バカね： カズマ。彼とカズマを同列に扱うなんて、とんでもない暴挙よ。彼とカズ

マは、月とすっぽん… どころか太陽とミジンコ位差があるのよ?」

哀れみの視線を俺に向けながらそう言つてきた。

「こいつ… 後で絶対、泣かしてやる…」

そう誓いつつも、質問を続けた。

「あいつらも、転生者なのはわかつたけど、何がそんなに違うってんだ? 大体、お前は転生者の事なんていちいち覚えてないって言つてたじゃんか。」

「これだから世間知らずの引きニートは…」

まるで、枕詞のように俺の悪口を加えながらアクアは説明を始めた。

「良い? カズマ。本来ならあの場に導かれるのは、ランダムに選ばれる無害な若者の魂なの。でも、彼はある出来事から私自身が注目して、もし若くして亡くなるようなら、是非でも転生してもらおうと介入していたのよ。」

「いつたい、あいつは何者なんだ?」

「カズマもゲームなら『ソードアート・オンライン』って知ってるわよね。」

「そりやあ、知つてるさ。俺も応募したけど一万人っていう狭き門に阻まれて落選して、そりやあ悔しがつたもんだ… けど、実は正真正銘のデスマニアだつたみたいで、落選して良かつたつなあって、ホツとしたもんだ。それからVRは一度とやらないと決めてアミューズフィアにも手を出さなかつたし… つてまさか…」

俺は、アクアの言わんとしている事に気付いた。

「そうよ、彼はSAOサバイバー。それも、デスゲームをクリアして60000人もの命を救つた… 平和な日本に於いては、二度と現れる事はないだろう正真正銘の英雄よ？」  
「それに引き換え、カズマさんは何してたかしら？ 確か学校も行かず引きこもつてゲームしてたヒキニートよね。」

⋮ 生まれてきてスマセん⋮

「つてことは、あの女の子も？」

「彼女も同じね。SAOサバイバー。それも最前線で一番大きいギルドの副団長をやつていたわね。彼女はキリトがゲームをクリアする寸前に彼を庇つて命を落とし掛けたけど、制作者の氣まぐれで生きてたみたい。まあ、キリトもラスボスと相討ちだつたら本来なら死んでいたんでしょうけど。」

「ちなみに、一人はゲームの中で結婚もしていたそうよ？」

⋮ なんだろう。殺したい程に妬ましい。

「とにかく、彼らには期待してるのよ。魔王討伐を。だから対応が丁寧になるのは当然でしょ？」

「そう言えば、あいつらアクアに敬意を払つてたけど、アクシズ教に入れなくて良いのか？」

「必要無いわ。彼らの祈りは私に届いているもの。宗教つてね、神を認知して、神に祈りを捧げる為に分かりやすくしたものなのよ。だから、彼らには必要無いわ。」  
そ、 そうなのか?

今日のアクアは、何故だか知的だ… 知力が低いくせに…

「まあ、良いか。とにかく、疲れたし今日は家に早く戻ろう。… ってそう言えば、さつきからめぐみんが一言もしゃべつていないような…」

めぐみんは… 未だに呆けていた…

よほど、 ゆんゆんが誰かと一緒にいることに驚いていたようだ…

# アスナ、異世界にて初クエストに挑む！

キリト君と、この世界で再会して一日が経つた。

昨日は、キリト君とユイちゃんと三人で一つのベッドに寝た。

それが、どうしようもなく嬉しくて、キリト君の胸で泣いてしまった。

キリト君は、そつと私を抱き締めてくれた。

その温もりに、私はなかなか涙を止められなかつた。

一度、失つてしまつた温もり。それを再び取り戻すことができ、今はとても幸せです。

この幸せを守るためなら、なんだつて出来る。

この気持ちがあれば、あの時、お母さんに立ち向かう事だつて出来たのにな……  
そう思うと、悔しい。

今なら解る……幸せを失う事の本当の怖さを。

人が誰かと争うのは、自分の幸せのためだつて、誰かが言つてたつけ。

私の幸せは、キリト君とユイちゃんと……三人で平穏に暮らす事。

その為に、今度こそ逃げずに戦おう。

それが、私の誓い。

翌日、冒険者登録を済ませ、私はアークプリーストとなつた。前衛もこなす回復職との事なので、ALOでの戦闘スタイルにもマッチしているから、直ぐに慣れると思う。

何よりも、キリト君が傷ついた時に、自分の手で癒せるのが大きい。ギルドで、ジャイアントトード10匹の討伐というクエストを受けた。

名前から考えると大きい力エル…スカンベジトードも大きかつたけど…どれくらいの大きさなんだろう?

ギルドを出ると、予想もしていなかつた人に遭遇した。

私たちを転生させてくれた天使の上司である女神アクア様。

私にとつては恩人と言つて良い人?だ。

この方がいたからこそ、私はキリト君と再会できたのだから。

アクア様は、事情があつて今はこの世界に、人として降臨されているのだそ�だ。もし、彼女が困つていたなら、手助けをしよう。

そう思つた。

それにして…魔王の討伐かあ…願いといつても、私の願いはもう叶つてるし  
なあ。

でも、キリト君との暮らしを穏やかに送るためにも、平和な世界にしたいしな。  
うん、キリト君も目標にしてるし、私も頑張ろう。

そう言えば、キリト君はなにか願い事はあるのかな?  
アクア様と別れて、私は今、武器屋にいる。

実は、アイテムストレージにランベントライ特が入っているんだけど、今の私には装備出来ない。ステータスが足りていなければだ。

一度オブジェクト化してしまって、二度とアイテムストレージに戻せないそ

ら、今は実体化させていない。

装備できない武器は邪魔なだけだしね。

武器屋で、レイピアを身繕い、キリト君にお金を出してもらつて購入した。  
材質が、やや不安だけど今はこれで我慢だ。

早く、ランベントライ特を装備出来るようになりたいなあ。

リズ：元気かな。

怒ってるよね……きつと。

お父さんや兄さんには悪いけど、家族にはそれほど会いたいと思わない。でもリズ  
や、シノノン：仲間たちには会いたい。会つて謝りたい。

それだけが、心残りだ。

そんな事を考えながら目的地に着いた。

そこは日本では、お目にかかる事がほとんど無いだろう見渡す限りの草原だった。

「さて、これから俺たちパーティーの初クエストになるわけだが……」

そう言つてキリト君は、今日の方針について説明を始めた。

「今回の目標のジャイアントトードは、俺たちのステータスなら簡単に倒せる敵だ。打撃には耐性があるようだが、斬撃には弱いし動きも遅い。その巨体によるのし掛かりや、舌を使つた攻撃に注意さえすれば、然程苦戦はしないだろう。」

「ただし、アスナは今回初クエストになるし、今日は全力で挑む。目標は5体。一応ノルマは三日あるが、出来るなら一日でクリアしたい。なにか質問は？」

「討伐の前に、スキルや動作の確認をしたいんだけど。」

私の要望に、

「勿論、そうしてもらうつもりだ。」

キリト君は、快く答えてくれた。

私は、まずソードスキルの確認を行つた。

基本的なものから、細剣専用のソードスキルのリニア・スター・スプラッショ、フラッシング・ペネトレイター、それに私のオリジナルのスターリィ・ティア……うん、全て問題なく発動した。

それから、アークプリーストのスキルのヒール、それに状態回復魔法、支援魔法を幾つか。これも問題無く発動できた。

後は、体の動きだけど……こちらは少し重く感じた。ステータスが低いせいかな？  
生身の身体つて意味だと相当動けるんだけど、VRのアバターの身体つて考えるとどうしても動きが悪く感じる。

これは、慣れが必要かな。

「だいたい、把握できたよ？ キリト君。」

私の準備が整ったのを見届けて、場所を移動する私たち……  
そこに……巨大な力エルがいた……  
大きい……私の予想よりも相當に……

「アスナ。まず1体目は俺とゆんゆんで仕留める。アスナは俺たちの攻撃から、この力エルの耐久力を大まかで良いから予測しておいてくれ。2体目は俺とアスナで仕留めるぞ。」

「う、うん。」

正直、ちょっと気持ち悪い。  
でも、キリト君といふる為だ。

頑張らないと……

1体目は、ゆんゆんが魔法で足止めして、キリト君の下位ソードスキルの二連発で仕留めた。

私たちの、今のステータスでは一発じや仕留めきれないのか…

耐久力はなかなかだね。打撃には強いんだつけ。

2体目、いよいよ私の番。

大丈夫。私はやれる。さつきの戦闘でこのモンスターの大体の動きは把握した。

「キリト君。行くよ。」

そう、声を掛け、私は飛び出した。

使う技はリニア。私が使うソードスキルの中で、最も多用し、最も隙の少ない技。これの連発で倒せるだろう。

そう、思っていた…

私の技が当たつた途端、私の手に肉を引き裂く耐え難い感触が伝わってくる…

今さらながらに、この世界がゲームではないことを実感した。

アインクラッドですら、モンスターを討伐するとき、プレイヤーに生き物を殺す感触は伝えて来なかつた。

HPのやり取りとその身体をボリゴン化し消滅。

そこには、頭の中で倒したと解つても、身体で感じる事は無かつた。

でも、ここは紛れもない現実だ。

そう思つたと同時に生き物の命を奪う行いに対する恐怖で身体が硬直してしまつた。

「あつ」

カエルは、私に敵意を向けると口を空け、舌を伸ばしてきた。

避けなければ… そう思うのに身体が動かない…

「ママ、避けて！」

ユイちゃんの声が聞こえる。

「アスナ！」

私が諦め掛けた時、キリト君が私の前に飛び出した。

キリト君が舌を切り飛ばしたと同時に、残つた舌がキリト君を横風ぎに殴り飛ばす…

その光景を見て、私の中で何かがキレた…

よくも、キリト君を…

「うあああああああ！」

大声を上げ、フラツシング・ペネトレイターを見舞う。

オーバーキルも良いところだが、知つたことか。

キリト君を傷つけるものは許さない。

気がつくとカエルは倒れていた。

そうだ、キリト君は…

私がキリト君の方を振り向くとキリト君は痛みに顔を歪ませながら、ゆんゆんに肩を貸されながら、なんとか立ち上がった。

私は、キリト君にヒールを掛け、さつきの事を謝った。

キリト君は私の目をじっと見つめ、

「俺は大丈夫…でもアスナこそ大丈夫か？」

そう聞いてきた。攻撃の時に私が硬直した理由を察したみたいだ。

でも、もう大丈夫。一度失敗したが、キリト君を失う事に比べれば対した恐怖じやないと気付いたから…

3体目、もう一度キリト君と私で。

4体目は私とゆんゆん。

5体目は三人の連携を試しながら仕留めて、この日を終えた。

私は戦える。

キリト君と一緒になら、できないことなんて無いんだから。

ちなみに、カエルは一匹5000エリスで売れた。

輸送はギルドで行つてくれるそうで輸送費をさつ引くとその値段になるらしい。

… 食用なのだそうだ…

た、食べなきやダメなのかな？

この世界で生きてくのは樂じやない…

どうか、味がまともでありますように。

そう言えど、余裕が出来たら、またキリト君に手料理を作りたいな。

そのためにも、早くレベルを上げてホームを持たないと。  
私は、当面の目標を見つけ、皆で帰路に着いた。

# カズマ一行、キリアスに会いに行く。

俺の名前はサトウカズマ。

女神アクアの導きのもと、この世界に転生した勇者候補の冒険者だ。  
え？ どうやって転生したかって？

そうだな…俺は、日本で生まれ日本で育った日本人。

ある日、女の子が（農業用トラクターに）轢かれそうになつている所を助け（る必要  
は無かつたの。トラクターは女の子の前で停止したから）、代わりに（トラックに轢かれ  
たと勘違いしてショックで）死んでしまい（おまけにオシツコもらしながら）アクアの  
元に導かれ…つて…ウルサーア。

さつきから、○を付けて人のモノローグに余計なことを追加してるのは誰だあ…  
(私じやないわよ？ カズマさんの現実を読者に伝えようとしてるなんて事はしてない  
わ。)

「おい、アクア。お前の台詞が○で記されてるんだが？」

「… 私じやないわよ？」

「今さら遅いわ。このクソビツチが。お前があの時、キリトに接するみたいに俺に対応

してたら、俺はまともな特典を選んで、こんな苦労させられる事もなかつたんだ。反省しろ駄女神。」

昨日は、アクアのイチオシの転生者『キリト』に出会つた。

アクアがまともな女神をしている所を初めて目撃した気がする。

あんな態度で俺を案内してたら、腹いせにアクアを異世界に持つていくなんて……罰ゲームみたいな特典を勢いで選ぶ事もなかつたのに……

クソ……あの時の選択が今でも悔やまれるぜ……

「ハア？ 昨日も言つたけど、カズマとキリトを同列に扱うなんて、私とアンデッドを同列に扱う位失礼なことなのよ？」

……あんまり変わんなくね？

「ねえ？ 今、変なこと考えなかつた？」

クソツ……変な所で鋭い……

「気のせいだろ？ それより、お前がそこまで言うんだ。あいつらの戦いつぶりを見てやろうじやないか。それで、もし大したこと無かつたら、俺に今までの態度を謝つて、俺を敬え。」

チート能力は貰つてるんだろうが、あいつらはこの世界に来たばかり。どうせ今は大したこと無いだろう。

「ハンツ。良いわよ。その代わりもし彼らが、本当に凄かつたら、カズマの奢りでものすごい高いお酒をいっぱい飲ませてもらうわよ?」

俺たちは、にらみ合いながら、同時に立ち上がる。

「二人とも落ち着け。彼らは、もうクエストに行つてしまつてゐるかも知れないだろ?」  
ダクネスが仲裁に入るも、

「私も興味あります。 ゆんゆんがパーティを組む人たちの実力を知りたいですしね。」  
めぐみんも俺たちに賛同した為、ダクネスはやむ無く折れて、四人でギルドへ向かつた。

キリト達は、まだギルドにいた。

正確には酒場の方で軽食を取りながら、今日の打ち合わせを行つてゐるようだ。

俺たちは、キリト達に近づき挨拶をした。

「よお、畠山はどうも。」

ちよつとセンパイ風に声を掛ける。

えつど、どちら様?」

あ  
つ  
う  
そ  
う  
言  
え  
ば  
、  
昨  
日  
こ  
い  
つ  
ら  
に  
声  
を  
掛  
け  
て  
た  
の  
は  
ア  
ク  
ア  
と  
め  
ぐ  
み  
ん  
だ  
け  
だ  
つ

た  
・  
・

「ああ。俺は、サトウカズマ。アクアのいるパーテイーのリーダーをやつてる冒険者だ。」

「アクア様の？ そうか。ルナさんが言つていた上級職が集つているパーテイーって言うのは君たちの事か。それに、その名前…君も転生者だよな？」

キリトは、直ぐに察したらしい。なかなか鋭いな…こいつ。

「それじゃあ、俺たちも自己紹介しないとな。俺は、桐ヶ谷和人。ここではキリトと呼ばれてる。職業は、ソードマスターだ。」

「私は、結城明日奈。ここではアスナよ。職業はアークプリースト。よろしくね。」

「私は、ユイです。職業は…ナビゲーターです。こちらのお二人の娘です。よろしくお願ひします。」

「『娘えええええ!!』」

『娘』の単語に驚く俺たち。

「ユイは、こんななりだし血が繋がつてている訳じやない。それでも俺とアスナの娘だよ。」

「うん。血の繋がりなんて無くて、私たちは心で繋がつてている。」「ありがとうございます。パパ、ママ。」

そこには、三人の空間が出来上がつていた…

そこはスルーして、最後の一人に視線を向ける俺たち。

「わ、私の事はみんな知ってるんだし、自己紹介はいらないと思うんだけど……」

「そんなことはありません。私の知っている彼女はパーティを組むような娘じや無かつたですから。名乗って貰わないと、とても同一人物とは思えません。」

めぐみんがゆんゆんにダメだしをする。

ただ、弄つて いるようにしか見えないが……

「わ、わかったわよ。名乗れば良いんでしょ？ 周りに人がいる前で恥ずかしいけど……」

我が名はゆんゆん！ アークウイザードにして、上級魔法操る者。 いずれは紅魔族の長となる者……」

ゆんゆんは、顔を真っ赤にして自己紹介をした。

「あ、知つてますよ？」

めぐみんがシレツと言ひ放つた。

… ゆんゆんは、泣いて良いと思う。

「じゃあ、次はこっちの番だな。」

「さつきも言つたけど、サトウカズマ。職業は…：冒險者です。」

職業を小声で言つてしまふのは、周りが全員上級職のせいだ。

これが、ダストのパーティーならまだ氣後れなんてしないんだが…：

「私は、ダクネス。クルセイダーだ。よろしく頼む。」

「我が名は、めぐみん。アークウェイザードにして、爆裂魔法操る者。いずれは、爆裂魔法を極める者！」

二人も続き…

「私は、アクア。ここではアークプリーストです。キリトさん達も、同じ冒険者仲間として気楽に接して下さい。」

女神アクア様が、降臨なされていた…

# カズマ一行、キリアスの戦闘を見学する。

俺たちの目の前に、女神アクア様が降臨なされた……

「カ、カ、カ、カズマ。アクアが壊れました。」

めぐみんが、俺に掴みかからんと言う勢いで詰め寄つてくる。

心なしか、身体が震えているようだ。

ああ、そう言えば……めぐみんは昨日、ゆんゆんに絡んでいたから、このアクアを見てないんだつたな。

その気持ちはよくわかるぞ。

目撃するのが二度目の俺でさえ、正直氣味が悪い位だ。

初見の衝撃は凄まじいものがあるだろう。

「落ち着け、めぐみん。アクアにも体裁を整えたい相手がいるんだとさ。俺たちは、生暖かい目で、アクアの奇行を見守つてやろうじゃないか。」

「な、なるほど……。」

俺がそう言つてやると、少し落ち着きを取り戻すめぐみん。

「お前たち……」

呆れでいるような眼差しを、俺たちに向けてくるダクネス。

でも、知ってるんだぞ？

お前が今、笑いを堪えてるのは丸見えだ…

そんな俺たちのやり取りを他所に、キリトが真面目な顔をして俺に話しかけてきた。

「それで、今日はどう言つた用件で来たんだ？ 正直、アクア…さんはともかく、君達とは初対面だよな？ まさか自己紹介に来ただけでも無いだろうし、何か用事があつたんだろ？」

あれ？ そう言えば、なんで來たんだつけ???

女神アクア様の降臨の衝撃で、忘れたわ…

えーと… 確か今朝、アクアと口論になつて…

ああ、そうだ。

キリトたちの戦いを見学しに來たんだつた。

さて、どう説明しようか…

お前らが凄いかどうか見に來た… なんて言つたら怒られそうだ…

俺は、頭をフル回転させて、

「… うちのアクアが、キリト達の事を気に掛けているみたいだつたからな。キリト達は、まだ冒険者登録したばかりの新人だろ？ 心配だから危なくないか見守ろうって話に

なつたんだ…」

ふつ。これなら問題あるまい。

先輩冒険者として見守るつて話なら、断りにくいだろう。我ながら完璧な言い訳だ。  
「へえ、そうなんだ。」

アクアが台無しにさえしなければ…

「や、やだなあ。アクア。今朝、お前が言い出したんだろう？」

「え？ 私じゃなくて、カズマが…」

お前はもうしゃべるな…

ダクネスが慌ててアクアの口を塞ぐ。

「？？。まあ、良いか。いざつてときの保険は多いに越したことは無いからな。」

多少、疑問の表情を浮かべたキリトだが、直ぐに切り替えたようで、俺たちの同行を了承した。

ギルドを出た俺たちは、街の外に移動した。

「さて、もうすぐ目的地だな。皆、用意は良いか？」

キリトが切り出すも、俺は疑問点があり、キリトに話しかけた。

「一つ良いか？ キリトとアスナ… 二人とも、なんで木刀なんて装備してるんだ？ ジア  
イアントトードに打撃はほとんど効果が無いぞ？」

そう、移動中に気づいたんだが、二人とも真剣の他に木刀を持つてきていたのだ。はつきり言つて、ジアイアントトード戦にはなんの役にも立たないだろう。

俺が指摘すると、

「ああ、これか？これは、直ぐに倒さない為に用意したんだ。はつきり言つて、俺たちのステータスなら、ジアイアントトードは、簡単に倒せる。でも、それじゃあ、連携プレイの練習にならないからなあ。」

「俺たちは、昨日パーティーを組んだばかりだ。俺とアスナはともかく、そこにゆんゆんが加われば、咄嗟の時に上手く連携が取れない可能性がある。まだ敵が弱くて、直ぐにフォローが出来る今のうちに、身に付けて置かないとマズイからな。」

……この自信は何だろう？  
俺なんて、ジアイアントトードに食われ掛けたのは、一度や二度じや無いと言うのに……

アクアやめぐみんは、実際に何度か食われたが……

幸い、人を捕食中のジアイアントトードは無防備になるので、なんとかなつたんだが……

まあ良い。捕食されかけたら、その時は俺がいつものように助け出せば良いだろう。  
そうすれば、キリトは俺を尊敬するだろうし、もしかしたら、アスナは俺に惚れるか

もしれないしな。

おまけにアクアの目が節穴だと、一生からかえるだろう。正に一石二鳥いや三鳥だ。  
そんな事を考えていると、目標が現れた。

いきなり三体も同時に……

これは詰んだな。

そう思っていたが……

「ゆんゆん、泥沼魔法の準備。俺の合図で仕掛けてくれ。いくぞ、アスナ。」

「了解」

「わかりました。」

キリトが指示を飛ばす。ゆんゆんはともかく、アスナには具体的に何も指示していない  
ようだけど良いのか？

そう思っていると、アスナがキリトを追い越して真ん中のカエルに仕掛けた。  
ものすごいスピードで突きを繰り出す。

何故か木刀が光っていたような……

しかし、ジアイアントトードには打撃は効果が薄い。

何しろ、女神パワーの成せる技か、ステータスがカンストしているアクアの攻撃すら、  
あまり堪えた様子がなかつた程だ。

案の定、大したダメージは受けずアスナを捕食しようと/or>するジャイアントトード。  
こんなものか… やはりアクアの目なんて節穴だな…

そう思った時、アスナの右側からキリトが飛び出し、ジャイアントトードの横つ面を  
木刀で薙いだ。

やはり、木刀が光つて見えたが、そこにどれ程の力が込められていたのか… 巨大な  
ジャイアントトードの身体を吹き飛ばし、左側にいたもう一体のジャイアントトードと  
激突した。

「ゆんゆん。2体に泥沼魔法。」

「はい。『ボトムレス・スワンプ』」

カエル2体の足元が泥沼に変わる。

「よし、アスナ。まず一体目だ。」

キリトがそう言つて飛び出す。

とんでもない速さで木刀を振るキリト。

キリトの攻撃の隙を埋めるようにアスナが攻撃を繰り出す。

そしてアスナの攻撃の隙を埋めるように、またキリトが攻撃する。

その連携は正に一心同体。まるで次にお互いが繰り出す攻撃が解るかのようだ。

そんな事を何度も繰り返す。

どんな集中力だ…

だが、ジアイアントトードもやられてばかりではない。

舌を使つてキリトを攻撃しようと試みる。

だが、キリトは恐るべき反射速度で舌を迎撃した。

そして何度目のアスナの攻撃がジアイアントトードに当たった時、ジアイアント

トードは倒れた…

うつそーん。ジアイアントトードって打撃で倒せるものなの？

これヤバくない？キリト達、実は本当に凄いんじゃ…

一体が倒れたとき、泥沼から残りの2体が這い出てきた。

「ゆんゆん、迎撃。」

「はい。『ライトニング』」

カミナリの中級魔法が一体に炸裂。

それだけで、カエルは絶命した。

「よし、残りは一体だ。いくぞ。」

そして、今度はキリトに止めを刺され倒れるカエル…

その後、ノルマの残り2体を危なげなく倒すキリト達。

もう、言葉も無かつた…

めぐみんもダクネスも空いた口がふさがらないようだつた…

アクアは、どや顔で俺を見ている。

「ふふーん。どう? カズマ。私が言つた通り、彼らは凄いでしょ? さてと、今日はいつぱい高いお酒が飲めるわね。」

くつ。あの横顔を張り倒したい… でもそんな事したら、あのキリト達を敵に回すかもしけん… そんな事になつたら…

俺は、キリト達に蹂躪されたジヤイアントトードを見て身体を震わせた。

「さて、これで依頼は達成だな。カズマ。これが、俺たちの戦いなんだけど… どうだろうか?」

キリトが俺に言つてくる。

俺はその問いかけてくる。

「… ナマ言つてすいませんでしたあ。」

綺麗な、土下座を敢行した。

その夜… アクアにシコタマ酒を奢らされた…

畜生… 今日はさんざんだ…

ゆんゆん、生まれて初めて、仲間と打ち上げパーティーをする。

皆さん、こんにちは。

私は、ゆんゆん。紅魔族の長の娘です。  
え？あの独特の名乗りはしないのかつて？  
しませんよ？恥ずかしいし…

モノローグ位、普通にやらせてください。

今は、めぐみんと勝負をするために、初心者冒険者が集う街『アクセル』にいます。  
めぐみんと再会してしばらく経ちました。  
久しぶりに会つためぐみんは、私の知らない人たちとパーティーを組んでいて、樂し  
そうでした。

再会したときは、カエルに食べられそうになつてたけど…

正直、毎日楽しそうに仲間と過ごすめぐみんが羨ましかつたです。  
だから私は、時間があるときはめぐみんに勝負を持ち込んだ。

カズマさんが家に遊びに来いと言つてくれた時は、お邪魔しちや悪いかなと思いつ

も、嬉しかった。

そうして、私もアクセルの街に居着くようになった。

それから1ヶ月以上が経つけど、その間にめぐみんのパーティーは、魔王の幹部を討伐すると言う大金星を挙げていた。

聞くところによると、以前にも幹部討伐を行つていたり、機動要塞デストロイヤーの破壊まで行つてゐるのだとか。

確かに、めぐみんは爆裂魔法しか習得していない。

そのせいで一日に一度しか魔法が撃てない。

でも、その威力は人類が出せる最強のもの。

ボスクラスのモンスター相手には切り札となりうる魔法。

そんなめぐみんが、金星を挙げるのも当然なのかも知れない。

それに比べて、私は里にいる時と変わつていなかつた。

クエストも一緒に行く人はいない。一人でクエストをこなし、一人で食事をし、一人で宿に帰る。

ライバルのめぐみんとの差を実感させられている気がしていた。

そんな毎日を送つていたある日、私の人生が劇的に変わる転機をもたらす人と出会つた。

小さな妖精を肩に乗せ、全身黒ずくめのその人は、私をクエストに誘つてくれた。生まれて初めてパークで誘われた私は、嬉しさで直ぐにうなづいた。

今考えると、ちょっと軽率だったかな。

キリトさんが良い人だつたから良かつたけど…

その事でめぐみんに説教されちやつたし。

キリトさんと初めて行つたクエストでは、驚きばかりでした。

キリトさんの強さにも驚いたけど、キリトさんの判断力や指示の正確さにも驚いた。

キリトさんは、冒険者に登録したばかりの新人のはずなんだけど、まるで百戦錬磨のベテラン冒険者のように頼りになります。

その日は私に、パークとしての戦い方も教えてくれました。

それから、キリトさんが娘のように可愛がつているピクシーのユイちゃん。

ピクシーは初めて見たけど、凄く物知りなんです。それに、とても素直な良い子で、キリトさんが娘のように可愛がるのもわかる気がします。

そんなキリトさん達と一時的にせよパークを組んで三日目、キリトさんを追いかけて、恋人のアスナさんがアクセルの街にやつてきました。

キリトさんに恋人がいたのを知つたときは驚いたけど、幸せそうなお二人を見ていると、私も幸せな気分になります。

アスナさんと話をしてみると、キリトさんが好きになるだけあるなあと感心しました。

綺麗だし、優しいし、とても素敵な女性だ。

なんだか『大人の女性』つてこんな人なんじやないかなって思います。

うちの里の大人は何て言うか… 変わってるからなあ…

そして、私たちは改めて正式にパーティーを結成した。  
キリトさんとアスナさんの戦闘を初めて見たときは、凄く感動したのを覚えていました。

まるで、次にお互いが何をするのかわかっているかのように、交代で敵にダメージを与えるその姿は、正に『理想のパートナー』と言った感じでした。

今日は、めぐみん達が私たちの戦闘を見学していたけど、やっぱり二人の戦い方に驚いていたみたい。

めぐみんなんて、口を開けたまま呆けていたもんね。

めぐみん達は、私達がクエストを達成するのを見届けると、先に帰つていっちゃつた。一緒に帰れば良いのに、なんだかカズマさんが強硬に先に戻ると言つて、未だに呆然としていためぐみんとダクネスさんを引っ張つて帰つていつた。

アクアさんは楽しそうだつたけど。

そして、今私は、アクセルの街の冒険者ギルドに併設された酒場にパーティーの皆さんで来ています。

今日は、私達がパーティーを結成して、初めてクエストを達成した日。

パーティーの結成と、クエスト達成の祝いを兼ねて打ち上げパーティーを行うことになつた。

皆でパーティーをするなんて、初めてで舞い上がってしまった私は、お金は私が払うと言つたんだけど、それは皆に止められた。

結局、今回の報酬から払つて残りを分けると言う話で落ち着いた。

おかしいな？友達のふにふらさんやどんどんこさんなら、ありがとうって言つて高いものをどんどん頼むんだけど…おかげであの時は大変だつたな…

二人に奢る為に、バイトしないとお金が足りなかつたし…

私がこれまでの事を振り返つていると、

「それじゃあ、俺たちのパーティー結成と初クエストの達成を祝して…」

「「「カンペーイ」」」

いよいよ打ち上げが始まつた…

楽しいな。凄く楽しい。

皆でパーティーをするつてこんなにも楽しい事だつたんだなあ…

私は、今のこの幸せに少し泣いちゃいました。・  
キリトさん。あの時、私に声を掛けてくれて、ありがとうございます。

きつと役に立つてみせますからね。

私は、キリトさんの横顔を見て  
決意を新たにした。

・ · ·

オマケ

「高級しゆわしゆわ追加お願ひします。」

「おい、アクア。まだ飲むのか？ どんだけ飲む気だ。お前は。・」

「ハア？ 賭けを持ち出してきたのはカズマでしょう？ カズマは黙つて私に奢れば良いの  
よ？」

「もう勘弁して下さい。・」

「なあ、アスナ。あそこにいるの、カズマとアクアさんだよな？」

「うん。そうだと。・ 思うけど。・ なんかアクアさんの雰囲気が昼間と違うよな。・」

「パパ、ママ、あの女性はアクアさんで間違いないと思われます。アクアさんと外見情報

が完全に一致します。」

「…………見なかつた事にしておくか。」

「…………そうだね。」

「わかりました。」

# 異変の前触れ

俺たちが、この世界に来て1ヶ月以上が経つた。

この1ヶ月の間、出来る限りの討伐クエストを行い、レベルアップに励んできた。まだ、ゆんゆんとのレベル差はあるが、多少は縮まっている。

また、連携の訓練も継続して行い、連携プレイに最初は慣れていなかつたゆんゆんも、今では簡単な指示でこちらの行つて欲しい事を察知し、実行できるまでになつていた。

課題も見つかった。

俺たちのパーティーは、戦線を維持する前衛が足りない。具体的にはタンクが欲しい。

敵が弱い今はともかく、強くなつて来たときに、俺がダメージを受けて後方に下がると、回復役のアスナが前衛に出るしか無くなり、そうなるとアイテム以外での回復手段が無くなる。

できれば、あと一人タンク役をこなせる仲間がいれば安定するんだが‥‥

次点で、アスナとは別に回復役に徹したヒーラーがいれば‥‥

ただ、俺たち‥‥と言うか俺のこの街での評判は、あまり良くない。ただでさえ、ア

スナやゆんゆんとパーティーを組んでいる所に加えて、上級モンスターの討伐を行っていない。

ステータス的には討伐可能ではあるだろうが、安全を考えればもう少しレベルを上げておきたい所だ。

これは、アインクラッドでの二年間の考え方による影響が大きいと思う。安全マージンを充分取つてなお、犠牲者をゼロには出来ない事を、俺たちは身に染みてわかっているから。：

そんな俺の方針のせいで、周りの冒険者からの評判は、あまり良くない訳だ。

ステータスが高いのに強いモンスターと戦わない俺は、冒険をしない冒険者、弱虫、臆病者と陰口を叩かれている。

アスナやゆんゆんを狙つて、正面から言つてきた挙げ句、アスナ達を自分のパーティに誘うやつらも、何度も見られた。

まあ、そんな場合、当のアスナもゆんゆんも、そいつらの言葉に激怒してパーティに誘う所じや無くなるんだけどな。

むしろ、陰口を叩かれてる俺自身は、大して気にしていなかつたりする。

S A O で卑怯者のビーターと言われていた時に比べれば、臆病者なんて気にもならんな。

アスナやゆんゆんの命に比べれば、臆病者の誇りなど、問題にもならない。

勿論、俺の考えに賛同してくれる人たちも少なからずいる。

ギルドの職員はもちろん、カズマ達や、カズマの知り合いの冒険者も、良くしてくれている。

とは言え、そんな状況でパーティーメンバーを募集しても、ろくな奴が来ない為、未だに三人（ユイは戦闘要員ではない）でクエストをこなしている。

そんな、1ヶ月を過ぎて来た俺たちだが、最近… 張り出されているクエストに違和感を覚えた。

ジャイアントトードのような、比較的弱いモンスターの討伐依頼が無く、中級～上級のモンスター討伐の依頼しかないのだ。

張り出されているクエストの数事態も少ない。

一体、どういう事なのだろうか…。

そう思つていると、ルナさんが話しかけてきた。

「キリトさん、何かクエストをお探しですか？」

俺は、気になつていたことを質問してみた。

すると、ルナさんは困った顔をしながら、

「それなんですが、最近、比較的弱いモンスターが姿を隠している様なんです。まるで、何かに怯えているかのようだ。」

「なにが原因なんですか？」

「今のところ、原因是不明です。ただ……以前にも同じような事があつたんです。その時は、近くの廃城に魔王の幹部が住み着いていたんですよ。」

「その幹部は、カズマさんのパーティーを中心としたこの街の冒険者によつて、間違いなく討伐されたハズなんですが……」

ルナさんは、思案顔をしたあと、

「キリトさん。もし宜しければ、キリトさんのパーティーで、廃城の調査を行つてはもらえないでしようか。この街で最も安定して戦闘が行えて、生存率も最も高いのはキリトさんのパーティーだと私は思うんです。」

俺たちにクエストを提案した。

さて……どうするか……

「皆はどうしたい？」

一応、パーティーの意見を聞こうと皆に訊ねてみた。

「私は……私達が行くべきだと思う。はつきり言つて、この街で私達より強い冒険者はいないよ。もし、他のパーティーにこの話が行つて、そのパーティーが帰つて来なかつ

たら、またキリト君の悪口が出そうだし…

真っ先にアスナが賛成した。

「私も賛成です。それに、私はテレポートの魔法が使えます。例え、不足の事態があつても逃げるだけなら可能です。」

ゆんゆんもそれに続く。

「… わかった。ルナさん、このクエスト… 僕達が請け負うよ。」

俺は、クエストを請け負う事を決めた。

「さて、討伐ではなく異変の調査となると、俺たちだけでは難しい。できれば、盗賊系のスキルを持つている冒険者に同行して欲しいんだけど… ルナさん、誰か紹介できる冒険者はいないかな？」

カズマが持つているハズだけど、異変の調査には向いてないだろうしな…

「それでしたら、クリスさんがオススメですね。クリスさんは、パーティを組んでいいフリーの盗賊ですし、戦闘力も高めで、盗賊スキルもかなり高いです。色んなパーティに引っ張りだこな所を見ても、実力が高いからでしょうし… それに…」

そこで、ルナさんは一度止めて、次に小声で

「キリトさんに、偏見も持っていないでしようから。」

その言葉にアスナ達がムツとする。

この話題は俺たちのパーティーには禁句と言つて良いからなあ……  
それにも、クリスか……

確か、カズマの知り合いだつたな。

上手く会えれば良いんだが……結構、神出鬼没だからな。あの娘……

そんな事を考へていると……

「呼ばれた気がしたんだけど、私に何か用事かな？」

目の前に笑顔のクリスが立つていた……

## 廃城の奥で待つもの…

さて、今回異変の調査をギルドから依頼された俺たち。

事実上、指名依頼になるわけだが… はつきり言つてこの世界に無知な俺たちに異変の調査が行えるかと言えば… 正直、自信はない。

世界の情報を検索できるユイがいるとは言え、その能力は万能ではない。

そもそも、この世界に来てから討伐依頼しか行つておらず、ダンジョン探索は未経験。この世界のダンジョンが、どんな場所かわからない以上、危険が大きすぎる。

できれば、盗賊のスキルを持つている仲間が欲しい。そう思つてルナさんに相談していると、正にルナさんが勧めてくれたクリスが、そこに立つっていた。

「呼ばれた気がしたんだけど、私に何か用事かな？」

「呼んだ訳では無いが、どうやつて察知したのだろう…」

「聞き耳スキルでもあるんだろうか。」

「やあ、こうやつてしまふと話すのは初めてかな？ 初めまして。キリト君。私はクリス。見ての通り盗賊だよ。」

「ああ。初めまして、クリス… さん。俺は、キリト。ソードマスターで、一応このパー

ティーのリーダーだ。』

「アスナです。アークプリーストをやっています。初めまして。クリスさん。』

「ユイです。ピクシーです。』

「…わ、我が名はゆんゆん。アークワイザードにして上級魔法操るもの。』

もう、紅魔族の名乗りには慣れれた。

ゆんゆんは相変わらず、恥ずかしそうだが。

「クリスで良いよ。さん付けって好きじゃないんだ。』

「それなら、俺たちの事も呼び捨てで構わないぜ？』

「さて、自己紹介は終わりとして、本題なんだが… 確かにクリスに用があつたんだが、今大丈夫か？」

「大丈夫だよ？今は他のパーティーにも参加しないしね。』

「そうか… 実はさつきギルドからクエストを依頼されたんだ。』

「うわっ。それって、ギルドから直々に指名依頼があつたって事？凄いね、君たち。まだ、冒険者になつて1ヶ月なのに、そこまでギルドに信頼されてるんだ。』

「勿論ですよ。実際、キリトさん達のパーティーのクエスト達成率は、今のところ百パー セント。難易度は低めですが、それでもこれは凄い事ですよ？」  
ルナさんが話に加わってきた。

実際、高難易度のクエストばかりが張り出されている為、誰もクエストを受けず暇なのだろう。

「クリスさんにも、事情をお伝えします。できれば、キリトさん達に協力して頂きたいんですけどが。」

そう言って、クリスに説明を始めるルナさん。

「わかつたよ。このまま原因もわからないままで高難易度のクエストしか出されないんじゃ、この街の冒険者は失業しちやうしね。その代わり、報酬は期待して良いんだよね？」

ルナさんの説明を聞いて、クリスは了承した。  
ちやつかり、報酬についても触れていたが…

「勿論です。私たちにとっても、死活問題ですからね。色をつけさせてもらいますよ。」  
ルナさんも、ニッコリと笑って返した。

俺たちは、早速依頼に取りかかった。

あの後、軽く打ち合わせを行い、準備のため一時解散。  
再び集合し、アクセルの街を出発した。

そして、今俺たちは、件の廃城に来ている。

「うーん。確かにおかしいね。あの廃城は半年位前に、魔王の幹部の一人、『デュラハンのベルディア』って奴が根城にしていたんだ。でも、それはカズマのパーテイーを中心とした街の冒険者達に討伐された。その後、ベルディアの配下だつアンデッド達は統率を失つて、散り散りになつたハズなんだけど……」

クリスのスキルの一つ、千里眼で偵察すると、廃城には、アンデッドが群れをなしているらしい。

「もしかして、幹部クラスの魔物が再び住み着いているのか？」

「それは、中を見てみないとなんとも言えないな……でも、あのアンデッドの群れを突破して中に入るのは難しいね。潜伏スキルと言つても万能じやないし……」

俺の隠蔽スキルも見つかり辛くなるだけだしな……

仕方ないな。正面から突破するしかなか

と、その前に……

「アスナ、大丈夫か？アスナはああ言うの苦手だろ？もし、ダメならアスナとユイは、先に戻つて待ついてくれても良いんだぞ？」

そう、アスナはホラーが苦手だ。

AINクラッドでも、ゴースト系モンスターのいる階層では何かにつけて理由を付けては、攻略をサボる程に。

攻略の鬼と呼ばれていた当時のアスナがそうする位だから、相当苦手なのだろう。

「確かに苦手だよ？でもねキリト君。私にとつて、一番の恐怖つてなんだかわかる？」

顔色はあまり良くないが、決意を持った表情で続けるアスナ。

「それはね、キリト君が私の知らない所で死んじやう事… 私を置いていつたら許さないからね？キリト君。」

「…わかった。」

俺は、一度アスナにそれを経験させている…

俺は、震えるアスナの身体を抱き締めた。

「イヤ付くのは、時と場所を考えた方が良いよ？」

クリスに突っ込まれて、直ぐ離れたが…

「潜伏での侵入が難しい以上、正面から行くしかないな。」

「正気？正直城の外にいる奴らだけでも100体位いそしだけど。」

「ソードマスターのスキルに剣に聖属性を付与するセイントソードって言うのがある。アスナも剣は得意だし、浄化魔法もある。ゆんゆんのサポートがあればなんとかなるだろう。」

「それに、危なくなつたらゆんゆんのテレポートの魔法で離脱すれば良いからな。」

そう。これが一番大きい。

何かあつた時に戦闘を離脱できると言うのは、安全を考えた時大きなアドバンテージとなる。

「うーん……わかつたよ。でも、私は戦闘はそこまで得意つて訳じや無いんだ。自分の身を守ることは出来るけど、フォローはしてよね。」

クリスの言葉に俺は頷くと、

「よし、行くぞ。」

掛け声と共に飛び出した……

「はあ……カズマ達に聞いてはいたけど……君たちつて本当に無茶苦茶強いんだね。とても、冒険者登録して1ヶ月の新人とは思えないよ。パーティーの連携も見事だし……。」

「特にキリトとアスナの連携はどんでもないね。あんなの真似できる人いるのかな?まるで数十年連れ添つた夫婦みたい。と言うか、私が今まで一緒に組んだパーティーの中でキリト達が最強だよ。うん。」

正面から突破を試みた俺たちは、見事廃城の外にいるアンデッドを全滅させる事が出来た。

その戦いを見て、クリスは目を丸くして驚きながら言つてきた。

「サンキュー。クリス。」

クリスの称賛に返すも、続いて質問された言葉にアスナ達の雰囲気が変わる。

「キリト達なら、高難易度のクエストだつてクリア出来るのに何で受けないの？」

「いくらクリスさんでも、そんなこと言つたら許しませんよ？」

「ち、違うからね？ 純粹に疑問に思つただけで…… 大体、本当に臆病者なら、こんな何が起ころかわからない異変の調査なんてクエスト引き受けないでしょ。」

慌てて、訂正するクリス。その言葉にいつもの雰囲気に戻る二人。

俺は、自分の考えをクリスに伝えた。

勿論、AINクラッドでの話はしていないが……

「なるほどね…… 私はキリトの考えに賛同するよ。」

その話を聞いて、クリスは相槌を打つと、俺の考えに賛同した。

「キリトが、他の冒険者からなんて呼ばれてるかは知つてるよ。臆病者とか、冒険をしない冒険者とかね。」

「でも、私はこれでも長い間、色々な冒険者を見てきたからわかる。この職業は、慎重な人しか生き出来ない。どれだけ強力な武器や防具を持つても、あるいは強力なスキルや才能があつても、自分は選ばれている…… なんて、勘違いしてる子達は、大抵、身の

丈を超えた依頼に振り回された挙げ句、こんなハズじや無かつたつて世の中を呪つて死んでいく…。それに比べて、君たちは自分の能力をしつかり把握して、命を一番に考えてる。だから、君たちはそのままで良いと、私は思うよ。」

「ありがとう。」

その言葉に少し救われた気がした。

城の中に侵入した俺たちだが、中には然程アンデッドはいなかつた…

そして、中心部…おそらく玉座の間と思われる場所に果たしてソイツはいた。

「ほお。ここまでやつてくる冒険者がいるとはな。なんとも嬉しい話じやないか…」

## 復活のベルディア

「ほお。ここまでやつてくる冒険者がいるとはな。なんとも嬉しい話じゃないか……」

今、私たちの目の前には、自分の首を片手に持ったデュラハンがいます。

「き、君はデュラハンのベルディア。何で君が……君は前にアクセルの街に侵攻してきました時に、カズマ達に討伐されたハズ。」

クリスさんが、驚きながら問いかけました。

と言うことは、この人？はやはり魔王の幹部と言うことになります。

「確かに、俺はあの時倒された。だが……倒し方が不味かつたな……」

「どういう意味かな？」

クリスさん達の会話は続いています。

多分、クリスさんはできるだけ相手の情報を引き出す気なんだと思います……

「俺は、デュラハン。上級のアンデッドナイトと言つても良いかもな。アンデッドとは、

この世に未練を残した死者が、その存在を歪めてでも生き永らえようとした者だ。」

「かつて……俺がまだ生者であつたころ……主君は謀によつて暗殺され、俺はその罪を擦り付けられた上で、処刑されたのだからな。己の死の瞬間、俺は思った。騎士として、

この命尽き果てるまで、主君の為に戦い、強き者の手によつて散りたかつた……とな。  
そんな俺の強い未練が形となつたのがこの姿よ。」

ベルデイアは、過去の事を思い返しているのか、悔しそうに首を持つ手を震わせていた。

「さて、盗賊の娘よ。前回のお前達の戦いが、俺の未練を断ち切るものだつたと……本当に思うかな？」

私は、その戦いに参加していないのでわかりませんが、クリスさんが沈黙してしまいました。

「で、でも君はアクアセ……アクアさんの浄化魔法で消滅したんだよ？ どれだけ強い未練を残していたアンデッドだとしても、復活できるなんて……」

「そこは、魔王様のお力のお陰だ。俺の強い未練を感じし、地獄の底から掬い上げて下さつたのだ。それでも力を取り戻すのにここまでかかったのだから、あのアークプリーストの力は恐るべきものだがな。」

「君は、なぜまたこの城に戻ってきたの？」

「知れることよ……サトウカズマ……あやつのパーティーに復讐するためよ。」

「だいたいな？ あいつらがもつとまともに俺を倒してくれていたなら復讐なんてすることも無かつたんだぞ？」

それが、あの頭のおかしい紅魔族は、一日に一発しか魔法が撃てないとわかつたり、クルセイダーの小姑娘は攻撃が当たらない上にただのド変態。サトウカズマは人の頭を盗んだ挙げ句にボールと称して蹴る外道。俺に止めを刺したアークプリーストは頭のかしいアクシズ教徒……」

「これを地獄で知つた時の俺の嘆きがわかるか？ わからんだろう？ ああ、未練だらけだとも。あいつら……必ず復讐してやるぞ！ クソがー！」

ベルディアさんは、かなりお怒りの様子です……

ふと、視線を感じて見るとキリトさんが私を見ています。

あれは魔法詠唱の合図。でも、何を唱えれば……

「あなたの話はわかつたよ、ベルディアさん。でも、ハイそうですかと、あの街に侵攻させることにはいかない。」

そう言つて、キリトさんとアスナさんが前に出ました。

いつもと違つて、どの魔法を使うと言われていない私は混乱しています。

「ゆんゆんさん。テレポートの準備です。パパ達は、ここであのデュラハンを倒すつもりはありません。と言うよりできません。準備が足りていらないんです。もともと、ここに来た目的は異変の調査。目的を終えている以上離脱することが賢明です。」

いつの間にか、私の頭に移っていたユイちゃんが、キリトさんの意図を教えてくれま

した。

私は、慌てて詠唱を始めます。

「行くぞ。ベルデイア。」

キリトさんがベルデイアに向かっていきます。

いつもの様に剣が光ったと思ったら物凄い早さで突進していきます。

確かアレは……ソニツクリープ。

ベルデイアは反応できなかつたのか、防御もできず攻撃に身体を晒しました。

「!？」

キリトさんは、直ぐにその場を離れます。

次いで、アスナさんのリニアーが炸裂しました……  
でも……

アスナさんの細剣は、衝撃に耐えきれず、半ばまで折れてしましました……  
見ると、キリトさんの剣も刃こぼれしているようでした……

「見事な剣技だ。とても駆け出しの冒険者とは思えんな。だが……その武器では俺の身体にダメージを負わせるのは無理だな。精々、鎧に傷を付けるのが精一杯だ……」

今のキリトさん達の武器は、アクセルの街にやつて来たときに買った安物の武器。  
確かに、あの鎧にダメージを与えるのは難しい……。

「キリトさん、 テレポートの詠唱は終わっています。撤退しましよう！」

私は、焦りから大声で叫んでから、しまつたと思つた。

ベルディアさんが、キリトさん達に攻撃を仕掛けていなかつたのは、私の魔法を警戒してたのもあつたはず

現に、ベルディアは目の色を変えて、体勢を変えた。

「ほお。逃げるのか？構わんぞ。だが、せつかく来たんだ。土産を持つていくがいい。」

ベルディアはそう言うと、持つていた大剣を掲げ、キリトさんに降り下ろした。

キリトさんは、その剣に反応し、自身の剣で防ごうとした。でも、ベルディアの大剣は、キリトさんの剣ごとキリトさんの身体を切り裂いた…

「ぐはっ！」

倒れるキリトさん…

「い、嫌ああああああああ…！」

「パパー！」

アスナさんとユイちゃんが悲鳴を挙げる。

アスナさんは、狂つたようにヒールをキリトさんに掛けるが効果が薄い。これはアンデッドによる呪いが発動している為か…

私は…呆然としていた。

嘘……キリトさんが……キリトさんがやられるなんて……

私たちが恐慌をきたす中、一人冷静なクリスさんが指示を出す。

「ゆんゆん、私がキリトとアスナを回収する。そしたらテレビポートを使うんだ。良いね。」

私は、その言葉に反応出来なかつた。

「ゆんゆん。キリトはまだ死んじやいない。街に戻つて、アクアさんに回復魔法を掛け  
て貰えれば助けられる。今、キリトを救えるのは君だけなんだ。」

キリトさんを助ける……その言葉にようやく意識がはつきりする。

「クリスさん、お願ひします！」

「帰るなら、街の連中に伝えて貰おうか。一週間後、もう一度アクセルの街に行つてや  
る。首を洗つて待つているがいい。それと、サトウカズマ一行が逃げないようにしてお  
け？もしいなれば、街の連中は皆殺しにするとな。」

私は、ベルディアを睨みつけたあと頷くと、キリトさん達を回収したクリスさんを  
伴つてテレビポートを行つた。

# 立ち上がり、ゆんゆん！

ベルディアに見逃された私たちは、転移魔法でアクセルの街に戻りました。

大怪我を負ったキリトさん…。

キリトさんを助けるには、アクアさんの力が必要です。

屋敷にいるとは限らないため、クリスさんの提案で冒険者ギルドに行き、ルナさんに放送を掛けてもらつて、アクアさんを呼んでもらいました。

直ぐに、アクアさんは駆け付けてくれました。

「アクアさん。お願します！キリト君を… キリト君を助けて。私のヒールじや回復しきれないんです。」

アクアさんの姿を見つけたアスナさんが、必死に助けを求めました。

「大丈夫。私に任せて。」

キリトさんの傷を見て、一瞬目を見張つたアクアさんですが、直ぐ自信の表情を浮かべて、アスナさんを元気付けます。

「ブレイクスペル… かーらのー… エクストラヒール！」

なんと言うことでしょう。アレだけ大きな怪我だつたキリトさんのキズがみるみ

る塞がつていきます。

「アスナ、貴方のヒールが彼に効かなかつたのは、キズそのものに呪いが掛けられていたらよ。先にブレイクスペルで呪いの効果を打ち消してから回復魔法を掛ければこの通りよ?」

すごい。普段はカズマさんとお馬鹿なことをしてる印象しかないけど、回復魔法にかけては、アクアさんは本当に天才です。

「これでよしつと。明日には目を醒ますと思うわ。ただ、かなり強力な呪いが掛けられてたから、完調には一週間位はかかると思うけど…」

一週間…ベルディアが攻めてくる日…

「ありがとうございます、アクアさん。本当にありがとうございました。」

アスナさんが泣いてアクアさんにお礼を言いました。

「アスナ。ちょっときついことを言うわよ。貴女も同じアーフプリーストよ。貴女にも同じ事が出来るはず。もつと癒しについて勉強しなさい。彼を癒すのは貴女の役目なのよ?」

「はい。本当にありがとうございました。」

私は、そんなやりとりをずっと眺めていました。

「それで? キリトはどうしてこんな事になつたの?」

アクアさんが質問します。

「それなんですか？」

そう言つて、クリスさんに話を聞いていたルナさんが会話を引き継ぎました。  
「なあんですつてえ！ベルデイアが復活した？ちょっとどういう事よ。あいつは私のセ  
イクリッドターンアンデッドで淨化したのよ？いくら高位のアンデッドだからって、お  
いそれと復活なんて出来るわけないじやない！」  
ルナさんに食つて掛かるアクアさん。

いつもの事なのか、冷静に話を続けるルナさん。

その原因を聞いて固まるアクアさん。

「とにかく、一週間後、ベルデイアはこの街を攻めにやつてきます。冒険者の皆さんは、  
武装を整えて防備に当たつてください！」

ルナさんが号令を掛けました。

「へつ、あいつの弱点はわかってるんだ。楽勝だぜ。」

「そうだな、水に弱いことは前回でわかってるんだ。そんな構えることもないだろ。」

周りの冒険者達は気楽な様子でした。

「それはどうかな？弱点が露見してるので、わざわざ、侵攻日を知らせた上で正面から戦  
いを挑むと思う？きっと対策をしてきてるハズだよ？それに… 戦闘力も前回よりか

なり上がつてゐみたいだつた。真剣に取り組まないと……死ぬよ?」

そのお気楽なムードにクリスさんが冷や水を浴びせます。

「と、とにかく、一週間後は皆さんお願ひします。特にアクアさん。カズマさん達を必ず引っ張つて来るようにお願いしますね。」

ルナさんの一言で、その場は解散となりました。

キリトさんを宿屋に運んで、私は自分の部屋に戻りました。

一人になり、やることが無くなつた私は、あの時の事をどうしても考えてしまう。

私が犯したミス。どうして私は、あの時大声でテレビポートするなんて言つてしまつたのだろう。

そのせいでキリトさんは……本当なら無傷で帰れたハズなのに……

気がつくと、私はキリトさん達の部屋の前に立つていた。

そつと扉を開くと、アスナさんが祈るようにがキリトさんの手をとり、必死に声を掛けっていました。

その手にはユイちゃんも乗っています。こちらも必死にキリトさんに話しかけていました。

その姿に、私はいてもたつてもいられず、宿を飛び出しました……

どこをどう歩いたのか覚えていません。いつの間にか私は街のハズレに座り込んで

いました…

「どうかしたのかい？ゆんゆん。」

「どうしてクリスさんがここにいるんですか？」

何故かクリスさんが声を掛けてきました。

「今日のクエストで消耗したアイテムの補充をしてたら、ゆんゆんがふらふら歩いているのを見かけてね？心配になつて後を付けてきたのさ。」

「それで…何かあつたのかな？随分落ち込んでいるようだけど…私でよければ話してみない？これでも、人の悩みを聞くのは慣れてるんだ。」

私は、何故か私の胸の内をクリスさんに打ち明けていました。

キリトさんに、孤独を救つてもらつたこと。

パーティーでの戦いが楽しかったこと。

一緒にご飯を食べて嬉しかったこと。

恩人のキリトさんを自分のミスで殺しかけたこと…

「私は、誰かと一緒にいる資格なんて無かつたんです。私のせいでキリトさんは…」

「あの場には、私もいたし確かに君のミスはあつたけど…キリトがあんな怪我をしたのは不可抗力だと思う…つてありきたりな事を言つても納得しないだろうね。」

「だから、私は慰めの言葉は掛けない。でも、これだけは言わせてもらうよ？ゆんゆんは

これからどうするんだい?」

「私は…」

私は、どうしたいんだろう。キリトさん達の側にはいたいです。でも、今回みたいに足を引っ張ってしまうのは怖い…

…思えば、私は昔からそうだつた…

一人は淋しい…でも、人に嫌われるのは怖い。だから人を誘えない。待つていてるだけの私に声をかけてくれる人なんてほとんどいなかつた。

唯一、めぐみんだけは、他の人から奇異の目で見られていためぐみんだからか、気軽に話しかけられた。

めぐみんは、私と似ていると思つたから…

それからは、勝負を持ちかけてみたりして、めぐめんの気を引こうとした…  
打算的なのだ。私は…

「ふむ。大分迷つてるみたいだね。私はアクシズ教徒じゃないけど、アクシズ教徒の教義に、今の君にピッタリの言葉があるから教えようか。『迷つて いるときに出した決断は、どの道どつちを選んでも後悔するもの。なら、今が楽ちんな方を選びなさい』…まあ、樂ちんつて言うのはどうかと思うけど…。」

「君にとって、一人に戻ることと、パーティーの足を引っ張ること…どつちが嫌かな

?

どつちも嫌だ……でも……やつぱり一人に戻りたくない。何より、私はキリトさんに恩を返していいない……

「答えは出たみたいだね。」

「ありがとうございます、クリスさん。私は、今のパーティーを離れたくないです。だから……私がキリトさん達を守ります。」

「よし……なら一週間後は頑張ろう。」

「はい。」

私は、キリトさん達を守る。絶対に……  
決意を胸に、私は宿へと戻った。

# アクセル防衛戦1　迫る危機！

アクアがギルドに呼び出しを受けた。

また、なにかやらかしたのかと冷や汗を搔いていたが、戻つて来て事情を聞けば、予想以上にとんでも展開だつた。

なんと、あのベルディアが復活したのだと言う。

アクアは、ベルディアにやられて重症を負つたキリトの回復の為に呼び出されていたのだそうだ。

正直、ぞつとした。以前、キリト達の戦闘を見学してゐる俺は、キリトがやられる姿が想像が出来ない。

しかも、そのベルディアは一週間後、この街を攻めにやつてくるらしい。その上、俺たちは名指しで逃げるなど釘を刺されている……

正直、逃げたい……

いや待て……

ヤツの弱点はわかってるんだ。そう怖がることもないか。

「アクア、キリトは明日には目を醒ますと言つてたよな。」

「うん。かなり強力な呪いを掛けられてたから、すぐに完調はしないだろうけどね。」「とりあえず詳しい事情を聞きに、明日はキリトの見舞いにでも行くか。」

そう決めて、その日は就寝した。

翌日…：

俺たちは、キリトの取つている宿屋に向かつた。

部屋に着くと、キリトは目を醒ましていた。

アスナとユイが、付きつきりで看病していたが…

相変わらず羨ましいヤツだ。

「ああ、カズマか。入つてくれ。」

俺たちに気付いたキリトが中に促す…：

キリトはまだ身体を起こせないようで、横になつたままだ。

「アクアから話は聞いたぜ？手酷くやられたみたいだけど… 大丈夫なのか？」

「見ての通りさ… つとその前に、アクアさん。ありがとうございます。貴女のお陰でなんとか、助かりました。」

「無理はしないようね。貴方の受けた呪いは、この私の魔法をもつてしても直ぐに完治は出来ない位強力なもの。ベルディアの侵攻に間に合わないかもしねないわ。」

それは、悪い話だ… キリトの戦力を当てに出来ないのは大きい。正直、このアクセ

ルの街で最も強いのはキリト達だ。

「それで…何があつたんだ？お前がそこまで重症を負うとは思えないんだけど。」

「ああ…それか…」

詳しい話を聞くと、どうやら武器が問題だつたらしい。

アスナの細剣は、一度の攻撃で折れ、キリトの剣も刃こぼれを起こしてろくにダメージを与えられなかつたのだそうだ。

まあ、あの剣はこの街の武器屋にある安物だしな。俺の相棒（ちゅんちゅん丸）なら傷を付けられるかもしけんが…

そんな剣でベルディアの攻撃を防げる訳もなく、剣ごと切られたらしい。

とにかく、話を聞く限り戦いそのもので、ベルディアに遅れを取つていた訳ではなさそうだ。

「あの… ゆんゆんが見当たらないんですけど、ゆんゆんはどちらに？」

めぐみんが尋ねる。

思えば、部屋に入つてからキヨロキヨロと部屋を見たり落ち着きが無かつた。ゆんゆんを探していたのか…。

「ああ、ゆんゆんは特訓をするつて言つて、朝早くから出掛けてるよ。」

「私たちは、気にしてないつて言つたんだけど、ゆんゆん… 昨日ちょっとしたミスをし

てね。それを気にしてるみたいなの。昨日と違つて落ち込んではいなかつたけど、私は自分が守るからって言つて……氣負いすぎてなければ良いんだけど……

「そうですか……」

「めぐみんは、かなり心配そうだ。

「あら、めぐみん。来てたのね。」

ちようどそのタイミングでゆんゆんが（恐らくキリトの）ご飯をもつて部屋に入つてきた。

間の悪い……

「ゆんゆん、大丈夫なのでですか？」

「??なんのこと?」

「昨日、なにかミスをして落ち込んでいたと聞きましたが……今朝も早く特訓に行つたと言つてましたし。」

「え? もしかして心配してくれてるの?」

「ち、違わい。」

「私は大丈夫よ。確かに昨日の私のミスは忘れられないけど……まずは今度のベルディアの侵攻を防ぐ事を考えなきや。今は、やれる事をやるだけよ。」

……ゆんゆんつてこんな前向きな子だつたかな?

めぐみんも、かなり驚いているようだ……

「あいつは、水が弱点なんだよ。前回それで倒してるし、今回も大丈夫さ。」

俺が元気付けるように、気楽に伝える。

「あの……カズマさん。それなんですけど……クリスさんも言つてたんですが……前回と同じ弱点を残して正面から攻めてくるのはおかしいです。きっと、その弱点はもう無いと思いますよ?」

た、確かに一理ある……つてことは何……？

あいつとガチバトルしなきやならないの?

無理ゲージやね? それ……。

いや、また。落ち着くんだ。サトウカズマ……。

昔から再生怪人は弱いと相場が決まってるんだ。

ウチのパーティには対アンデッド最強の駄女神アクラと、火力最強の爆裂狂めぐみんがいるんだ。

きつとなんとかなる……と……思う……多分……きつと……そうなるといい

なあ……。

「と、とにかく、安静にな。キリト。」

(そして、ベルディアの侵攻に間に合わせてください)

俺たちは、キリトの部屋を後にした。

あつという間に一週間が経ち……

ベルデイアの侵攻当日……

俺たちアクセルの街の冒険者は、街の正門前に集まっている。

キリトは間に合わなかつた。

せめて、あと一日猶予があれば……

復調していなきキリト。

キリトが出て来ないよう監視するためアスナが残り、キリトのパーティーからはゆんゆんのみが参加している。

そして、いよいよその時はやつて來た。

「大勢の出迎え、ご苦労。俺はデュラハンのベルデイア。貴様らに、間抜けな倒され方をしたベルデイアだ。魔王様のお力で、貴様らに地獄を味あわせるために、こうして蘇つてきた。さあ、それでは始めようか……。俺の復讐を!!」

## アクセル防衛戦2　冒険者たちの戦い！

「大勢の出迎え、苦労。俺はデュラハンのベルディア。貴様らに間抜けな倒され方をしたベルディアだ。魔王様のお力で、貴様らに地獄を味あわせるため、こうして蘇つてきた。さあ、それでは始めようか。俺の復讐を!!!」

そう言つて俺たちの方を睨むベルディア。

おかしい……あの時は街の皆、総出でベルディアを討伐したハズだ。  
俺たちだけが睨まれる謂われはない。

そりやあ、ダクネスは変態性を存分に発揮してたし、勝負を楽しもうとした動かないベルディアにすら攻撃を外すしで、ガツカリさせてた。めぐみんは、言うまでもなく城に爆裂魔法を撃ち続けて嫌がらせしてたか……。アクアもそれに付き合つてたんだよな。

俺は……ベルディアの頭をステイールしてサツカーしたつけ……。

うん。これは仕方ないか。そりやあ怒るよね。コレ……  
だが、黙つてやられる訳にはいかない。

先ずは、本当に水の弱点を克服したのか見極める。

『クリエイトウォーター!!』

俺の不意討ちによる、水魔法がベルディアに炸裂する。

以前のベルディアなら大袈裟に避けるそぶりを見せていたそれを、避けるどころか、動くそぶりも見せず、まともに食らうベルディア。

「ふん。バカめ。弱点をそのまま残していると思ったか？水への対策は万全だ。くつ、やつぱり対策してきてたのか？：んつ？今なんか引っ掛かる事を言つてたな。

水への対策は万全だ。：

水への対策は万全だ。：

「水」への対策は。：

「アクア、浄化魔法だ。」

「わかったわ。セイクリッドターンアンデッド！」

「ひあああああああああつ！！！」

悲鳴を挙げて転がり回るベルディア。

やつぱり。：

前回も、かなり効いてたもんなあ。

「くつ、やはりあのアークプリーストは危険だ。アンデッドナイトども、あのアークプリーストを狙え！」

「嫌あ。またこの展開いく！」  
ベルデイアが引き連れてきていたアンデッドに命令を下す。

アクアがまたアンデッドに追いかけ回される。

だが、今回もベルデイアに対し、ダメージを最も与えられるのはアクアだ。  
なんとかしないと……

こうなつたら前回と同じ作戦でめぐみんに……

「そう言えば頭のおかしいそこの魔法使い。確かめぐみんと言つたか。あの時は爆裂魔法を撃つたが、今回は撃たんのか？まあ、前回も俺に大したダメージは与えられなかつたものな？」

マズイ。これはあからさまな挑発だ。俺たちにとつて切り札と言つて良い爆裂魔法を先に潰す氣だ。

「乗るなめぐみん。ただの挑発だ！」

大声で叫ぶが遅かつた……

「良いでしよう、私とてあの時よりレベルも上がり、爆裂魔法の威力も上がっています。  
私の魔法が上か、貴方の耐久力が上か……勝負です！」

そう言つて、爆裂魔法の詠唱に入るめぐみん。

俺の声は、華麗に無視された…

『エクスプロージョン!!!』

爆裂魔法が、炸裂した。

大爆発がベルデイアを中心に起ころる…

「あう。」

魔力を使い果たし倒れるめぐみん。

あんなあからさまな挑発をしてきた位だ… きつと何かある… 杞憂であつてくれれば良いが…

煙が晴れると… そこには無傷のベルデイアが立つていた。

「なつ!?

無傷?

いくらなんでもそれは、おかしい。

あの機動要塞デストロイヤーをも破壊しためぐみんの爆裂魔法を受けて、耐えるどころか無傷なんてありえない。

こいつ… 何しやがつた。

「不思議そうだな。」

ベルデイアが持つ頭がニヤリと笑った。

「種明かしをしてやろう。『インヴィジブル』と言うスキルを知っているか？日に一度、10秒間だけ無敵になれるというものなんだが…」  
こいつ汚ねえ。

「おい、ベルデイア。いくらなんでも卑怯だろ。今のはめぐみんの魔法をお前が耐えるシーンだろ。それでも元騎士か。」

「『元』騎士だ。なんとでも言うが良い。貴様らを殲滅するのに騎士の矜持など邪魔なのでな。…どうせ俺を満足させられるヤツもおらん。さて、これで爆裂娘は無力化した。あのアークプリーストもアンデッドどもの追いかけっこ真っ最中。さて、サトウカズマ。どうする？」

クソつ。策で完全に上を行かれた。

「待て、ベルデイア。まだ私がいる。」

そう言つて、前に出るダクネス。

「…お前の相手はせん。どうせ攻撃しても当たらんだろう。相手をするだけ無駄だ。」

ダクネスを無視するベルデイア。

「ほ、放置プレイ。どうしよう、カズマ。あのデュラハン、いつの間にかそんな高等テクニックを身につけてる。前回は私を痛め付けるだけだったのに…」

嬉々として、ヨダレを垂らしながら俺に言つてくるダクネス。  
お前は、いい加減時と場所を考えた発言をしろ。

「さて、これで終わるのもつまらんな。もう少し余興を楽しもうか。」  
ベルデイアがそう言うと、ベルデイアの回りから大量のアンデッドが召喚される。  
まだ戦力を残していたのか…

アンデッド達は散り散りになつて、アクセルの街に侵入しようと試みる。  
他の冒険者達が応戦するが、数が多い。

クソッ、どうすれば…

「ライトオブセイバー！」

俺が焦る中、アンデッドの群れの一角が吹き飛んだ。

あの魔法は、ゆんゆんか。

「ここは、誰も通さない。キリトさん達は、私が守る！」

「ベルデイア。貴方に弱点が無いなら、物量で責めるだけ。見なさい、特訓で編み出した  
上級魔法の多重機動。その名も…」

『スペルオブボンバー!!』

炎が雷が氷が竜巻が…とにかくとんでもない数の魔法がベルデイアに降り注ぐ…  
アレ、範囲はともかく威力だけなら、めぐみんのエクスプロージョンに匹敵するん

じゃ…

ベルデイアは膝をついていたが、まだ戦えそうだ。

「くつ、やつてくれるでは無いか。この間とは見違えたぞ…」

魔力を使い果たしたのか、ふらふらのゆんゆん。それでも倒れないゆんゆんに、ベルデイアが話しかける。

「名を… 聞いておこうか。」

「我が名はゆんゆん… アークウイザードにして、上級魔法を操るもの。そして、キリトさんのパートィーメンバー！」

高らかに宣言するゆんゆん。

正直、少しカッコいい。

「そうか。ゆんゆんとやら。お前の強さに敬意を表し、騎士として止めをさしてやろう。」

ベルデイアは大剣を構え、ゆんゆんに向かい歩き出す。

マズイ。ゆんゆんはもうふらふらだ。

「逃げろ、ゆんゆん！」

「逃げてください！」

焦る俺たち。

俺は、めぐみんを守る為に動けない。

他の冒険者もアンデッドの相手で精一杯。クソつ、どうすれば…

「さらばだ、ゆんゆん！」

ベルデイアが大剣を降り下ろす。

「そうはさせんぞ。ベルデイア、お前の相手はこの私だ。攻撃は当たらずとも、この身を盾に貴様の攻撃を受けてみせよう！」

ダクネスが間に入り、ベルデイアの剣を止めた。

ナイスだ、ダクネス。

「邪魔だ。お前のような半人前に用はない。」

ベルデイアはそう言うと大剣を横に廻いで、ダクネスを遠くへ吹き飛ばす。  
な、ダクネスが一撃で…

もう、ゆんゆんとベルデイアを隔てるものはいない。

「さて、仕切り直しだ。何か言つておくことはあるか？ゆんゆん。」

「… んは… 私が… る。」

「キリトさんは、私が守る。」

瞳を紅く輝かせたゆんゆんがベルデイアに殴りかかつた。

無茶だ。いくらなんでも魔法使いがフルプレートの敵に殴りかかるなんて…

ゆんゆんの拳がベルデイアに直撃する。

パンツと言う音が響き、そして…

ベルデイアの鎧に亀裂が出来た…

「ば、バカな。貴様何をした！」

「私が特訓で編み出したもうひとつ技。自分の魔力を拳に宿して打ち付ける。『スペルナツクル』よ。」

「だが、俺の鎧を殴った貴様の拳の骨もボロボロだろう。どうするつもりだ？」  
「拳なら、もうひとつあるわ…！」

「くらえ。ベルデイ… あつ」

倒れるゆんゆん。今度こそ魔力が切れたか。

「なんで、後ちょっとなのに… なんで倒れてるのよ、私は。」

悔し涙を流すゆんゆん。

「ふつ、本当に驚かせてくれる。だが… ここまでようだな。何、ここまで手こずらせてくれた礼だ。痛みもなく送つてやる。」

「や、やめてええ!!」

めぐみんが叫ぶ…

ベルデイアの大剣が、ゆんゆんに突き刺さるその刹那…

二つの影が、ベルデイアに向かい、ベルデイアを吹き飛ばした。

「よく頑張ったなゆんゆん。あとは……俺たちに任せてくれ。」

そこに……二本の剣……一本は真っ黒な刀身。もう一本は水晶よようく美しい刀身を持つた黒ずくめの剣士と、一本の莊厳な細剣を持つた白い女剣士が立っていた。

# アクセル防衛戦3 キリアス戦場へ！

時間は、少し遡る。

ベルデイアの侵攻の真っ最中、キリトは防衛戦に参加する為にアスナとユイの説得を試みていた。

「アスナ。俺の身体はもう大丈夫だ。ヤツから受けた呪いも解除されてるし、俺たちも防衛戦に参加しないと…」

「ダメだよ。キリト君は病み上がりなんだよ？傷が癒えても、体力まで回復した訳じゃ無い。私は、キリト君を止める為にここに残ってるんだよ？」

「私も反対です。パパのバイタルはまだ安定しているとは言えません。そんな状態で戦いに参加したら、どんな不足の事態が起きるかわかりません。」

なんとか、二人を説得したいがアスナもユイもなかなか首を縊には振らない。

その時、巨大な爆発音が戦場の方から聞こえてきた。

「あれは、めぐみんの爆裂魔法か…」

それでも、戦場から戦いの音が消える事は無かつた。

爆裂魔法でもベルディアを倒すには至らなかつたのだろう…。  
このままじや街の冒險者達は全滅する…。

「アスナ…：皆戦つてる…：ゆんゆんも、クリスやカズマ達も、街の冒險者達だつて…」  
「わかつてる。でも、怖いの。キリト君が死んじやうんじやないかつて。あの時、ベル  
ディアの攻撃を受けて倒れたキリト君を見て、本当に心臓が潰れるかと思つた。キリト  
君、私は…：街の人たちよりも、キリト君の方が大事だよ？だからお願ひ。ここにい  
て。」

「アスナ…：アスナが好きになつてくれた『黒の剣士キリト』は、ここで皆を見捨てるよ  
うなヤツだつたか？」

アスナは何も言えなかつた…。

そんな事はわかつてゐる…。

キリトは、いつだつて皆のためにその身を犠牲にしてきた。

AINクラッドでの第一層のボス攻略…

攻略組が瓦解しないようにと、自ら悪役を買つて出た。

その後も、ソロとして活動するようになつても、皆の為に、マップを提供したり、ボ  
ス攻略では、最も危険な位置で戦いをコントロールしていた。

自分が好きになつたキリトと言う男性は、いつだつて皆の為に無茶な事をやつてい

た。

どれだけ自分が傷ついても、周りの人を守っていた。

「アスナ…：覚えてるか？ アインクラッドで…『俺の命は君の物だ』って言つたこと。」  
覚えている。クラディールの事件の時に、キリトの側を離れようとした自分に、キリトが贈つてくれた言葉だ。

「俺は死なないよ。俺が死んだらアスナも死んじやうからな。俺は、アスナを死なせたくない。だから…：俺は絶対に生き抜いて見せる。」

強い…：決意の瞳を持つてアスナを見つめるキリト。

「う… ん…：でも酷いよ…：キリト君は… 言い出したら…：絶対に聞いてくれないし…：私の気持ちなんて…：全然…：わかつてくれないんだから…：」

アスナは泣きながら、キリトの参加を容認した…：

「ねえ、キリト君。戦うのは良いとして、武器はどうするの？ 私たちの武器は、この間の戦いで壊れちゃつたし、正直、この街の武器屋にある剣じや、一番高い物でもベルディアを倒すのは難しいよ？」

しばらくして、落ち着いたアスナは思考を切り替えてキリトに聞いた。

その質問にニヤリと笑つたキリトは、ステータスウインドウを開き、アスナに見せる。  
「この間のアンデッド100体斬りで、レベルアップして、漸く条件が整つたんだ。」

アスナは、はつとして自分もステータスウインドウを開く……するとランベントライトの装備に必要な筋力要求値に達していた。

キリトを見るアスナ。キリトは頷いた。

アスナはシステムウインドウを操作すると、ランベントライトをオブジェクト化する。

自分の手元にオブジェクト化されたかつての愛剣。それを手に取り意識が高揚するアスナ。

キリトの方を見ると、キリトはまだ武器をオブジェクト化していなかつた。

「どうしたの、キリト君？」

アスナが聞くと、

「いや、ベルディアとの戦い……俺の全力……二刀流を解禁しないと倒せない気がするんだ……」

それは、ゲーマーとしての自分の勘。

だが、その勘は……かつての鉄の城で何度も自分を助けてくれた物だ……

「でも、エリュシデータはともかく、エクスキヤリバーを装備するには、まだまだ筋力が足りなくて……どうしたものか……」

悩むキリトに、どこからか声が聞こえてきた。

『お困りのようですね。キリトさん。』

それは、自分達をこの世界に送つてくれた天使の声だった。

「お久しぶりですね。キリトさん、アスナさん、ユイさん。」

「お久しぶりです。ですが…今は悠長に挨拶をしている暇は…」

『存じていますよ。キリトさん。私たちには貴方達を手助けすることは出来ません。ですが…』

『貴方がその世界に持ち込んだ武器を、ランクの低い物と交換することは可能です。弱体化させる訳ですからね。手助けには当たりません。』

きっと、それは屁理屈なのだろう。

この天使は、自分達の窮地に手を貸すために無理をして、連絡をくれたのだ。

『ただし…一度交換したら、二度とエクスキャリバーを手にすることは叶いません。それでも、良いですか？』

その言葉に、一瞬悩むキリト…

確かにエクスキャリバーは、S A O 、A L O を含めても最強クラスの武器だ…だが…必要なのは最強じやない。今を生き残る力だ…

『お願ひします。エクスキャリバーをダークリパルサーと交換してください。』

『わかりました。それでは貴方のアバターデータに入ります。交換の選択肢が出たら

OKボタンを押してください。』

その言葉でアイテムトレードのウインドウが開く。

OKボタンを押すとき、一瞬シノンの顔がよぎった。  
エクスキャリバーは、シノンがくれたもの。

—これを使う時は、私の顔を思い出してください—

冗談混じりにそんな事を言つてたつけ：

シノンのヤツ怒るだろうなあ：

そう思いながら、キリトはOKボタンを押した。

『全く… しようがないわね。これは貸しよ？返しに来ないと承知しないからね？』

どこからか、シノンの声が聞こえてきた気がした。

アイテムウインドウにエクスキャリバーの文字が消え、ダークリパルサーが表示される。

早速ダークリパルサーをオブジェクト化するキリト。

ダークリパルサーを手に持つた時、キリトは心の中で呼び掛けた。

(力を貸してくれ。リズ)

『頑張りなさい、キリト。でも、アスナを不幸にしたら許さないからね。』

今度はリズの声が聞こえた。

幻聴かもしない。それでも、キリトは嬉しかった。例え世界は変わつても、俺たちの心は繋がつてゐる。

ああ… わかつてゐさ。リズ。

必ず、アスナを幸せにするよ。

そう、心の中で誓い、エリュシジーダもオブジエクト化する。  
エリュシジーダとダークリパルサー…：

二本の剣を背負つた黒の剣士…：

今この世界に、ソードアート・オンラインをクリアに導いたアインクラッド最強の剣士の姿が降臨した。

『活躍… 期待して います。キリトさん。それとアクア様をよろしくお願ひします。』

そう言つて、天使の声は聞こえなくなつた。

「私は戦場ではお役に立てません。二人を信じて、宿で待つて います。だから… 必ず帰つてきてください。」

ユイの言葉に頷き、抱き締め合う親子。

そして…：

「ユイ。行つてくる。」

「直ぐに終わらせてくるからね。今日はご馳走にしようね、ユイちゃん。」

二人は、戦場へ駆け出した。

正門に辿り着くと、ベルデイアがまさに今、ゆんゆんに止めを刺そうとしている所だった。

「マズイ。行くぞ、アスナ。」

間に合え……

一気にベルディアとの間合いを詰めるキリト。

アスナもそれに続く。

動した。

アスナも『リニア』を使い、飛び込む。

横から二人の攻撃をまとめて食らい、吹き飛ぶベルデイア。

ゆんゆんは、魔力が尽きたのか倒れて動けないようだつた。

流しながら微笑んだ。

ボロボロのゆんゆんに、キリトは声を掛ける。

「よく頑張ったなゆんゆん。あとは…俺たちに任せてくれ。」

そう言つて、キリトはベルデイアを睨み付けた。

# アクセル防衛戦4 黒の剣士と閃光再び

突然の乱入者に、ゆんゆんは驚いていた。

自分がベルデイアに止めを刺される…まさにその瞬間…ベルデイアの身体が吹き飛んだ。

「よく頑張ったなゆんゆん。あとは…俺たちに任せてくれ。」

ベルデイアを吹き飛ばした乱入者の片割れは、そう言つてゆんゆんに微笑みかけた。

黒ずくめの衣装に身を包んだ剣士、キリト。

キリトは見慣れぬ二本の剣を携えていた。

今まで、キリトが二本の剣を使つている所を、ゆんゆんは見たことが無い。

それなのに、その姿は何故かキリトにしつくりとハマつて見えた。

ゆんゆんは、複雑な心境だった。

自分が救いたい人に救われてしまつた悔しさと、助けてもらえた嬉しさ。そんな感情

がない交ぜになり、どんな表情をしたら良いのかわからない。

それでも、言われた通り、後の事はキリト達に任せよう。そう考えて、キリトに頷き返す。

一方、吹き飛ばされたベルデイアは、なかなか起き上がらない。

それでも、油断なくベルデイアを見るキリト。

その間に、アスナはゆんゆんをカズマ達のもとへと運んだ。

それを見計らつたかのように、ベルデイアは起き上がる。

「ハハハハハハ。待つて いたぞ、貴様があの程度で終わるとは思つていなかつたからな。」

ベルデイアは、さも嬉しそうに笑いながら話し出す。

「それに、その剣。それが本来の貴様の武器か。確かに以前貴様が持つていた剣は、明らかに貴様の技量には不釣り合いだつたからな。二刀流が貴様の本来のスタイルとは見抜けなかつたが…… それも、これから戦いの楽しみと言えよう。」「カズマ達への復讐が目的じやなかつたのか？」

キリトが聞き返すと、

「それは、目的の三分の一と言つたところだ。」

ベルデイアは続ける。

「確かに、サトウカズマ一行への復讐心から俺は蘇つた。だが……」

「先日のお前達との戦いを経て、俺の本来の未練がサトウカズマ達への復讐心を大きく

上回つたのだ。今の俺が望むは、強き者との死闘。それだけよ。』

「そうか……だつたら……存分に楽しんでいい。お代はあんたの命で賄つてもらう。俺の仲間をこんなにして、手加減してもらえると思うなよ?」

『戦いを始める前に……騎士として名乗るにしよう……俺は魔王軍の幹部……デュラ

ハンのベルディア。さあ、貴様達も名乗るが良い。』

『キリトだ。』

『アスナよ。』

『そうか……ではキリト、アスナ。お前達の本当の力……見せてもらおう。』

『行くぞ、アスナ。』

『うん。』

戦いが始まつた。ベルディアは、廃城でキリトを戦闘不能に追い込んだ上段からの降り下ろしを行う。

キリトはすぐさま反応し二刀を頭の上に翳す。二人の武器が激突する。

『なっ!?』

驚いたのはベルディアだつた。

以前の戦いでキリトはこの攻撃で致命傷を負った。

今回は、回避して反撃に転じると思つていただけに、まさか正面から受け止められるとは思わなかつたのだ。

ましてや、キリトの体躯は自身より遙かに小さく、手に持つた剣も片手剣。いくら二刀を重ねているとはいえ自身が持つ大剣とは比較にならない。

だと言うのに、武器同士がぶつかつた時に剣から伝わる衝撃は尋常なものでは無かつた。

まるで、大岩にでも打ち付けたかのような衝撃に、一瞬硬直するベルデイア。その隙にキリトは、ベルデイアの大剣を跳ね上げた。

そして、そのタイミングを逃さずアスナが突つ込んでくる。

「ハアアアアアア！」

アスナは『フラツシング・ペネトレイター』を発動した。

狙うのはベルデイアの右腕。

キリトが大技を出すために、ベルデイアの武器を落とす狙いだつた。

高速で繰り出されるその攻撃は、それでも正確に狙いを付け放たれる。

「くつ」

ベルデイアはなんとか回避に成功するも、そこに待つていたかのようにキリトが攻撃

を繰り出す。

ベルデイアは防戦一方で追い込まれた。

そんな戦いを、アンデッド達を一掃した周りの冒険者たちは自分達が戦いに参加するのも忘れ、茫然と見つめていた。

いや、参加できるはずも無い。その戦いは自分たちの知るものとは次元が違う。

キリトとアスナによる超高度な連携の上に成り立つ剣劇の嵐。  
それを、防戦一方で追い込まれながらも凌ぎ続けるベルデイア。

「お、おい。あいつらスゲーな。」

一人の冒険者が口を開く。

「誰だよ。キリトが臆病者だなんて言つたのは。」

「こうなつたらやつちまえ～！」

「キリト～！」「アスナ～！」

冒険者たちは声を出して二人を応援した。

一方、押しているはずのキリトたちは、内心焦りを感じていた。

押しているように見えるその戦いは、ペース配分も無く、最初から全力で行っているが故だつた。

もともと、病み上がりのキリトは体力的に問題があつた。

そのために、最初から全力で攻撃を行つてゐるのだが、それでも決定打を与えられないと、いでのいた。

このままでは、遠からず先に体力が尽きるのは自分達の方…

”クソッ、一体どうしたら…”

キリトは心中で舌打ちをした…

周りがキリト達の戦いに熱狂するなか、ゆんゆんはしかし、一人冷静にその戦いを見ていた。

キリト達が、焦りを感じているのをゆんゆんだけは感じていた。

この世界で、誰よりも二人の戦闘を見てきたゆんゆん。

今のような全力の戦いを見たことは無かつたが、それでもパーテイーメンバーとして、二人の考え方や気持ちが伝わってくる。

ゆんゆんは、ふらふらになりながらも立ち上がり、カズマに話しかけた。

「カズマさん。お願ひがあります。」

ゆんゆんの突然の行動に驚くカズマ。ゆんゆんは構わず話を続ける。

「カズマさん。私に一発で良い、魔法を放つだけの魔力を補給してもらえませんか。」

ゆんゆんは、カズマがドレインタツチと言うスキルで魔力を他人に分ける事ができる

のを知っていた。

「ど、どうしたんだよ、ゆんゆん。このまま行けば、キリト達の勝ちだろ？ ゆんゆんが無理しなくても良いだろ？」

「そうですよ。今のゆんゆんじゃ足手まといになるだけです。大人しくしていましょう。」

カズマ達は訳もわからず、ゆんゆんに話しかける。

「いえ。このままだとキリトさんたちは、負けます。」

ゆんゆんは、自分が感じた事を、感じていた事をカズマに伝えた。  
驚くカズマだったが、ゆんゆんの真剣な瞳に頷くしかなかつた。

カズマは自分に残った魔力を、ギリギリまでゆんゆんに与える。

冒険者であるカズマは、もともと魔力が少ない。ギリギリまで渡して、それでもゆんゆんが放つ中級魔法一発分にしかならなかつた。

「頼むぞ。ゆんゆん。」

魔力切れで倒れるカズマ。それでも親指を突き出しカズマは笑つた。

戦況は、いつの間にか拮抗していた。

キリト達の反応が、体力の消耗で遅くなつてきていたのだ。

それを敏感に察知したベルディア。

「このまま行けば、お前達の負けだな。残念だが、そろそろ終わりにしよう。」  
自分の優位に、意気を上げ決着を迫るベルデイア。  
そこに…

「ベルデイア、これを食らいなさい。『フリーズランサー』！」

ゆんゆんの魔法が炸裂する。狙いはベルデイアの右肘間接。  
寸分違わず、ベルデイアの右肘間接が凍りつく。

「なんのつもりだ。」

だが、それは一瞬の出来事。魔力の残り少ないゆんゆんの魔法は一瞬にして消失して  
しまった。

だが、その一瞬にキリト達は動き出す。

アスナは、動きの止まつたベルデイアの右腕。

その腕が持つ大剣に向けて、自身が作り、切り札であるオリジナルソードスキル『ス  
ターリイ・ティア』を発動した。

迎撃しようとするベルデイアだが、ゆんゆんの魔法により、腕の動きが止まっていた。

「ハアアアアアアッ!!」

アスナのソードスキルはベルデイアの大剣の全て同じ場所に当り、ベルデイアの大剣  
は砕け散つた。

「バ、バカな…」

そう、アスナの狙いは武器破壊。かつてキリトがS A Oで得意としていたものだ。ベルデイアの剣を振るスピードは早く、狙えるものでは無かつたが、ゆんゆんの魔法のお陰で、破壊に成功した。

「キリト君！」

その時キリトは、既にベルデイアの懷に飛び込んでいた。  
アスナの狙いを読み、アスナを信じて最高の一撃を放つ。  
そのために…

「終わりだ、ベルデイア！…『スター・バースト・ストリーム』！」

キリトが持つ二刀流ソードスキル。その中でも上位に位置する、二刀による16連  
戟。

「ぐああああああつ!?」

キリトの攻撃を無防備に受け、ベルデイアはなす術もなく、倒れるのだつた…

決着… そして…

キリトの『スター・バースト・ストリーム』を食らい、ベルデイアは倒れた。

「う、うおおおおおおおつ!!!!」

周りの冒険者達が歎声を上げる。

ズザツ…

と、その時、ベルデイアが立ち上がった…

一斉に辺りは静まり返る。

だが、キリト達は動かない。

キリト達にはわかっていたのだ。

既にベルデイアに戦意が無いことを…。

「俺の… 負けだな。キリト… アスナ… そして、ゆんゆん。感謝する。お前達との戦い… 俺は… 全てを出しきる事が出来た。これで… 思い残すことは… もう… 無い。魔王様のお力でも、二度と俺が復活することも無いだろう。」

「あんたは強かつたよ。俺一人じゃ、絶対に勝てなかつた。アスナと… ゆんゆんのおかげだ。」

キリトはベルデイアの強さを称賛した。

「俺の強さはアンデッド化によるものだ。生前の俺では、お前達の足元にも及ばん。本当の英雄を見ることが出来た。それだけで、俺は充分だ。」

ベルデイアは、満足そうに言つた。

しかし、続けた言葉にキリトたちは戦慄する。

「俺を倒した褒美だ。お前達に相応しい二つ名をやろう。」

ベルデイアの言葉にギヨツとするキリト達。

「キリト、お前には『黒の剣士』だ。お前を見れば誰もがその名を思い浮かべるだろう。」

勘弁してくれ…

キリトは思つた。

「アスナ、お前は『閃光』だ。お前の技とスピードは正に閃光。その名が相応しい。」

アスナは思つた。

バーサークヒーラーよりは良いか…。

「ゆんゆん。お前の魔法の嵐。凄まじかつたぞ。お前は”天から魔法の嵐を生む魔女”『天魔』だ。」

ゆんゆんは思つた。

カツコいい…。

「そろそろ時間のようだ。 黒の剣士キリト、閃光のアスナ、そして天魔のゆんゆん。お前達との戦いを俺は誇りに思う。さらばだ。」

達との戦いを、俺は誇りに思う。さらばだ……」

「キリト君？ キリト君が号令掛けないと、皆動けないよ？」

アスナは、ベルデイアの二つ名と言う置き土産に固まっていたキリトに声を掛ける。

キリトは辺りを見渡す。

皆、キリト達に視線を注いでいた。

キリストは観念して、エリュシデーツを空に掲げ……

「俺たちの勝利だ！」

高らかに宣言した。

今度こそ勝利を確信し、  
周りから勝利の悦びによる雄叫びや、  
キリト達への称賛の嵐

が始まる。

早速、ベルデイアが付けた二つ名を連呼する者までいた。

その冒険者達の雄叫びはしばらく鳴り止むことは無かつた。

ちなみに、アンデツドに追いかけ回されていたアクアだが、ベルデイアの消滅に伴つ

てそのアンデッドも消えた。

ベルデイア戦で、ずっと追いかけ回されていたアクアは精も根も尽きて地面に突つ伏していた。

誰も気にしていなかつたが…

「なんですよ。このシリーズの私、超優秀じゃない。なんで最後にオチが付くのよお。」

それが、アクアと言う存在なのだから仕方がない。

その日は、ベルデイアとの死闘により皆ぼろぼろだつたため、報酬は翌日と言う事になり、冒険者達は町に戻ると解散した。

「お帰りなさい、パパ、ママ。 ゆんゆんさん。」

宿に戻ると、ユイが三人を笑顔で出迎えた。

キリト達は、お互いを見ると、

「「ただいま。」」

そう言つて笑顔でユイの元へと向かつていつた。

宿に戻ると、ユイが三人を笑顔で出迎えた。

翌日…：

キリト達はギルドに向かつた。

報酬を受けとる為だ。何故だか時間が指定されていた為、昼を回つた頃に出掛けた。ギルドに入ると、そこに大勢の冒険者達がキリト達を待ち構えていた。

「街を救つた英雄のご登場だ。」

「黒の剣士キリトバンザーイ！」  
「閃光のアスナ様ーー！」

「天魔のゆんゆん最高！」

どうやら、キリト達を労うために、わざとキリト達だけ時間を指定していたようだ。  
そんな中、ギルドの受付嬢ルナがキリト達に近づいてくる。

そして、ちょっと困った顔で、キリト達に告げる。

「キリトさん。今回は貴方達のお陰で、この街は救われました。まずは感謝を。そして、報酬なんですが……そのお。」

「ベルデイアは一度、倒されていまして、討伐報酬が既に支払われているんです。ですか  
らキリトさん達に出せるものが無くて……勿論、今回のギルドからの緊急クエストの報  
酬は特別報酬も含めて出しますが、常時、ベルデイアの討伐報酬の十分の一になるか  
ど……本当にごめんなさい。」

その額、三千万エリス。

キリトは、笑つて報酬を受けとると、

「そんなに申し訳なさそうな顔をしなくても大丈夫ですよ。皆がこうして笑つていられ  
る。それだけで俺は充分です。」

ルナにそう声を掛けた。

「キリトさん。」

ルナは潤んだ瞳でキリトを見つめる。

「キリトくん」

後ろから、地獄の底から響くような声が聞こえてくる。

「ひつ」

恐る恐る振り向くと、アスナが正に閃光の早さでキリトの耳を掴み引っ張つてい  
く…

ゆんゆんも不機嫌そうにそれに続く。

その光景に爆笑する冒険者たち。

「ア、アスナ。さつきのはべつにルナさんを口説いた訳じやなくて、落ち込んでるよう  
だつたから慰めようとただけで…」

「言い訳は良いの。反省しなさい。」

「…ハイ」

「さすがの黒の剣士様も、閃光様の前じや形無しだな。」

そう言つて近づいてきたのはカズマだ。

「昨日は、お疲れさん。それと…サンキューな。お陰で命拾いしたよ。」

カズマはそう言つて、キリトを労つた。

「ゆんゆん。昨日は聞きそびれましたけど、あの魔法はなんですか？正直、私の爆裂魔法に匹敵する威力がありました。なんですか？私の存在意義を奪うつもりなんですか？」  
そう言えば、『天魔』なんて二つ名まで貰つてましたね？紅魔族の名乗りですら恥ずかしがるゆんゆんがそんな大層な名前を貰うとは思いませんでした。」

めぐみんは、ゆんゆんに絡んでいる。

ゆんゆんは、ニヤリと笑い、

「ふふん。羨ましいの？めぐみん？まあ、そうだよね。これから私は天魔のゆんゆん。自称じやなくて、冒險者に広がつてからね。ああ、それとあの魔法は複数の魔法を同時に発動させたのよ。」

「キリトさん達の役に立ちたくて、私が編み出したの。かなり難しいけど、めぐみんならやろうとすればできるかもね。まあ、爆裂魔法しか習得してないめぐみんには意味の無い技術だけど。」

ゆんゆんも、逞しくなつたものだ。

キリトが感心していた。

ダクネスはアスナの戦いぶりを称賛していた。

「アスナは凄いな。動きも早いし、何より攻撃の正確さがとんでもない。あのベルディ

アの大剣を碎いた時、一体どうやつたら5連撃もの攻撃を、同じ場所に与えられるのだ？（私なんて、動かない敵にすら当たらないのに…）

「うーん、特にコツなんてないんだけど…：やつぱり集中することかな。」

そんな会話を行っていた。

そして、アクアは宴会芸の披露に夢中だつた。

こうして、キリト達の異世界での日々は過ぎていく。

アスナは、そんな光景を見て思つた。

これからも、色々なことに巻き込まれたり、自分達から首を突っ込んだりして、大きな事件に関わっていくのだろう。

それでも、キリトの隣にはアスナが、アスナの隣にはキリトが…：二人がいればどんなことでも乗り越えて行けるだろう。

ましてや、二人には大切な娘のユイ。

この世界で出会つた仲間のゆんゆんもいるのだから。

「大好きだよ、キリト君。これからもずっと一緒にだよ？」

そう言つて、キリトに口付けするアスナ。

その行為に固まるキリト。

それを見て、ヒートアップする冒険者たち。

その日、冒險者ギルドの酒場からは常に賑やかな音が鳴り止むことは無かつた。

# この素晴らしいキリアスに祝福を！ 終章前までのあらすじ

まず、前シリーズについては読んでください。  
その続きから、時系列に沿つて。

前のシリーズは、原作における4巻と5巻の間の話になります。

原作では、その間は一日しか無いですが、キリト達の介入で、時間がズレたと思つて頂ければ：

ここから、続きの内容になります。

キリト達がベルディアを討伐後、アクアを除いたカズマ一行がキリト達の戦いを見て  
思うことがあり、キリト達に相談をする。

自分達はこのままで良いのか？

カズマ達のこれまでの戦い方を聞いて、キリアスのダメだし。

特に、めぐみんとダクネスに関しては、仲間の命を背負つてなお、自分の嗜好を優先  
するなら、パーティーを辞めた方がいいと言ったキツイ事を言います。  
いつか、後悔することになるからと言つて。

カズマはアスナに、リーダーとしての心構えの面で調子に乗りすぎないように注意を受ける程度。

それぞれダメだしを受けたカズマ達は、悩みながら帰宅。

数日後に5巻の内容がスタート。

ゆんゆんに故郷から手紙が。

原作通り、カズマの元へ言つてあの発言。

ノリはまだ、原作と変わらず。

勘違いとわかり、ゆんゆんは宿に戻り、キリト達に一時的にパーティーを離脱する旨を伝える。

キリトに理由を聞かれて答えるゆんゆん。

キリト達も同行を申し出る。

ゆんゆんは、自身の問題だからと同行を拒否するも、

「もし、俺たちが困つてたら、ゆんゆんは放つておけるのか？」

と説得されて、一緒にきます。

道中、キリト達の方は順調に進み、カズマ達の危機を救います。

キリト達に助けられた事で、ダクネスとめぐみんは、先日受けたダメだしを思い出してさらに思い悩みます。

魔王の手下に囮まれるキリト達。

紅魔の里のパーさん達に助けられるキリト達。  
カズマ達は先にテレポートで送つてもう。

キリト達は、レベル上げも兼ねて徒步で紅魔の里へ。  
紅魔の里に到着したキリト達。

ゆんゆんの成長に驚く紅魔の人々。

そこに、魔王の幹部シルビア襲来。

原作と違い、カズマもアスナの助言を受けて、あまり調子に乗ることがないため無難に撃退。

この戦いで良いところの無いダクネスはカズマに相談。

自身の嗜好を押し殺して大剣スキルを取る。

それを物陰から見ているめぐみん。

魔術師殺しと合体するシルビア。

爆裂魔法でダメージを与えるも倒しきれず焦るめぐみん。

キリト達の活躍で討伐。

その夜、めぐみんもダクネスと同じように、カズマに相談して、中級魔法を覚える（上級魔法にはポイント足りず。）。それでも、汎用性は格段に上昇。

初级魔法を上手く使いこなすカズマに、上手い使い方を相談する。

カズマ一行とキリト一行帰宅。

これが、5巻時間軸の内容になります。

続いて、6巻。

アイリスに呼ばれるカズマ達。

キリト達は、呼ばれない為オリジナル展開。

それまでの戦いで、やはりもう一人パーテイーメンバーが必要との結論に至るキリト達。

パーテイーメンバーを募集するも、キリト達の戦いぶりを知っているアクセルの冒険者は気後れして入つて来ず、来たとしても、アスナやゆんゆん目当てのろくなヤツがないため、別の町へ。

隣の町へ到着すると、町の領主が圧制を敷いていた。

そんな中、領主の兵士が女の子に暴行を加えようとしている所に遭遇。

助けると、それはキリトのトラウマの元、サチだつた。

サチは、SAO死亡後この世界に転生。チートで癒しの力を貰い、順調にレベルを上げてこの町に入るも、この町の現状を見て、少しでも自分の力が役に立てばと、抵抗運動を行つていた。

一方、キリトはサチの姿にトラウマを刺激されて、どう接して良いかわからず。アスナもキリトのサチに対する思いがわからず不安を抱える。思い悩む二人に、MHPとしてのユイの本領発揮。

キリトは、現状での大切な物を再確認。

アスナは、マザロザ i-f での自身の後悔を思い出して、勇気を出してキリトに尋ねる。キリトにとってのサチは、自分が必要の無い人間じやないと認識するための存在だつた。

サチを守ることで、自分の心を守つていた。

サチに対して、恋愛感情は無いときっぱり告げるキリト。

アスナは、自分の不安と弱音を話して泣きながらキリトに抱きつく。

キリトもまた、自身の弱音とトラウマを話して、お互いに励まし合うのだつた。

その様子を陰で見ていたサチ。

サチにとつてはキリトは憧れの存在だつたが、この思いは伝わらないと確信し、思いを吹つ切る。

町の領主と対決。

圧倒的な力で領主の元へ。

アスナを見て、アスナを差し出すなら不問にすると伝える領主。

拒否するキリト。

用心棒の先生お願いします（笑）からの、キリトのタイマン。

先生敗北（笑）

赦しを請う領主。圧制はないと誓う領主。

領主を解放し、サチが正式に仲間に。

以降、サチはリズ達と同じ立場に。

アクセルの町に戻るキリト達。

このままにすると思うかと懲りない領主。

それを読んでいたキリトは、王族のコネを作ったカズマに領主を調べるよう手紙を出してほしいと頼む。

領主逮捕。

これが6巻の時間軸の内容になります。

注意）ここからは書籍原作より先の展開が出てきます。

書籍の方がどんな結末を迎えるかわかりませんが、ネタバレになる可能性が高いため、嫌な方は飛ばして次のページへ。

7つは割愛。

その間にキリトはミツルギ君と遭遇。  
ここからはWeb編に。

アルダープ編は起こらず、セレナ編から。

最近、優秀になつたカズマ達に疎外感を感じるようになつてきたアクア。  
そこに、アクセルの町に優秀なプリーストセレナがやつてき。

カズマのパーティーに居場所を感じられず、また町の皆からはセレナ聾負の声。  
アクセルの町に自分の居場所を見つけられず、アクアは原作より早く家出をする。

カズマ達は、アクアを探して町の外へ。

一方セレナだが、実は魔王軍の幹部で、町の冒険者を洗脳。  
その毒牙はキリトにも及ぶ。

アスナ達は、キリトを取り戻すために奮闘。

最終的に、キリトとアスナの絆で洗脳を解き、セレナを討伐。

帰つてくるカズマ達。手がかりがなく、屋敷に戻ると、置き手紙に気づく。

魔王討伐に向かつたと知つて慌てるカズマ達。

カズマは、アクアを追いかける為実力が足りないことを思い悩むも、ルナに転職を持ちかけられる。

冒險者のままレベルを50まで上げた人だけがなれる伝説の職業。

上級冒險者。それまでに普通は転職をするのでなつたやつがないのだつた。  
上級冒險者になるカズマ。

メリットは、あらゆるスキルをポイント無しで覚えられること。

デメリットは、ステータスが他の上級職より低いのは変わらず、またやはり、スキルも専属に比べると能力は落ちる。

器用貧乏は変わらないというもの。

カズマ達はキリト達の助けもあつてアクアと合流。

アクアはミツルギ達と臨時にパーティーを組んでいた。

カズマは、アクアにそのままミツルギのパーティーに残るのか聞くと、アクアは泣きながら謝つてカズマのパーティーに戻る。

そのまま魔王との最終決戦。

ここは俺に任せろ的に仲間が離脱していき、最後に魔王の前にいるのはキリアスとカズマのみ。

魔王は討伐されたが、カズマが死亡。魔王討伐と同時にアクアが天界に戻されたため、蘇生ができず。

カズマは魔王討伐の報酬として、もう一度あの世界に戻る事を願い、持つていける

チートにまたアクアを指定して一緒に戻るのだつた。

魔王を討伐したキリアス。

そのキリアスの願いをエリスが聞くところから物語が始まります。

## キリトの願い、アスナの望み

俺たちは、魔王を倒すことに成功した。

その戦いにおいて、カズマが犠牲になつたが、カズマは魔王を倒した際の報酬：『どんな願いも叶える』を使って再びこの世界に転生してきた。

今、俺の目の前ではカズマ達のパーティが、カズマの復活と、アクアが戻ってきたことを喜び、抱き合っている。

魔王討伐によつて、アクアが天界に戻つたと聞かされたときは、正直焦つた。

めぐみんもダクネスも、カズマが二度と蘇生出来ないと知つて、顔面を蒼白にしていた。

カズマもアクアも、ここに戻つてきて本当にホツとした。

これで、全て終わつた… そう思つた時、辺りが突然光り出した。

その一瞬後に、虚空に一人の女性が現れる。

「皆さん。この度は、魔王を討伐していただき、本当に感謝しています。私はエリス。女神エリスです。」

その女性は、自らを女神エリスと名乗つた。

アクアやカズマの方を見ると、二人とも頷いた。

つまり、この人？は本当に女神エリスなのだろう。

「本當なら、この戦いに参加した全員に、褒美を差し上げたい所なのですが、それは残念ながらできません。私から褒美を出せるのは、異世界からの転生者であり、最終的に魔王自身との戦いに参加しているものに限られています。本当にごめんなさい。」

そう言つて、申し訳なさそうに謝るエリス様。

「構いません。僕はこの戦い…キリト達の足を引つ張つていました。僕のパーティーが力不足なばかりに、キリトのパーティーから回復役のサチさんを借りる事になつてしまいましたし…なにより、アクア様の悲願を達成できただけで、僕は満足です。」  
ミツルギは、笑いながらエリス様の言葉を受け入れた。

本当に良いヤツだと思う。

「私も、もう一度…生きるチャンスをこの世界で得られただけで満足です。」

サチも同意する。

サチは、本当に強くなつたな。

SAOでの生き方を後悔したからこそ、この世界では後悔しない生き方をしようと頑張ってきたサチの表情は、自信に満ちている。

SAOの時とは別人の様だ。

この世界の元々の住人であるゆんゆん達も、エリス様を非難することはなく、皆しつかりと受け入れた。

その事を確認したエリス様は、微笑みながら感謝を伝えると、話を続ける。

「それでは、キリトさん。そしてアスナさん。あなた達に、魔王討伐の褒美を与えます。どんな願いでも、一つだけ叶えて差し上げましよう。」

俺は、その言葉に決戦前夜にアスナと話し合つた事を思い出していた。

ユイは、気を利かせてゆんゆんの部屋で寝ていて部屋には二人だけだ。

「アスナ。明日はいよいよ魔王との決戦だ。怖くないか？」

「怖くないよ。だってキリト君が一緒だもん。でも……絶対に死なないでね？ キリト君。」

「ああ……わかってるさ。俺が死んだらアスナも死んじゃうからな。死はないよ……絶対に。それに……」

「うん。ユイちゃんを残していけないもんね。」

「ああ。だから、明日は絶対に勝つぞ。アスナ。」

「うん。」

そんな話をしていたとき、ふと思いついたことがあり、俺は、アスナに訊ねた。

「そう言えば、アスナ。覚えてるか？この世界に転生するとき、天使が言つた言葉。「えつと、魔王を倒したら願い事を叶えてくれるって言つてた事？」

「ああ。アスナは願い事……決めてあるのか？」

その言葉に、アスナは少し困った顔をして、首を振つた。

「ううん。全然。だつて……私の願いって、もう叶つてるもの。キリト君と……ユイちゃんと一緒に暮らしていくって願い事。」

俺は、その言葉が嬉しくて仕方なかつた。

「アスナ……」

その気持ちを少しでも伝えたくて、アスナを抱き締めた。

「キリト君は、願い事決めてあるの？」

そんな俺に、今度はアスナから訊ねてくる。

俺は……

「俺は、母さんや父さん、直葉、それにリズ達に会いたい……」

俺の言葉に、アスナは何故か不安そうな顔をした。

アスナは家族やリズ達に会いたくないのだろうか？

そう考へてゐると、アスナが不安そうな表情のまま口を開く。

「キリト君は、向こうの世界に帰りたいの？」

「帰りたいっていうか、皆に会いたいって事だけ……アスナは皆に会いたくないのか？」

「リズ達には会いたいよ？リズ達には酷いことしちゃつたし。謝りたい。でも……」

そう言つて、アスナは一度言葉を切つた。

続いた言葉は否定だった。

「私の家族には会いたくない。の人たち……ううん、母さんには絶対に。だからあの世界に帰るのは嫌なの。」

「アスナ……お母さんと何かあつたのか？」

その質問に、アスナは重い口を開き話してくれた。

ユウキと出会う前の正月に、お見合いもどきをさせられていたこと。俺との交際を否定されていた事。学校の転校の話まで出ていたとの事だつた。

何度、自分の思いを伝えても、アスナの母親……確か京子さんと言つたか……京子さんにアスナの思いは届かない。

母親に言いくるめられる自分の弱さを見て、俺に嫌われるかも知れないと、俺に相談も出来なかつたそうだ。

流石にそれは、否定した。そんな事で俺は、アスナを嫌いになつたりしないと。

「でも、キリト君いつも言つてくれてたよね。アスナは強いなつて。キリト君が好きになつてくれたのは、『結城明日奈』じやなくて、『閃光のアスナ』でしょ？だから、怖くて……君に嫌われる事がなにより、怖かつたの。」

俺は、その言葉に後悔した。

俺の言葉が、そんなにアスナを追い詰めているとは思つていなかつた。

絶対に否定しなきやならない。『閃光のアスナ』も『結城明日奈』も同じ存在だと、アスナに気付かせてあげなきやいけない。

どうしたら良い……どうすれば……

一キリト君……結婚したときに、相手の人の隠れた一面に気づいたとき、君ならどう思う？

ふと、そんな言葉が浮かんできた。アスナから聞かれた質問……アレはいつだつたか……

俺は、どう答えたんだつけ……  
ああ、そうだつた。俺は……

「なあ、アスナ。ヨルコさんの事、覚えてるか？」

「え？」

突然の俺の言葉に戸惑うアスナ。何故ここでその名前が出てくるのか… 戸惑いながらも答えるアスナ。

「もちろん覚えてるよ。私が、君に恋をしてるって自覚した日にあつた事件で出会った人だもん。」

そう言えば、あの時か…。

アスナを昼寝に誘つたの。

「あの事件が解決した後、アスナが俺に聞いた事があつただろ?」

「えつと… あの時は、グリムロックさんが、奥さんの隠れた一面を見て… 許せなくてグリセルダさんを… だからキリト君に、キリト君ならどうするか聞いたんだよね。相手の隠れた一面に気付いたとき、キリト君ならどうするか…。あつ!」

そこまで言つて、アスナは思い出したのだろう。

俺が言つた言葉を。別にこの事を予想して答えた訛じやない。なにせ、あの時は俺がアスナと付き合う事になるなんて、思つてなかつたしな。

だからこそ、アスナに届く。

アスナは、涙を浮かべながら笑つた。

「例え、アスナの弱い一面を見ても、俺はラツキーだつたつて思うよ。その一面も、きつと好きになるから…」

アスナは、俺の胸に顔を埋めて力一杯抱き締めてきた。

俺も、しつかりと受け止める。

「キリト君。私は、キリト君を好きになつて良かつた。愛しています。これまでも。これからも。」

「俺もだよ。アスナ。」

それについても、京子さんか？」

話を聞く限り、京子さんがアスナの不幸を願つていたとは思えない。

ただ、京子さんはアスナ自身を見ていない。

自分の考えた幸せをアスナに押し付けていたんだろう。

それが、お互いをすれ違わせたんだろうな。

俺は、アスナを幸せにしたい。

だからこそ、出来るなら仲直りさせてやりたいな。

「決めたよ、アスナ。俺の願い。それは……」

俺は、自分の考えをアスナに伝えた。

そうだ、俺の願いは……

「エリス様。俺は、俺と、俺が認めた人を俺の世界に行き来させる事が出来る能力が欲しいです。」

## アクリアの提案

「エリス様。俺は、俺と、俺が認めた人を、俺の世界に行き来させる事が出来る事が欲しいです。」

俺は、女神エリスに自分の願いを告げた。

だが、それを聞いたエリス様は、困った表情になつた。

そして、少し考えたあと結論を俺に話した。

「ごめんなさい、キリトさん。どんな願いでも叶えると言いましたが、キリトさんの願いを叶えるのは、かなり難しいです。少なくとも年単位で時間が掛かると思います。」「理由を聞いても良いですか？」

「はい。世界間の移動と言うのは、あなた方が考えるより、遥かに大変なことなんです。まず、大前提として、その世界の物質を異世界に持っていく事は出来ません。それは神々による規定によって定められているからです。」

「でも、俺たちはこうしてここにいますよ？」

エリス様の言い分通りなら、俺たちがここにいる事 자체がおかしい事になる。

「キリトさん。その身体は、本当に元の世界の貴方の身体ですか？」

「あつ!?

俺は、その言葉ですぐに理解した。

「お察しの通りです。あなた達… 所謂『転生者』と呼ばれる人たちが、何故この世界の理に順応できるのか。何故、元の世界で活動を止めてしまった身体をこの世界で使っているのか。答えは簡単です。あなた達の身体が、この世界の物質を使って構成されていますから…」

なるほど、その説明は納得の行くものだ。

「これまで、私はカズマさんの蘇生を何度も許可しました。本来は、これも規定違反なのですが、これは私が管轄しているこの世界のみでの事なので、ちょっと大変でしたが、なんとかなりました。ですが、世界間の移動となると、当然向こうの世界に干渉することになります。」

「向こうに行つて… また戻つてくる。これを行うには、前もつてかなりの下準備を行い、更に制限時間も設ける必要があるでしょう。恐らくは数年に一回… それも一日のみとか、そんな感じになると思います。それでも構いませんか?」

俺は、その言葉に悩んだ。

そこまで、難しい願いだとは思つていなかつたからだ。

アスナの方を見ると、アスナはただ微笑んでいた。  
キリト君の思った通りにしていいよ。

アスナは目でそう語つていた。

俺は…

あのとき、決めたんだ。アスナの為にも、京子さんと仲直りさせてやりたい。  
それに…俺自身家族や仲間に会いたい。

「それでも構いません。それでお願いします。」

エリス様は、一つため息を着くと

「わかりました。」

と言つて了承してくれた。

「それでは、アスナさん。アスナさんの願い事を聞きましよう。」

そう言えば、結局昨日はアスナの願い事を聞かなかつたな。

「私は、元の世界の… S A O でキリト君と暮らした家が欲しいです。」

その言葉を聞いた俺は、耳を疑つた。

折角の願い事を、そんなものに使つて良いものか…

そう言おうと思つたが、アスナの真剣な目を見て、言うのを止めた。

そう言えば、A L O での家を再度購入したとき、アスナは嬉しさに泣いていたつけ

な。

それだけ、思つてくれていたんだ。

俺としても嬉しい。

「えーと… 本当にその願い事で良いんですか？」

エリス様が、再度確認の為にアスナに聞くが、

「はい。その願い事でお願いします。」

アスナはキッパリと告げた。

「わかりました。ですが、流石にそれだけと言うのは、私としては心苦しいので、その家に幾つか機能を追加しておきます。」

「… わかりました。」

アスナも了承した。

そのままで良いのに… とか思つてるな… きっと。

「それでは、アスナさんの願い事は、近日中に調べて叶えますね。具体的な方法は追つて報せます。そして、キリトさんの願い事ですが、実行可能になつた時にお知らせします。ですが、先程も言つた通りこれには数年程度時間がかかりますので、そのつもりでいてください。」

「それでは、皆さん… この度は本当にお疲れさまでした。」

そう言つて、エリス様は消えようとした。

その時、空気が読めないことに定評のあるアクアがエリス様を止めた。

「ちよつと待つてエリス。」

「もお、なんなんですか、アクア先輩。役目を終えて、綺麗に消えるつもりだったのに。」

⋮ さつきまでとは違つて、かなり碎けてるな。

「あのね。エリス。キリトの願い事なんだけど、私良いことを思い付いちやつたのよ。」  
どう言うことだろう？

「おい、アクア。頭の弱い子のお前が考えつく事なんて、エリス⋮ 様なら考えついてるに決まってるだろ。ここは大人しくしておけ。」

カズマが、アクアを止めようとしている。

まあ、これまでの言動見てればそうするよなあ⋮

「うるさいわねえ、まずは私の考え方を聞いてから否定してくれる？」

構わず続けるアクア。

「ねえ。エリス。キリトの願い事の一番ネックになつてる部分つて、キリト達の身体そのものを移動させる事でしよう？」

「そうです。世界間の物質の移動は、天界規定でかなり高い禁止事項になりますから。」

その言葉に、ニヤリと笑うアクア。

「フフーン。私の管轄していた日本にはね、フルダイブ技術と言うものがあつたのよ。」「フルダイブ？先輩。それはどんなものなんですか？」

「詳しく述べよくわからないんだけど、身体を残して、仮想の身体に自分の身体の感覚をして、仮想の世界で遊びましようって技術よ？」

「うーん……大まかには合っているような気もするけど……」

「補足しても良いですか？エリス様。」

そう言つて、俺は自分が知るフルダイブ技術について、エリス様に伝えた。

「はあ……そんな技術があるんですねえ。」

エリス様は、異世界の技術に感心していた。

「それでアクア。そのフルダイブ技術がキリトの願い事とどう関係していくんだ？」

カズマが続きを促す。

「だらからら、キリトの願い事のネックは、世界間の物質移動なわけでしょ？だつたら、この世界に身体を残して、フルダイブすれば、少なくともキリト達が遊んでた仮想世界には行けるんじやない？って事よ。キリトが元の世界に行きたいのは、友人や家族に会いたいからなんでしょう？だつたら、少なくとも仮想世界の仲間には、これで会いに行けると思うんだけど……」

皆、衝撃を受けていた。

特に、カズマ達の動搖は凄まじかった。

「ど、ど、ど… どうしたんだ!? アクア。まとも過ぎる提案をするなんて熱があるんじゃないか?」

「だれか、アクアに回復魔法を… 回復魔法をお願いします。」

「ふ、二人とも落ち着け。アレだ… その… エリス様… 世界は大丈夫なのでしょうか。」

「うわあーん! 折角良いこと言つたのに、皆がいじめる…」

誰がどの発言をしたかは敢えて言わない。

とは言え、このままだと收拾がつかないので…

「えつと… エリス様。今のアクアの提案はどうなんですか?」

エリス様は、少し考えた後…

「イケるかもしません。」

「キリトさん、一月ほど時間を貰えませんか? 日本のフルダイブ技術について、詳しく調べてみます。」

俺は、一も二もなく頷いた。本当なら数年の時間がかかることなのだ。  
それが、一月で仮想世界限定とは言え行けるかも知れないのだ。

断る理由がない。

「それでは皆さん。今度こそ……お疲れさまでした。皆さんの功績は後々まで語られる事でしよう。それでは失礼します。」

エリス様は、今度こそ姿を消した。

「アスナ……」

「キリト君……」

リズ達に会えるかも知れない。

それが嬉しくて、俺たちは互いを見つめながら静かに笑いあつた。

カズマ達は、まだ騒いでいた……

# ああ、愛しのマイホーム

私たちが、魔王を討伐してから一週間が経つた。  
エリス様からは、まだ連絡は来ていない。

でも、私たちもそれどころじゃなかつたから、丁度良かつたかもしねない。  
まず、私たちの二つ名がグレードアップした。

キリト君は「黒の勇者」…

私は「閃光の姫騎士」…

ゆんゆんは「天魔の大魔導師」

サチは「救世の聖女」と呼ばれる様になつていた。

何故かカズマ達には二つ名は付いて来ないんだよね。

カズマ達だつて、魔王討伐に貢献したパーティーなのに。

キリト君とゆんゆん、サチはともかく、私は姫でも騎士でも無いんだけど…

私たちは、魔王を討伐したパーティーとして、各国から呼び出しを受けては晩餐会に

出席させられていた。

正直、私としては遠慮したいところなんだよね。

そう言う所に出席すると、どうしても結城本家に顔を出す時を思い出して、嫌な気分になるし……

それに、そう言う場に出ると必ずと言つて良いほど、求婚をしてくるお貴族様がいて、本当に勘弁して欲しい……

昨日なんて、王子様自ら、結婚を申し出てきて、ウンザリだつた。

まあ、その度にキリト君が間に入つてくれて、

「アスナは俺のだ。」

つて格好良く言つてくれるのを見るのは嬉しいんだけど……

そう言うキリト君にも縁談の話が絶えない。

この国のお姫様のアイリス様も候補に挙がつているらしい。

でも、アイリス様はカズマに好意があるようだから、心配は無いと思う……

どの国も、魔王を討伐した私たちとの繋がりが欲しいんだろうつてキリト君は言つてたけど、それでも良い気はしない。

今日は、流石にオフにしてもらつているから良いけど、明日からはまた予定がビツチリ入つていて。

「ハア……」

私は、今日何度もため息を着いた。

キリト君が苦笑している。

いけない。折角今日は一日オフにしてもらつたんだから、今は気持ちを切り換えて楽しまないとね。

ちなみに、ゆんゆんは実家に戻つていて今はいない。

サチも、今日はレジスタンス活動をしていた仲間の所に行つていて、今日はいない。今日は、私たち家族水入らずで過ごせる。

そう考えて、キリト君に話しかけようとすると、メールの通知音が鳴つた。

この世界に来て、システムウインドウでメールのやり取りが出来るのはキリト君と私がだけ。

キリト君は目の前にいるし、メールを出す必要はない。

一体どうなつているんだろう……

そう思いながらウインドウを操作すると、エリス様からのメッセージだつた。

アスナさんへ。

連絡が遅れてごめんなさい。貴方の願い事を叶える為に、一応貴方の希望したもののが確認作業をしていました。

なにしろ、向こうの世界の物……それも現実世界にないものなので、こっちの世界で再現する前に、色々不具合が無いか検証する必要があつたのです。

ですが、検証は全て終わりました。必要な機能も付与できましたので、貴方のアイテムウインドウに贈ります。

それにしても、このシステムウインドウって便利ですね。  
この世界でも使える様にしたいです。

エリス様は、かなり慎重な方のようね。

これがアクアだつたら、

「はい。用意したわよ。内装とかは適当に自分達で揃えてね。ところで土地とかどうするの?」

とか言つて終わりそう……

…………この世界の担当女神がエリス様で良かつたわ……

「アスナ? 誰からのメールだつた?」

「あ、うん。エリス様からだよ。ホームの用意が出来たつて。」

「本当ですか? また、あの家にパパとママと暮らせるんですね。」

ユイちゃんが、真っ先に飛び付いてきた。

「そつか。そう言えば機能を追加するとか言つてたけど、その辺は書いてあるか?」

キリト君の言葉に、私はメールを読み進める。

ホームに関しては、ALOの方を再現することになるようだ。

内装も、そのままにしてあるとの事なので、家具に関しては当面買い揃える必要もないかな。

それから、追加した機能について、

1. トイレに関して。

そ、そうだつた… そう言えば、VRだと排泄をする事が無いから、ホームにトイレは無いんだつた…

エリス様、ありがとうございます。

2. お風呂について

この世界でも有数の温泉がある所から、一部空間を曲げて、ホームのお風呂に注がれるそうだ。

これで毎日が温泉三昧ですね… by エリス

お風呂好きの私としては嬉しい限りだ。

ありがとうございます。

3. 破壊不能

これは、あれね。ALOの破壊不能オブジェクト機能をそのまま使つたつて事だよね。

つまり、この家は誰にも壊せないし劣化もしない。

#### 4. 認証機能

これもALOにあるものだ。所有者以外の人間は、所有者が登録した人間、所有者が招いた人間以外はこの家に入ることは出来ないと言うもの。

防犯対策として、これ以上のものも無いだろう。

#### 5. 一番の目玉機能、ホーム収納。

私のアイテムウインドウに、ホームごと収納出来るよう調整してくれたらしい。  
 ……え？ つまりこれってクエストとかで、遠出した時とかに、この家を出して泊まるれるつてこと？

とんでもなく豪華なテントになるつて事だよね。

この家の機能があれば、見張りもいらないし……

うわあ、旅事情が一変するなあ。

まあ、家のパーティにはテレポートが使えるゆんゆんがいるから、そうそう使う機会も無いかも知れないけど、次の街までまだ遠いって所で野宿する必要が無いし、お風

呂に入れて、柔らかいベッドで眠れる。

本当にありがとうございます、エリス様。

ここまで説明で、キリト君も啞然としていた。

「機能を追加するって言つてたけど、ALO の機能だけでも現実に再現すると、とんでもないな。正直、この家に逃げ込めばとりあえず、どんな危機もやり過ごせるってことだもんなあ。これ、もう家つて言うより、要塞…いや、神器だな。」

「もう、私たちの思い出の家なんだから、そんな身も蓋もない言い方しないでよね。」

「あ、ああ、悪い。」

キリト君を軽く嗜めつつ、メールの残りを見る。

「あれ？まだ機能があるみたい…？」

私は、残りの文章を読んで、顔を真っ赤にして固まつた…

「アスナ？どうかしたのか？」

不振に思つたキリト君が、私のメールを読もうとしたので、慌てて止めると、残りの機能を告げた。

「な、な、な、何でも無いよ… 6つ目は、拡張機能だつて。家の大きさの三倍位まで中の空間を広げて部屋を追加出来るんだつて。」

「へえ、それは凄いな。」

キリト君は、多少怪しんでいたけど、なんとか話に食いついてくれた。

良かつた…

これで、いつでも家族を増やせますよ。

頑張つて下さいね。アスナさん。

… 気を回しそぎです。エリス様。

でも… ありがとうございます。

私たちは、早速この家を出せるだけの広さの土地を購入した。資金は、魔王討伐で得た報酬で、正直使いきれない位あるから見晴らしのいい土地を一括購入した。

私は、キリト君を見る。キリト君も私を見て頷く。

私は、キリト君の手を握りながらシステムウインドウを操作し、ホームをオブジェクト化した。

一瞬辺りが光に包まれると、次の瞬間には私たちの思い出の、あの家がそこにあつた。思えば、この二年以上の間、この世界で得た資金で家を買おうとすれば、その機会は何度もあつた。

最初はそれを、ホームを持つことを目標にしてた位だし。

それでも私は、いざその時になると、なんとなく乗り気になれず、結局今日まで宿暮らしだった。

その理由が、今はつきりわかつた。

私は、無意識にこの家を求めていたんだ。

キリト君と結婚して暮らした二週間の思い出は、それだけ私にとつて大きいものだつた……。

「アスナ……」

キリト君の指が私の頬に触れる。

私は、いつの間にか泣いていたようだ。

「ママ……」

ユイちゃんも、人間形態をとつて私を待つている。

私は、手の中にある鍵を使い、家の扉を開く。

そして、三人で手を繋いで同時に中に入つた。

「「ただいま。」」

私たちは、帰ってきたのだ。私たちの家に。

# リンクスタート！

俺たちは、念願のマイホームを手に入れた。

正直、予想を遥かに超える超高性能アイテム（あれをただの家と言つてしまつて良いものか…）と化していたが…

とは言え、内装も外装も俺たちが使つていた通りに再現されたこのログハウス…。約二年を超える、この世界での生活で再び手に入れた、俺たちの帰るべき場所。

初日は、アスナとユイと三人で一つのベッドで眠つた。

そう言えど、この世界でアスナと再会した日もそうしたつけな…

さて、ホームを手に入れたとは言え、俺たちの「お呼ばれ」生活は続いていた。まあ、理解はできる。

魔王を討伐するほどの戦力を持つた俺たちと、なんとか繋ぎを取りたいのだろう。中には、アスナ達の外見に惚れて、本気で婚姻関係を望む輩もいたが…。

特に、某国の第一王子は本当に面倒なヤツだつた。

アスナに一目惚れしたらしい、某王子はあの手この手を使ってアスナを誘つた。時には、金を。時には名声を。

時には俺をこき下ろして…

あちこちに呼ばれてる俺たちのスケジュールをどうやつて知ったのか知らないが、行く先々で偶然を装つて近付いてきては撃沈していた。

最終的に、ヤツは権力と言う名の暴力に訴えようとした。

「アスナ。いい加減に私のものとなるのだ。私のもとに来れば、お前を戦わせるような酷いことはさせん。一生幸せにしようでは無いか。」

「何度も言っていますが、私は、彼といるだけで十分幸せです。貴方のもとに行く気は毛頭ありません。」

アスナの何度目かな、断りの言葉。

流石に、何度も断られているから噂になつていたのか、周りの人間から失笑がもれた。それに、プライドを傷つけられた某王子は激昂し、

「今、笑つたヤツは誰だ？ 私を誰か、わかつての行動だろうな!!」

大声で怒鳴り散らし、話を続ける。

「アスナよ、そこまで私を拒むなら、私にも考えがあるぞ？ お前の住む街を我が国の騎士を使つて攻めても良いのだぞ？」

その言葉に周りの人間達は一斉にざわめきだした。

そりやあそだ。一人の女性を手に入れる為に戦争を起こすと公言したのだから…

俺は、流石にただ見ている訳には行かず、二人の間に割って入った。

「いい加減にしたらどうですか？王子。今の発言は忘れます。だからもうお帰りください。」

「キリト君。」

俺の登場で、アスナは喜びの表情で俺のもとに来ると、俺の腕に自分の手を添えた。

「貴様… 私に向かつて良くほざいたな。自分の発言の意味がわかつているのか？」

「それはこちらの台詞ですよ。王子こそ、俺たちを敵に回すと言うことがどういうことか、本当に理解されていますか？」

「どういう意味だ。」

この王子は本当にわかつていないうだ。

まあ、わかっていたら、さつきのような発言をするわけもないか。

「王子、俺たちは何者ですか？」

その質問に、王子は意味がわからなかつたのか、疑問の表情を浮かべる。

「質問を変えましょ。今日の集まりは、なんの為に開かれたのです？」

「それは、魔王を討伐したお前達の祝勝会を…」

そこまで言つて、ようやく気づいたようだ。

「そう、俺たちは魔王から世界を救つた勇者と周りは呼んでいますね。」

俺は話を続ける。

「さて、王子。ただでさえ魔王を討伐する力を持つた俺たち。それに、世界を救つたと言ふことで、俺たちの名声は世界中に鳴り響いている。だからこそ、こうしてあちこちから呼ばれているわけだしな。そんな俺たちに、宣戦布告するつて事は、世界を相手に戦争をしますと宣言しているようなものですよ？」

「ち、違う… 私は、ただ…」

既に、この王子を見る周りの目は呆れと怒りの物になつていた。

自分の発言を理解できない頭の悪さに対する呆れ。

平和になつたことを喜ぶこの場で、私欲のために戦争をすると公言したことに対する怒り。

その周りの目に耐えられなかつたようで、王子は護衛を引き連れて退散していく。  
結局、この王子は国本に帰るが、この話を知つた国王の逆鱗に触れ、廢嫡されたようだ。

まあ、あんな人間がその国の王になつたら国民は大変だろうから良かつたのだろう。  
あれから二週間。ようやく俺たちの生活も落ち着いてきた。

各国への顔見せも大体終わり、ようやく一段落就いた。

そして、魔王討伐から実に一月以上経つたころ、家で寛いでいた俺たちの前に、エリ

ス様が再び降臨した。

「お久し振りですね。キリトさん、アスナさん、ユイさんも。」

そう言つて微笑むエリス様。

「エリス様。この家、本当にありがとうございます。エリス様のおかげで、こうして快適に過ごさせて頂いています。」

アスナが、エリス様にお礼を言う。

「お礼は、不要ですよ。そもそも、この家は貴方の魔王討伐と言う偉業の対価として出した報酬です。快適に過ごせているなら、私としても嬉しいですよ。」

本当に良い女神（ひと）だな。

「それで、エリス様。今日はどういった要件で？もしかして…」

エリス様は頷くと、

「はい。キリトさんの願い事を叶える為にやつてきました。やはり、貴方の世界を渡る能力を授けるのは難しいです。こつちは、あと数年… 時間を下さい。それで、アクア先輩の提案の方なんですが… この一月、いろいろ調べてようやく形になりましたので、改めてスキルを授けに来ました。」

そうか… ようやく向こうに行けるようになる。

俺は、喜びにうち震えた。

「それでは、キリトさん。前に。」

俺は、言われた通り、エリス様の前に出る。

エリス様が、俺の額に手を翳すと俺の全身が光に包まれた。

「はい。これで終了です。」

「え？ これで終わりなんですか？」

なんか偉くあつさり終わつたな。

「はい。スキルの付与は終わりです。それでは次にスキルの説明を始めます。まずはスキル名を言つてください。スキル名は『VR』です。」

俺は、言われた通りにする。

そうすると、俺の手にアミュスマフィアが現れた。電気コードこそ付いていないが、間違いない。

「エリス様。これは？」

「貴方の考へておられるものと同じですよ。それを装着して『リンクスタート』と言う事で貴方はALOの世界へ、フルダイブすることが出来ます。アミュスマフィアは貴方のスキルで最大10個まで呼び出せますから、一度に行けるのは最大で10人までとなります。」「それから、ここからが肝心なのですが、例え物質を持っていかないとしても、世界を渡るのはかなりのエネルギーを使います。そのスキルを使い、ALOにダイブできるの

は、一週間に一度。それも24時間のみとさせて頂きます。それを大きく超えると、強制的にログアウトして、二度とそのスキルを発動出来なくなるので気を付けて下さい。」「わかりました。」

「それでは三人とも、これでとりあえずの役目は終わりです。キリトさんの本当の願い事を叶える為に、私も頑張りますので、皆さんをお元気で。それでは……」

そう言つて、エリス様は姿を消した。

俺は、自分の手元にあるアミ Yusfia を一度見たあと、アスナ達の方を見る。二人とも、期待に満ちた顔をしていた。

「キリト君。早く試してみようよ。」

「私も、早くフルダイブと言うものを経験してみたいです。」

そう言えば、ユイは肉体を持つて、フルダイブするのは初めてになるのか。

俺は、二人に頷くと、

スキルでアミ Yusfia を更にを二つ出し、アスナとユイに手渡した。

この家にいる限り、犯罪に巻き込まれることはまず無い。

三人同時にダイブしても問題ないだろう。

俺たちはアスナの提案で三人で同じベッドに横になるとアミ Yusfia を装着した。

そして手を繋ぎ合いながら、俺たちにとつては久しぶりの、ユイにとつては初めての

言葉を紡ぎ出す。

「「リンクスタート」」

俺たちは、あの世界に再び戻ったのだった。

## 再び妖精の世界へ

「「リンクスター！」」

そう言つて俺たちは戻つてきた。

再びあの世界へ…

目を開けた俺は、まだ家の中にいることに一瞬失敗したのかと思つた。  
「キリト君、外を見て。」

だが、アスナの声に窓の外を見ると、そこに慣れ親しんだアクセルの街並みは無く、思  
い出にあるアインクラッド二十二層の森と湖が広がつていた。

俺たちは、互いに身を寄せて、その景色を楽しんだ。

ああ、やつと帰つてこれたんだな…

まだ、現実世界に行けるようになつた訳じやない。

それでも、俺たちはこの世界に戻つて来れたんだ。

「あ、キリト君。姿がスプリガンのアバターに変わつてるよ？」

言われて、気づいた。

「アスナもウンディーネのアバターになつてるな。この家もそうだけど、ALOの俺た

ちのアカウントをそのまま使えるつて事なのか?」

俺は今の状況について、ユイに探つてもらう事にした。

「えつと… ちょっと待つてくださいね。調べてみます。」

ユイの検索作業を待つこと数分…。

「間違いないです。これはALOでのパパとママのアカウントです。」「やつぱりか。アスナ、ステータスとかはどうなつてる?」

そう言つて、俺も自分のステータスを確認する。

ん?ステータスは… 俺の記憶と一致しないな。

と言うか、これつて魔王を討伐したときの俺のステータスだよな。

職業ソードマスターつてあるし、ALOに職業なんてなかつたはず。

「アスナ?」

アスナを見ると、向こうも同じ状態のようだつた。

「これつて不正アクセス扱いで、マズイ事になるんじやないか?」

俺は、冷や汗を書きながら呟く。

「いえ、それは大丈夫だと思います。パパ達のアバターは確かにパパ達本来のアカウントを使用していますが、ログイン状態は確認されていません。あくまで、そのアバターは異世界からのアクセスなので、システムが拾えていないんだと思います。ですから、

例え不正を確認されても、パパ達を特定することはできません。簡単に言えば、このゲームが存在している限りにおいて、パパ達のデータに介入することはGMにも不可能でしょう。」

「そ、そうなのか。」

うーむ… いくらなんでもチート過ぎるな…

真剣にこのゲームをやっている皆に失礼だよなあ。

とは言え、一週間に一日しかログイン出来ない俺たちは、この世界でのスキル上げもままならないから仕方ないのかも知れないけど…

「とりあえず、あまり目立たないようにしよう。いくらGMに特定されないつて言つても、噂が立つといろいろ動きにくくなるし、この世界に存在しないスキルは、なるべく使わないようにしよう。」

二刀流スキルを見ながら、アスナ達にも同意を求める。

「わかったよ。」

「はい、パパ。」

二人の同意を得て、改めてシステムウインドウを操作する。

アイテムは… 装備してたエリュシデータとダークリパルサー、それにコートオブミッドナイトだけしかない。

やっぱり、エクスカリバーは無いかあ。

とりあえず、コートと二本の剣を装備する。

アスナも血盟騎士団の服とランベントライトを装備した。

「アスナ。フレンドリストはどうなってる?」

そう言いながら、自分のリストを確認したが、そこにはアスナしか登録されていなかつた。

アスナを見たが、首を横に振る。

そうか…フレンドはリセットされているんだな。

「フレンドリストが残つてればメールを送ることもできたんだけどな。」

「うん。でも死んだはずの人物からメールが来ても気味が悪がられてスルーされちゃうんじやないかな?」

「あ…それもそうだな。」

そうだった。この世界に来ることばかりに考えが行つてたけど、俺もアスナも、この世界じや死んだはずの人間だ。例え会つても、信じてもらえるかどうか…

「今、考へても仕方ないよ。とりあえず、今はここへ戻つて来れた事を喜ぼうよ。」

アスナの言葉に思考を切り替えた俺は、

「そうだな…よし、とりあえず外に出るか。久しぶりに二十二層を見て回ろう。」

そう言つて、外へ行くことを提案した。

その提案に、アスナも同意するが、

「あ、それならお弁当持つてピクニックしよう……と思つたけど、お金もアイテムも無いんじや、お弁当作れないや……」

あからさまにガツカリするアスナ。

「少し回つたらモンスター狩りでもするか。時間制限があるからできる範囲でだけど。」  
そう言つてアスナを慰める。

「そうだね。」

アスナの返事を受け改めて告げる。

「よし、じゃあ出発しよう。」

懐かしい22層の景色は、俺たちの思い出と変わらずそこにあつた。

魚釣りをした湖も、アスナと散歩した道も、そしてユイと出会つた森も。

俺たちは思い出話に花を咲かせた。

一通り散歩を楽しんだ俺たちは、モンスター狩りにアインクラッドを出て、久しぶりの空中散歩を楽しみながら、モンスターがPOPする場所を目指した。

その久しぶりの感覚に、気分が高揚した俺は、アスナに勝負を持ち掛ける。

「なあ、アスナ。久しぶりに空を飛ぶんだし、折角だから競争しようか。ゴールはあの遠

くにある岩山な。」

「え？ そんなのキリト君に勝てるわけないよ。キリト君と勝負になるのなんてリーフアちゃん位なんだから。」

「まあ、そう言うなって。遊びだよ、遊び。それじゃ行くぞ。よーいドン。」

そう言つて、アスナの返事も聞かずに俺は飛び出した。

「あく、ちよつとキリト君ずるいよー。」

後ろでアスナが抗議の声を挙げる。

「ハハハ。早く来ないと置いてくぞー。」

その声を聞きながらも、俺はスピードを上げていった。

「パパ。今のは流石にズルいと思ひますよ。後で、ママに謝つてください。」

ポケットからユイも抗議してきた。

「はい。ごめんなさい。」

愛娘の説教に、意氣消沈する。

ゴールまでもう少しと言つところで、ユイが何かに気付き、声をかけてきた。

「パパ。向こうを見てください。プレイヤー同士が争つてゐるようです。」

言われた方向を見ると、女性プレイヤーの二人組がサラマンダーの男性プレイヤー10名位の集団に囲まれていた。

「プレイヤー狩りか？でも、あの女性プレイヤーの装備を見る限り、まだ初心者みたいだけど…まさか初心者狩りか？」

いや、女性プレイヤーを襲つてゐる所を見ると、もつと悪質なことをしようとしてる可能性もあるな。

脅してリアルの情報を聞き出すとか、マヒ毒を使つて、R指定のような事をしようとしてるとか。

どうせ、ろくなことじや無さそうだ。

そう考えた俺は腹を決めた。

「ユイ。助けに行くぞ。」

「パパならそう言ううと思つてました。」

そう言つて微笑むユイに一つ頷くと、俺はプレイヤー同士が争つてゐる現場に猛スピードで突つ込んでいった。

ドーンと言う大きな音と共に、俺はその場に乱入した。

結論から言うと着地に失敗したのだが…

久しぶりの飛行だつたのを忘れて全力飛行してしまい、勢い殺せず突つ込み過ぎたのだ。

「つてててて。うーん、失敗、失敗。」

愛想笑いを浮かべてお茶を濁そうとしたが、周りの人たちは俺の突然の乱入に驚き固まっていた。

仕方ない。このまま進めようか。

「やあ、サラマンダーの人たち。男が大勢で二人の女の子を襲うなんて、ちょっと格好悪いんじゃないか？」

「うるさい。突然乱入してきやがつて。何様だ、てめえ。」

サラマンダーの一人が激昂して剣を片手に突っ込んで来る。

俺は、エリュシデータを抜くと男の剣をいなし、一刀のもとに切り伏せる。  
そいつはあつさりHPバーをゼロにして、命の残り火となつた。もうしばらくすると、そのまま死亡となりデスペナルティを受ける事となる。

「あんたらじや、俺には勝てないよ。今すぐ解散するなら良し。そうでないなら…：全員切り伏せさせてもらうぜ？」

俺は、そう言って男達を威嚇した。

# 私の王子様

私の名前はセシル。

もちろん、本名ではなくALOにおけるアバターの名前だけど。

私は、現実では高校一年生の女の子。

今まで勉強ばかりしてきた所謂ガリ勉女子だつたんだけど、高校に入学して友達になつた子に誘われて、初めてゲームと言うものを体験した。

初めて触れるゲーム、それもフルダイブ型ゲームに私は、魅了された。

そこは、現実とはかけ離れた異世界。そして、そこでは私も空を飛ぶことのできる妖精。

キヤラクターエディットでは、時間を掛けて、かなり可愛いアバターに仕上がった。

現実じやあ、平凡な私もここでは可愛い女の子になれ。

まあ、友達には笑われたけどね。

そう言うその子も、現実より可愛く作つてたから、私を笑う資格は無いとも思うの。

この一ヶ月の間、それはもうドッププリとこの世界に浸かっていた。

流石に、ゲームをしそうだつてお母さんに怒られてからは、時間を制限されたんだけど

どね。

今日も友達のリリーと一緒に、初心者向けのクエストを消化して、帰ろうとした時にそれは起こつた。

私たちの周りを、いつの間にか複数のサラマンダーの男性達が囮んでいたのだ。

男達は、下卑た笑いを浮かべていた。

リリーは、気持ち悪がつて一步下がる。

私も怖かつたけど、勇気を出して訪ねた。

「私たちに何か用ですか？用がないなら、どいてください。」

「おつ、なかなか勇ましいね。君。」

男たちの内の一人がニヤニヤしながら言つてくる。

「そんなことは良いです。用件はなんですか？」

「なあに、そんなに警戒しなくても大丈夫だよ。君たちの装備を見る限り、君たち初心者なんだろう？女の子の二人組、しかも初心者じや危ないだろう？親切な俺たちがちよつと指導してあげようと思つてね。」

「結構です。私たちは私たちのペースでやりますから。」

私は、そんな話を信じる気は無かつた。

この人たちは、絶対下心を持つて近づいて来ただんだ。

そもそも、こんな人数で周りを囲んでおいて、指導も何も無いだろう。

これは、私たちを逃がさない為に囲っているのだろう。

「そんなツレナイ事言うなつて。折角、親切心で言つてるんだぜ？俺たちがみつちり教えてやるからよ。手取り足取りな。」

そう言いながら、包囲を狭めてくる男達。

どうしよう。力で来られたら、私たちなんてあつという間に組み伏せられてしまう。そうだ。確かにセクハラ行為は禁止事項のハズ。

「それ以上近づいたら、セクハラでGMコールしますよ。」

私は、そう言って男達を牽制した。

でも、その言葉は男達を刺激してしまった。

「ちつ、面倒だな。」

男は舌打ちすると、短剣を取り出した。

そして、気がつくと私の前にいて、その短剣を私に突き立てる。

あつ・：と思つた時には私は、倒れていた。

ステータスにはマヒの状態異常のマークが出ていた。

「不思議そだな。この短剣はな、攻撃力こそ皆無なんだがマヒ攻撃を出せる対人武器としてはかなりの一品なんだわ。大人しくしてたらこんなことしなかつたんだが・：」

仕方ないよな。」

隣を見ると、リリーも同じように倒れていた。

男たちが、私たちに何をしようとしてるのかわからないけど、良いことは待つていな  
いだろう。

誰か助けて…：

私は、目をつぶった。

その時、

ドーンっと言う大きな音がした。

目を開けると、全身、黒ずくめの服を着たスプリガンの見知らぬ男性が地面に倒れて  
いた。どうやら空から着地しようとして失敗したみたい。

「つててててて。うーん、失敗、失敗。」

そう言つて、場違いに苦笑いを浮かべるその人。

サラマンダーの男達は、突然の乱入者に、驚いて固まつていた。

「やあ、サラマンダーの人たち。男が大勢で二人の女の子を襲うなんて、ちょっと格好悪  
いんじゃないか?」

そんな男達には構わらず、スプリガンの男性は飄々とした態度を崩さずに、彼らを挑発  
した。

「うるさい。突然乱入してきやがつて。何様だ、てめえ。」

その言葉に、男達の内の一人が激昂し、スプリガンの男性に斬りかかる。

でも、それはあつさりといつの間にか抜いていた男性の黒い刀身の剣によつていなされ、逆に斬られた男は、そのままＨＰをゼロにした。

凄い……

素直にそう思つた。今の動きにしたつて殆ど見えないほどの動きだつたのだ。

「あんたらじや、俺には勝てないよ。今すぐ解散するなら良し。そうでないなら……全員切り伏せさせてもらうぜ？」

男性は、さらに男達を挑発した。

格好いい……こんなシチュエーションを体験できるなんて。

今の私つて物語のヒロインみたいだよね。

私の危機に、知らない男性が助けに入る。

そして、知り合つた私たちは恋に落ちてそのまま……

キヤー。どうしよう。

ゲームの中の出来事だけど、憧れるわ。

私は、今の状況をすっかり忘れてトリップしていたと思う。

「お、おい。こいつ結構やるぞ。」

「どうする？」

男たちは、男性の強さに動搖して及び腰になつてゐるようだ。  
 「何をビビつてやがる。幾らあいつが強くても、相手は一人。この人数で相手にすれば  
 どうつてことないだろう。」

男たちのリーダーとおぼしき人物がそう、捲し立てる。

すると、

ドーン：

また、新たな乱入者が現れた。

「キーリートーくーん」

新たに乱入してきたのはアバターとしても、かなり可愛い顔をしたウンディーネの女の子だった。

そんな彼女は、どうやらスプリガノの男性に、怒つてゐるようだ。

「酷いよ、キリト君。私を置いていくし、ゴールに着いたのにいないし。私、行つた道を戻つて探す羽目になつたんだからね。」

「ああ、アスナ： 悪い。ちよつとトラブルを見かけてさ、助けに入つてたんだよ。」

「全く： 仕方ないなあ：」

そう言つて苦笑するそのアスナと言う女性。

それは、互いに信頼しあつた恋人の会話のようだつた。

：：どうやら、私の恋はほんの数分で終わりを告げたようだ。隣を見ると、リリーも微妙な顔をしていた。

ああ、きっとリリーも、同じこと考えてたんだろうなあ。

私は、その表情を見て悟つてしまつた。

まあ、こんなシチュエーションだもんね。

女の子なら、誰だつて憧れるだろう。

その相手に恋人さえいなければ：：

「さて：：：これで二人だな。」

キリトと呼ばれた男性は、男達にニヤリと笑いながら告げる。

「はつ。一人が二人になつたところで何も変わらんさ。おい、お前ら。獲物が増えたんだ、喜びやがれ。」

男たちのリーダーはそう言つて、武器を取り出す。

男たちもそれに続いた。

「アスナ。半分任せた。」

「了解。」

二人は、これから戦闘になると言うのに、全く氣負つた様子もなく、男達に近寄つ

た：

二人の強さは圧倒的だつた。

男達は10人位いたのに、その数をどんどんと減らしていく。

男達の攻撃はまるで当たる様子はなく、二人の攻撃であつさりと消えていった。気がつけば最後の一人、リーダー格の男のみとなつていた。

「お、お前ら一体何者なんだ…」

男は、もう意氣消沈していた。

二人に勝てないのは解りきつているからだ。

「通りすがりの、ただのプレイヤーだよ。」

うーん… この人はいちいち言うことが格好いいなあ。

なんだろう。普通の人人が言つたら気障な台詞つて笑うんだけど、この人が言うと、不思議とハマるんだよね。

やつぱりアレかな？恋は盲目つてやつなんだろうか？

「そ、そんなハズ無え。いや、お前の格好… 全身黒ずくめ… 盾無しの片手剣…」

男は、ぶつぶつと呟いていた…

そして、何か思い当たる事があつたのか、キリトさんに質問をした。

「お前… あの女…『黒の絶剣士』の知り合いか？」

黒の絶剣士？

「黒の絶剣士？いや、聞いた事もないな。」

キリトさんは知らないようだ。

「嘘を言うな、それだけの強さなんだ。ALOを長くやつてるトップクラスの廃人プレイヤーなんだろう？この世界最強のプレイヤーと言われる黒の絶剣士を知らないハズが無いだろう？」

そんな人がいるのかあ‥‥

女人で最強なんて凄いなあ‥‥

「へえ、そんなヤツが出てきてるのか。残念ながら俺たちがこのゲームをやるのは2年半ぶり位でな、その時にそんなプレイヤーは聞かなかつたな。まあ『絶剣』って呼ばれてたヤツなら知ってるが‥‥」

キリトさんはそう答えた。

キリトさんもアスナさんも、ブランクあつてあの強さなんだ‥‥凄いなあ。

「嘘を付くな。そんな強さで二年ぶりだと？俺は信じないぞ！」

「別に信じなくても良いんだけどな‥‥とりあえず、そろそろ終わりにしよう。」

そう言つて、キリトさんは男を倒した。

「お疲れ、アスナ。」

「キリト君もね。まあ、あの程度の人たちならキリト君だけで倒せただろうけどね。」

「そんな事無いさ。助かつたよ。」

「どういたしまして。」

二人はお互いを労うと、私たちに声をかけてきた。

「君たち、大丈夫だつたか？立てる？」

私は、自分の体を動かそうとしてみた。

いつの間にかマヒは消えていて、すんなり立つことができた。

「大丈夫…みたいで。あの…助けてくれてありがとうございます。」

「ありがとうございました。」

私たちは、二人にお礼を言つた。

「いや、無事で良かったよ。ああ言うプレイヤーは、どんなオンラインゲームにも一定数いる。残念だけどね。だから君たちも気を付けた方がいい。初心者一人だけでパーティを組むんじゃなくて、中堅からベテランの人と行動した方が良い。」

キリトさんは、私たちにアドバイスをくれた。

良い人だなあ。

この人には、恋人がいるみたいだけど、思うだけなら私の自由だよね。

だつて、私にとつてこの人は私の危機を救つてくれた王子様なんだもん。

私は、キリトさんのアドバイスを聞いて一つ思いついた事があつた。それをキリトさん伝えます。

「あの…もしよろしければ、私たちに指導してもらえませんか？」  
折角知り合えたんだもん。これで終わりじゃ勿体無い。  
命短し恋せよ乙女つてね。

# 初心者指導

「あの… もしよろしければ、私たちに指導してもらえませんか？」

私は、二人にお願いをした。

正直、自分でもびっくりする行動だと思う。

ゲームの中とはいって、初対面の人になんかこと頼むなんてね。

それも、さつきあんなことがあつたばかりなのだ。

普通なら、身内以外信用しないか、このゲームをやめるか。

そんな選択肢になると思う。

でも、私はこの世界が好きだった。このゲームを辞めたいとは思えない。

それに… キリトさんの事ももつと知りたいと思つてたし。

そんな私の考えもあって、頼んだのだけれど、キリトさんは困った顔をして答えた。

「うーん… 俺たちは事情があつて週に一度しかログインできないんだ。だからあまり、初心者を指導するのには向いてないんだよ。君たちは同じシルフみたいだし、シルフ領でベテランプレイヤーを捕まえて指導をお願いした方が良いと思うよ?」

「で、でも、キリトさんたちはアレだけ強いんだし、トッププレイヤーなんですよね。そ

んな人たちに教えてもらう機会なんてそう無いと思いますし。」

リリーの援護が入る。

うん、まあリリーも多分私と同じ理由なんだろうなあ……

「ハア……キリト君……一人が週一でも良いつて言つてるんだから、良いじゃない。」

ため息を付きながらも、アスナさんがキリトさんを取りなしてくれる。

「いや、けどなあ……」

「どうせ、来週にはゆんゆん達も戻つてくるし、きっと二人もやるつて言うわよ。そしたら二人にも指導しなきやならないんだし、その時に一緒にやれば良いでしょ？それには……」

そこで、一旦止めたアスナさん……次には笑顔で、

「こうなつたのはキリト君のせいだからね。少し位付き合つて上げなさい。」

そう言つてくれた。

……あの……アスナさん……取りなしてくれるのはありがたいのですが……目が

笑つていないんですけど……

「いや、俺のせいって……俺はただ、あいつらから助けただけで他は何も……」

「キリト君？」

「いえ、なんでもないです。」

キリトさんはアスナさんには逆らえないようです。

「ど、言うことだから二人とも、来週の日曜日、10時にここに集合で良いかな？」

「サー、イエッサー！」

私たちの心は一つだ…

私たちは、キリトさんたちとお互いに自己紹介したあと、フレンド登録を済ませて解散となつた。

自己紹介の時に、キリトさんのプライベートピクシーを紹介されたときは、びっくりしたなあ。

受け答えも自然だし、感情表現も豊かで、まるで本当に生きているみたいだった。ユイちゃんがキリトさん達をパパ、ママと読んだ時の衝撃はもつと驚いたけど…もしかして、二人は恋人を通り越して結婚してるんだろうか？

こつそり、後ろを覗くとキリトさんが正座をさせられてアスナさんに説教を受けていた。

なんだか、一級フラグ建築士とか言う単語が出てきてたけど、なんの事だろう？とにかく、これで来週もキリトさんに会える。

ああ、早く来週にならないかなあ…

そして、約束の日…

私たちは集合時間より前に集まつてキリトさん達を待つた。

ただ指導を受けるだけなのも申し訳ないので、この日までに出来るだけレベルも上げたし、魔法も少しは使えるようになつた。

まだ、補助コントローラー無しでの飛行は上手く出来ないけど、戦闘はそこそこなせるようになつたと思う。

リリーと他愛ない会話をしながらキリトさん達を待つていると、キリトさんたちが空からやつて来た。

アレ？なんだか人数が多いような…

そう言えば、他にも教える人がいるって言つてたつけ。

キリトさんとアスナさんは、残りの二人のスピードに合わせてゆっくり近づいてきた。

「やあ、セシルにリリー。待たせたかな？」

「いえ、大丈夫です。それよりそちらの二人は？」

私は、キリトさんが連れてきた残りの二名（女性）が気になつて紹介を促した。

「ああ、二人は他のVRゲームからコンバートしてきたプレイヤーでサチとゆんゆんだ。二人もこのゲームは初めてなんで一緒に教えようと思つてな。迷惑だったかな？」

「いえ、私たちも教えてもらう立場ですし、迷惑なんて事は無いですよ。」

「そうか。よかつたよ。」

そう言つてニッコリ笑うキリトさんに、私もリリーも心を撃ち抜かれた。

しばらくボーッとしていたと思う。

そこに、今日初めて会う、確かサチと呼ばれた女性が苦笑しながら声をかけてきた。  
「はじめまして。セシル、リリー。私は、サチ。種族はケツトシーだよ？前の所ではヒーラーをやつていたんだけど、ウンディーネはアスナさんがいるしね。折角だから別の事をやってみようかと思つてね。宜しく。」

「はい。宜しくお願ひします。」

「私は、ゆんゆんです。種族はお二人と同じシルフを選択しました。空を飛ぶのに憧れていまして。夢が叶つて感動しています。宜しくお願ひします。」

「宜しくお願ひします。ゆんゆんさん：」つてどうしたんですか？」

ゆんゆんさんは泣いていた。そこまで感動したのかあ。

感受性の高い人なんだなあ。

(今の私は、紅魔族では無くシルフ。つまり捷もない。普通に自己紹介が出来る日が来るなんて…それに、私の名前もここでは目立たない。ああ、ゲームつて良いなあ。)  
「こ、この子の事は置いておこうか。次は二人が自己紹介してくれるか？」

キリトさんが促しました。

私たちも互いに自己紹介を済ませると、いよいよキリトたちの指導が始まります。

最初は、補助コントローラー無しでの随意飛行を練習するよう言われた。  
このALOでは飛行しながらの戦闘も、当たり前に行われていて、その時にコントローラーで片手が塞がってしまうのは致命的なのだそうだ。

最初に出来るようになったのはサチさんだつた。

悔しいなあ。サチさんはコンバートしたてで、今日が初めての飛行なのにあつという間に飛行出来るようになっていた。

次は、私、その次にリリーが飛べるようになつた。

ゆんゆんさんは、なかなか上手く行かず、キリトさんがマンツーマンで指導した。

ゆんゆんさんの手を引っ張つて飛行するキリトを見て、最初こそ羨ましいと思つたけど、だんだんスピードが上がつていつて、とんでもないスピードで飛行を始めるキリトさん。

なに…あれ。スプリガンってあんなに早く飛べるの？

飛行はシルフの方が得意って聞いてたんだけど…

半泣きで絶叫するゆんゆんさんを見て、考えを改めた。

アレは恐ろしい。自分で飛べるようになつて本当に良かつた。

結局、そのスピードでの飛行を体験してコツを掴んだのか、ゆんゆんさんも最後は随意飛行が出来るようになつていた。

そこで、その日は終わり。

二回目の指導は、アスナさんとユイちゃんを中心に魔法の勉強会となつた。ガリ勉女子の私としては、全く苦にならなかつたんだけど、リリリーとキリトさんが音を挙げていた。

まさか、キリトさんも魔法が苦手だとは思わなかつたな。

この授業で一番適性があつたのはゆんゆんさん。次いで私、サチさん。

リリリーとキリトさんは同着のビリね‥：

三回目は剣の指導。

キリトさんとアスナさんが中心で行いました。

これは以外にもリリリーが適性があつたみたい。

流石に、キリトさんやアスナさんと比べるのは問題外だけど、経験者だと言つていたサチさんには一步譲るが、それでも何とか付いていけるようになつていたのだから驚きだ。

最後にソードスキルの基本技をいくつか教わり、解散となつた。

次は、また一週間後。  
次回はソードスキルのおさらいと、キリトさんたちのデュエルを見せてくれるそうだ。

楽しみだ。

それまでに、しつかり復習しておかないとなあ。

私たちは、次の日練習が終わるとシルフ領にある食事処で話をしていた。

「ああ、早く日曜日にならないかなあ。」

「そうだねー。私、教えてもらつたソードスキルはもう完璧に使いこなせるようになつたんだ。見てもらわないとねえ。」

くつ。リリーめ⋮ 羨ましい。

「いいなあ。私は『バーチカル・アーク』がまだ上手く出来ないんだよねえ。」

私だつて練習してるんたけど⋮

「それにしても⋮ キリトさん達⋮ もう少し時間取れればいいんだけどな。」

「仕方ないでしよう。キリトさんもアスナさんも、事情があつて週一でしかログイン出来ないって言つてたじやない。」

「だつてー。キリトさんに会いたいんだもん⋮」

私たちが、そんな会話をしていると、突然声をかけて来た人がいた。

その人は、キリトさんのように、全身を黒い装束で身を包んだ、正直シルフには見えないような女性だつた。

「ねえ、貴方たち。今の話に出てきた『キリト』と『アスナ』つて人について教えてもらえない？」

突然、話しかけられて、ビックリしてしまつた私たち。

「えつと、貴方は？」

なんとか気を取り直して、その人物に私は、聞いた。

「そう言えば、自己紹介してなかつたね。私は、リーフア。『黒の絶剣士』とも呼ばれてるわ。宜しくね。」

その女性は、そう名乗つたのだつた。

## 再会の兄妹

お兄ちゃんが亡くなつて、もう2年半が経つた。

あの後私は、『黒の剣士』の名前だけでも残したいと、『絶剣』のユウキに弟子入りして、その技を受け継ぎ、今では二人の名前を合わせた『黒の絶剣士』として、このALOにおいて最強のプレイヤーとして名を馳せている。

容姿も、黒の絶剣士を広めるため、黒の装束に身を包み、シルフ特有の縁がかった金髪を隠すため、黒のターバンを頭に巻いている。

デュエル統一トーナメントでは2年連続の優勝を果たして殿堂入りをし、ユウキにならって辻デュエルをしては連勝を続けていった。

でも… 黒の絶剣士の名前が広まれば広まるほど、私のこのゲームへの関心は薄くなつていった。

理由は、わかっている。私にとつて、このゲームはもはや娯楽ではなく、お兄ちゃんが生きていた証を残すと言う使命感でプレイしているからだ。

娯楽で無くなつたゲームを、目的が達成した後も続けるのは難しいだろうと思う。

それ以外にも、リズさんたちがあまりログインしていないのも大きい。

もともと、リズさんやシリカはお兄ちゃんやアスナさんがこのゲームをやつていたからこそ、一緒にプレイしていたんだと思う。

その中心の二人がいない今のALOに、魅力を感じないのだろう。

それでも、私を心配して時々でもログインしてくれるのは、私にとつてとても嬉しい事だった。

シノンさんは、GGOの方をメインに相変わらず活動している。

シノンさんは、リズさんたちよりは多くこちらにも来てくれていて、たまに高難度のクエストを一緒に行ったりしている。

クラインさんは、しばらく落ち込んでいたけれど、いつの間にか吹っ切ったようで、風林火山のグループを率いて、今も精力的に活動している。

時々、クエストにも誘われるけど、正直サラマンダーの種族の人と私が一緒に行動するには、いまのALOでは好ましいとは言えないでの遠慮させてもらっている。

と言うのも、お兄ちゃんが亡くなつて以来、各種族関係なく対等に話していたお兄ちゃんの勢力がいなくなり、昔ほどでは無いにしろ種族間の関係が悪化しているのだ。

特に、サラマンダーはその種族特性上、粗暴なプレイヤーが多く、時に犯罪まがいの行いをするものまでいることから嫌っているものが多い。

そんなサラマンダーの種族のクラインさんと、最強のプレイヤーたる私が一緒に行動

するのは、周りの目を考えれば良いことは言えないのだ。

エギルさんは、相変わらずマイペースにログインしている。たまに、奥さんと一緒にログインしたりしているらしい。

今日も、挑戦者を10人抜きして終わらせシルフ領に戻ってきた。

ホームに入ると、ベッドに横たわりため息をつく。

「ハア…疲れたな。私、なんのためにALOに残ってるんだろ…」

もう良いよね…お兄ちゃん。

私、十分頑張ったよね…

今度、行われる小規模のデュエル大会を終えたら引退しよう…

そう考えて、その日はログアウトした。

そして、大会当日…小規模とあつてか、大したプレイヤーはおらずあつさり優勝を決めた私は、その場を後にしようとした。

その時に、ある噂を聞いてしまった。

それは、黒の絶剣士の弟子がサラマンダーのプレイヤーのグループをあつという間に倒したと言うものだつた。

騙りか…と思いつつも、

詳しく聞くと、どうもそのサラマンダー達は、中堅プレイヤーで初心者の女の子にセクハラまがいの事をする悪質な連中なのだそうだ。

今回もシルフの女の子の二人組を狙っていたようだが、どこからか現れた黒ずくめのスプリガンの男性プレイヤーに全員一刀のもとに切り伏せられたのだそうだ。

話を聞く限り、良い人みたいだし放置しても構わないかもと思つたが、そのプレイヤーの名前を聞いて思い直した。

『キリト』： そう名乗つたそうだ。

そのスプリガンは…。

… ふざけるな。その名前は…：

私… いや… 私たちにとつて、特別な名前なのだ。

そいつは黒の絶剣士の弟子を名乗つているんじやない。

『黒の剣士キリト』の真似をしているニセモノなのだ。

私は、犯罪まがいの行いをしたサラマンダーの連中より、この『ニセキリト』に怒りを感じた。

許せない。許しちゃいけない。

今日で引退するつもりだつたけど、取り止めだ。  
このニセキリトを叩き潰す。

私は、それからと言うもののこのニセキリトについて情報収集を行つていた。  
でも、全く話に上がつてこない。

おかしい。サラマンダーの連中を一蹴出来るほどのトッププレイヤーなら、もつと話題になつても良いはずだし、何よりわざわざ黒の剣士の真似事をしているのだから、自己主張にしろ、なにか目的があるにしろ、もつと目立つた行動をとつても良いハズだ。  
当初の目論見では簡単に見つかるだろうと思っていたが、全く情報が掴めなかつた。  
それから一月近く経つたころ……

「ハア……今日も空振りかあ。ニセキリトは一体どこにいるんだろう？もしかして、噂が間違つてた……なんて事は無いよね……」

疲れが溜まつっていた私は、シルフ領に戻り休憩も兼ねてシルフ領の飲食店を訪れた。  
そこで、初心者らしい装備の女性プレイヤーが二人で会話をしていた。  
何気なく聞いていると、信じられない話をしていた。

「ああ、早く日曜日にならぬいかなあ。」

「そうだねー。私、教えてもらつたソードスキルはもう完璧に使いこなせるようになつたんだ。見てもらわないとね。」

「いいなあ。私は、『バーチカルスクエア』がまだ上手く出来ないんだよねえ。」「へえ、ソードスキルを教わつてるのかあ。」

あれを教えるのつて結構難しいんだよね。  
体感的なものだから。

「それにしても… キリトさん達… もう少し時間取れればいいんだけどな。」  
はつ？今、キリトつて言わなかつた？

「仕方ないでしよう。キリトさんもアスナさんも、事情があつて週1でしかログイン出来ないつて言つてたじやない。」

えつ？お兄ちゃんのニセモノだけじやなくてアスナさんのニセモノもいるの？  
その人たち、本当に何が目的なの???

「だつてー。キリトさんに会いたいんだもん…」  
動搖してゐる場合じやないよね。

とにかく折角見つけた手掛けかり。  
逃す訳には行かない。

私は、二人に近づくと声をかけた。

「ねえ、貴方たち。今の話に出てきた『キリト』と『アスナ』つて人について教えてもら  
えない？」

突然、話しかけられて二人はビックリして固まつていたが、一人が意を決して尋ねて  
くる。

「えっと、貴方は?」

「そう言えば、自己紹介してなかつたわね。私は、リーフア。『黒の絶剣士』とも呼ばれてるわ。宜しくね。」

「え? 黒の絶剣士って……」

「A.L.O最強つて噂の黒の絶剣士ですか? お会い出来て光榮です。私はセシルつて言います。」

「私はリリーです。」

私が自己紹介をすると、二人は直ぐに思い至つたのか、笑顔で挨拶してくる。  
「宜しく、セシル。リリー。それでさつきの話なんだけど……」

セシル達の話は、私の聞いた内容とだいたい変わらなかつた。

と言うより、どうも助けられた当事者だつたようで、詳しく述べてくれた。

まさか、アスナさんのニセモノまでいるとは思わなかつた。

そこまで徹底して、この人物たちは何がしたいのだろう?

話を聞く限り、どうしても名前を騙るような人物に見えない。

初心者を助けて、頼まれて指導までしているらしい。

そんな、いい人を演じるなら、人の名前を騙る必要はないだろう。

やはり、私の目で確認する必要がある。

セシル達は、毎週日曜日に指導を受けているようなので、同伴させてもらうことにした。

そして、その日はやつて來た。

待ち合わせの場所へ行くと、既にその人物たちは到着していた。

私の知らない人が二人。

セシルたちが、言つていたコンバート組だろう。

そして……残りの二人を見たとき……私の中で、何かが切れた。

その二人は、あまりにもソックリだつた。

容姿だけじやない。雰囲気も……何かも。

まるで、私の大切な人たちとの思い出を踏みにじられている氣分だつた。氣が付いた時、私はニセキリトに向かつて飛び出し、斬りかかっていた。

「キリト君、危ない！」

私の突進に気づいたニセアスナが叫ぶ。

構うものか……これで、このニセモノは終わりだ……そう思えるほど、その一撃には力を込めていた。

しかし……

「なつ!？」

「いきなり、斬りかかるなんて、失礼な人だな。」

その一撃は、ほとんど不意を突いていたにも関わらず、ニセキリトがいつの間にか抜いていた黒い刀身の片手剣によつて止められていた。

私は、驚きつつも、言い返す。

「ニセモノに言われたくは無いわ。」

「ニセモノ?」

ニセキリトは、言われている意味がわからないかのように首をかしげた。

そこまで、徹底して演技を続けるのか…

私は怒りに身を任せ、剣を振り回す。

「くっ…」

私の怒涛の攻撃に防戦していたニセキリトは、私の一瞬の隙を突いて反撃をしてきた。

なんとか、避ける事が出来たその攻撃は、私の頭に巻いていたターバンを掠めた。

： 私は、その攻撃に冷や汗を搔いた。

強い…

噂の話だけでも、このニセキリトがかなりの強さなのは想像していた。

それでも、ここまで強さは想定していなかつた。

ユージーン将軍にも、戦績で勝ち越している今の私と互角？  
もしかしたら、それ以上かもしれない……

まるで、本物のお兄ちゃんを相手にしているようだ。

闇雲に攻撃をして、当たる気がしない。

もつと、戦略を練らないと……

私は冷静さを取り戻し、仕切り直して相手の隙を伺つた。

すると、ニセキリトは驚愕の表情を浮かべていた。

何をそんなに驚いているのか……

そう考えていると……私の頭に巻いていたターバンが先程の攻撃で斬り裂かれたようで、下に落ちているのが見えた。

私の素顔に驚いたのか？

何故？

その時、ニセキリトが私に向かつて、掠れた声で言葉を発した……

「リーフア？……スグ……直葉なのか？」

え？

この男は、今、なんと言つたのか？

「リーフア」が「キリト」の妹なのは、ALOでは割りと有名な話だ。

レコンのアホが言いふらしていたから…

でも、リーフアリ直葉と知っている人間は限られている。

そして、私をスグと呼ぶ人物は…

そんな人間は、一人しかいない…

「お、お兄ちゃん？」

私は、その日、二度と会えるハズのない人物と再会を果たすのだつた…

# 対決！ 黒の剣士ＶＳ黒の絶劍士！

「お、お兄ちゃん…なの？」

私は、目の前のプレイヤーに、絶対にあり得ない人物の名前で呼び掛けた…ほとんど、無意識に近い呟きにも似た呼び掛けだつたと思う。

「ああ…俺だよ。和人だ。スグ…わかるか？」

「ウソ…そんなのウソだよ。だつて…お兄ちゃんは…もう…貴方がお兄ちゃんであるハズがない…」

自分で呼び掛けておきながら、私は彼を否定した。

そうだ…『桐ヶ谷和人』は死んだ。

だから、目の前のプレイヤーが『キリト』であるハズがない。

自分の中の、現実的な思考は彼を否定している。

でも、感覚的な思考が彼をキリトと認めていた。

でも、それを認める訳には行かない。

もし、それで…やはり騙していたとわかつたら…

そうなつたら…私は、もう立ち直れないだろう…

その恐怖が、彼をキリトとして認める事を拒んでいるのだ。

「そう…だよな…信じられるハズ無いよな…」

その人は、とても悲しそうな表情で私の言葉を肯定すると続けて、「悪かった。もう二度と…君の前に姿を見せないと誓うよ。」

そう言つた。

そんな…この人をキリトと認めるのも怖いけど、このままお別れなのも嫌だ…どうしたら良いの？

私は、どうしたいの？

「それじゃあ、リーフア。俺たちはもう行くよ。」

「キリト君、良いの？」

「良いんだ…」

キリト君は、結論を出して、ここを去ろうとした。

アスナさんは、そんなキリト君を気遣いながらも、キリト君に従う。

残りの二人も一緒だ。

ああ…キリト君とアスナさんが…

二人が行ってしまう…

「待つて…」

気が付くと、私は二人を呼び止めていた。

もう、考えるのは止めよう。

自分の心のままに、言葉を紡ぐのだ。

「ねえ、キリト君。私とデュエルしよう。」

そう、私が彼をキリトと認識した最大の理由は、彼の強さ。  
だつたら、彼と戦い……自分を納得させる。

きっと、この人が本当に兄ちゃんなのか、私には結論を出せない。  
でも、キリト君なら、この戦いで私を納得させてくれる……

そう信じる……。

「貴方が本当に本物のキリト君なのか、私にはわからない。だから、このデュエルで証明してみせて。貴方が本当に『黒の剣士』キリトだと。本気の力で……」  
キリト君は、一度目を瞑る。

そして、目を開くと、ニヤリと笑つて

「わかった。」

「キリト君。ダメだよ。そんなの。」

アスナさんが、止めようとする。

「ママ。ここは一人を信じましょ。」

なんだ… ユイちゃんも、一緒にいたんだね。

キリト君は、システムウインドウを操作する。

その次の瞬間、彼の背にもう一本の剣が現れた。

エクスキャリバーでは無いが、そのもう一本の剣も、かなりの力を持っているように感じた。

そう、黒の剣士の本気の戦闘モード。

彼の代名詞とも呼べる二刀流。

このALOでは、未だに実装こそされないスキルだが、お兄ちゃんは試行錯誤の末、システムに頼らずに二刀流のソードスキルを再現する事に成功していたし、システム外スキルのスキルコネクトなんてものまで開発していた。

私は、二本の剣を背負つた彼を見て思つた。

本気のキリト君と戦える。

今のが、どこまで強くなれたのか…

見てもらうんだ、彼に。

私は、自分の剣を抜くと中段に構えた。

彼も二本の剣を抜き放ち、構える。

ワクワクする。こんな気持ちになるのは、本当に久しぶりだ。

思えば、この二年半の間……ただただ最強の称号を得るために義務感から戦い続けていた。

そこに、楽しいなんて感情は何一つ感じなかつた。

「リーファとこうして真剣に戦うのは、アスナを助けるためにログインして、グランドクエストに挑む前の……あの時以来だな……」

「そうだね。あの時は、中断しちゃつたけど、今回は……最後まで行くよ?」

「ああ。本気で行くぞ? スグ?」

「私も、本気で行くよ? お兄ちゃん。」

もう、わかつていた。この人はお兄ちゃんだ。

理屈なんてわからないけど、目の前のこの人はお兄ちゃん。

でも、けじめは必要だ……

だから、全力で戦う。

私は、正面から突っ込んだ。

キリト君が恐るべき反応速度で迎撃する。

キリト君は、二本の剣を巧みに使い、私の剣をことごとく弾いた。

くつ……なんて強いの?

二年以上もブランクがあるハズなのに……

でも、私だつてこの二年半の間、ずっと強くなるために戦ってきたのだ。  
簡単に、負けるものか……

攻防を繰り返す私たち。

「強いな。スグ。」

「お兄ちゃんもね。」

いつまでも、こうしてお兄ちゃんと戦つてみたい。

そんな気分だった。でも……終わらせないとね……

「そろそろ決着をつけようか。スグ。」

「そうだね。」

お兄ちゃんが、構え直す。

私にも、切り札がある。

『絶剣』のユウキから受け継いだ、最強のソードスキル……

あれから二年以上経つが、未だにこれを超えるオリジナルソードスキルを開発した。

レイヤーは現れていない。

マザーズロザリオ……

「ハアアアアアアアアアッ！」

総数11回にも上る剣戟がお兄ちゃんを襲う。

これを防ぐのは、どんな人間にも不可能だ。

そう、確信していた…

でも、その全ての斬撃は、彼の持つた二本の剣により打ち落とされた…

「そんな…」

「今度はこっちの番だ。いくぜ…リーフア。『スター・バースト・ストリーム』  
スター・バースト・ストリーム…以前お兄ちゃんが練習していたのを見たことがあ  
る。

二本の剣による16連撃。

でも、これはシステムによりちゃんとアシストされている。

いつの間に、二刀流は実装されたのだろうか…

考えていた時間はない。

お兄ちゃんは、私の『マザーズロザリオ』を防いだのだ。私だって、この技を防いで  
見せる。

「くっ」

予想以上に、速くて重い…

私は、十撃目の攻撃を防いだ時に剣を弾かれて、その攻撃を身体に受ける。  
私の…負けだね…

気が付くと、私は大地に横たわっていた。

アスナさんが蘇生魔法をかけてくれたようだ。

「大丈夫か？ スグ。」

お兄ちゃんが、心配そうな顔で私を覗きこんでいる。

「大丈夫だよ。」

私は、立ち上ると改めてその顔を見つめた。

そして…

「お兄ちゃん… なんだね？ 本当に…」

「ああ。 そうだよ。… スグ。信じてもらえないかも知れないけど…」

「信じるよ。 私は信じる。 おかえりなさい。 お兄ちゃん。」

「ただいま。」

私たちは、泣きながら抱き締めあつた。

ああ、神様。

奇跡をありがとうございます。

# 集合！ キリアスのもとに集う仲間たち！ 前編

「篠崎さん。俺たち、別れよう。」

私の何度もかの彼氏は、そう話を切り出した。

「ああ……うん……わかつたわ。」

私は、その言葉を受け入れる。

今回は、上手く行くと思つたんだけどなあ……。

この人は、結構いい人で、優しくて顔もそこそこ。私に告白してきた時はなんの冗談かと周りを疑つたわよ。

それから数ヶ月、私たちはデートを繰り返した。

と言つても、買い物したり遊園地に行つたり、清い交際だつたわよ？

それが、結局は破局してしまつた。

理由はわかってる。間違いなく私が悪い……。

明日奈の葬儀の日、私は誓つた。

ー私は、私はあの二人の後を追つたりしない。私の命は、あの城で、あの二人が命を懸けて救つてくれたものだもの。精一杯生きて、幸せになつて、そして……あの二人を

悔しがらせてやるんだからー

その日から、その宣言を実行するため、自分で言うのもなんだが、それはもう涙ぐましい努力をしたと思う。

特に、マイクには力を入れて勉強し、かなりの成果を挙げている。

将来は、その道に進もうと思っている程だ。

そんな私は、それなりにモテるようになつた。

もともと、男の比重の圧倒的に高い学校なのだ。明日奈がいなくなつた事で、皮肉にも明日奈の影に隠れがちだつた私に注目が集まるようになつた。

もちろん、私の努力の成果もあるとは思うけど。

そんな訳で、ちよくちよく告白されるようになつた私は、自分でもいいなと思う人と、何度もお付き合いをした。

でも、これが長続きしない。長くても数ヶ月。

酷いと、一月もしないうちに別れ話を切り出されてしまう。

一度、相手に理由を問い合わせてみたことがあつた。

その人も、わりかし好印象の男性で私にしては長く続いていたのだが：

「篠崎さん。俺と別れて欲しい。」

「ど、どうして？」

「だつて、篠崎さん……俺に壁を作つてるだろ？そりやあ、篠崎さんは気さくだし、明るくて優しい、友達として付き合うなら最高の人だよ？でも、恋人になつても俺たちの関係はまるで、変わらないじやないか。」

そんなこと無い……そう言おうとしたんだけど、何故か言葉にならなかつた。

そして、続いて言われた言葉に、私の心は打ちのめされた。

「篠崎さん。もしかして君……他に誰か好きな人がいるんじやないか？結城さんたちと一緒にいる時の君の方が、ずっと魅力的だつた。」

この言葉で、私は悟つた。

私は、今でもキリトのヤツを忘れられないのだと。

その思いが、彼に対し無意識に壁を作つてしまつてゐる。

彼が怒るのは当然だろう。私は、別れ話を受け入れた。

それからも、何度もお付き合いをしたが、結局は同じ結末を迎える。

「ハア……私の春はいつ来るんだか……」

私は、深いため息を吐き出す。

また、しばらくは時間が出来たし、シリカを誘つてALOに顔を出しますか。

あの日以来、私やシリカ、シノンは自然とALOにログインする機会が減つていつた。もともと、キリトやアスナがやつていたからこそ、私たちもやつていたような物だか

ら仕方がない。

今は、キリトの名前を残すとムキになつて続けているリーファを心配して、時々ログインする程度だ。

早速、シリカに電話をかける。

「あ、もしもし珪子？ しばらくは時間が出来たんだけど、今度暇なときにALOやらない？」

『時間が出来たって……また、別れたんですか？ もう、いい加減落ち着いたらどうなんですか？』

電話の向こうで呆れたと言った感情を隠しもせずに、そんな事を言つてくる珪子。

「あんたにだけは、言われたくないわよ。」

そう……こと、恋愛話に関しては、間違いなく珪子の方が重症だ。

もともと、アインクラッドでは中層プレイヤーの間でアイドル扱いされていたのだ。

当然、珪子はモテる。何人の男の子に告白されていた。

だと言うのに、珪子のヤツは……

「キリトさん以上の男性なんていません。私は、キリトさんを想つて、生涯独身を貫きます。」

自分の教室で、珪子に告白してきた人たちを集めて、そう宣言してしまつたらしい……

おそろしい子だわ……本当に。  
それ以来、その話はあつという間に学校なかに広まつて、珪子に告白する人間はほとんどいなくなつたそうだ。

まあ、わからないでもない。私たちより年下……思春期の真つ只中……命懸けのゲームと言う、異常な状況で、命懸けで自分を守つてくれた人に恋をしてしまつたのだ。  
彼女の内で、キリトを超える男性像が思い浮かばないのだと思う。

『私の事は良いんです。それよりも、ALOですけど、明後日ならバイトも休みですし、時間が取れますよ? リーファにメールしときますか?』

「よろしくー。」

そう言つて、その日は電話を切つた。  
次の日、珪子の方から電話が来た。

「ああ、珪子。どうしたの? もしかして明日用事が出来たとか?」

『いえ、そうじやなくて……昨日、リーファに連絡を入れたんですけど、今度の日曜日に皆で集まれないかって返事が来まして……』

リーファが、皆を集めるなんて珍しいわね……

あの日以来、こつちから会いに行かないと、いつまでも連絡不通状態だつたのに……  
その理由も、リーファの目的を聞いて、怒るよりむしろ心配になつた。

私たちの中で、最もキリトとアスナに囚われているのがリーファだ。

珪子は、恋愛に関しては重症だが、まだ前を向いているだけ、マシだろう。

それに比べてリーファは、キリトが生きた証を残すと言つて、無茶なブレイングを続けていた。

そのせいで、現実の剣道の方は疎かになつていて、大会でもあまり活躍出来ていないらしい。

周りはそんな直葉を、説得してみたりしたが、逆効果になつてしまい、返つてALOに比重が行つてしまつたそうだ。

直葉の両親も、今は本人の納得するまで続けさせると言つていると聞いた。  
この間、久しぶりにログインしたときに聞いた話では、デュエル統一トーナメントで二連覇を果たして殿堂入りを果たしたらしい。

正直、もう充分なんじやないかと思うんだけど……

今は、静かに見守る事しか出来ない……

そんな、リーファが自ら皆を集めるなんて……

もしかして、とうとう引退するのかね。

それなら、とびきりの笑顔で送り出してやらないとね。

「わかった。ちゃんと日曜日は空けとくわ。珪子はどうするの？」

『その日はバイトがあつたんですけど、もちろん、誰かに替わつてもらつてでも休みますよ。折角、リーファからのお誘いですからね。久しぶりに、皆で楽しみましょう。』  
そうね。久しぶりに気楽にALOを楽しみますか。

この時の私は、まだ、リーファが皆を集めた理由を知らなかつた。

# 集合！ キリアスのもとに集う仲間たち！ 中編

リーファからの呼び掛けに、その日最初に現れたのはシノンだった。

「久しぶりね。リーフア。それとも『黒の絶剣士』さんって呼んだ方がいいかしら？」  
シノンは、リーフアをからかうように声をかけた。

「もお… リーフアで良いですよ。お久しぶりです、シノンさん。この間の大会、優勝おめでとうございます。」

今、リーフアと最も交流が多いのはシノンだ。

GGOをメインに活動しているシノンだが、リーフアに付き添つて、たまに一緒に高難度のクエストをするなどして、手助けしているため、軽口もよく言っているのだ。

ここしばらくは、GGOの方で大会に出場していたため顔を出すのは久しぶりだった。

久しぶりに会つたリーフアは、雰囲気が柔らかくなつていて、シノンは違和感を感じる。

この間までのリーフアは『黒の絶剣士』の名を広めると言う強迫観念にも似た目的に突き動かされ、ずっと張り詰めた表情をしていた…

そう… 今のリーファは出会った頃の…  
キリトがいた頃のリーファのようだつた。

「それで? 今回はどんなクエストをするのかしら。」

理由が少し気になつたが、まずは今回の目的を聞こうと、リーファに質問するシノン。  
シノンは、リーファから呼び出しを受けた目的をまだ聞かされていなかつたのだ。  
「あー、ちょっと待つてくださいね… まだ全員揃つていないんで…」

「全員? 今回は、リズ達も参加するの?」

シノンは不思議に思つていた。

リズ達はあの日以来、あまりインしてくることは無くなつていた。

たまに、リーファを心配してインすることはあるが、目的がリーファと話す事なので、  
レベル上げなども行つていない。

そのため、クエストと一緒にいくこともなかつた。

リズ達も、足手まといになることはわかつてゐるため付いてきたいなどと言つうことも  
ない。

シノンは、その事を責めるつもりはなかつた。

リズやシリカがこのゲームをしていたのは、あくまでもキリトとアスナがいたからだ  
ろう。

「その二人が、この世界にいない今、彼女たちがこのゲームを続ける理由が無いのだ。  
「えーと… リズさんたちと、クライインさん、エギルさんも来ますよ。」

シノンが、リズたちの事を考えていると、リーファが先程のシノンの質問に答えた。  
その面子に、シノンは混乱した。

「ハア？ エギルはともかくとしてもクライインまで？ 一体、何をするつもりなの？ リーファ？」

今のALOの現状はシノンも知っている。

サラマンダーの… 特に中層プレイヤーの素行の悪さは目に余るものがあり、サラマンダーと他の種族で反目し合っている状況だ。

そんな状況で、このALOで最も有名なリーファや、それなりに有名なシノンがサラマンダーのクライインに会うのは、一般プレイヤーにとつていい感情を抱かせないだろう。

ましてや、リーファはシルフ。サクヤ自身は話せる人間だが、シルフ領全体の事を考えれば、シルフ領を放逐されてしまう可能性すら会つた。

もちろん、クライインや風林火山の面子が犯罪プレイを行つては無い。それどころか、そう言つたサラマンダーの中層プレイヤーを凝らしめたりしているのだが… 一般プレイヤーにそんな見分けは付かないだろう。

そんな理由から、クライイン達と行動することを避けていたと言うのに、本当に今回は何が目的なのか…

面子を考えるなら、キリトやアスナ関連の事なのかも知れないが…

あれから二年半も経つて、今さらキリト達の思い出話でもしよう… なんてことも無いだろう…

シノンがそんな事を考えていると、リズとシリカがやつて來た。

「ヤツホー、リーファにシノン。久しぶりね。」

「お久しぶりです。リーファ、シノンさん。」

二人が挨拶をしてくる。

「お久しぶりです。リズさん。シリカ。今回は、急な呼び出しだつたのに、二人とも。来てくれてありがとうございます。」

リーファが、二人に笑顔で挨拶を返す。

「!?」

リズやシリカも、リーファの変化を敏感に察知したようだ。

「へえ… 急な呼び出しに、よく来れたわね。シリカはバイトがあるし、リズは恋人がいるんじやなかつた？ 日曜なのに放つておいて良いのかしら？」

シノンは、その話に乗つかり、場を流すと二人に聞いた。

「うつ…」

リズが話に詰まる。そして、シリカが代わりに答えた。

「私は、バイト替わつて貰つたんで大丈夫ですよ。リズさんは…」「わあああつ。言わなくて良いから…」

慌てて、シリカの口を塞ぐリズ。

「つまり、また別れた訳ね…」

その様子に、シノンは全てを察した。

呆れながら、シノンが言うと、観念したリズが「ハイ…」と小さく答えるのだった。  
「もう、リズさんも諦めたら良いのに…」

「嫌よ。私は、あんたと違つて一生独身なんて絶対にゴメンだわ。だいたい、学校の教室で一生独身宣言するなんて正気の沙汰じやないわよ？」

「そう言う事言いますか？リズさんなんて、何度も男性をとつかえひつかえしてるものだから、私のクラスでは悪女扱いされてるんですからね？」

「なーんですつてー。ちよつとソイツら絞めて来るわ。言つたやつの名前を教えなさい。」

「嫌ですよ。大体、リズさんが男の人をとつかえひつかえしてるのは事実じやないです

か。」

しばらく、二人の掛け合い漫才を見ていたリーファとシノン。すると、最後にエギルとクラインが到着した。

「よお。お前達……元気そうだな。」

エギルが最初に声をかけた。

「リーファっち。それに皆も……久しぶりだな。」

クラインは、フードとマントで変装をしていた。

クラインもA L O の現状でリーフア達に会う不味さは理解しており、変装をしてきたようだった。

「お久しぶりです。エギルさん。今日はお店を休んでまで来てくれてありがとうございます。」

「クラインさんも、お久しぶりです。クラインさん、よくクエストに誘ってくれてたのに、出れなくてごめんなさい。今日は本当に来てくれてありがとうございます。」「いや、俺の方こそすまねえな。配慮が足りてなかつたぜ。」

二人はお互に謝り合う。

そんな雰囲気を変えるため、エギルは改めてリーフアに今回の目的を尋ねた。「それで、リーフア。俺たちを集めて、一体何をしようって言うんだ？」

周囲の皆も喧騒を止めて、聞きの体勢に入る。

「…それなんですか…これから皆さんに一緒に来て欲しい場所があるんです。着いて来て下さい。」

そう言つて、羽を出すと飛び上がるリーフア。

シノン達は、目的を告げずに飛び立つたリーフアに疑問を感じつつも、後に続く。

… 目的の場所は、天空城インクラッド。

その二十二層、今リーフア達は、森の中を歩いていた。

最初こそ、騒ぎながらリーフアに着いてきていたクライイン達だつたが、この二十二層に入つた途端、口数はめつきりと減つていつた。

「な、なあ。リーフアつち。こんな所に来てどうしようつてんだ？」

クライインも、シノン達も、リーフアが自分達を連れていこうとしている場所を察していた。

そう、ここにはこの世界に置いて、自分達がよく集まつていた…あの二人が大切にしていた思い出のホームがあるので。

だが、あの一人がこの世を去つた事で、あの家に入る事の出来る人間はいなくなり、また、二人を思い出すのが辛くて、自然と誰も寄り付かなくなつていた。

その森の家が、今日の前にある。

たまらず、クラインがリーファに声をかけた。

「リーファつちも、わかってるだろ？もう… この家の扉を開けられるプレイヤーは口グインすることは無いんだ。こんな所に来たつて…」

そう、キリトは事故でこの世を去り、キリトを深く愛していたアスナもその後を追つ

た

二人が、本当の娘のように大切にしていたユイも、あれ以来姿を見せない。

クラインは、沈痛な表情で現実を伝えようとした。

その時、ガチャツ

「よお。スグ。おかげり。ありがとな。皆を連れてきてくれて。」

「おつ？ クライン。久しぶりだな。相変わらずの野武士面だ。」扉を開けた人物。キリトがそこに立っていた。

# 集合！ キリアスのもとに集う仲間たち！ 後編

この場に集つたほとんどの人間が驚愕していた。

当然だろう。：

二度と会えないハズの人物が、自分達の目の前にいるからだ。

いち早く、現実に復帰したクラインが怒りの表情で目の前の人物に怒鳴り散らす。

「よりによつて、キリトになりますたあ良い度胸じやねえか。このクライン様が成敗してくれる。」

そう言つて、キリトに斬りかかるクライン。

キリトはため息を一つつくと、その刀を避けてクラインの顔面を押さえながら、  
「いいぜ。でも、ここだと狭いから少し離れようぜ。」

そう言つてクラインと共に少し遠くに離れていった。

この中で唯一、事情を知つているリーファは止めない。

事前に打ち合わせをしていたからだ。

「多分、情に厚いクラインは、話も聞かずに斬りかかってくると思う。だからそ  
なつたら俺に任せて欲しいんだー」

キリトはそう言つていた。

自分も、似たような事をしているだけに、了承するリーフア。

どうやら、キリトの予想通りの展開になつたようだ。

「やつぱりこうなつちゃつたんだね。」  
 「仕方ないですよ、ママ。普通に考えて、私たちがここにいることはあり得ないんですから。」

キリト達に気を取られていた時、家中から新たな人物たちが出てくる。

その人物たちは、揃つて苦笑の標準を浮かべていた。

「ア…アス…ナ…なの？」

最も早く、その存在に気づいたのは、やはり彼女にとつて一番の親友だつたりズだつた。

「え？ アスナさん??？」

シリカはなおも驚いている。

「どういう事なの？ 一体… クラインが言つたように偽者？」

シノンは、偽者ではないかと話す。

「ただの偽物が、この家から出て来るなんて無理だろ。」

だが、エギルは冷静に偽者がこの家に入れるハズがないとニセモノ説を否定する。

「二人のアカウントを乗っ取ったハッカーとか？」

「アクティブラユーザーのアカウントならともかく、二年以上ログインしていない…しかも、この二人をピンポイントで同時にハックするなんて、いくらなんでも手間に合うとは思えんな。それこそ、今のALOならリーファやユージーン将軍をハックするだろう。」

結局、真相がわからずリーファに聞く面々。

「あはははははは…えーっと…どう説明したら良いか。」

リーファは、キリトと再会した日を思い出していた。

・・・

「それで、お兄ちゃん。これは一体どういう事なの？」

キリトとのデュエルを終えたりーファは、改めて目の前の人物がキリトであると認めた。

でも、なぜこうしてここにいるのかは、全くわからない。

それはそうだろう。

なぜなら『キリト』を動かす現実の人間『桐ヶ谷和人』は既に亡くなっているのだから。

「そうだな。信じられるかわからないけど、話すよ。これまでの事を。」

そう言って、キリトが話した内容は、確かに信じ難いものだつた。  
神様（の部下の天使）に会つて、異世界を救つて欲しいと頼まれ、記憶と体をそのままに、チートを持つて転生。

そこで、魔王を倒し、褒美に願い事を叶えてもらい、世界を渡る能力を貰つた…

目の前にキリトがいなければ、絶対に信じられないだろう。

もはや、目の前のキリトを偽者とは考えていない。

雰囲気もどうだし、自身との会話にも違和感はない。

自分たちしか知らないような話にも、普通に着いてくるのだから、疑う余地が無かつた。

「まあ、正直信じられないけど、お兄ちゃんは異世界でちゃんと生きてるのね？アスナさんやユイちゃんも。」

「ああ、そうだ。」

「それでお兄ちゃん。お兄ちゃんはこれからどうするの？」

「それなんだけど、皆と連絡を取りたいんだ。俺たちのフレンドリストはリセットされ

てるんでな。スグ。頼めないか？」

「良いけど、どうやつて皆を誘うの？お兄ちゃんを見つけました…なんて送つたら、私がおかしくなったと思われちゃうんだけど…」

「う、うーん…」

・  
・  
・  
皆で考えた末に、目的を告げずにここに連れてきて、なし崩し的に会つてしまおうつて事になつた。

まさか、兄があんな軽い挨拶をすることは夢にも思わなかつたが…

後で、その事を問いただすと、アレがキリトの中で一番無難な対応と考えたらしい。相変わらず対人スキルの低い男だ。

「リーファちゃん。私が説明するよ。」

アスナの声に、我に反つたりーフア。

「良いんですか？アスナさん。」

リーファは、気遣しげに声をかける。

「大丈夫だよ。例え信じて貰えなくとも、私だってリズ達には会いたくなかった訳じや

ないもの……こうして一目でも会えた。だから大丈夫。」

「皆……私は……」

アスナが意を決して、話し出そうとしたとき、リズがアスナに駆け寄ると、そのままアスナを抱き締めた。

「アスナ……アスナだよね。私には解るよ。」「信じてくれるの? リズ。」

「当たり前でしょ? 何年、あんたの親友やつてたと思つてるのよ。困つたときにする癖も、泣きそうなのを堪える表情も、ニセモノには出来ないわよ。」

「リズ……会いたかつたよ。リズ……ごめんなさい。私、リズに……リズ達に酷いことしちやつたのに……」

「本当よ、全く。皆、どれだけ悲しんだと思ってるの?」

「ごめんね。リズ……ごめんなさい……皆……ウワアアアアアアア。」

アスナは泣いた。リズを抱き締めながら。

リズも泣いていた。

そのお互いの涙に、ニセモノを警戒していた他の皆も、アスナを本物と認めたようだ。

離れた場所から悲鳴が上がった。

「ぎやあああああああ」

どうやら、向こうも決着が着いたようだ。

女性陣は、その場を動こうとしない。

再会の余韻に浸つていてるようだ。：

エギルは、仕方なくその場を離れキリト達のもとに向かう。

クラインは、命の灯火となつていた。：

キリトにデュエルで負けたのだろう。：

後、十数秒で死亡扱いとなる。

「ハア。」

エギルは、一つため息をつくと、ウインドウを操作して蘇生アイテムを取りだし、ク  
ラインを蘇生する。

「キリト。よく戻ってきたな。」

エギルは、笑つてキリトの帰還を喜んだ。

「エギル。サンキューナ。」

エギルが自分を信じてくれたことが嬉しい。

でも、面と向かつてそれを言うのは照れる。

キリトは、結局顔を下に向けながら礼を言う。

キリトの気持ちを理解しているエギルは、それ以上、なにも言わなかつた。

クラインがアイテムで完全に蘇生された。

エギルは蘇生されたクラインに向けて指を一本だして、一言。

「適正価格の二倍な。」

「そ、そりゃあ無えだろう。エギルの旦那あ。」

クラインは、値切る為に交渉を開始した。

そのやり取りに苦笑を浮かべつつ、キリトはアスナ達のもとへ向かう。

「アスナの方は、穩便に済んだみたいだな。」

「リズがいたからね。それに、リーファちゃんが認めてくれてるのが大きかつたと思う。理由はもとかく、私たちが本人だつて言うのは、納得してくれよ。ありがとう。キリト君。キリト君のおかげで、皆に謝る事が出来たよ。」

「お礼はいらないよ。俺だって、皆に会いたかったんだから。」

「それでも、良いの。ありがとう、キリト君。大好きだよ。」

二人は、見つめ合う。そして…：

「あー、おっほん。」

リズが、咳払いすることで離れた。

「間違いなく、この二人はキリトとアスナね。周りがいるのに二人の世界を作るなんて…：こいつらにしか出来ないわよ。」

リズは久しぶりに見るキリアスに、二人が本物だと完全に認めた。

「アスナさん。私たちは、二年半ぶりにキリトさんに会うんですから、ここは譲ってください。」

シリカは、久しぶりに会ったキリトに暴走気味だ。

「シリカちゃん…なんか、変わったね。随分とアグレッシブになつたような…」

そんな、シリカに驚くアスナ。

以前から、キリトに好意を持つてているのは知っていたが、アスナがいるため遠慮しているような娘だったハズなのだが…

「あああああああ…！」

シリカがキリトの方を見て、大声を上げる。

見ると、シノンがキリトに抱きついていた。

「キリト。本当に貴方なのね。私…私…」

「「キーリートー（君）（さん）。」」

「お兄ちゃん？」

「ま、待て。これはシノンが…」

「言い訳は、良いから離れなさい！… つてシリカちゃん!?」

アスナが怒っている間に、

「私も、抱きつきます。キリトさん。会いたかつたです。」  
シリカがキリトに抱きついた。

「あ、じゃあ……ついでに私も……」

リズが顔を真っ赤にしながら空いてる所に抱きつく。

「ちょっと、リズまで……」

「皆、ズルいです。私も……」

リーファも続く。

「ちょっと、リーファちゃんはこの間したでしよう？ って言うか、皆、離れて……離れない。」

「ちょっと位良いじゃないですか。二年ぶりなんですよ？」

シリカがニコニコしながら言う。

「良い訳無いでしよう？」

「これは、勝手な事をしたアスナへの罰よ。諒めなさい？」

「シノのん。それとこれとは話が違うでしょ？」

「そうそう、罰よ罰。」

リズも、乗つかる。

「アスナさんは、毎日一緒にいるんだから良いじゃないですか。」

とどめとばかりにリーファが言う。

「もう、良いから離れてえ。キリト君は私のなの。私のキリト君なお。」

「キリト… 手前え… 散々、皆を悲しませといて、美少女にまみれるとはどういう事だ。このクライン様が成敗してやる。」

キリトの惨状に怒りのボルテージを再び上げるクライン。

「今度は、いくらで蘇生アイテムを売つて欲しいんだ？」

エギルの言葉にピタリと動きを止めるクライン。

キリト達の再会は、感動の再会とは呼べないだろう。

それでも、皆、久しぶりに本気で怒つて、本気で泣いて、そして、本気で笑つた。  
自分達の日常が戻つてきた。

この奇跡の再会を誰もが心の底から喜ぶのだつた。

# 英雄対決！キリトVSカズマ

俺たちは、魔王を倒した。

その名声は、世界中に広まり今や俺たちは時の人となつた。

キリトのパーティーはいち早く有名になつており、あちこちの国に呼び出されていたが、俺たちの方にも、遅れて呼び出しが掛かるようになつた。

そして、なによりも俺たちにも二つ名が付くようになつた。

俺、サトウカズマは『強（狂）運の冒険者』

めぐみんは『爆裂卿（狂）』

ダクネスは『盾の（変態）聖騎士』

そして、アクアは『アクシズ教（狂）の女神』

……つてなんでだあ！！

なんで全員（）が入ってるんだよ。しかもその中身が明らかに俺たちをデイスってやがる：

これは、絶対にアクセルの街の連中の仕業だ。  
間違いない。微妙に真実っぽいのがその証拠だ。

なんでも、魔王討伐後に、俺たちの足跡をたどった記者がまとめた新聞を冒険者ギルドの方で検討して、そのまま付けられたらしいからな。

こんなことを知つてるのは、あの街の連中‥

他にもいなくは無いが、きっとそうだ。

アクセルの街にもどつたら、絶対に復讐してやる。

魔王を倒したこのカズマさんをなめるなよ?

ふつふつふ‥

さて、そんな俺たちだが‥ 今、俺たちはアクセルの街にはいない。

アイリスに呼ばれて城に滞在している。

もう、一月になるか‥

実を言えба、他の国からも招待状が来てる。

どこも英雄の俺たちとの繋ぎが欲しいのだろう。

だが、俺たちはアイリスやダクネスの顔を立ててこの城に留まつている。

他の国は、キリト達が上手くやつているだろう。

これまでの事を思い返しながら部屋で寛いでいると、この国の重鎮の一人であるクレ

アが近づいて来た。

「カズマ殿‥ もういい加減、言い飽きたが‥ 帰つてくれ。」

「断る。」

「ここ最近、毎日言われている事なので、何を言われるかわかっている俺は、クレアの言葉に被せるように即座に否定する。」

「この世界の救世主たる俺たちだが、この城に滞在して二週間も経つと、周りから煙たがれるようになつた。」

「何故だ？俺たちは世界を救つた英雄として、ただ手厚い歓待を望んでいるだけなのに…。」

「カズマ殿たちが、魔王を倒してくれた事には感謝している。だが、このままではカズマ殿たちの為に、国の財政が傾いてしまうのだ。頼む。カズマ殿。もう、帰つてくれ。」

「俺たちが帰つたら、アイリスが寂しがるだろう？」

「その心配はない。遠征に出ていた陛下たちがもうすぐ帰つてくる。アイリス様も、実の家族と水入らずしたいだろう。」

「くつ… やはり義理の兄では、本当の家族には叶わないか…  
しかし…」

「だが、断る…」

「この贅沢三昧の暮らしを手放すものか…」

「クレアめ… 以前は実力で排除されたが今回も上手く行くと思うなよ？」

俺が、臨戦体制に入ったのを察したのか、クレアは一つため息を付くと、

「仕方ない。世界を救つた救世主殿だ。出来れば自身の決断で帰つて欲しかったのだが……」

そう言つて、お付きの兵士に何かを伝える……

そして、その兵士がどこかへ行つたと思つたら、その兵士はすぐに戻つてきた。ある人物を連れて。

「よう、カズマ久しぶりだな。」

そう言つて、俺に声を掛けた人物は、キリトだった。

巷では『黒の勇者』と呼ばれているらしい。

魔王を倒すと言う同じ功績を持つ俺たちなのに、何故こうも評価が違うのか……

「久しぶりだな、キリト。今回は何しに来たんだ？」

警戒しながら聞くと、

「薄々、わかっていると思うけど、今回は冒険者としてあるクエストの為に来たんだ。」

「……依頼内容は？」

いつでも逃げ出せる準備をする。

「この城からカズマをアクセルの街に戻すことだな。」

言い終わる前に、俺は逃げ出した……ハズなんだが……

「カズマ。帰るぞ。」

いつの間にか、俺の前にいたキリトに腕を締め上げられた…

「いてててててて、キリト、頼む見逃してくれ。」

「断る…と言うか、もう後はお前だけだぞ?」

「は?」

広間にそのまま連行されると、キリトパーティーの他に、簾巻きにされたアクアとそ

れを見ているめぐみん、ダクネスがいた。

「あ、カズマ! たす… けるのは無理そうね。」

「ああ、やつぱりカズマも捕まりましたか…」

アクアが助けを請おうとして、俺の現状を見て諦める。

ダクネスは、もともと帰ることを主張していたし、めぐみんはどちらでも良い派だつたので俺たち二人を拘束した段階で、キリトたちのクエストは達成と言うわけだ。

「流石はキリト殿、眞の英雄は違いますね。」

クレアがキリトを誉める。

眞の英雄がいると言うことは、偽の英雄がいることになるんだが…

どうも、キリト達にクエストを依頼したのは、このクレアらしい。

どうやら、帰宅を主張していたダクネスと結託して、キリトを呼んだのだそうだ。

余計なことを…

くつ、こうなつたら一か八か…

「キリト、賭けをしないか？俺と一騎討ちをしてキリトが勝つたら素直に従おう。だが、俺が勝つたら見逃して欲しい。」

「この状況で、俺がそれを受けるメリットは無いだろう。」

「私も、見てみたいのです。世間で英雄と言われるパーティのリーダーであるお二人の戦いを。」

アイリスが俺に賛同してくれた。

「アイリス様…」

クレアはアイリスに甘い。

「仕方ないですね。カズマ殿、自分で言つた事だ。約束は守つて頂きますよ？」

やはり、アイリスの意見を無視できなかつたか…

「いや、そんな事をしなくても、このままカズマたちを連れ帰れば依頼達成なのでは？」

「キリト殿、申し訳ないがお願ひ出来ないだろうか。カズマ殿もあれで一応… 認めたくはないが、例えあんなでも、魔王を倒した英雄の一人なのだ。出来れば、自分の意思で帰つてもらいたい。」

おい、なんだその言い方は。

一応つてなんだ。あんなでもつてなんだ。正真正銘の英雄だろう。

「ハア、仕方ないですね。でも、本来ならここで依頼達成なんですから、追加報酬をもらいますよ?」

キリトが折れた。

「仕方ないですね。追加で50万エリス出しましよう。」

え? 一体、このクエストにいくらの報酬が付いてるんだ?

そんなに、俺たち煙たがれていたの?

俺は、その金額に戦慄した。そこまで出して俺たちをこの城から追い出したいつて…

冷や汗をかきながら、場所を移動する俺たち。

「ねえ、ダクネス。この運び方はどうかと思うの。もうちょっと、私に優しくしてくれても良いんじゃないかしら?」

簪巻きにされたまま、ダクネスに担がれているアクアが主張する。

「私が、帰宅を主張した時に帰つていたら優しくしても良かつたのだがな… これ以上、城の者たちに迷惑は掛けられないんだ。帰るまで大人しくしていてもらうぞ?」

ダクネスは、取り合う気は無いようだ。

「カズマ、大丈夫なのですか? キリトとカズマでは、戦闘力に差があります。今の内

に謝った方が良いですよ?」

めぐみんが、心配して言つてくる。

「正面からやり合えば勝ち目は無いだろうけど、この俺が正面から戦いをするハズが無いだろう?」

そう言つて、めぐみんを安心させる。

「そうですね。いつも小狡い戦いをしてきたカズマですからね。なんとか切り抜けられますよね。」

：自分から言つておいてなんだが…： 胸が痛いです…：

そんな事を話していると、どうやら目的地に到着したようだ。

「ここは、普段城の兵士たちが訓練をする訓練所だ。ここなら多少、大きな技を使つても問題ない。」

クレアが言う。

「おい、アレ… 黒の勇者じやないか?」

「本當だ、閃光の姫騎士もいる。綺麗だなあ。」

「バカ、勇者と姫は恋人だぞ? お前なんか相手にされるものか。」

「天魔の大魔導師、救世の聖女も…」

「うおおお。英雄をこの目で見れるなんて。」

兵士たちが俺たちに気づき騒ぎ出す。

お前ら… 英雄なら毎日見ていたじやないか…

「それでは二人とも前へ。」

クレアに促され部屋の中央で対峙する俺とキリト。

その雰囲気に、これから俺たちが一騎討ちをすることを察したのだろう。騒いでいた兵士たちが一斉に静かになる。

それはそうだろう。英雄同士の戦いだ。皆、記なるだろうしな。

キリトは右手の剣を下げ、左手を付きだし半身になつて構えた。

どうやら、キリトは二刀流を使う気は無いようだ。

これなら勝機はある。あのミツルギにも効いた手、これを使えばキリトがいくら強くても、なんとか勝てるハズだ。

「それでは…はじめ」

合図と共に飛びたす。

「いくぞキリト…『ステイール』

「!」

俺はステイールを唱えた。狙い通り、キリトから剣を盗むことに成功する。

後はこの剣でキリトをノックダウンすれば…

つて重つ…なにこの剣…重くて持てないんですけど…

俺が、なんとか剣を持ち上げようとしていると肩を叩かれる。

振り向くと、キリトが右手を抜き手の形に替えて俺の脇腹を付く… 気のせいかその手が光つて見えた気がする。

「ぐはっ。」

俺は、ぶつ飛んで倒れた。

「よし、今度こそ帰るぞ？カズマ。」

剣を拾いながら、話すキリト。

呆気ない決着に、周りが沈黙している…

その居たまらない雰囲気のなか、俺は意識を手放した。

気がつくと、アクセルの自分の屋敷に戻っていた。

意識を失っている間に、アクセルに戻されたようだ。

「ああ、気がついたかカズマ。」

「大丈夫ですか？カズマ。」

めぐみんとダクネスが声をかけてくる。

「カズマつたら、凄い負けっぷりだったわね。お城の人達、爆笑してたわよ？پーくすくす。」

アクアは、後で泣かしてやろう。

「キリトたちは？」

「もう、帰ったわ。明日、改めて顔を出すつて言つてたわよ？」  
仕方ない、自分で言つたことだしな。負けた以上、約束は守るとするか。  
取りあえず、アクアを泣かしてから今後の事を考えるとするか。  
幸い、金はたんまりあるんだ。  
ゆっくり、まつたりやつて行くさ。  
この素晴らしい世界に祝福を！」

# 邂逅

カズマが強制送還を受けた次の日…

「よ、カズマ。生きてるか?」

キリト一行がカズマの屋敷を訪れた。

「自分でやつといて、何言つてくれやがる。」

半眼でキリトを睨むカズマ。

「まあ、そう言うなつて。あのままだと、もつと酷い目にあつてたかも知れないんだぞ

？」

「酷い目?」

キリトの言葉に、首を捻るカズマ。

「例えば、お前らが飲み食いしたり、壊したりした物品の金額を請求されたり…：多分、  
金額聞いたらヒクぞ?」

その金額は、カズマ達の全財産よりも大きかつた…：

「…：マジで?」

大真面目に頷くキリト。

カズマがアクアの方を向くと、顔を背けるアクア。

「お前…なにした？飲み食いだけで、そこまでいくハズないよな？」

「その…この間の宴会で宴会スキルを披露したときに、色々お城にあるものを消した…ような…氣も…しま…す…」

「その金額は、アクアに請求するように掛け合おう。」

「待つて、カズマさん…待つて。謝るから…お願ひよカズマさん。」

アクアを引きずりながら扉の方へ向かうカズマ。

「大丈夫だぞ？あのまま居座つてたら、そうなつてたつてだけだ。仮にも魔王を倒した英雄に、そこまではしたくないつて言う事で、あの指命依頼が入つたんだよ。」

「お、驚かすなよキリト。」

ホツとするカズマ。

「それで？今日はそれを言いに来ただけでは無いのだろう？一体何をしに来たんだ？ダクネスが、キリト達にお茶を出しながら聞いてくる。

「ああ、それなんだけど…エリス様からの褒美を俺たちも貰つてな。俺の方はアクアの提案のおかげで週一つて言う制限こそあるけど、ALOにダイブできるようになつたんだ。定員も10名までだから一緒にどうかと思つて誘いに来たんだ。」

「本当か？ああ、でもフルダイブかあ…それつて…大丈夫なのか？」

カズマはSAO事件を知っているため、警戒を持っていた。

「アミュスファイアは、脳を焼くなんて機能は無いし、何よりエリス様が調整した能力なんだから心配する事ないさ。」

その一言が決め手となり、カズマ一行の初VR体験が決まった。

フルダイブ中、身体は無防備になるため、キリトの提案で、キリトの家へ向かうことになつた一行。

「ここが、キリトたちの家か… なんか周りが石作りの町並みだから、ログハウスつて少し浮いて見えるな…」

「ねえ、カズマ… 私たちの家になにか文句でもあるのかな?」

瞬間、とてつもない殺気を放ち、カズマを問い合わせアスナ…

「滅相もございません。」

カズマはすぐに、訂正した。

「そうだぞ？ 暖かみがあつて… 良い家じゃないか。」

ダクネスが平然と答えるあたり、アスナの殺気は指向性を持つて、カズマのみに放たれていたらしい…

「じゃあ、中に入ろうか。ようこそ、我が家へ。」

そう言って、皆を中に先導するアスナ。

中に入ると、外からは想像できないほど広く、カズマたちは驚く。

「なあ、キリト…この家、こんなに広かつたか？」

「ああ、それはエリス様が追加してくれた機能でな、空間を圧縮して三倍位まで広くできるんだよ。」

他の機能の説明も受け、カズマのパーティーは、固まつてしまつた。

「まあ、家のことは置いといて、ここなら安全にダイブできるから、安心してくれ。じゃあ、皆…これを目元まで被つてくれ。被つたら『リンクスタート』の掛け声でダイブが開始される。後は、事前に説明した通り、種族を決めたら、能力や見た目なんかはこちらの世界の自分が参照されるからそのつもりで。」

キリトの説明を受け、全員が準備を調える。

そして…：

### 『リンクスタート』

カズマたちが気がつくと、そこはキリトたちの家と同じ作りの家だつた。だが、お互いの姿を見て、同じ場所ではないことを確信する。

カズマは、サラマンダーを選んだため、髪が赤くなつていた。

アクアは、ウンディーネを選んだため…見た目殆んど変わらず（笑）

めぐみんは、闇と言う言葉に惹かれてインプを選んだようで、藍色の髪をしていた。ダクネスは、ゆんゆん同様、空を飛びたいとシルフを選び、いつもの金髪が少し緑がかっていた。

「へえ、これがこの世界の俺たちの姿か。」

「カズマの髪…真っ赤ですね。」

「サラマンダーの特徴みたいだからな。そう言うめぐみんは、藍色みたいだぞ?」

「ふつ…我が種族は闇を司りし闇妖精。きっと、この世界で強大な力を持つている種族に違ひありません。」

「わ、私はどうだろうか? カズマ。」

ダクネスも、カズマに自分の容姿を聞く。

「少し、緑っぽくなってるな。」

「それだけか?」

「うん。それだけ…」

「…」

興味津々で、お互いを見ているカズマ達。

しかし、一人だけ後悔している人物がいた…  
アクラだった。

「どうしたんだよアクリア。」

あまりの落ち込みように、少し心配になつたカズマが声をかける。

「いや、私… 水妖精つてことでウンディーネを選んだじやない？でも、よく考えてみたら、ウンディーネつて私の部下の天使に支える精霊の事なのよね… 私… 水の女神なのに… ウンディーネを選ぶつて… どうなんだろうなつて…」

カズマは、その独白を聞いてスルーすることに決めた。

「ちゃんと、ログイン出来たみたいだな。カズマ。」

カズマ達が、騒いでいると先にログインしていたキリトが部屋にやつて来て声をかけってきた。

「早速だけど、会わせたい連中もいるから、広間に来てくれるか？」

キリトは、そう言つてカズマたちを促す。

カズマたちが広間に着くと、

『カズマ一行、ALOへようこそ』

と書かれた看板があり、そして中にはキリト達、カズマが知つてゐる人間の他に、キリトのこの世界の仲間であるリズ達が、笑顔でカズマ達を歓迎していた。

そのうちの一人、クライインがカズマに声をかける。

「お、お前さんサラマンダーだな？俺は、お前さんと同じサラマンダーのクライイン。『風

「林火山』って言うパーティーのリーダーをやつてるんだ。よろしくな。」

「クラインの自己紹介に、自分も答えるカズマ。  
しかし、カズマには少し気になる事があつた。

「あの… クラインさん？」

「クラインでいいぜ？」

「じゃあ、クライン。風林火山のクラインって言つてたけど… もしかして○○って  
ゲームやつてなかつたか？」

「やつぱり… 僕だよクライン。カズマだよ。」

「… もしかして、レア運だけのカズマさんとか、インしたらいつもいるカズマ

さんとか言われてた、あのカズマか？」

「… はい… そうです。久しぶりですね。クラインさん…」

その悲しい覚えられ方に、少し落ち込むカズマ。

「ま、まあ良いじやねえか。それにしても、まさかお前さんもキリトと同じ所に行つて  
とはなあ。まあ、若くして死んだとしても、こうして他の世界で生きてるんだ。運が良  
かつたじやないか。」

「うだな。うだよな。」

「うだな。うだよな。」

クラインは、知り合ったゲームでもそうだった。面倒見が良く凄く良いやつだった。  
そして……

「ところで、カズマ。あの一緒にインしてきた女性達は、お前の仲間だよな。頼むカズ  
マ。紹介してくれ。」

そして、女にモテなかつた。

「おい、カズマ。女にモテなかつたのはお前もだろ？お前があんな綺麗な女の子と知り  
合いになれたんだ。俺だつていつかは……」

「ふつ・： クラインよ。俺をキリトのようなテンプレハーレム野郎と一緒にするなよな  
？いくらクラインでも許さないぜ？」

カズマは、アクア達の奇行とそれに伴う苦労の愚痴を散々クラインにぶちまけた。  
流石のクラインも顔が引き攣る。

「まあ、何が言いたいかと言うと…… キリトのヤツは爆発しろと。」

「そうだな。その通りだ。」

キリトの方を見る二人。

今もキリトの周りは女の子だらけだった。

「キリトめ……」「キリトめ……」

ちなみにこの頃、アクアは得意の宴会芸を披露していた。

めぐみんとダクネスは、ゆんゆんに飛行の体験談を聞いて目を輝かせていました。

そうして、お互いの親睦を深めた二つの世界の仲間達は、この後も大騒ぎをして盛り上るのだった。

次のログインの時には、キリト達が指導している初心者の二人を交えて、戦闘や飛行の練習を行つた。

そして、あつと言う間に月日は流れ、半年がたつた。

この日は、キリトとアスナ、ユイの三人だけでログインしていた。

皆、それぞれ事情がありログインできなかつたのだ。

三人で、ゆつくり空を散歩していると、モンスターに襲われているシルフの女性プレイヤーを見つけたアスナ達。

急いで、助けたその女性はアスナの顔を見ると、一瞬驚愕の表情を浮かべた。だが、なんとか思い直すと、

「危ないところを助けてくれて、ありがとう。」

その女性は、そう言つて感謝を伝えた。

「いえ、無事で良かったです。こちら辺は、少し強いモンスターがいるから気を付けた方が良いですよ？」

アスナが、アドバイスを贈る。

「そうなのね。こう言うゲームつてはじめてで、よくわからなかつたから… 本当に、あ  
りがとうね… えつと…」

「あ、私… アスナつて言います。」

アスナの自己紹介に、再び驚く女性。

しかし、今度はすぐに平静に戻り、

「私は、キヨーコよ。よろしくアスナさん。」

その女性は、そう名乗るのだった。

## 母と娘と…

「あの… キョーコさん。ステータスとか異常はないですか？モンスターに囮まれてた訳ですし、状態異常とか確認した方が良いですよ？」

「え、ええ…」

アスナさんのパーティーメンバーと思われる男性のプレイヤーの言葉を聞いた私は、慌てて確認したが特に異常は無さそうだった…

でも…

アスナさんを見た時の衝撃で忘れていたが、モンスターに囮まれた時の恐怖を思い出すと、正直ゾッとした。

教えてもらつた戦い方も出来ず、パニックになつてしまつた…

あのSAOでは、その恐怖の上、更に本物の死と言う恐怖まで加わつてくるのね…

良くあの娘は、そんな世界で二年以上も生き延びて来れたものだわ…

「とにかく、無事で良かったですよ。俺はキリト、こつちは俺のプライベートピクシーでユイと言います。よろしくキョーコさん。」

「ユイです。よろしくお願ひします。キョーコさん。」

そう言えば、名前を聞いてなかつたわね。

それに、ユイちゃん…か。確か、プライベートピクシーはA-Iで動いているのよね?

それにしては、随分と自然に会話をするわね。

まるで、本当に生きているみたいだわ。

ん? キリト?

何故かしら…どこかで聞いたことがあるような気がするのだけれど…  
どこだつたか…

私は、ゲーム事態これが初めてだし、ゲームで聞いた名前では無いわよね…  
…ダメだわ…思い出せない…

何か、重要な意味を持つていた気がするのだけれど…

「キヨーコさん。良ければシルフ領まで送つていきましようか?」

私が『キリト』について思い出そうとしていると  
キリト君がそう提案してくれた。

「ありがとう。お願ひできるかしら。」

私は、その提案を受け入れた。

ただ、何故かこの二人ともう少し一緒にプレイをしてみたい…そんな衝動に狩られ

た。

おそらく、明日奈と同じ顔をしたアスナさんに、もう二度と会えない明日奈を重ねてしまつて いるのだろう。：

私は、二人と交流を続けるために、考えたことを口にした。

「その。： 図々しいお願ひだとは思うのだけど。： 少しの間で良いから、このゲームについてレクチャーをお願いできなかしら？ 見たところ、二人とも随分とこのゲームに慣れているように見えるわ？」

私は、事情を説明した。家族でこのゲームを始めるこ。

先行して、私がこのゲームに慣れ、後から来る二人に教えなければならぬこと。

「キヨーコさん。私たちは、事情があつて週に一度。： それも日曜日にしかログインできなひんです。それでも構いませんか？」

週に一度。： 社会人なのかしら。： 仕事に支障を来さないようにするのは立派なことよね。：

私は、構わない旨を二人に伝えた。

二人は、何故か苦笑の表情を浮かべる。

どうしたのか？

私の疑問を察したのだろう。： キリト君が答えた。

「ああ…すみません。実は、半年位前にも似たよう事があつたもので…」  
 「あら。 そうなの？」

「そうなんですよ。 聞いてくださいキョーコさん。 その時は二人のシルフの女の子を助けたんですけど… 二人ともキリト君に特別な感情を持つちゃって大変なんです。 私と言ふものがありながら…」

「そんな事無いだろう？ 一人とも、危ないところを助けてもらつて感謝しているだけさ。」

「ハア… キリト君鈍いから…」

「処置無しです…」

「ちよつ… ユイまで…」

「あはははははははは」

三人の口論を聞いていたら、私は何故だか笑いが堪えられなかつた。

気が付いた時には、モンスターに襲われたときの恐怖なんて完全に忘れていた。

これなんだ… 明日奈があの世界で見て来たことは…

例え、この体が作り物なんだとしても、私たちの思いは現実の私が感じている本物…

た

私は、改めて二人… いえ、三人にお願いした。

「キリスト君、アスナさん、ユイちゃん。これからよろしくね。」

私はその夜、食事の場で夫の彰三に今日ALOであつたこと、感じたこと、そして、出会いについて話した。

息子は、今日は仕事でトラブルがあつたらしく遅くなる為、二人での食事となつている。

「そんなことがあつたのか‥」

「ええ、貴方もダイブしたらモンスターには気を付けた方が良いわよ?」

「ははははははつ。なあに、モンスターなんて私にかかれれば一捻りさ。」

そんな冗談を交わしたあと‥

「それにもしても‥ 明日奈に似た容姿のアスナと言うプレイヤーか‥」

「ええ‥ はじめて見たときは驚いたわ。本当にそつくりなんだもの。でも、少し嬉しかつたわ。あの子の動いている姿を見ているようで‥ それに‥ とても楽しそうだつたわ‥」

「そう言えば、もう一人いたと言つていたな?」

「一人と‥ プライベートピクシーの子の三人ね? 名前はキリストとユイって言つてたわ。」

私の言葉に、夫は驚いて立ち上がつた‥

「なんだつて？キリト… そう名乗つたのか？」

「え、ええ… どこかで聞いた名前だと思うのだけど… 思い出せないのよね…」

夫は、少し間を置いたあとに話し出した。

「… キリトと言うのは、フルダイブ型のゲームに置いてはなれば伝説になりつつあるプレイヤーの名前だ。」

「A L Oにおいては、数々のシステム外スキルを編みだし、最強格のプレイヤーとして名前が残っている。G G Oにおいては、コンバートしてすぐに大きな大会で優勝しているそうだ。そして… S A Oにおいては、茅場晶彦を倒しクリアに導いた英雄…」

私は、その言葉によく思い出した。

キリト… それは明日奈の思い人… 桐ヶ谷和人君のゲームでの名前…

「こんな偶然… あるのかしら。」

私は、呆然としながら… なからば独り言のように呟いた。

「わからん… 明日、会社に行つたら二人のログイン履歴を調べてみよう。」  
結果から言えば、二人がログインした形跡は無かつた。

つまり、あの二人は桐ヶ谷和人君と明日奈では無いと言ふことだ…  
普通に考えれば当然だ。二人とも、既にこの世にはいないのだから…  
でも、私は何故かあの子は明日奈だと思ってしまう。

私の母親としての勘が、あの子を明日奈だと伝えている。

昔の私なら、そんな非理論的なこと一笑にするところなのだけれど…  
幸い、次に会う予定は取り付けている。

そこで、確かめるのだ。自分自身で…：

そして、日曜日。

「お待たせしました。」

キリト君たちが、待ち合わせ場所にやつて來た。

何故だか、かなりの大人数になっていた。

「すみません。キヨーコさんの話をしたら、私たちの仲間が是非遭いたいと言つてきた  
もので…」

アスナさんが、申し訳なさそうに謝つてきた。

「構いませんよ。私は教えを請う立場ですから… 私はキヨーコです。よろしく皆さ  
ん。」

お互に自己紹介を済ませると、早速初心者向けのレクチャーを受けた。

このゲームを始めた時に、シルフ領で先輩プレイヤーに少し教わったがキリト君たち  
のレクチャーは、具体的でとても分かりやすいものだった。

今日一日で、私は随分と上達したと思う。 ただ、自分でお願いしておいてなんだが、今日はもっと、大きな目的がある。

私は、休憩の時間を利用してアスナさんに声をかけて、二人で話をすることにした。「今日は、本当にありがとうございましたアスナさん。貴方たちのおかげで、随分と上達したわ。」「いえ、そんなこと無いですよ。キヨーコさん、とても飲み込みが早いから私たちの方こそビックリです。」

「ふふつ。お世辞でも嬉しいわ。」

さて……ここからだ……

「貴方とキリト君は、随分と仲が良いわね。どうやつて知り合ったの？」

「えつ？ その……突然ですね。」

私の問いかけに、驚くアスナさん。

ちょっと早すぎたかしら……冷静にならないと……

「ちょっと気になつてね……子供までいる私からしても、貴方達は恋人と言うより夫婦みたいだつたから……」

「そ、そ、うですか……えへへ……ありがとうございます。」

真っ赤になりながら照れるアスナさん。

「そうですね……私たちは、あるゲームの中で出会いました。詳しくは言いませんが……」

私は、そのとき絶望していました。そんな私を救つてくれたのがキリト君なんです。」

SAOの名前こそ出していないけれど、その内容は、明日奈が生前に、良く言つていた内容に酷似している。

でも、確定的ではない。だつたら…

「そうなの… 羨ましいわね。実は、私にも娘がいたのよ…」

「そうなんですか…」

「でも、その娘はね、もういないの。恋人が事故で亡くなつて… 後を追つて自殺してしまつた。」

「……」

アスナさんは、顔を青ざめているようだつた。

「私の話を聴いてくれる?」

そう言つて、私はアスナさんの返事も待たずに話し出した…

「私はね、子供の頃から努力して、大学で教授にまで上り詰めたの。そして、名家の男性と結婚して、子供も二人に恵まれた。特に娘の方は、親の私が言うのもなんだけど、才色兼備全てを備えたような子だつた。私は娘に、幸せになつて貰いたくて、幼い頃から英才教育を施したわ。」

「でもある時、順風満帆な娘の人生に転機が訪れたの… SAOと言うゲームに娘は囚

われてしまつた…。なんとか娘は生還を果たしたけど、周りの人達からは取り残されてしまつた…。私は焦つたわ。このままでは、娘の人生はダメになつてしまふ。その思いが娘を追い詰めてしまつた。」

「気が付いた時には、もう手遅れだつたわ。娘は、明日奈は…。桐ヶ谷君に救いを求めて、死んでしまつた桐ヶ谷君の後を追つてしまつた…。」

一呼吸した後、私はそれを口にする。

「貴方は、明日奈ね？」

「お…母…さん…。」

アスナは驚愕の表情で、私を見つめた。

# 家族

「お…母…さん…」

アスナは、突然の事に混乱していた。  
目の前のこの人が、自分の母親？

そんなはずは無い…

あの人はこんな穏やかな笑顔を見せないし、何よりもゲームなんてするような人では無いハズだ…

アスナは纏まらない思考のまま、その場を逃げ出した。

「待つて、明日奈…私の話を聞いて頂戴。」

逃げるアスナに、キヨーコは引き止めようと声をかけるが、アスナは空を翔んで遠くへ行ってしまった。

まだ、飛行に十分慣れていないキヨーコでは、追い付くことができるハズもなく、結局見失つてしまつた。

「明日奈…」

明日奈を追い詰めるつもりは無かつた…

ただ、話がしたかつただけなのに…

明日奈は、やはり自分を恨んでいるのだろうか…

京子は、明日奈の行動にネガティブな感情に支配されそうになる…  
そこに、キリトが近づいて来て声をかけて来た。

「キヨーコさん… 失礼ですが貴方は明日奈の母親の京子さんですね？」  
「え…ええ… 貴方は桐ヶ谷君ね？」

「はい。アスナは今、突然の再会に混乱してるだけだと思います。だから、アスナの事は  
俺に任せてください。必ずまた、貴方の前に連れてきてみせます。」

「ありがとうございます。桐ヶ谷君… よろしくお願ひね？」

キリトの言葉に弱々しく返事をする京子。

「ユイ、俺はアスナを追いかける。だから、京子さんを頼めるか？」

「わかりました。パパ… ママの事、お願ひします。」

ユイの返事を聞いたキリトは、一つ頷くと、アスナが飛んでいった方向に飛んでいつ  
た。

「キヨーコさん… いえ、京子さん。ママの事は、パパに任せてください。きっと、ここ  
に連れてきてくれます。」

その場に残ったユイは、京子を慰める為に話しかけた。

「ありがとう、ユイちゃん。でも…私は明日奈に恨まれているのよ。だから、あの子は私の前から逃げ出したんだわ。」

今の京子は、娘が自分の前から逃げた事のショックにより、どうしても悪い方向に全てを考えてしまっていた。

「そんな事はありません。ママは、自分の親を憎み続けられるような心は持つていません。」

「そんなこと、わかるわけが無いわ。」

「確かに、普通なら解らないかもしません。ですが、私には解るんです。何故なら、私はメンタルカウンセリングプログラム… S A Oにおいて、プレイヤーの心理的なケアを目的に作られたプログラムだからです。」

その言葉に驚く京子。

「貴方は、プライベートピクシーでは無かつたのです？」

「いいえ… もともとの私は S A O のプログラムです。この A L O においては、規格の近いプライベートピクシーと呼ばれるプログラムに偽装をしているだけです。」

そう言つて、ユイは本来の人間ベースの姿をとつた。

「これが、本当の私の姿です。」

「それじゃあ貴方は、S A O での子達の心理カウンセリングをしていたのね？」

京子の質問に首を振るユイ。：

「いえ…むしろ私の方がアスナさんとキリトさんに救われた側です。」

「どういう事なの？」

そして、ユイは語りだした。

自分の産まれた理由。その役目を管理プログラムに禁止されたこと、プレイヤーのモニタリングを続けていった結果、エラーを蓄積していき、自己崩壊を起こしかけていたこと。

「あなたは、どうやつて自分を保つたの？」

「崩壊寸前に、アスナさんとキリトさんを見つけられたからです。あの二人はデスゲームとなつたあの世界で、数少ない温かいメンタルパーソナリティーを持つていました。私は、二人に会うために、無理をして管理プログラムを騙して、二人に接触しました。その過程で、私は記憶を失つていましたが、二人はそんな私を娘として扱つてくれたんです。」

「そう…だから貴方は、二人をパパ、ママと呼んで慕つているのね。」

「はい。二人は記憶を取り戻して、私がプログラムである事を伝えて、変わらず娘だと言つてくれました。」

「実の親子でなくとも、貴方達はそれだけの絆を作れた。それに比べて私は…」

京子は、自分が情けなくなつた。血の繋がりの無い明日奈とユイは、これだけの絆を持つていてるのに、実の母親である自分は、明日奈との間に大きな溝を持つていた。」「京子さん……明日奈さんを、そう育てたのは紛れもなく貴方なんですよ？もつと自信を持つてください。」「その通りだ。」「そうだね……」

ユイが、京子を慰めていると二人の見知らぬプレイヤーが声をかけて來た。

一方、その頃キリトの方はアスナと合流することに成功した。

「アスナ……」

「キリト君……」

アスナは泣いていた。何故自分が泣いているのかもわかつていなかつた。  
キリトは、なおも話しかける。

「アスナ……あの人は君の母親なんだろ？」

「うん……」

「なんで逃げたりなんかしたんだ？」

「わからない……全然わからないの。ただ、あそこにいたくなかった。」

「アスナは、お母さんのこと……やっぱり嫌いなのかな？」

アスナは、その質問にとつとつと語りだした。

「そうだね。前にも話したけど、キリト君との交際を反対したり、勝手に転校させようとしたり、あの人を嫌う理由はいくつもある。：キリト君が死んだ事を良かつたって言つたことは、今でも許せない。」

「その…：ハズなのに…：お母さんが目の前にいるつてわかつたら、私…：会いたかつたつて思つたの…：私は…：」

アスナは、自分の中で整理が着いていないのだろう。京子を許したくない自分。許したいと思う自分。会いたいと願つていた自分。

だからキリトは、自分が思つたことを口にした。

きつと、それがアスナの背中を押すことになると信じて。

「アスナ…：俺は京子さんの事を良く知らないから、上手く説明できないけど、この世界で出会つたキヨーコさんは、アスナが言うような冷たい女性には見えなかつた。純粹にこの世界を楽しんでいるようだつた。」

「…：うん。」

それは、アスナも感じていた。

「それにさ…：京子さんは、なんでこのゲームを始めたんだと思う？」

「そうだ…：何故お母さんはこのゲームを始めたのだろう。」

ゲームなんか……って言うような人なのに……

「多分、アスナの事を理解したいと……そう思つたんじやないかな？」

「アスナを亡くして、きっと京子さんは後悔したんだと思う。だからせめて、君の事を理解しようとした。俺はそう思うんだ。」

そう……なのかな……

「だから、アスナ……自分の目で確かめよう。もし、会うのが怖いのなら俺も一緒にいるから……だから……勇気を出して。」

そう言つてキリトはアスナに手を差し出した。

「ありがとう、キリト君。私……会つてみるよ。」

アスナはキリトの手を取ると、一緒に母が待つ場所へ向かつた。

キヨーコのいる場所へ戻つたアスナ達は、新たに二人のプレイヤーがいることに気づいた。

「あ、見てください。戻つてきましたよ？」

始めてユイが気づいた。

「おお、明日奈だ。明日奈が生きておる。良かつた。本当に良かつた。」

「父さん……」

見知らぬ二人のプレイヤーは、お互に涙ぐんでいる様子だった。

「えっと…」

状況が飲み込めないキリトが声をかける。

「おお…： 君は桐ヶ谷君だね。私だよ…： 明日奈の父の…」

「もしかして…： 彰三さんですか？」

「その通りだよ。キリト君。ただ、ここではショーンと呼んでくれたまえ。」「はあ…：」

キリトは、アスナの父親とは面識があつた。

正直、大会社を経営するような人とは思えないくらいフレンドリーにキリトに接してくれていたが、変わつていないうらしい。

「僕は、始めてましでかな。キリト君。明日奈の兄の浩一郎だよ。ここではコウと呼んでくれ。」

「お父さん…： それに兄さんも…： どうして？」

アスナは、更なる家族の登場に呆然としていた。

「実は…： 京子さんと同じ座標からログインしているお二人を発見しまして、コンタクトを取つたんです。そうしたら、お二人もママの親族とわかりまして…： ゆんゆんさんと言つて、反則ですがレポートを使つてもらつて、連れてきて貰つたんです。」

「私も、浩一郎も偶然仕事が早く終わりまして、折角だから前から用意していたアミュ

「フィアを使ってみようと言う話になつたのですよ。」

「明日奈……生きていてくれて嬉しいよ。話はユイ君から聞いている。にわかには信じられん話だが……私はお前が生きているとわかつただけで十分だ。」

「お父さん……ありがとう。」

「うむ。さあ、明日奈。母さんと話してきなさい。その為に戻ってきたのだろう?」  
「はい。」

明日奈は、京子の方に向き直つた。

「明日奈……ごめんなさい。私は……貴方の事を見ていなかつたわ。私は、貴方に私の持つ価値観を押し付けていた。貴方を失つて、後悔して……ようやく気付いたわ。」「お母さん……私こそごめんなさい。お母さんが生んでくれた命を……自分で……捨ててしまつて……ごめんなさい。」

明日奈は、感極まつて京子に抱きつくと泣き出した。

「お母さん……お母さん……お母さん……」

京子は、小さい頃の明日奈を思い出していた。

「そう言えば、あの頃は明日奈は甘えん坊だつたわねー」

「明日奈……私ね……今は大学を辞めて専業主婦をやつてるのよ?」

アスナが落ち着いた頃、京子は自分今の心境を語りだした。

「えっ!？」

その言葉に驚くアスナ。

「貴方を失つたことと、大学で出会つたある生徒のお陰でね、家族の大切さを再認識したの。今では家の雰囲気も宮城のお爺ちゃんの家に負けないわよ?」

「そうなんだ… 見てみたいな… 変わつた結城家を。」

「見に来なさいな。ユイちゃんから聞いてるわよ? 数年もすれば、現実世界に来れるようになるつて。」

「制限付きだと思うけどね…」

「それでも、いいじゃない。」

「そうだぞ? あそこはお前の家でもあるのだからな。」

彰三が会話に加わる。

「うん。僕たちも待つているよ。あの家で。だから、必ず帰つてくるんだよ?」

浩一郎も続く。

「お父さん、お母さん、兄さん、ありがとう。私、必ず幸せになるからね。そして、現実

世界に戻れるようになつたら、きっと家に帰るからね。」

「ああ、いつでも待つていてよ。それに… ここでなら週一でお前と会えるのだろう?」

「うん。」

「なら、早く仕事を片付けて定期的にログイン出さるようにないとね。父さん。」「もちろんだとも。」

親子の会話が続くなか、

「パパ、ママ… そろそろ時間です。」

ユイが、その時を告げた。

「皆さん、俺たちがここに来れるのは、時間制限があるんです。だから… 今日はここで…」

キリトが、別れの挨拶をしようとしたとき、

彰三が、これだけは言つておきたいと言つて、話し出す。

「キリト君… こんな娘だが、どうか明日奈をよろしく頼む。」

「彰三さん…」

「貴方を否定していた私には、言う資格が無いのはわかっています。ですがどうか… 明日奈を幸せにしてあげてください。」

京子も、キリトに向き直り続く。

「お母さん…」

京子の言葉を聞いて、アスナはまた泣きそうになつた。

「でも、明日奈を泣かせたら承知しないからな。」

浩一郎が釘を指す。

「もちろんだとも。」

「当然です。」

彰三も京子も同意見のようだ。：

「わかりました。明日奈さんは必ず幸せにして見せます。」

キリストは、きつぱりと宣言した。

「おおおおおおおおおおおおお」

周りが騒ぎ出す中、キリト達の身体が光だした。

次の瞬間には、キリト達の姿は無くなっていた。

彰三は、京子の肩に手を置くと、

「大丈夫だ。きっと彼なら明日奈を幸せにしてくれる。それに、また来週には会える。」

「そうですね。」

京子の目には、優しい涙が浮かんでいた。

# プロポーズ

時間のため、俺たちはログアウトした。

出来ればアスナにもつとゆっくり家族と話をさせてやりたかったんだけどな。  
折角、仲直り出来たんだし……

そう、今回のログインでアスナは家族と再会することが出来た。  
確執のあつた京子さんとも和解することが出来た。

本当に良かつた……。

そして……

俺は、アスナの家族からアスナを託された。

だからこそ、言わなければならない言葉がある。

俺は、アスナの方に向き直る。

「アスナ……」

俺がアスナの名前を呼ぶと、アスナが勢い良く抱きついてきた。

「キリト君……ありがとう。キリト君のおかげで、お母さんと仲直り出来た……お父さんや兄さんにも会えた……本当にありがとう……」

アスナは、家族と会えて… お母さんと和解して、感極まっているようだ…  
… 言うタイミングを逃しちゃったな…

でも、アスナの嬉しそうな顔を見ていたら、まあ、後でも良いか… と思った。

「キリト、アスナ、私たちはそろそろ宿に戻るね？」

アスナが落ち着いた頃、サチがそう告げてきた。

「え？ 折角だから、夕飯食べていきなよ。今日は、ご馳走作るよ？」

アスナがそう言つて引き留める。

余程、今日の事が嬉しかつたのだろう。

ご馳走か… 楽しみだ…

「パパ… 涙が出てますよ…」

ユイが呆れた口調で言つてくる…

マズイ… 父親としての威厳が…

「折角だけど、私たちは遠慮するわ。家族水入らずの邪魔をするのは、悪いから…」

「そうですね。今日のところは失礼します。」

ゆんゆんもサチの意見に同意のようだ。

「そう… それじゃあ、サチ、ゆんゆん… 今日はありがとう。また明日ね。」

それ以上引き留めるのも悪いと思つたのだろう。

アスナは、サチ達に挨拶を交わした。

「あ、帰る前に、キリト… 少し良いかな?」

そう言つてサチは俺を手招きした。

「どうしたんだ?」

俺がサチに近づくと、サチは顔を寄せ、小声で、

「キリト、頑張つてね…」

そう言つてきた…

どうやら、俺の心境はサチ達にはバレバレのようだ…  
顔が熱くなるのを懸命に抑えて、

「ああ、頑張るよ。」

なんとか、そう答えた。

「キリト君。サチ… なんだつて?」

アスナが聞いてきた。

「あ、ああ… 今日はお疲れさまつてさ。」

なんとか、誤魔化そつとするが、

「そんなことで、キリト君だけ呼んでわざわざ言わないと思うんだけど…」

アスナに隠し事は難しい…

ジーツと見つめてくるアスナ……レジストしようと頑張る俺……

そんな事を数秒?したあと、

「まあ、良いでしよう。キリト君の隠し事は今に始まつた事じやないしね……」

アスナが折れてくれた……

助かつた……そう思つたが……

「その代わり……キリト君の今日の晩御飯……一品抜きね?」

アスナが笑顔で、俺に残酷な事を言つてきた。

「ちよつ!?: それは酷くないか?」

「知りません。キリト君が隠し事するのがいけないんだよ。ねえ、ユイちゃん。」

「はい。パパは隠し事が多すぎです。それで何度も危険な目に会つているんですから、

少しはお灸を据えた方が良いです。」

俺の抗議は、聞き入れてはもらえなかつた……

それどころか、ユイから説教まで受けてしまつた……

その夜の夕御飯は、本当に豪華だつた……

この中から、一品減らされる……

もう、言つてしまおうか……

いやいや、食欲に負けて言つたら絶対に怒られる。

それに、俺にも男としての矜持はあるのだ…

ガマン… ガマンだ…

「アハハツ… キリト君、凄い顔してるよ… 仕方ないなあ。今日のことは、キリト君のおかげだし、特別に… 罰は解除してあげますか。」

「おお… 流石はアスナ。サンキュー。

… でも… 僕… そんなに凄い顔してたかな?」

「はい。パパつたら、それはもう悲しそうな顔をしてましたよ?」

そ… そうなのか… 僕… そんな顔をしていたのか…

男の矜持が… 父の威厳が…

「ほら、キリト君。早く食べよう? 折角駆走作つたんだから、冷めたら勿体無いよ。」

そうだよな。これと言うのも、アスナの料理が美味しそうなのが悪いのだ。

だつたらせめて、美味しく食べて元を取らねば…

余談だが、俺たちは魔王を倒した報償金で金には困っていない。

それでも、我が家家の財布を預かるアスナはしつかりしたもので、あまり贅沢をしない。

普段から贅沢をするも金銭感覚がおかしくなるからだと言っていた。

彼女の家は、かなり裕福なハズなんだけど…

あればあるだけ使ってしまう俺とは偉い違ひだ…

まあ、そんなことは後だ。まずは目の前のご馳走を食べなければ…

「「「いただきます。」」」

アスナの料理は…： もの凄くおいしかった事を、ここに記す…

時間は更に経つて、夜中と言える時間だ。

ユイは先に休んでいる。

今は、アスナと二人で居間で寛いでいる。

「キリト君…： 改めて…： 今日は本当にありがとう。」

「俺は、きつかけを作つただけさ。」

「そんなことない。キリト君の願い事のおかげで、私はあの世界に戻れた。キリト君がいたから、お母さんにまた出会えた。キリト君が私の手を取つてくれたから、お母さんと話す勇気を貰えた。全部、キリト君のおかげだよ。」

「まあ…： アスナがそう思つてくれるなら、それでも構わないさ。アスナが京子さんと仲直りできて…： 本当に良かつた。」

「うん。私…： もう何度思つたか数えられないけど、キリト君と出会えて、本当に良かつた。キリト君を好きになれて本当に楽しかった。キリト君と愛し合えて…： 私は幸せだよ。」

「俺もだよ。アスナに出会つていなければ…： きつと俺はS A Oの中で絶望のままに死

んでいたと思う。アスナが俺を変えてくれたんだ。アスナがいてくれたから、俺は強くなれた。アスナが俺を守ると言つてくれたから、俺は俺のままでいられた。今の俺があるのは、全部アスナのおかげさ。」

「ありがとう、キリト君……私と出会つてくれて……」

「ありがとう。アスナ……俺と出会つてくれて……」

俺たちは、そう言つて唇を合わせた。

「アスナ……彰三さんたちが最後に俺に言つたこと、覚えてるか？」

「うん。恥ずかしかつたけど……キリト君が私を幸せにするつてしまつかり答えてくれて、嬉しかつたよ。」

「その気持ちは変わらないよ……だからこそ、言わなきやいけない言葉があるんだ。」

「…………。」

アスナが俺の目を見て続きを待つていてる……

「アスナ……結婚しよう。」

俺の言葉に、アスナは涙を浮かべながら、これ以上ないと言うような笑顔を浮かべた。この顔を見るのは2度目だ。

かつて S A O で、アスナにプロポーズした時と、そして今と……

「……はい。キリト君……これからも……いつまでも……よろしくお願ひします。」

「もちろんさ。」

俺たちは、もう一度唇を交わした。

アスナ：必ず君を幸せにするよ。・

そうして、俺たちは幸せな気分のまま、その夜は更けていった。・

# 桐ヶ谷家の人々

「えーーーっ!? アスナさん… お兄ちゃんからプロポーズされたんですかあ?」

アスナから告げられた言葉に、リーファは大仰に驚いた。

今、リーファとアスナは二人でリーファのホームにいる。

キリトには、大事な話があるからと言つて席を外してもらつていた。

今ごろ、アスナの家族の相手をしている事だろう。

「うん。ほら… キリト君… この間、お父さん達に私を幸せにするつて言つてくれた  
でしょ?」

「はい。お兄ちゃん… 淫く格好良かつたです。」

きつぱりと告げるリーファに、少し冷や汗をかくアスナ…

「まあ… それには同意するけど… それでね、その言葉を形にするためについて、あの後  
プロポーズしてくれたの。」

あの兄にそんな甲斐性があるとは…

つくづく、兄を変えたアスナに敬意を抱くりーファ。

「でもね…」

アスナは一転、陰りのある表情になる。

「結婚つて、本当ならお互いの両親に挨拶して、両家を繋ぐものでしょ？でも、私はキリスト君の両親に挨拶していない…それに、キリスト君だって、口にはしないけどお母さんやお父さんに会いたいと思つてると思うの…リーファちゃん…なんとかキリスト君のご両親をここに連れてきて来れないかな？」

「私も、あれ以来何度も、両親をALOに誘つてはいるんですけど…家の親は二人ともアレで結構忙しい方でして、それにアミ Yusf イアも買わないといけないし、いい返事を貰えてないんですよ…」

そう言つて、困り顔になるリーフア。

「アミ Yusf イアなら、お父さんに言えばなんとかなると思うよ？なにしろ自社製品だし…」

「いえ、流石にそれは…」

リーフアが断ろうとするも、アスナは既にショウ3に向けて、メールを送つていた。

「OKだつて。近日中に一台送るそうよ。住所は変わつてないよね？」

アスナの行動力に、断るタイミングを逃すリーフア…

「アスナさん…まだ問題はあるんです。二人とも、私が何度も誘うものだからALOに何があるのかつて、毎回聞いてくるんですよ…でも、どう答えたら良いか…」

「うーん……確かにキリト君……和人君に会えるって言つても信じては貰えないよね。

私の場合は、お母さんが自らログインしてくれていた訳だし……」

「うーん……仕方ない。アスナさんが折角お膳立てしてくれたんだし、出たとこ勝負で誘つてみます。お父さんはともかく、お母さんなら時間さえあれば誘えると思いますよ？もともとゲーマーですから。」

「お願ひね。リーファちゃん。」

リーファの言葉に、リーファの手を取つて真剣にお願いするアスナ。

「はい。頑張ります。」

そう言つて、リーファはログアウトした。

その夜……

「あ、お母さん。話があるの……」

そう言つて、直葉は母の翠に話をした。

父の峰嵩は、今日も遅いようだ。

「なあに？直葉。」

「私と一緒にA L Oにダイブして欲しいの……」

「また、その話？そりやあ、お母さんだつて、出来ればやつてみたいところだけど……時間もお金も無いから、無理よ。まあ、そのうちにね。」

「アミュスフイアなら、問題は無くなつたよ？近日中には届くから。」

「その言葉で、一瞬固まる翠。

「直葉…あんた…一体何をしたの、アミュスフイアを、二台も買えるようなお小遣いは出してないし…まさか…援交…は無いわね…そんな時間、今の直葉には無いものね…」

「当たり前でしよう。」

大声で否定する直葉。

「じゃあ、どうやつて二台も手に入れたの？」

「アスナさんの…お兄ちゃんの彼女のお父さん…覚えてる？」

「もちろん覚えてるわよ。あの和人にあんな可愛い彼女が出来たのも仰天だつたのに、その親はあの『レクト』のCEOをやつてるって言うじゃない。もう、お母さん心臓が飛び出るかと思つたわ…」

おちやらけて翠はそう言つた後、声のトーンを落として、

「それに…彰三氏は和人の葬儀にも顔を出してくれたからね…向こうも、娘が自殺して大変だつただろうに…」

そう続けるのだった。

「それで？その彰三氏がどうしたの？」

一転、明るい声に戻った翠は話を戻した。

「うん。今、アスナさんの家族みんなALOを始めたんだけど、私がお母さん達にもプレーして欲しいって話をしたら、自社製品だから無料で送るって言われちゃって……」

「直葉……あなた……」

流石に顔色が悪くなる翠……

いくら、先方が金持ちで自社の製品だと言つても、いい大人がじやあ……と言つて受け取るのは非常識極まりない……

「わ、私がおねだりした訳じゃないよ? 気が付いたら、話がどんどん進んでたんだから。」「それでもね、大人として面子つてものがあるのよ……ハア……向こうに電話でお断りの連絡をしないと……」

そう言つて立ち上がった翠は、結城家に電話を掛けた。

幸い、連絡先は和人の葬儀の時に書いてもらっている台帳がある。

「あ、もしもし? 結城さんのお宅ですか? 私、桐ヶ谷和人の母で翠と言います。」

そう言つて、電話越しに話すことそ三十分……

電話にしては、随分と長い……

そして、翠が戻ってきた。

「ねえ、直葉……何かお母さんに話しお忘れていることは無いかしら?」

翠は、にこやかに話しかけてくる。

だが、目は笑っているように見えない……

「えーっと……なんの事かな？」

「キリト……つてプレイヤーに心当たり無あい？」

「そうよね？ 私も自分の会社の雑誌で『S A Oをクリアに導いた英雄』なーんて特集組んだから知ってるわ。それでね……さつき、明日奈ちゃんのお母さんと話をしていたんだねどね？ なんでも、今A L Oにキリトとアスナを名乗るプレイヤーがいるそうね？ 何か知らないかなあ？ 黒の絶剣士さん？」

直葉は、観念して今までの事を伝えた。

正直、信じて貰えるとは思っていない。

それでも、伝えなければならなかつた。

何故なら、自分の母親が恐ろしかつたから……

「なるほどね。ねえ、直葉。なんでもつと早く伝えなかつたの？」

「いや、だつて異世界に転生してました……なんて言つても信じられないでしょ？ 最悪、私が頭のおかしい子扱いされちゃうと思つて……」

その言葉に、翠は実に心外だと言わん顔をした。

「直葉… 貴方はお母さんを誤解しているわ。」

「え？」

「お母さんは、筋金入りのゲームよ？ そんな私が異世界転生なんて面白ネタをスルーするような… そんな訳無いじやない。今週中にはアミューズファイアを届けてくれるそ うだから、日曜日にはお父さんも休ませるわ。皆でダイブしましよう。」

桐ヶ谷家で母に逆らえるものはいない。

夫の峰嵩は、自分の知らない間に、ALOをする事が決まった。

そして、日曜日…。

「それじゃあ、行くわよ？ 二人とも。」

翠の号令が掛かる。

「了解！」

直葉は、直ぐに返事をする。

「… 了解…」

峰嵩は、しぶしぶ従う。

「「リンクスタート」」

いつもの合流場所に向かうリーファ一行。

ちなみに、翠はプレイヤー名『ヒスイ』

峰嵩は『タカミネ』と名付けた。

ヒスイはウンディーネ、タカミネはサラマンダーだ。

それを見たりーフアの感想は…：

「うーん… 家の家族… 見事に種族がバラバラだね。」

そして、合流場所に到着。既にキリトたちは集まっていた。

「おう！スグ。今日は遅かつたな。ん？その人たちは？」

キリトはリーフアたちに気づき近付いて声を掛けってきた。

すると、ヒスイが何を思つたか一步前に出てキリトにニコリと笑い掛ける。そして…：

右腕を振りかぶると、腰の入った見事なボディブローを撃ち込んだ…：

「グハッ!?」

悶絶して倒れるキリト…：

「和人… さんざん人に心配掛けといて、私たちに連絡も入れずに遊び呆けるとは良い度胸ね… 覚悟は良いかしら？」

キリトは、ダメージから回復すると、恐る恐る尋ねた。

「… もしかして… お母様でせうか？」

「yes」

「ごめんなさい。」

土下座を敢行するキリト。

母は、基本的に放任主義だ。よほどの事が無い限り怒らない……たが、一度怒ると大変恐ろしかった。

以前、叱られている時に実の親でも無いくせに……つて反論した事があつた……その後の事は二度と思い出たくないほど、キリトの中でトラウマとなつていて……あの時も、ボディブローを食らつたなあ……

—母の愛は、魂にまで響くのよ? —

なんて言つてたけど……さつきのダメージ……アレは眞実の言葉だつたのかも知れない……

ガタガタと震えるキリトに、救いの女神が現れた。

「あの……キリト君のお母さんですよね?」

「そう言う貴方はアスナちゃんね?」

「はい。どうか、キリト君を許して貰えませんか? こうして、このALOに来れたのもキリト君が家族に会うことを願つたからなんです。まだ、現実世界に行くことは出来ないので、こう言う形でしか、この世界に戻つて来れないんです。」

「ハア……仕方ない。アスナちゃんの顔を立てて、許すとしますか。」

いつだって、キリトを救う女神はアスナなのだ。  
アスナに感謝するキリト。

「和人…… 例え異世界でも、貴方が生きていて嬉しいわ。」

その言葉は不意打ちだつた。・

「母さん……ごめん……俺……折角母さんたちが俺を引き取つて育ててくれたのに、何  
も返せずに死んじゃって……ごめん……ごめんなさい……」

キリトは泣いた。周囲の目も憚らず。

「いいのよ、和人。こうして帰つてきてくれたんだもの。頑張ったわね。」

翠は、キリトを抱き締めながらあやし続けた。

キリトは落ち着いた時、あまりの恥ずかしさ落ち込んでいた。

ちゃんと挨拶しないと。」

「… そうだな… えーと桐ヶ谷家、結城家の皆様にお伝えします。この度、俺とアスナさんは結婚することになりました。」

「「「「ええええええええええええええええつ!?!」」」

その爆弾発言にその場の全員が大声で叫んだのだつた。・・

結婚式の準備をしよう！

キリトの爆弾発言に、その場の全員が大声で叫んだ。：

「和人」：結婚をすること、相手の人生を背負うことだ：その覚悟は

あるのか？」

数分後、真っ先に我に帰つたのは峰嵩だつた。

峰は、さすがに覺悟を説いた。

「もちろんさ。向こうでは俺たちも生活基盤を手に入れてるし、仕事もある。それに……既に使いきれない位のお金を稼いでるから…」

「そ、そうなのかな？」

予想外の答えに戸惑う峰嵩

「使いきれない」とつて、實際いくらあるのかしら？」

お金の話しに食いついたのは翠たつた

「えーっと… いくらだろ？家の財布はアスナが握ってるからなあ… アスナ… 今、家のお金つていくらくらいあつたつけ？」

「うん… こっちの世界とは物価も違うし、難しいけど… 多分、数十億つて規模じゃないかな？ 向こうだとそんなに娯楽もないし、正直あまり使い道が無いんだよね。」

「和人お。 家に是非仕送りして頂戴？」

翠が、猫なで声を挙げながら、実の息子にすり寄る。

「無理だからな？ そう言うことが出来ないから、このALOにしか来れないんだよ。 それだつて週一つて制限あるし…」

変わらない母の姿に苦笑しながら、説明するキリト。

「ちえーつ。 折角仕事辞めて廃人ゲーマーに戻れると思つたのに…」

「お母さん…」

その物言いに、呆れるリーフア。

「桐ヶ谷君… 本当にありがとう。 これからも、明日奈をどうかよろしくね。」

次に復帰したのは京子だつた。

「はい。 京子さん。 明日奈さんは必ず幸せにしてみせます。」

「あら？ これからは『お義母さん』でしょ？」

からかい混じりの声に戻つた赤くなるキリト。

それでも、意を決して、

「はい、お義母さん。」

キリトはそう答える。そのやり取りを見て、この人が黙つていな。

「私も、明日奈ちゃんに『お義母さん』って呼んで欲しいなあ……」

「ううう……お義母さん。」

キリト以上に真っ赤な顔で、アスナは答えるのだつた。

そして……

「めでたい。実際にめでたい。キリト君……ありがとう……本当にありがとう。あの日、二度とこんな日が来ることはないと思った。だが、娘の結婚に立ち会える夢が叶うのにな……うおお～ん。」

彰三は男泣きをしていた……

「え～っと……お父さん……言いにくいんだけど……お父さんつ……て言うか、この世界の人たちは向こうの世界に行けないから、式には立ち会えないよ？」

若干、言い辛そうに残酷な真実を伝えるアスナ。

「なんだつて！？キリト君……どう言うことだね？私は、明日奈の父親だよ？その私が何故、式に参加できんのかね？教えてくれないかな？キリト君……さあ……」

彰三は、まるでこの世の終わり……と言つた顔でキリトに迫ると、その肩を掴んでブンブン振り回しながら早口で捲し立てた。

「待つて……彰三さん……話せない……話せないから……」

「お義父さんだろう。キリト君……」

「お……お……義父……さ……ん……」

「良し良いぞ。それで？さつきの答えは？」

「なんとか、彰三が落ち着くよう宥めて、キリトはエリスから言われた事について、詳しく事情を話した。

「それに、この世界の俺たちの戸籍つて、既に死亡扱いになつてますよね？」

「そ、そうだつた……」

キリトの言葉に、絶望する彰三……

「残念だな。キリトとアスナの結婚式……私も出席したかつたわ。」

本当に残念そうに話すのはリズベットだ。

ほかの仲間たちも同様の表情をしていた。

「仕方ない。せめて後日にでも、ここでパーティーでも開きましょう。」  
すぐに、思考を切り替えて代案を出すリズベット。

「……でも、結婚とか結婚式が挙げられたら良いのにね？このALOには、そんなシステム無いからねえ……」

それは、ほとんどリズベットの独り言だつた。  
だが、その言葉を耳に入れたものがいた。

「それだあ!… リズベット君。君は天才だ。何故、私はそんな簡単な事に気付かなかつたんだ!?」

大声を挙げながら、リズベットを称賛するのは、もちろん彰三である。

「明日奈たちがこの世界でしか存在出来ないなら、この世界で結婚式を挙げれば良いだけではないか! 浩一郎… すぐに、会社に戻るぞ。ALOの開発スタッフを至急集めるのだ。」

完全にイツちやつた目で、そう告げる彰三。

「いや、父さん… そんな簡単には…」

「何を言うんだ。アスナの結婚式をお前は見たくないのか?」

「いや、見たいよ? 僕だって、可愛い妹の晴れ姿は見たいさ。でも、そう簡単にシステムのアップデートなんて…」

「浩一郎よ… 私はレクトの元とは言えCEO… 多少の我が儘位言つてもバチは当たらんだろう。」

「いやいや、父さん… 何言つてるの。会社を私物化なんて出来ないからね?」

「そうよ? あなた。ちゃんとメリットを伝えなくては… 私に任せてちようだい。大学で男どもを論破してきた私なら楽勝よ?」

「お、お母さん?」

自分の母親は、こんな人だつただろうか…

真剣に、悩むアスナ…

「そうと決まれば、あなた… 今日の所は早めに落ちて、プレゼン内容を考えましょう。」

「そうだな。皆さん。 そう言う事なので、今日の所はこの辺で… 行くぞ？ 浩一郎。」

「… はい。」

浩一郎の背中は哀愁が漂っていた…

三人は、そのままログアウトしていった…

「ねえ、アスナ…」

リズベットが何か言おうとするも…

「言わないで… 私だつて、あんな両親初めて見るんだから…」

アスナは、混乱していた。

「ま、まあ、これで私たちも二人の結婚式を見れる可能性が出てきたわけだし、結果的に  
は良かった… と思うよ？」

リズベットはアスナを慰めるのだつた。

「うん… そうだね。私もリズたちには祝福して欲しいし… 良かつた… んだよ  
ね…」

アスナは、その言葉に乗つかる事にしたようだ。

一方キリトは、峰嵩に結婚後のアドバイスを受けていた。

「和人……結婚生活を上手く続けるコツは一つ『嫁さんには逆らうな！』だ。」「……それだけ？」

「そうだ。」

「良いこと聞いたわ。ねえ峰嵩さん。私、欲しいものがあるんだけど……」

「翠さん……少し待つて頂きたい。」

キリトは思った……

ただ翠の尻に敷かれてるだけじゃないか……

そして、別れの時間となる。

「それじゃあ皆、また来週に……」

「私たちの結婚式も、まだ日取りは決まってないし……決まつたら一応伝えるね。」

「それでは皆さん、また来週お会いしましょう。」

「そう言って、キリトたちは帰つていった。」

「リズさん……私たちはどうしましようか。」

シリカがリズベットに訊ねる。

「決まってんでしょ？ アスナのお父さんの話が上手く行くかわからないし、私たちは私たちなりに準備をしましよう？ たとえ、システム上、結婚出来なくとも、身内で集まつ

て、擬似的に結婚式挙げたら良いんだし。」

リズベットが答える。

「おお、そりやあ良い考えだ。」

クライインが真っ先に賛同する。

「じゃあ、アスナが着るウェディングドレスを用意したいわね。」  
シノンが提案した。

「キリトのタキシードもな。金のことなら相談をうけるぞ？」

エギルも乗り気の様だ。

「サクヤさんやアリシャさんも招待したいですね。ユージーン将軍は…どつちでも良  
いか…それに、スリーピングナイツの人達も…」

リーファも、話しに参加した。

そうして、キリトの仲間たちはキリトたちの結婚式の話で盛り上がるのだつた。

## 続 結婚式の準備をしよう！

ALOから戻ったキリトとアスナは、翌日カズマの屋敷を訪れていた。

「ああ、キリトたちか。どうかしたのか？」

カズマが用件を訊ねる。

「ああ… カズマ… つていうかアクアに頼みごとがあつて來たんだ。」

「私に？ 何かしら？ お金なら無いわよ？ カズマがお小遣い増やしてくれないから…」

何か勘違いするアクア。

「十分な小遣い渡してるだろ？ お前の金遣いが荒いのが問題なんだろうが。金が入るとすぐに、高い酒買つてきたり、アクシズ教のやつらと豪遊したり… つて言うかキリト… お前、正気か？ アクアに頼みごとなんて… きっととんでもないことやらかすぞ？ 悪いことは言わないから、別のやつに頼んだ方が良いぞ？」

「喧嘩を売つてるなら買つてあげるわよ？ クソニート。」

魔王を倒して、英雄となつたカズマたちだが、その関係は変わらない。

「まあ、それは良いとして、キリト。アクアに頼みとはどう言うことなのだ？」

睨み合う二人を無視して、ダクネスが続きを促す。

「うん。実は私たち… 近い内に結婚しようと思つてゐるの…」

それに、答えたのはアスナ。

「本當ですか？おめでとうございます。二人とも。」

めぐみんはキラキラした目で、二人を祝う言葉を述べた。

「そうか…。それはめでたい。一人とも、私たちにとつては恩人だ。私からも祝福させてもらおう。」

ダクネスも続く。

「キリト… 一発殴らせろ…」

カズマが危ない目をしてキリトに詰め寄る…

返り討ちに会うカズマは放置して、アクアが話を続ける。

「そうなんだ… 二人ともおめでとう。それで… 私に頼みつて何かしら？」

キリトとアスナは互いを見て頷くと、

「実は、アクアに俺たちの結婚式で司祭の役割を努めて貰いたいんだ。」

「私たち二人で相談したんだけど、私たちがこうして、この世界で再会出来たのは、アクアのお陰だから… アクアが女神として、キリト君をこの世界に転生させるきっかけを作つてくれたから、私たちはここにいる。だから、アクアにお願いしたいの。私たちの門出を取り仕切る役を…」

「キリト… アスナ… 二人とも… わかつたわ。その役目… このアクア様に任せて  
ちようだい。きっと素敵な結婚式にしてみせるから。」

泣きながら、了承するアクア。

「場所や日にちはまだ決まって無いから、ゆっくり考えてくれ。一応、英雄として各国か  
ら招待を受けた手前、結婚の話しさえないとマズイから、今ゆんゆんとサチに伝えて  
もらつてはいるところなんだ。」

「なるほどね。わかつたわ。」

「よろしく頼むよアクア。」

「良かつたね。キリト君。」

そうして、二人は帰つていった。

「アスナ… 幸せそうでしたね…」

「そうだな…」

めぐみんとダクネスは互いに先程のアスナの表情を思い出して呟く。

そして、床で倒れ伏すカズマを見てから、ため息を付くのだった。

一方、ゆんゆんとサチはキリトたちの結婚の報を各国に伝えて回つていた。

「なんと… それはめでたい。我が国としてもお祝いさせて頂こう。… それで場所は

どこでやるのかな？この国の城下にある教会は自慢できる立派な物だぞ？きっと、二人の良い思い出になると思うが……」

またか……

ゆんゆんとサチは思った。

行く国行く国で、必ず聞かれる質問と自分の国での結婚式を勧める王たち……どの国も、勇者であるキリトとアスナに恩を売りたいのだ……あわよくば自分の国に取り込みみたいとも考えているのだろう。

「折角ですが陛下、キリトとアスナの両名は自分達の住んでいるアクセルの街に強い思い入れがありまして……そこで結婚式を挙げたいと希望しております。」

「なんと……それでは我が国は、どうやつて祝つたら良いか……出来れば、私自ら祝辞を述べさせて頂きたいが……」

サチの言葉に、残念そうにする王に対し、ゆんゆんが答える。

「その事なのですが、陛下……今、私の開発中の魔法が完成すれば間接的にですが、陛下のお言葉を伝える事が可能となります。」

「なんと……そのような魔法があるのか。」

実はゆんゆん……ALOの月光鏡の魔法を見て、この世界でも出来ないかと研究していた。

「はい。陛下。各国の城の謁見の間と城下町の広場にこれから伝える物を設置してもらえますか？それで私が主となる鏡に魔力を送ることで、鏡に映った影像と音声を届ける事ができます。」

「それは凄い。それでゆんゆん殿……その魔法は教えてもらうことは出来ないか？」

この魔法が実用化すれば、この国的情報伝達速度がとてもなく上がる。

期待する王だったが、

「折角ですが陛下……恐らくは紅魔族の上位クラスにしか使えないでしょう。爆裂魔法にも匹敵する魔力を使いますので……」

そう答えたゆんゆんだったが、実のところ、嘘だった。

そこまでの魔力は使わないのだが、これが実用化した場合、戦争などに使われたときに被害が増えると考え、警戒して遭えて伝えないことにしたのだ。

「そうか……残念だな……」

開発者本人からの話なので疑うこともせず、王は諦めるのだった。

この後、ゆんゆんを巡つて各国がスカウト合戦を始める事になるのだが……それは別の話なので割愛する。

さて、ALOサイドはと言うと……

「さて……じゃあ、キリトたちの結婚式に関して役割を決めるわよ?」  
話し合いはリズベットの司会で始まった。

「じゃあ、サクヤさんたちへの報告と繋ぎは私がやりますね。」

リーファが立候補した。確かにALOで最も有名な彼女が行くのが正解だろう。  
お互いに面識もあるし、友好的な関係を持っているのも大きい。

「私は、アスナのウエディングドレスとキリトのタキシードの発注をアシュレイさんに  
依頼するわ。お互いに生産職つてことで仲もそれなりに良いし、多少割引きしてくれる  
と思うわ。」

リズベットが続く。

「私とシノンさんは、式の催し物を考えたいと思います。」「そうね。」

シリカはシノンを誘つて、既に役割を決めていた。

「金銭的なことは、俺に任せてくれ。」  
エギルは、金銭面でのフオロード。

「俺は……」

クラインが何か言う前に、リズベットが被せる。

「クラインは、アシュレイさんに渡す素材を集めで頂戴。」  
「……いや……俺は……」

「頑張つて下さいねつ。クラインさん。」

「お願いね。クライン。」  
「クラインさん。よろしくお願ひします。」

「集められなかつたら、承知しないわよ?」  
「任せたぞ。クライン。」

「……はい。」

クラインは、泣きそうになりながら了承すると飛び立つていった。  
風林火山を召集するつもりなのだろう。

「さて、じゃあ皆、最高の結婚式にするために……頑張ろー。」  
「「「おーーーーー」」」

リズベットの号令に、仲間たちは拳を上げて答えるのだった。

最後に現実サイドは……

「諸君、集まつてもらつたのは他でもない。実はALOに結婚イベントを追加してもらいたい。」

彰三がALOの開発責任者たちを集め、提案していた。

「いや……結城元CEO……いきなりその様な事を言われましても……今年度のアップデーター計画は既に組み終わつてますから……」

抵抗するスタッフ一同。

「やつてもらいたい……」

「いえ……ですから……」

「いいから、やりたまえ……」

「……。」

温厚な彰三しか見たことのない職員たちは、鬼気迫る表情の彰三に何も言えなくな  
る。

「あなた……そんな頭ごなしに言つては、皆さんがかわいそうですよ？」

そこに、京子が登場した。

あまり職場に顔を出さない彰三の妻の登場に驚いたが、職員たちには京子が救いの女

神に見えたことだろう。

「皆さん。この話にはちゃんと、メリットがあるのです。」

しかし、京子も彰三の提案を否定はしなかつた。

「まず、一つ目は会社のイメージ回復。先の須郷の事件でのレクトのイメージはまだ回復しきつていません。実はこの話のモニターを既に選んでいるのよ。彼らはALOでしか結婚式を挙げられないそうなの。多分メディキュボイドの被験者なのだとと思うわ。そんな二人がALOで結婚式を挙げる……素敵な話よね？」

「それと、もう一つは集客力ね。結婚式を挙げげたくてもお金が無くて挙げられない……そんな人達は、少なからずいるわ？確かにその人達だけなら数は少ないかも知れない。でも、出席する人達もアミューズファイアを付けなければならぬし、それで参加した人達の何割かが継続的なプレイヤーになつてくれたら……」

「なるほど……確かに興味深い話です。」

一人が、京子の話に食い付く。

流石に元とは言え、大学で教鞭を振るつていた京子の説明は分かりやすかつた。

「わかっていると思うけど、これは他社に先んじて行わなければならないわ。わかるわね？」

「はい。任せてください。結城夫人。皆……これから貫徹でプログラムを組むぞ……」

「マジっすか…」

「ウエーイ」

「おー。」

職員たちは、最終的に了承して退出していくた…

「… 上手く行つたな京子…」

「予定通りね… あなた。」

今回の流れは、二人の仕組んだものだつた様だ。

まず、彰三が有無を言わさない高圧的な態度で、相手の思考能力を奪い、京子が冷静な態度でメリットを説明…

思考能力の低下した職員たちは、とても素晴らしい提案だと思い込み、そのまま了承させてしまおうと言う作戦だつた。

他の部署にも伝達する必要はあるが、既に現場スタッフが了承している以上、事後承諾としてどうにでもなる。

何よりも、メリットに関しては事実である以上、レクトの幹部たちも否とは言わないだろう。

かくして、ALOにおいても着々とキリトたちの結婚式の準備は進んでいるのだつた。

## 続続 結婚式の準備をしよう！

カズマたちは、キリトたちの結婚式で役割を頼まれた。

カズマは仲人を…

ダクネスは司会を…

めぐみんは、カズマたちのパーテイーを代表して祝辞を述べる役割を…

そして、アクアは司祭の役割を…

「ふ、ふ、二人の… で、で、出会いは… アレ？ そう言えばあの二人つてどうやつて出会つたんだ？ 僕、知らないぞ？」

「こ、こ、こ、こ、こ、この度は、お集まり頂き… 誠におめでたい… いや違うな？」

「ふ、ふ、ふ、ふ、二人とも、この度は、おめでとうござります…」

今、カズマたちは結婚式の予行演習を行つてゐるが… 勿論グダグダだつた。

「ちよつと… こんなんで… 大丈夫なのかしらね？」

そんな三人の様子を、ソファーに寝転がりながら見ていたアクアが呆れながら言つた。

「う、うるさい！ つて言うかアクアこそ大丈夫なのかよ？ 練習しなくて…」

自覚はあつたのだろう……カズマは動搖しつつも練習もせず余裕のアクアを心配する。

一応、友人のキリトたちの結婚式なのだ。

出来れば、良い思い出にしてやりたい。

……と言うより、アクアがなんかが司祭役なんてやつて、失敗した時……

怒ったアスナを敵にしたくない……

そんな恐怖に刈られての言葉だ。

「ハア？ 私を誰だと思ってるの？ アクシズ教の女神アクア様よ？ カズマ達と一緒にしないでくれる？ もう、とつくに段取りは覚えたわよ？ そんな事もわからないなんて、超ウケるんですけど。 プクスクス。」

アクアは、余裕の態度を崩さない……

それを見て、益々不安になるカズマ。

「わ、私だつて、領主代理として、完璧な司会をしてみせるぞ。」

ダクネスは、アクアの言葉にそう言つて反論する。

めぐみんは、そんな周囲の騒ぎに気づかず、未だに練習を続けていた……

そんな中、屋敷に訪問者が訪れた。

「あ、ようやく来たわね。」

喧騒を止めて、玄関に向かうアクア。

戻つてくると、荷物を抱えていた。

どうやら、先程の訪問者は、荷物を配達しに来ていた様だ。

「アクア？何を頼んだんだ？変なものじゃないだろうな？」

アクアが抱えた荷物に警戒するカズマ。

「ふ、ふくん。これはね、キリトたちの結婚式で私が着る司祭服よ？特注で作つたんだから。」

「… アクア… 金はどうしたんだ？お前、この間金は無いって言つてたよな？」  
「ダクネスに頼んだのよ。キリトたちの結婚式で使うからつて。」

「ああ。用途もハツキリしてゐし構わないと思つて領主代理の権限で渡したな。」  
ダクネスが同意したため、ほつとするカズマ。

「それで？どんな衣装を用意したんだ？」

「ふ、ふくん。見て驚きなさい？」

ニヤニヤしながら、包装から中身を取り出したアクア。

「これは…」

『それ』を見て、固まるカズマ達…

「どう？スゴいでしょ。」

自慢気に胸を張るアクア。

カズマは、フリーズから復帰すると、

「返品してこい……」

そう言うのだった……

「なあんでもよ。」

「お前、何考えてるんだ…… こんなきらびやかで豪華な衣装を用意して…… 花嫁より目立つつもりか？」

そう、アクアが特注で作らせた司祭服は、もはや司祭服とは呼べないほどの豪華な作りとなっていた。所々に宝石も埋め込んであつたりする……

「私の一生一代の大仕事なのよ？ これくらい良いじやない。それに、特注なんだから返品なんて出来ないわよ。」

「結婚式の主役は花嫁と花婿なんだよ。そいつらより司祭が目立つてどうするんだ…… おい、ダクネス…… これは売り払つもつと地味なの用意してもらえ。」

「わかった……」

なんで、アクアに金だけ渡してしまったのか…… 監視しておくべきだった…… 後悔しつつ、カズマの指示に従うダクネスだった。

「待つて…… 返してく。私のなの。私のなの。私の衣装なの。ダクネスのドロボー……」

「人聞きの悪いことを言わないでくれ……」

カズマ達は、平常運転だ……

ちなみに、めぐみんは未だに練習を続けていたりする…… 実は、この娘…… 緊張に弱い子だつたりするのだ……

一方、ALO組は……

「取り合えず、ショウ3からの情報よ？ ALO に結婚のシステム導入が正式に決まったそよ？ 結婚式のイベントも追加されるみたい。」

「「「おおおおおおおお……」」」

リズベットの進行で話は進んでいく。

「それで？ 皆の方はどうかしら？ 私はアシュレイさんに、了承を取り付けたわ。今は、クラインに素材收拾してもらつてる所ね。」

ちなみに、クラインは素材集めのため、この集まりには参加していない。

「サクヤさんたちとの連絡は付きましたよ。それにスリーピングナイツの人達にも…… 皆、参加してくれるそうです。」

リーファが答える。

「結婚式のイベントが正式に決まったので、私とシノンさんは二次会のイベントを企画中です。」

シリカとシノンの方も順調だ。

「素材の件は、俺も店で取り扱ってる物や、募集を掛けてるから、近いうちに全て揃うだろう。」

エギルもそう答えた。

「もう少しだから、皆、頑張りましよう。」

最後にリズベットがそう発破をかけるのだつた。

その頃、クラインは…

「うおおおおおおおおおおおおおお… 待つてろよ… キリト、アスナ… クソ一日近く粘つてるのになかなかドロップしやがらねえ…」

レア素材を集めて回つていた。

ちなみに、今クラインが集めている素材は、エギルの店にあつたらしい…  
ようやく手に入れて戻ってきた時、彼はどんな顔をするのだろうか… それはまた別の話である…

そして現実世界…

「あの… 紹城元CEO… この納期はいくらなんでも…」

開発主任が彰三の出した開発計画を見て戦慄していた。

「大丈夫だ… 私は、君たちなら出来ると確信しているよ。」

「いや… いくらなんでも… これは…」

開発主任が抵抗を試みる…

「なに、君たちだけに、大変な思いをさせるのは私としても心苦しい。納期までは、私もここに泊まり込もうと思っている。」

余計な気の回し方だった…

常に、上司に見張られた職場… 気の休まらない現場を好む職員はいないだろう…

「あと、時々妻も差し入れを持つてくれるぞ？ 何しろ妻が出した企画の様なものだからな…」

「…………」

彰三は、さらに追い討ちをかけてくる。

「さあ、では早速始めようか。」

「い… イエッサー…」

彼らは、まだ知らない……開発中にも彰三や京子の無茶ぶりなアイデアが出され、調整に四苦八苦することになることを……合唱……

そして、キリトたちはと言うと……

「平和だね……キリト君。もうすぐ、ゲームの中じゃなくて、ちゃんと……キリト君のお嫁さんになれるんだね……。」

「ああ……俺も早くアスナと結婚したいよ。」

「皆、私たちの為に頑張つて準備してくれてるんだよね。」

「俺たちは、本当に良い仲間たちを持てたと思うよ……。」

「うん。でも、私にとつての一番はキリト君だよ？」

「俺にとつても、一番はアスナだよ。」

「キリト君……。」

「アスナ……。」

二人は互いに見つめ合ふと、唇を合わせるのだった。

## キリアスの結婚式 このすば編

いよいよ、結婚式当日となつた。

アクセルの街にある教会にて、カズマ達を筆頭に、本日の主役の登場を今か今かと待ちわびていた。

否… 世界を救つた勇者の結婚式を一目見ようと世界中の人々が見守つていた…  
この日の為に、ゆんゆんが開発した月光鏡の魔法を受信する魔道具を各国の城や城下町の広場などに設置していたのだ。

そして、その時は訪れた…

司祭役のアクアが誓いの間中央に立つ。

ちなみに、アクアが今着ているのは、やや上等な司祭服だ。

例の特注品は既に売り払われて、アクアの手元にはない…

その事でかなり揉めたが、カズマお得意の口八丁で、現在の司祭服に落ち着いた。

「それでは、これより新郎キリトと新婦アスナの結婚の儀式を執り行います。」

「そこでは、新郎キリト… 入場…」

「…」

扉から、白のタキシードを来たキリトが入場する。

「おお… あれが魔王を倒した、黒の勇者キリトか。」

「カツコいい！」

「素敵！」

「… 黒くないじやん…」

キリトの姿を写した魔道具を見た人々は様々な感想を口にした。

その殆どは好意的なものだ。

「続いて、新婦アスナの入場です。」

ウエディングドレスを来たアスナが姿を表す。その目には、既にうつすらと涙が煌めいていた。

「……美しい…」

どうやら、本当に美しい物を見た人々は、無口になるようだ。

「本来であれば、新婦には父親が付き新郎に引き渡すと言う流れがありますが、皆さんも知つての通り、この二人は異世界より神が遣わした存在。この世界に身寄りはありません。ですから、私… アクアがアスナの父親の代理として、キリトを夫と認め、引き渡しましょ。」

ギヨツとするカズマ。実はこの台詞、アクアのオリジナルだつたりする。

しかも、リハーサルでもやつていな……

「ありがとうございます。アクア様。貴方の言葉に恥じぬよう、精一杯アスナを幸せにして見せます。」

キリトは、アドリブで返す。

「期待していますよ。」

アクアが微笑む。

「それでは、私から言葉を送ります。」

カズマは冷や汗を搔いていた。：

そう言えば、この世界に聖歌や聖書なんて無いよな……何を言う気だ？  
まさか……

「アクシズ教教義から……迷った末に出した答えは、どちらを選んでも後悔するもの……  
どうせ後悔するのなら、今が楽チンな方を選びなさい。汝、老後を恐れるなかれ。未来  
の貴方が笑っているか、それは神ですらもわからない。ならば今だけでも笑いなさい。  
もし、あなた達が、迷い……苦しんだ時にはこの言葉を思い出しなさい。きっと、その  
時に光となります。」

よかつた……マシなやつだった。

もし、アクシズ教徒たちはやれば出来る。出来る子達なのだから、上手くいかないの

は貴方のせいじやない… 上手くいかないのは世間が悪い。嫌なことからは逃げれば良い。逃げるのは負けじやない… 逃げるが勝ちと言う言葉があるのでから… なんて言い出したら… 本気で狙撃して黙らそうかと思つていた所だ… ホツと一息付くカズマ。

「それでは、続いて誓いの儀式に移ります。」

アクアは、厳かに二人に問う。

汝、キリトは、この女、アスナを妻とし、  
良き時も悪き時も、富める時も貪しき時も、  
病める時も健やかなる時も、  
共に歩み、他の者に依らず、  
死が二人を分かつまで、

愛を誓い、妻を想い、妻のみに添うことを、  
神聖なる婚姻の契約のもとに、誓いますか？  
誓います。」

キリトが答える。

汝、アスナは、この男、キリトを夫とし、  
良き時も悪き時も、富める時も貪しき時も、

病める時も健やかなる時も、共に歩み、  
他の者に依らず、死が二人を分かつまで、  
愛を誓い、夫を想い、夫のみに添うことを、  
神聖なる婚姻の契約のもとに、誓いますか？

「誓います。」

アスナも答える。

皆さん、お二人の上に神の祝福を願い、  
結婚の絆によつて結ばれた このお二人を  
神が慈しみ深く守り、助けてくださるよう  
祈りましょう。

世界中の人々が、二人の為に祈る…

その時、女神アクアの像が光輝いた…

『女神アクアの名の元に、その祷りを聞き届けました。一人の新たな絆に祝福を…  
その言葉と共に、キリストとアスナの体も同じ輝きに包まれた。

周りがざわめきだす。

「おい… 見たか？そして聴こえたか？」

「ああ、俺にも聴こえた…」

「私も……」

「女神様自らが降臨なされたんだ……二人を祝福するためになんか？」

「さすがは世界を誘った勇者様だ。」

カズマは思つた……

やりやがつたな、あのバカ……

実は、これ……アクアの自演だつたりする。

特注衣装を諦めさせるため、カズマが言つた言葉……

司祭として目立つより、女神として目立つべきだろう？後で、二人を導いた女神  
だって周りに言つてやるからー

その言葉で、アクアはこれを思い付いたらしい……

幸い、好意的に見られてるが……もし失敗してたら恐ろしいことになる所だ……  
カズマが冷や汗を搔きながら見守るなか、式は続いていく……

「それでは、指輪の交換を……」

この指輪は、ユイが二人のために選んだものだつた。

ユイは二人の式の前に、不安そうな顔をしていた……  
キリトもアスナも、ユイを心配して声をかけた……

ユイは良い辛そうにしながら、理由を答えた。

「私は、お二人の本当の子供ではありません……パパ達が正式に夫婦になり……本当に子供が出来たら……私の居場所は無くなるんじやないかって……最近そんな事を考えてしまふんです……ご免なさい……パパ達が幸せになることは良いことなのに……」

私は、それが怖くて……」

キリトもアスナも後悔した……

二人の結婚が決まつてからと言うもの、その事にばかり考えがいつて、ユイの事を見ていなかつた……

ユイがここまで自分を追い詰める前に、気がつけたら……

「ユイ……ゴメンな……お前がそんな悩みを抱いてるのに気づけなくて……」

「ユイちゃん……誰がなんと言おうと、貴方は私たちの子供だよ？」

二人はユイを抱き締めて、謝りながら伝える。自分達の関係は、いつまでも変わらないことを……

「ハイ……パパ、ママ……私も……いつまでも二人の子供でいたいです。」

ユイは改めて、キリトたちの子供でありたいと願うのだった。

「ユイ……これからもヨロシクな。」

「私もね。」

それに答えるキリトとアスナ。

そして、アスナは続ける。

「それにね……私たちに子供ができたら、ユイちゃんはお姉ちゃんになるんだよ？妹か弟かはわからないけど……ユイちゃんも可愛がつてくれないとね？」

「わ、私がお姉ちゃんですか？」

ユイは、その言葉に驚いた。そして、姉となつた自分を想像する……

「エへへ……なんか恥ずかしいような……嬉しいような……不思議な気持ちです……」

「パパ、ママ……私、早くお姉ちゃんになりたいです。だから頑張ってくださいね。」

キリトはひきつった顔で頷くしかなかつた……

その翌日、三人で出かけた帰りに、ユイが見つけた宝石店でユイが選んだ結婚指輪を購入したのだつた。

二人は互いに指輪を手に取ると、お互の指にはめた。

「それでは……誓いのキスを……」

キリトがアスナのベールを上げる。

そして……キスを交わす二人……

アクアは、二人の手を取ると、その手を重ねて宣言する。

「今ここに、二人の結婚は成立しました。」

『うおおおおおおおおおおおお』

『おめでとう』

『お幸せに』

『末長く爆発しろ』

世界中が歓声を上げた。

「キリト君‥‥これで私たち‥‥本当の夫婦になれたんだね‥‥」

「ああ‥‥これからもよろしくな、アスナ。」

「ハイ‥‥ふつつかものですが‥‥末長く‥‥ううん‥‥いつまでも、よろしくお願ひします。」

「愛してや。アスナ。」

「私も‥‥愛しています。キリト君。」

アスナは涙を拭うこと無く、キリトに抱きつく。

アスナは思つた。

この世界に来られて本当に良かつた‥‥

この素晴らしい世界に感謝を‥‥

# キリアスの結婚式 S A O 編

アクセルの街にてキリト達が結婚式を挙げてから一月の歳月が流れた。：

ようやく、A L O における結婚のシステムが完成し、導入の運びとなつた。  
そして、今回はそのモニターとして彰三が選んだプレイヤーである『キリト』と『ア  
スナ』が結婚式を挙げる。：

彼らはA L O において有名なプレイヤーであり、また現実においても恋人関係にある  
ことは有名な話なので、二人に頼んだ。：

と言うシナリオになつていた。：

そして、今まさに結婚式が執り行われている。  
ユイに手を引かれ、先に姿を表したキリト。

彼の身に纏う衣装は、アシュレイ渾身のタキシードだ。

そして、キリトは今、新婦であるアスナを待つている。

「それでは、新婦の入場です。」

司会のN P C の進行に合わせて扉が開く。

そこに、ショウ3に手を引かれたアスナが入つてくる。

アスナが身に纏うのもまた、彼らの仲間たちが集め、アシュレイが作り出した最高のウエディングドレスだった。

アスナがキリトの所までやつて来る。

シヨウ3とキリトは共に礼をし合う。

「キリト君… 娘を… アスナをよろしく頼むよ…」

そう言つてシヨウ3は、キリトにアスナを託すのだつた。

この時、キリトは思った。

やはり、彼女の親から直接頼まれるこの儀式は、結婚式に必要だな…  
あの世界の人たちには悪いけど、俺たちにとつては、家族のいるここで、結婚式を挙げることに意味があるんだ…

そう、この結婚式にはキリトの家族も、アスナの家族も参加している。  
そして、キリトたちにとつて大事な仲間たちも…

そして、結婚式は続していく。

「それでは、誓いのキスを…」

「キリト君…」

「アスナ…」

キスを交わし合う二人。

「今ここに、二人の結婚は成立しました。」

司会の宣言と共に、二人の身体が光に包まる。

どうやら、ALOにおいて婚姻を結ぶと何らかのバフかスキルが掛かるようだ……

後に、ステータスを見たキリトは戦慄した。

婚姻関係にある男女が一定以内の距離にいると、全ステータスが1・1倍される。  
但し、離婚をした場合、全ステータスが0・9倍にされる。

そして、一度結婚をした者は、二度と他のプレイヤーと結婚は出来ない  
確実に、これは彰三からのメッセージだろう。アスナを不幸にしたら許さん……  
そう言われている気がした……

実のところ……キリトは勘違いしているが、この設定を作ったのは京子だつたりする。

だから、キリトにメッセージを送つたのは彰三ではなく京子なのだつた……

そんなことを知らない今のキリトたち。

キリト達を祝福する出席した多くのプレイヤー達。

そこには、様々な種族の壁を超えた集まりがあつた。

ちなみに、一番号泣していたのはショウ3だつたことをここに記す。

そして、最後のブーケトス…

この後の出来事により、ブーケトスは禁止イベントとなつた…

何があつたかは…皆さん想像にお任せする…

式は披露宴に移る。

「いやあ…まさか、ちゃんと酩酊状態になれる酒を作つてくるたあ…ショウ3氏…スゴいっすね。」

披露宴には酒が用意されていた。それを見たクライインは、ショウ3…と言うより開発スタッフを讃める。

「当たり前じやないか。クライイン君。酔えない酒など酒ではない。そして、披露宴で酒が出ないなどあり得ない…あつてはいけない。私自らが実験台となり、それはもう膨大なデータの中からレシピを開発したのだよ。」

「この無茶ぶりのせいで、開発は数週間延びた…合掌…

「それでは、新郎新婦の入場です。」

キリトとアスナが手を繋いで現れた。

拍手で迎える一同。

「ううつ…アスナ…良かつた…本当に良かつた…」

ショウ3は、ことある毎に泣いていた……

「あなた……」

それを慰めるのはキヨーコ。キヨーコも気持ちは同じだ……いや……アスナが死んだときの後悔の念はキヨーコの方が大きい……一番喜んでいるのはキヨーコなのかも知れない……

キリトの挨拶が始まつた。

「皆さん……今日は俺達のために、こうして集まつていただき……本当にありがとうございます。俺達が結婚式を（この世界で）行うのは不可能だと……そう……思つていました……」

「本当なら……俺達をここまで育ててくれた両親や、俺達を支えてくれた仲間たちに祝福してもらいたい……それが叶わない事を残念に思つていました……ですが、皆さんの……特にショウ3を始めとしたALOのスタッフの人たち……それに衣装の為の素材集めや、友人達への連絡、それに金銭面でも……支えてくれた仲間たち……本当に大勢の人々のお陰で……こうしてここで……結婚式を挙げることが出来ました……」

「本当に……本当にありがとうございます。そして、どうか……俺達の新しい門出を祝

福し、これからも見守つてください。」

「あなた……和人は立派になつたわね。」

「そうだな…」

キリストの挨拶を感慨深げに見守る桐ヶ谷夫妻。

「それでは…：乾杯」

『かんばーい。』

ケーキ入刀…

これに使用されたのは、キリストの失われた最強の武器エクスキャリバーだつたりする…

この後、お色直しやシリカたちの出し物などが続く。

そして、

アスナから両親への言葉…

流石にメール機能のあるこの世界に手紙は作れなかつたようだ…

「お父さん、お母さん… 今日は本当にありがとうございました… 二人が私を生み、育ててくれたからこそ、私は、キリスト君と出会い… こうして結婚することが出来ました。私は今… 本当に幸せです…」

「でも… だからこそ… 今日ほどあの時の事を後悔した日はありません… 私は… 二人の愛情に答えられないどころか… 否定さえしてしまいました… 私は… これほど二人に愛されていたのに… ゴメンナサイ… ゴメンナサイ…」

アスナは最後まで言う事が出来なかつた……そこでアスナは泣き出してしまふ……  
キヨーコもショウ3も……そんなアスナを放つて置けず、アスナを抱き締めて話しかける。

「もう良いのよ。アスナ……確かに貴方のしたことが間違つてないなんて、口が避けても言えないわ……でも、私だつて貴方への接し方を間違えたわ。」

「私も……仕事を理由にお前を放つていたことを後悔したよ。私たちは皆……間違えたんだ……」

二人もまた、自身の後悔を告白した。

「だが、今こうしてやり直すことが出来た……だからアスナ……笑つてくれないか?こんな目出度い席で、泣き顔なんて見せたら、キリト君に失礼だろう?」

ショウ3は、そう言つてアスナに笑いかけた。

「お父さん……ハイ……」

そして、先程言えなかつた最後の言葉を伝える。

「お父さん、お母さん、私は……二人の娘として、幸せになります。キリト君と一緒に……だからどうか……見守ついてください……」

こうして、ハプニングこそあつたが披露宴は幕を閉じたのだった……  
そのまま無礼講の飲み会へと突入……

「クラインが、飲み過ぎて吐いたり……」

リズ達が酒を理由にキリトに迫つたり……

アスナが女性陣を蹴散らしたり……

と賑やかに時間は過ぎていった。

そして……

「皆……今日は本当にありがとうございました。」

「最高の結婚式になりました。」

「また、お会いしましょう。」

別れの時間となつた……

「キリト……アスナ……本当に結婚おめでとう……」

クラインの言葉を、筆頭に別れの前に改めて二人を祝う面々。

『私からも、祝いの言葉を贈らせてもらおうか……』

突然姿を表した男に驚く一同……

「……茅場……」

キリトは、その男の名前を呟いた……

そう、そこにいたのは茅場昌彦だつたのだ。

警戒するキリトに茅場は苦笑する。

『警戒は必要ないよ‥‥ キリト君。本当に君たちを祝いに来ただけさ‥‥ 君たちは、システムすら超越した存在だ。私が憧れた存在と言つていい。そんな二人が結婚したと言うのでね‥‥ こうして祝いの言葉を贈りに来たのだよ。』

『キリト君‥‥ アスナ君。結婚おめでとう‥‥』

そう言つて、本当に何もせずに消える茅場‥‥

「何しに来たんだか‥‥」

苦笑いを浮かべながら呟くキリト‥‥

改めて、別れの挨拶を済ませ異世界へと戻るキリト達。

「キリト君‥‥ 今日からは本当の意味で夫婦だよ？ よろしくね？」

アスナの笑顔は‥‥ 輝いていた‥‥

# 帰郷

キリト君と結婚してから3年の月日が流れた…

今、私たちは私の実家である結城家の家の前にいる。

そう… ようやく、現実の世界に来ることが出来るよになつたのだ…

ただし、ALOへのログイン以上に制約が強いのだけど…

私は、エリス様の言葉を思い出していた。

「キリトさん… アスナさん… 大変遅くなつてゴメンナサイ。ようやく、向こうの世界に行くメドが立ちました。」

「本当ですか？エリス様…」

キリト君が、突然のエリス様の降臨と言葉に驚きながら聞き返した。

「はい。遅くなりましたが、向こうとの調整も済みました。と言うよりも、向こうの世界の神々があなたの方なら問題ないと判断したのですけどね。ALOでのあなた達の行動、

そして、制約を守つてログインしていたからこそ、許可が降りたのです。」

「そうか…あのALOにだけ、ログイン出来るようになつたのには、神々の規定以外に、私たちを見極める試験的な意味合いとあつたんだね…」

エリス様の話はまだ続く。

「とは言え、現実世界への行き来に関しては、当然ALO以上の制約が課せられます。」「と言うと?」

「年に一度…24時間限りの訪問となります。そして、行き来できるのはキリストさんのこの世界での家族のみとなります。」

「つまり、今、ここにいる者達以外…カズマ達を連れていいくことは出来ないと言うことですか?」

キリスト君の言葉に頷くエリス様。

「あの…ユイちゃんは向こうの世界に連れていいけるんですか?」

私は、それが気になつた。もともとユイちゃんはデータの存在だ。向こうに肉体なんてない。ユイちゃんを一人だけ残していくのは…

「もちろん行けますよ…」と言うより肉体云々の話ならキリストさん達の向こうの肉体だつて、既にお墓の中なんですよ?」

エリス様が、私の考えていた事を読んだのだろう…そう答えた。

そう言えばそうだよね……

ハハハハハ……

「制約が大きい理由も、そこにあります。あなた方は、今の肉体で向こうに行き来することになります。知つての通り、この世界の人間の肉体能力は、向こうの人たちより遥かに強い。ましてや、英雄と呼ばれるあなたの方の力は、向こうでは英雄どころか神人と呼ばれてもおかしくないレベルでしょう。」

「つまり、力を使うな……と言ふことですか？」

キリト君が確認する。

「そう言うことです。特に魔法などはもつての他でしょう。まあ、魔法など使わなくとも、今のキリトさん達なら大抵の事は危機にもならないと思いますよ？」

私たちが、その言葉を理解したのは、この世界に来て、私の家へ移動中の事だつた。

キリト君が、電車のキップを買いに（お金はエリス様から貰っている）行つている間に、軟派男達に私達が囲まれたのだ。

正直、今の私の状況を見て軟派するような男がいるとは思つていなかつたので、対応が遅れてしまつたのだ。

男達がニヤニヤした顔で囁いを狭めてくる。

： 軟派： と言うより、別の目的なのかもしれない。

とは言え、私は強引に突発することは、とある事情により出来ない……  
ユイちゃんが、私を庇うように前に立つた。

そう言えば、人間形体のユイちゃんは、向こうに行つてからの5年間で成長して、今  
では中学生から高校生と言つた見た目となつていて。

当然、美少女よ？

私たちの娘だからね。

え？ なんでそんなに余裕あるのかつて？

だつて、ほら……キリト君が近くまで来てるもの……

「俺の嫁さんに何か用か？」

キヤー（^\_-）俺の嫁だつて……

ああ……何度聞いても良い響きだよね。

「ちつ、もう戻つてきやがつた。アイツラ、足止めしとけつて言つといたのに。」

リーダー格の男が呟いた。

どうやら、キリト君の方にも男達の仲間が行つていたようだ。

「良いからすつこんで……ぐはつ」

男が言い終わる前に、キリト君のデコピンで後ろに倒れる男。

周りの男達も啞然としていた……

ああ、これがエリス様の言つていたことか…

「おい… こいつ何しやがつた…」

「デコピンで人がぶつ飛んだぞ?」

「ヤバくねえか?」

「逃げるぞ…」

男達は退散していった。

「大丈夫か? お姫さま方?」

キリト君が冗談混じりに言つてくる。

「ええ、大丈夫ですよ? 勇者様。」

「パパ… かつこ良かつたですょ?」

周りから拍手が聴こえる。

そう言えば、公衆の面前だつた…

恥ずかしくなつた私たちは、その場を退散した。

… それにしても… あんな公衆の面前で犯罪紛いの行為をするなんて、あの男

達… 何考えていたのかしら?

… どうやら、魔法を使わずに切り抜けた様ですね。力もほとんど使っていません

し…

これなら問題ないでしよう…  
どこからか、そんな声が聞こえた。

余談だが、この男達はこの後逮捕される事になるのだが、全員揃つて記憶がないと答えるのだつた。

だが男達は他にも強姦など余罪は多く、結局、刑務所に送られる事となる。

そして、私たちは今、結城邸の前まで来ている。

私は、緊張してなかなかインターフォンを、押すことが出来ないでいた…  
私は、一度…自らこの家の住人としての自分を捨てた…

ALOで、既に家族と和解しているとは言え、家に着いた途端、身体が硬直したよう  
に動かなくなつてしまつた…

キリト君は、ずっと待つてくれている。

この家に…良い思い出なんて無かつた…  
そう思つていた…

でも、こうして数年ぶり見た結城邸を見て、この家にも、ちゃんと楽しい思い出はあつ  
た…と…思い出した…

勉強して、良い点を取つて帰ってきた時、両親が誉めてくれて嬉しかった…  
兄さんが、私に構つて遊んでくれた時、楽しかつた…

私は、自然と涙が溢れてくる…

その暖かさが、私の身体の硬直をゆっくりとほぐしていつてくれた…  
そして私は、インターフォンを押した。

『はい。どちら様?』

お母さんが出た。

私は、とある事情によりALOにしばらくログインしていなかつた為、本当に久しづ  
りに母の声を聞いた。

一応、キリト君から事前に私たちの両親に、今日帰郷することを伝えてある。  
両家の家族は、今日の夜この家に集まる事になつてゐる。

「えつと…明日奈です。」

私は、まだ緊張が完全に溶けていないうで、小さい声で、それしか言えなかつた。  
それでも…

扉が開いた…

お母さんが…お母さんが目の前にいる。

私の姿を見たお母さんは、勢い良く私に抱きついた。

「明日奈……明日奈……良かつた。本当に良かつた。お帰りなさい。」  
お母さんが私を抱き締めて泣いている……

「お母さん……ごめんなさい……お母さん……うわあああああ。」

私は、お母さんの腕の中で子供のように泣いてしまった。

お母さんの姿を久しぶりに見て……あの強かつたお母さんの涙を見て……私は、罪悪感に押し潰されそうになりながら、ひたすらお母さんに謝り続けた。

私が落ち着いた頃……お母さんが改めて声をかける。

「改めて……お帰りなさい。明日奈。」

「……ただいま……お母さん。」

ようやく、言えた……

ただいま……私の家……

# こんにちは赤ちゃん

ようやく現実世界で再会したお母さん…

そのお母さんが、キリト君の方を見て話しかける。

「和人さんも、ようこそ。こうして、生身でお会いするのは、はじめてね。」

「はい。その節はありがとうございます。」

キリト君が、緊張した面持ちで答えた。

やはり、生身のお母さんは、迫力がある…

「良いのですよ？ 私たちは、義理とは言え家族ですもの。他人行儀は辞めましょう…」

お母さんは、キリト君の緊張を察したのか、表情を和らげて、話を続ける。

「それで…」

そして、キリト君の腕の中を見て…

「その子がこの間話していた、あなた達の子供ね？」

そう… 今キリト君の腕の中には、私が生んだ私たちの子供がいるのだ。

ほんの2ヶ月ほど前に産まれた私たちの子供…

私の妊娠が発覚してから、この子が生まれるまで、私はALOへのダイブは禁止され

た。

キリト君の能力による母体への影響が未知数だつた為だ。

キリト君も、私に遠慮してか、皆に近況を伝える以外でのダイブはしなかつた。

そう言えば、この子を初めて見た時のユイちゃんは、物凄く喜んでいたなあ。

「はじめまして。私はユイ。あなたのお姉ちゃんですよ。」

そう言つてから、しばらくこの子の側から離れなかつたつけ…

ここに来るまでは、私が抱いていたのだけれど、この家でインターフォンを押すのは  
私の方が良いとキリト君が言い出したため、キリト君に預けていた。

「名前は確か…」

「… キリアスです。」

この名前はエリス様が付けてくれたんだけど…

正直… 恥ずかしい…

私は、その時の事を思い出していた…

「え？ エリスに連絡取れないかつて？」

私たちは、カズマの屋敷を訪ねていた。

アクアに、エリス様と連絡が取れないか聞くためだつた。

理由は、先日生まれた私たちの子供に名前を付けて貰いたかつたからだ。

「あ、俺、連絡付けられるぞ？」

そう言つたのは、以外にもカズマだつた。

「ちよつと、カズマ…なんであんたがエリスと連絡取れるのよ…」

「そうだ。なんでカズマがエリス様と連絡取れるんだ。同じ女神のアクアならともかく、敬虔な信者の私にも無理だと言うのに…」

アクアとダクネスが驚いて、カズマに詰め寄る。

「いや…エリス様、時々この世界に降りてるんだよ。姿を変えて…俺はその時のエリス様を知つてるからな…」

「え？あの子つたら、そんな事してたの？ど真面目なあの子にしては、珍しいわね…ねえ、カズマ…」

「教えないぞ？エリス様に止められてるから…」

そんな二人のいつものやり取りは、スルーして…

「じゃあ、連絡取つてもらえないか？」

キリト君が話を続ける。

「良いけど、理由はなんだ？」

「ん？いや、まあ…その…なんだ…この子の名付け親になつて貰いたいんだよ。結婚式ではアクアに活躍してもらつたし、向こうへの帰還つて言う俺の願いでも、お世話になつてるしな。」

「なるほど…それは良い考えだな。と言うかエリス様に名付けて貰うなど、とてつもなく栄誉な事だろう。きっと良い子に育つぞ。」

ダクネスは、エリス教徒らしく賛成してくれた。

「そんな事をしなくても、名前なら私が良い名前を考えあげますよ？」  
めぐみんが、自己主張してくる…

「よおし、わかつた。エリス様に伝えておくよ。」

マズイと思つたのだろう…カズマがその言葉を遮るように大声で言った。  
ありがとうカズマ…もしめぐみんに任せたら、とんでもない名前を付けられる所  
だつた…

なにしろ、紅魔族のネームセンスは独特だからなあ…

めぐみんの名前もそうだし、めぐみんが飼つてる猫には『ちよむすけ』…カズマの愛  
刀に『ちゅんちゅん丸』なんて名付けるし…  
「頼むよ、カズマ。」

キリト君もカズマの話に乗っかり、なんとかめぐみんの名付けは阻止出来た。

それから一週間後…

私たちが、部屋で寛いでいると、

「キリトさん、アスナさん、それにユイさんも… お久しぶりですね。」  
エリス様が降臨された。

「お久しぶりです。エリス様。」

「話はカズマさんから聞かせて頂きました。私に、その子の名付け親になつて欲しいと  
か。」

「はい… 困々しいお願ひだとは思いますが、もし良ければ、生まれてくるこの子に名前  
を付けて上げて欲しいんです。結婚式では、俺たちを転生させてくれたアクアに司祭を  
頼みました…」

「だから、今度は俺たちを受け入れてくれた、この世界の女神である貴方にお願いしたい  
んです。」

「俺たちがこうして一緒にいられるのも、新しい命を授かつたのも、この世界のお蔭です  
から。」

「うん。本当にこの世界には感謝している…

こうして、キリト君と結婚して… 子供も授かつて…

もちろん、大変な事や悲しい事もあつた。

それでも私は、今幸せを感じている。

だから、感謝している… この転生を。

「私たちは、この世界の魔王を倒してもらいたいとお願ひしていた立場ですから、そこまで感謝する必要は無いのですが… 良いでしよう。魔王を倒した勇者の頼みとあつては無下にも出来ませんしね。」

エリス様は、そう言つて微笑む。

「では、アスナさん… 少しお腹を触らせて貰いますね？」

エリス様が、私のお腹を触ると目を閉じた。

数秒して目を開けたエリス様…

「貴方たちの子供は男の子の様ですね。」

「そうか… 名前を付けるのにも性別がわからないと付けられないものね…」

「決めました。貴方たちの子供の名前は…」

『キリアス』

「キリストのキリスト、アスナのアスを合わせた名前です。英雄の名前を掛け合わせた最高

の名前だと思いますよ？」

「そうだった… ここは洋名が基本の世界…」

日本人っぽい名前なんてエリス様が付けるハズが無かつた……

それにもしても……エリス様……安直過ぎませんか？

……なんて言えないよね……スゴく良い笑顔だもん……

それに、自分達からお願ひしたのに、気に入らないからやつぱり無し……なんて言え  
ないし……

「あ、アスナさん？」

「ひやい（ハイ）……」

動搖して、変な返事ををしてしまつた……

「お腹の赤ん坊が、無事出産出来るように、少しだけ私の加護を授けました。良い子を産  
んで下さいね？」

……そうだよね。名前よりも無事に産まれてきてくれたら、きっとそれが一番よね。  
「ありがとうございます。エリス様……きっと元気な子を産んで見せます。」

エリス様は、私の言葉に満足したのだろう。天界に帰つていった。

『キリアス』ですか。パパとママの名前を貰えるなんて、羨ましいです。でも……早く  
産まれてこないかなあ。』

ユイちゃん……スゴいキラキラした目で、私のお腹を見てるけど……予定日はもう  
ちよつと先だからね？

それから一月後…：キリアスはこの世界に生を受けた。  
周りの人たちは、皆祝福してくれた。

キリアスという名前も、私たちが有名だからか、直ぐに受け入れられて、ホツとしていた。

そして、現在…：

「ここにちは。キリアスちゃん。おばあちゃんですよ。」

お母さんが、破顔した表情でキリアスをあやしている。

お母さんが、こんな顔をするなんて…：

「ほら、三人とも？ いつまでも玄関にいないで家に入りなさい。」

「ハイ。おばあちゃん。」

ユイちゃんは、真っ先に同意した。

そう言えば、ユイちゃんを知った後の、お母さんやキリト君のお義母さんは、ユイちゃんをとても可愛がっていたつけ…：

「お邪魔します。」

キリト君の言葉に、

「和人君？ ここは貴方の家でもあるのよ？」

久しぶりに、厳しい表情を見せるお母さん。

何を言いたいのかわかつたのだろう。

キリト君は苦笑して、それから

「…た、ただいま。」

そう言うのだった。

その言葉に満足したお母さんは、

「おかえりなさい。」

そう返した。

「ほら、アスナも…」

「ただいま。」

「おかえりなさい。」

ああ、本当に帰つてきたんだね。

ありがとう、キリト君。キリト君のお蔭だよ。

キリト君に感謝しつつ、私は家の中に足を踏み入れた。

# 明日へ

結城家に足を踏み入れた俺たちを出迎えたのは、スグだつた。

「お兄ちゃん… お兄ちゃんだ。ホンモノだよね？」

そう言つて、抱きついてくるスグ。

「ああ… 俺だよ。スグ… ようやく帰つて来れたんだ。この世界に。」

「ウン… ウン…」

スグは、そのまま俺の腕の中で泣いていた。

「それはそようと、スグ… 学校は良いのか？」

スグが落ち着いた頃、疑問に思つていた事を聞いてみた。

「お兄ちゃん… 私、もう大学生だよ？ 講義も自分で選んでるんだし、一日位休んだって大丈夫だよ。」

「なるほど… つて結局休んでるんじやないか。」

「えへへ。でも、私だけじや無いんだよ？」

「えつ？」

「やつほー、和人。」

「母さん… あんたもか…」

「あら、私はちゃんと有給取つたわよ？ スグと違つてズル休みした訳じゃないんだからね。」

「ちよつとお母さん酷いよ。」

「事実でしようが。それに、京子さんだけに歓迎会の準備をさせとくわけには行かないでしょ？」

まあ、確かにその通りだよな…

「それより和人… 京子さんが抱いてる子…」

「あ、ああ。あの子が俺たちの子供のキリアスだよ。」

「キヤー、可愛い。京子さん、私にも抱かせて下さいな。」  
「キリアスちゃん。おばあちゃんですよ。」

「むつ。お母さん。私も抱っこしたい。」

女性には赤ん坊つてのは人気だな… やっぱり。

だが、この認識は甘かつた…

このあと、彰三氏が帰つてきた時の溺愛っぷりは女性陣遙かに超えていたのだった。

「あ、お兄ちゃん。リズさんたちから伝言預かってるよ？ 今回の帰郷は家族だけで過ごしなさいって。」

「そうか… 気を使わせたみたいだな…」

「そうだね。リズたちにも会いたかつたけど…」

「また、来年には来れるんでしょう？ その時は、しつかりスケジュール組んで会いましょ  
うつてさ。」

「リズらしいな…」

「うん。そうだね…」

アスナは、やはり残念そうだつた…

ALOにダイブもしてなかつたからな…

寂しいんだろう…

「アスナ… 向こうに戻つたら、またALOで会いに行こう。」

「うん。」

俺は、そう言つてアスナを慰めた。

そして、その夜…

彰三氏と浩一郎さんついでに父さんが帰つてきた。

「明日奈… ホンモノの明日奈だ。お帰り。明日奈。」

「お父さん…」

相変わらず熱い人だな…

と言うカリアクションがスグにそつくりなような…

「ハハ…まあ、勘弁してあげてくれよ。和人君。今日の為に無理して仕事を切り上げて来たんだ。」

浩一郎さんが声をかけてきた。

「ええ。こうして生身で再会するのは、6年ぶりですものね…当然だと思います。」

「そう言つてもらえると助かるよ。和人君…妹を、よろしく頼むよ?」

「はい。」

会話が終わるのを見計らつて、父さんも話しかけてきた…

「元気そうだな。和人。」

「うん。」

父さんは、それだけ言つて離れていった。

相変わらず無口な人だな…

気がつくと、彰三氏はターゲットをキリアスに変えていた…が泣かれてユイに慰められていた…

フットワークの軽い人だ…

何となくアスナを見ると目があつて苦笑した。

そして時間は進み、結城邸には桐ヶ谷家と結城家が集まり、俺たちの帰郷を祝う宴会

が催されていた。

キリアスは布団でお休み中だ。

「それにしても……よく戻ってきたな……和人……」

父さんが、そう言つて俺の肩に手を置いた。

「うん。でも……」

俺には少し気がかりがあつた。

「どうした和人？」

「いや……今の俺は二人の子供の『桐ヶ谷和人』と呼べる存在なのかなって……」

「どういう事だ？」

「うん。この世界の『桐ヶ谷和人』は事故で亡くなつてる……埋葬もされてるし戸籍も死

亡扱いだろ？」

「……ああ。」

その時の事を思い出したのか……父さんは少しトーンの落ちた声で返事をした。

「今俺は、肉体的には向こうの世界の物質で作られてるし、向こうの俺は『桐ヶ谷和人』ではなくて『キリト』なんだよ。だから……」

そう……俺もアスナも、この世界にとつてはもう存在しない人間だ。

だつたら、今の俺はこの世界において、何者なのだろう。本当に『桐ヶ谷和人』と胸

を張つて言えるのか…

「和人…」

「お兄ちゃん…」

母さんやスグも心配そうに見ている…

「折角、こうして戻ってきたのに、家族を心配させるなんて…ダメだな…俺は…  
和人…これは俺の持論になるが聞いてくれ。」

俺の悩みを聴いた父さんは、そう言つて話し出した。

「個人を認識するものはなんだとと思う？名前か？見た目か？その人間の考え方か？」

「どうなのだろう？自分でさえ自信を持つて自分だと言えない…」

「俺はな、周りの人間との関わり…思い出だと思う。和人が俺たちの子供になつた  
日…俺は忘れていない。和人が自分で自作のパソコンを組んだと聞かされた時は驚  
いたよ。それに、和人がどこからか戸籍を調べて俺たちの本当の子供じゃないと知つて  
距離を置くようになつたのも、SAOに囚われ戻つて来てから、人付き合いが良くなつ  
たのも…」

「俺がお前を和人と認識するのは、その時の思い出や気持ちを覚えているからだ。お前  
にはその思い出が無いのか？」

俺は首を振った。

覚えてる…桐ヶ谷家で過ごしてきた思い出を…

「そうか…だから俺はこの人を父さん…『桐ヶ谷峯嵩』と認識しているのか…」

「だったら、お前は『桐ヶ谷和人』だ。向こうの世界では『キリト』なのだとしても、俺にとつては、手のかかる息子の『桐ヶ谷和人』さ。」

「…ありがとうございます。父さん…」

面と向かって言うのは恥ずかしくて、俯きながら、俺はそう言うだけで精一杯だった。

「そう言えば、ALOなのだがね…結婚式イベントが見事に当たって、ログイン数が20%も上がったのだよ。」

しんみりした場を変えようと、彰三氏が話を変えるために、言つてきた。

「へえ、それは凄いですね。」

アスナの妊娠、出産であまりログイン出来てなかつたからなあ…

「うむ。あの後少し仕様を変更してな、初心者でもこなせるクエストを達成することで、結婚式を挙げられるようにしたのだよ。」

「金銭的に、結婚式を挙げられない若者をターゲットにしても、結婚式だけ挙げて、後は放置ではつまらんからな。結婚式を挙げる為のクエストを行うことでALOの楽しさを知つて貰えば、長期的なユーザーの取り込みにもなるしな。ハツハツハ…」「なるほど…良い考えです。」

「でも、それだと現実世界の結婚式場とかの売り上げが落ちて、何か言われないかしら？」

アスナが心配して聞いた。

「それが、そうでもないのだよ。ALOで結婚式を挙げたプレイヤーたちは、むしろ現実世界でも結婚式を挙げたいと思う者が多くてね、むしろ現実世界でも結婚式を挙げる人は増えているのだよ。」

「それなら良かつた。」

「それにしても…出来ることなら、現実世界でもお前たちの結婚式をしたいものだよ…戸籍も無く、年に一日しか来れないのでは無理だがね…残念だ…」

彰三氏が寂しそうに話す。ALOで結婚式ん挙げて貰つた俺達だけど、現実世界でも、祝いたかった…そう思つてくれているのだろう…

「お父さん…」

アスナが心配そうに声をかける。

「せめて、向こうの世界の結婚式に出席…いや見ることが出来たらな…」

「出来ますよ？」

彰三氏の語りに、以外な答えを返したのはユイだつた。

「本当かね。ユイ君。」

「はい。お爺ちゃん。知つての通り、私は向こうの世界にALOでの私の能力を持つて  
いつています。その中には録画機能もありますから。」

「そ、そうなのかな？ユイ。」

「ハイ、パパ。向こうでは録画した映像を再生する媒体が無いため、あまり意味の無い機  
能ですが、この世界には再生器機がたくさんありますから…」

「ユイ君。頼むよ。」

「わかりました。」

「俺達の… 拷問が始まった…」

「うわあ… アスナさん綺麗… ALOとはまた違つた美しさね。」

「うう… 恥ずかしい…」

「おお。和人君も立派にスピーチしておるな。」

「誰か… この拷問を止めてくれ…」

「家族の前で、自分達の結婚式を見せられらなんて… 恥ずかしさで死んでしまう…

「いやあ。堪能した。世界中の人々が明日奈たちの結婚式を祝つてくれたのだな。嬉し  
い限りだ。」

「それにしても、向こうの世界つて本当にゲームの世界みたいだね。エルフにドワーフ  
に獣人まで…」

各々が感想を言つていく…

ようやく、解放された… そう思つたのだが…

「おお、そうだユイ君。ALOの結婚式の録画はないのかね?」  
「あります。」

まだ、終わつていなかつた…

そして、結婚式鑑賞会と言う、俺達にとつての地獄が終わつた頃、  
「ユイ君。このALOの結婚式、ダビングは可能かね?」

「ハイ。可能です。」

「和人君。このALOの結婚式の映像を宣伝で使いたいんだ。構わないかな?」

「ええ!?

「ちょっとお父さん…」

「あら、良いわね。これだけ感動する映像なんだもの。良い宣伝になるわ。」

京子さんも賛成のようだ…

「… ハイ。どうぞお好きに使つてください…」

「おお、そうか。それじゃあ早速広報部に回そう。」

義理の両親に逆らえるほど俺の心は強くない…

それにどうせ、それを見る機会も無いんだ… 大丈夫だろう。

…このあと、ALOで会つたりズたちに、散々からかわれるのを、この時の俺は知らなかつた…

そうして、夜は更けていつた…

次の日、俺と明日奈、ユイ、キリアスは俺の本当の両親の墓の前に来ていた。同行してくれたのは、母さん、スグ、それと京子さんだ。

「この墓の中に、俺を生んだ父さんと母さんがいるんだな…」

何となく呟いた…

「和人も入つてるわよ?」

…………… そうだつた… でも、いくらなんでもブラックユーモアが過ぎませんか  
ね… 母さんや…

微妙に引きつた顔をしつつ、お参りを済ませる…

父さん、母さん…

俺は、桐ヶ谷家に引き取られて、ちゃんと幸せになつたよ。

この世界では長生き出来なかつたけど、こうして最高の奥さんと、子供にも恵まれて今はとても幸せなんだ…

だから安心して下さい…

『和人… 幸せにな。』

『私たちは、見守つているわ。』

幻聴なのか……そんな声が聴こえた気がした……  
それでも……

ありがとう……俺、頑張るよ……父さん、母さん。  
そうこうしていると、俺達の身体が光だした。

……時間のようだ……

「お別れみたいだ……」

「和人、元気でね。またALOで会いましょう。」

「ああ。」

「お兄ちゃん……」

「スグも元氣でな。」

「うん。」

「和人君。明日奈の事……よろしくね。それに、子供も出来たんだから、あまり無茶はしないようにね……」

「ハイ。肝に命じて起きます。」

「それじゃあ、皆……またALOで会おう。」

「私も、もう少し落ち着いたらログインします。」

「皆さん、お元気で。」

「ダー。」

キリアスも何かを感じたのか挨拶を交わしたようだ。

そうして、俺達は異世界に戻ってきた……

きっと、まだまだいろいろな事があるだろう。

それでも、俺達はこの世界で生きていく。

アスナと一緒になれたこの世界で。

アスナとユイとキリアスと家族皆で……

明日に向かって……

## この素晴らしい世界の伝説

かつて、この世界を侵略せんとする魔王がいました。

このままでは世界が滅びる…：そんな危機を抱いた神々は、別の世界から若くして亡くなつた者を、この世界に特典をつけて転生させることを思い付きます。

しかし、魔王の勢力は強大で情勢は変わりませんでした。

そんなある日、ある若者がこの世界に転生されます。

その者の名は『サトウカズマ』

彼は類い希な幸運と悪知恵、そして優秀な仲間たちとの出会いにより、それまで誰一人倒すことの出来なかつた魔王の幹部を倒すと言う快挙を成し遂げました。

そして、彼の転生から半年…：

後に伝説の勇者と呼ばれる者たちが女神に導かれ、この世界を訪れます。

その者の名は『キリト』

そして、彼の永遠の伴侶である『アスナ』

彼らの転生により、情勢は一気に動き、彼らが転生して数年後…：『キリト』『アスナ』そして『サトウカズマ』彼らと、彼らの仲間の活躍によつて、ついに魔王は討伐された

のです。

ここに、魔王討伐後の彼らの話を、ほんの少しだけ語りましょう。

まずは、キリトのパーティから…

黒の勇者『キリト』

魔王討伐後、しばらくはアクセルの街にて冒険者として活躍。彼や彼のパーティに憧れて冒険者を志す者が増え、その後、アクセルの街は発展していくことになった。

子供も生まれ、幸せに暮らしていたが、ある日、ある国の陰謀に巻き込まれる。

それは、魔王討伐後のパーティで、アスナにしつこく求婚を迫っていた王子の復讐だつた。

かの王子は、王から国を引き継ぐとキリトを国家反逆罪として投獄する。

しかし、彼のパーティや、カズマたちによって救い出され、その国の革命軍に参加。見事、国王を討伐することに成功する。

その後、国民たちの熱烈な希望により、その国の王となる。

国を『AINクラッド王国』と改め、初代国王となるのだつた。

彼は国民に信頼され、また国民が政治に参加できる独自のシステムを構築する。

彼の周りには、彼を慕つて多くの仲間たちが集い、AINクラッド王国は長きに渡り、

平和な国となつた。

### 閃光の姫騎士『アスナ』

魔王討伐後、キリトと結婚。

二人の間には、三人の子供が生まれる。

彼らの養子である『ユイ』を筆頭に、仲の良い家族であつた。

キリトが投獄された際には、パーティーを率いて、国軍を相手に奮闘し、救出に成功。彼と共に、レジスタンス活動に参加。

革命が成功し、キリトが国王となつたことで、王妃となる。

王妃となつて後、二人の子供を出産。既に生まっていた『キリアス』と養子のユイ、4人の母となる。

また、彼女は、強さもさることながら、美しさや気品と言つた者でも有名であつたが、彼女は生涯、キリト以外の男性に心を許すことは無く、最後まで彼と共にあつた。

### 天魔の大魔導師『ゆんゆん』

紅魔族にあつて、最もまともな感覚を持つていたことでも知られる。

彼女は、魔法において他の追随を許さぬ天才であり、彼女の開発した魔法は、後の世に無くてはならない技術となる。

その功績は、魔王討伐に匹敵するほどの偉業である。

彼女は、数多くの国から宫廷魔導師にと誘われたが、これを全て断り、紅魔族の長となる。長となつた後も、キリト達との交流を行つており、時にはその魔法で、彼らを助けていたようだ。

後に、冒険者の男性と結婚。一人の子供にも恵まれた。

### 救世の聖女『サチ』

魔王討伐後、レジスタンス活動を行つていた街に戻る。  
レジスタンスを率いていた男性と結婚した。

結婚した後も、冒険者活動は続けており、キリトが投獄された際には、アスナやゆんゆんと合流し、救出作戦に成功する。

キリト達が王族となつた後も、彼らとの交流は続いていたようだ。

### 〔new page〕

続いて、サトウカズマのパートナーを…

強（狂）運の冒険者『サトウカズマ』

魔王討伐の功により、ベルゼルグ王国の第一王女『アイリス』と婚約する。  
が… 調子に乗りすぎた為に城を追い出される。

その後、アクセルの街でまたり過ごしていたが、キリトの投獄を聞き付け、救出作戦に参加。

彼の機転は、救出作戦において大きな役割を果たす。

救出後はレジスタンス活動には参加せず、アクセルの街で、またり過ごす。彼は、生涯結婚はしなかつたが、いつの間にか子供が増えていた（笑）

### 美しき水の女神の生まれ変わり『アクア』

魔王討伐後、アクシズ教徒の最高指導者になるよう要請されるも、これを断る。「カズマは私がいないとダメだから……」

その言葉通り、彼の側を離れず、影に日向にと彼を支え続けた。

彼女は、生涯独身を貫き最後までカズマと共にあつた。

### 爆裂卿（狂）『めぐみん』

魔王討伐後、いろいろな国から宫廷魔導師にと誘われたが、これを全て断り生涯をカズマのパートナーメンバーとして過ごす。

彼女は生涯独身だつたが、いつの間にか身籠り、女の子を出産。

父親は不明だつたが、よく子供を可愛がる姿が目撃されていた。

ちなみに、子供の名前は『かずみん』と言つたそうな（笑）

盾の（変態）聖騎士『ダクネス』

魔王討伐後、正式にアクセルの街周辺の領主となる。

時々、ストレス解消のためか冒険者活動も行う姿が目撃されていた。

貴族の責務として、結婚を父親より命じられていたが、これを全て断る。

いつの間にか身籠つており、男の子を出産。

「これで、世継ぎは問題ないだろう。」

良い顔で、父親に良い放つたそうな。

ちなみに、子供の名前は『カズティーマ』と言つた（笑）

めぐみんの子供と同じく父親は不明（笑）だが、次期領主として英才教育が施され、名主と呼ばれたそうな。

彼ら英雄たちの活躍を、私たちは忘れてはならない。

我々の平和な世界は、彼らのお陰で訪れたものなのだから…

…… なあ、アクラア？

なによ、カズマ？

この話、誰が書いたんだろうな？

知らないわよ？ 私は…

なんか、俺達のパーティーでお前だけ良い感じで書かれてたぞ？

：私たちの活躍を見た誰かが、そう書いたんじよ？

俺の目を見て言つてみろ。

……。

あの… そんなことより二人とも、もう亡くなつたんですから、日本に帰つてくれませんか？

特にアクア先輩…

向こうの仕事しないと怒られますよ？

大丈夫よ。部下の天使がしつかりやつてくれるわよ。心配ないわ。

いえ、私の仕事の邪魔なんですけど…

それより、エリス… なんでキリストとアスナを導いた女神がエリスって事になつてるのか…

それを聞かせてもらいましょうか？

知りませんよ。下界の人たちが勝手にそう言い出したんですから。

私は、アクア先輩みたいに、自作の歴史書なんて残していませんし… やつぱり、あれを書いたのはお前か…

この墮女神が…

悪いこと書いてないんだから、あれくらい良いじゃない。

あ、開き直りやがつたな…

二人とも、言い争うのはそれくらいにして、日本に帰つてください。

いやよ、向こうに戻つたら退屈な仕事をさせられるんだから。

そうだぞ？エリス様。俺達は魔王を倒したんだから、ケチケチしなくても良いじやないか。

ああ…もう、誰かこの二人を引き取つてくださいーい。

天界で、そんなやりとりが繰り広げられていたが、それは別の話である。

「new page」

おまけ

現実世界のキリトの仲間たち

『リズベット』

大学卒業後、美容師になる。

彼女の丁寧な仕事は評判を呼び、後に独立。

念願の自分の店を持つ。

後に同じ職場の男性と結婚。

二人の子供に恵まれた。

### 『シリカ』

大学に在学中、スカウトされてアイドルデビューを果たす。

その愛らしい姿に老若男女人気を獲得する。

テレビでは以外と毒を吐くことでも知られているが、持ち前の愛嬌の良さでそれも、キヤラ作りの一貫として容認される。

彼女は、生涯独身を宣言しており、それもまたファンを増やす要因となる。ちなみに、彼女に恋愛話は禁句である。

ある時、生のバラエティーでその話題を振られた彼女は30分ノンストップで初恋人の話を続けると言う暴挙を行う。

しかし、この男性が故人とわかると、彼女の一途さに、人気は益々上がつたそうな。

### 『リーファ』

大学進学後も剣道を続け、全国大会で優勝を果たす。

ある会社の剣道部にスカウトされて入社。

仕事に剣道にと忙しい毎日を送る。

数年後、会社で知り合った男性と結婚。

子供も授かつた。

## 『シノン』

大学進学後、普通に就職した。

ある時、新川恭二に面会。

彼と話、和解。彼を許すのだった。

そして、新川恭二が出所した後は彼を支え、立ち直らせる事に尽力。  
後に彼と結婚した。

## 『エギル』

ダイシードラマ&カフェを続いている。

シリカがよく立ち寄る店として紹介されると爆発的に人気の店となる。  
ちなみに、この店は年に一度、貸し切りの日があるそうな。

## 『クライイン』

面倒見の良い彼は、会社でも頼りにされ、出世する。

相変わらず、彼には女性に縁が無く、独り身なそうな…

… なあ、作者さんよ…

俺に恨みもあるのか？

… 気のせいです…